

昭和 61 年度

# 京都市埋蔵文化財調査概要

1989 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1 久我東町遺跡全景（北から）



2 久我東町遺跡家屋C（東から）

## カラー図版一解説

### 久我東町遺跡

この遺跡は乙訓郡の平野部，桂川の右岸に位置している。14世紀の前半代に営まれた環濠集落と思われる。全容は不明だが，集落の中心的建物の南には小規模な建物群が並び建てられているのが判る。鎌倉時代から室町時代に至る動乱期洛外の一様相である。主館と思われる建物は，北半を土間として囲炉裏や流しを設け，南半を床張りとしている。柱の位置は精緻に堅固に造られている。

(長宗繁一)

## カラー図版二解説

### 中の谷窯跡

中の谷窯跡のある木野は京都盆地東北部，岩倉の小盆地西北部にある。調査地は木野の小谷沿いの山腹に位置する。この小谷と周辺山腹は京都精華大学の敷地となっており，大学拡張工事に先立ち発掘調査を実施した。既発見の奈良時代の須恵器窯（中の谷1号窯）に加えて，同窯南隣で奈良時代の須恵器窯，及び向かいの山腹で平安時代の灰釉陶器窯を新発見し調査を行った。掲載した写真は，西方上空からの調査地全景と，南西から撮影した灰釉陶器窯である。

(小森俊寛)



1 中の谷窯跡遠景（西から）



2 中の谷窯跡2区窯2全景（南西から）

# 序

この昭和61年度版としての調査概要は特別な意味を持っている。というのは、当研究所が発足以来10年を経過して、更に新しい10年目に踏み出したからである。10年経過したとは調査員が10年の歳を加えただけではなく、研究調査に10年の経験を蓄積したといえるのである。しかし慣れも加わっていることを意味する。慣れに流されると誤りもあるかも知れない。

ところで調査にあたり、調査箇所の情報も十分に得ておくことも必要である。当概報の平安京右京九条一坊1(14)は、西寺に関する遺構がある地点である。しかも西寺には平安京右京九条坊門小路が通る地点を含む。それを東寺では境内に取り込み、東寺の北の限りは、その地点より北方に寄せていて、九条坊門小路が認められないので、建立当初は通っていて、後に都合あって拡張したものと解釈(故大岡実博士の説-『南都七大学の研究』294頁)があった。昭和56年の防災施設工事にあって伽藍を限る北の築地の底部で、管を通す孔をうがう工事の際、築地の根は平安時代初期東寺造立当初のものであると認めた。

この情報を以て、今回の調査ではその箇所を線密に調べて東寺と等しく築地があり、犬走・両側溝も発見した。その築地と伽藍中心線を交錯するところには、東寺北大門(八脚門)と同じ痕跡はなかった。そのあたりは残る東寺を掘って明らかにすることはできよう。

なお、食堂と北の築地との間の広くあくような土地に、中心線が通るあたり西寺では東西棟五間四面、その西に位置して、北面を東西棟北面のそれぞれを同一線上においた南北棟七間(推定)、東西四間の切妻造(推定)を建てた痕跡を出した。五間四面東西棟に対し、東に同規模の南北棟が建てられていたと推定する。

この建物を東寺に残る伽藍図に付いてみる時、その位置に勅使坊と呼ぶ建物がある。それは東寺においては、同門派の僧侶には灌頂が行われていたので、灌頂を済ました僧侶が勅使に関して国の度牒を受ける儀が行われたところであろう。と考えれば、西寺で発見し、推定した3棟の建物は一具として、記録に残る国の綱所であったかも知れない。

この概報の中で、問題を含んでいるが問題を完全に解決できなかったものに久我東町遺跡(25)の環濠集落を発見したことである。数多い家屋が複雑に建ち並び、それはいくつかの組合せが考えられる。これと排水溝を考え合わせて単棟のA・B・F・G、複棟のC・D・Eが挙げられる。このことは環濠の中の、単位としての住生活を考えるに新しい資料を得たとして特記されることを、取り上げておきたい。

いずれにせよ、ここに概要を報告した他の調査地についても同様に所有者あるいは管理者の方々に、いろいろとお世話になったことを厚く御礼申し上げる。

平成元年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財研究所  
所長 杉山信三

# 凡 例

1. 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和 61 年度に実施した事業の年次報告である。発掘調査（第 1 章）、試掘・立会調査（第 2 章）、資料整理（第 3 章）、事務報告（第 4 章）とした。
2. 試掘・立会調査のうち、調査継続中のため次年度に報告する分は表 2 に示した。
3. 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系 VI によった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
4. 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行の都市計画基本図（2,500 分の 1、10,000 分の 1、30,000 分の 1）を修正して使用した。
5. 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
6. 遺構のうち表記記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。S A（柵）・S B（建物）・S D（溝）・S E（井戸）・S F（道路）・S G（池）・S K（土壙）・S X（その他の遺構）
7. 各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点である。
8. 昭和 61 年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、昭和 61 年 4 月～12 月実施分は 61 年度の各発掘調査概報に、昭和 62 年 1 月～3 月実施分は昭和 62 年度の各発掘調査概報に報告してある。
9. 図版一～七の調査地点番号の I は発掘調査、II は試掘・立会調査を表す。試掘・立会調査は付表 2 の番号を用いており、第 2 章の報告番号とは一致しない。
10. 本年度の調査並びに本書の作成にあたって、研究所全員の協力と参加があった。また本年度の調査のうち、京都市埋蔵文化財調査センターと平安京調査会の協力によって実施した調査については文末に記した。
11. 写真は、遺物写真及び一部を除く発掘調査の遺構写真は牛嶋茂・村井伸也が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
12. 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。編集と調整は、永田信一、前田義明、磯部 勝が行った。

# 目 次

## 第1章 発掘調査

	20	下鳥羽遺跡	55
I	昭和61年度の発掘調査概要	1	
II	平安宮・京跡		
1	平安宮中務省跡	4	
2	平安宮鼓吹司跡	5	
3	平安京左京一条三坊1	7	
4	平安京左京一条三坊2	10	
5	平安京左京四条三坊	13	
6	平安京左京四条四坊	15	
7	平安京左京六条一坊	19	
8	平安京左京七条二坊・ 八条二坊	21	
9	平安京左京八条一坊	26	
10	平安京左京八条三坊	28	
11	平安京右京三条二坊	31	
12	平安京右京六条三坊	35	
13	平安京右京七条一坊	38	
14	平安京右京九条一坊1	41	
15	平安京右京九条一坊2	45	
III	白河街区		
16	法勝寺跡	46	
17	尊勝寺跡	47	
IV	鳥羽離宮跡		
18	鳥羽離宮跡第120次調査	53	
19	鳥羽離宮跡第121次調査	54	
V	中臣遺跡		
21	中臣遺跡第66次調査	56	
22	中臣遺跡第67次調査	57	
VI	長岡京跡		
23	長岡京左京南一条三坊・ 二条三坊	58	
24	長岡京左京四条二・三坊	60	
25	久我東町遺跡	65	
VII	その他の遺跡		
26	植物園北遺跡	71	
27	中の谷窯跡	76	
28	一乗寺向畑町遺跡	83	
29	北野麩寺1	84	
30	北野麩寺2	86	
31	室町殿跡	87	
32	慈照寺（銀閣寺）境内	88	
33	大枝山古墳群	90	
34	天鼓の森古墳	92	
35	南春日町遺跡	96	
36	醍醐古墳群	99	
37	中久世遺跡1	100	
38	中久世遺跡2	101	
39	伏見城々下町	102	
40	伏見城跡	107	

## 第2章 試掘・立会調査

I	昭和61年度の試掘・ 立会・分布調査概要……………	109
II	平安宮・京跡	
1	平安宮梨本……………	111
2	平安京左京九条四坊……………	112
3	平安京右京三条一坊……………	113
4	平安京右京四条四坊1……………	114
5	平安京右京四条四坊2……………	115
6	平安京右京五条三坊……………	116
7	平安京右京六条四坊……………	117
8	平安京右京七条一坊……………	118
III	平安京域以外の遺跡	
9	鳥羽離宮跡……………	119
10	山科本願寺跡……………	120
11	久我東町遺跡……………	123
12	中の谷窯跡……………	124
13	円宗寺跡……………	129
14	仁和寺院家跡……………	138
15	巽1号墳……………	141

## 第3章 資料整理

1	遺跡測量……………	143
2	コンピュータ……………	144
3	写真撮影……………	145
4	保存科学……………	146
5	遺物復原……………	149
6	報告書の刊行……………	150

## 第4章 事務報告

1	人事異動……………	151
2	財団法人京都市埋蔵文化財研究所 設立10周年記念事業の実施 ……	151
3	普及啓発及び技術者養成事業 ……………	153
4	シリア沖古代遺跡 発掘調査への派遣……………	154
5	京都市考古資料館の状況……………	154
6	組織及び役職員……………	157
	付表	
1	昭和61年度発掘調査一覧表 ……	159
2	昭和61年度試掘・ 立会調査一覧表……………	161



# 図版目次

図版 1	調査地点位置図 (1)	平安京跡調査地点位置図
図版 2	調査地点位置図 (2)	1 白河街区調査地点位置図 2 鳥羽離宮跡調査地点位置図
図版 3	調査地点位置図 (3)	中臣遺跡及び東部地域調査地点位置図
図版 4	調査地点位置図 (4)	長岡京城調査地点位置図
図版 5	調査地点位置図 (5)	1 北部地域調査地点位置図 2 北東部地域調査地点位置図
図版 6	調査地点位置図 (6)	1 北西部地域調査地点位置図 2 西部地域調査地点位置図
図版 7	調査地点位置図 (7)	南部地域調査地点位置図
図版 8	平安宮鼓吹司跡	1 全景 (北から) 2 墓跡全景 (北から)
図版 9	平安宮梨本・1 平安京右京三条一坊	梨本・全景 (西から) 2 右京三条一坊・全景 (北から)
図版 10	平安京左京一条三坊 1 (1)	1 調査区全景・第2面 (東から) 2 調査区全景・第3面 (東から)
図版 11	平安京左京一条三坊 1 (2)	1 井戸 279 (西から) 2 堀 19 の石組み (南西から)
図版 12	平安京左京一条三坊 2	1 平安時代遺構面全景 (西から) 2 戦国時代から桃山時代遺構面全景 (西から)
図版 13	平安京左京四条三坊	1 全景・プラン 1 (北から) 2 全景・プラン 3-2 (西から)
図版 14	平安京左京四条四坊	1 全景・プラン 1-2 (北から) 2 全景・プラン 3-2 (北から)
図版 15	平安京左京六条一坊	1 全景 (北から) 2 井戸 S E 43 (西から)
図版 16	平安京左京七条二坊・ 八条二坊 (1)	1 調査区全景 (北から) 2 No. 6 トレンチ (北から)

- |       |                        |   |                       |
|-------|------------------------|---|-----------------------|
|       |                        | 3 | No. 7 トレンチ全景 (北から)    |
| 図版 17 | 平安京左京七条二坊・<br>八条二坊 (2) | 1 | No. 8 トレンチ全景 (北から)    |
|       |                        | 2 | No. 9 トレンチ全景 (北から)    |
|       |                        | 3 | No.10 トレンチ全景 (南から)    |
|       |                        | 4 | No.11 トレンチ全景 (北から)    |
| 図版 18 | 平安京左京八条一坊              | 1 | 全景 (西から)              |
|       |                        | 2 | 井戸 S E 20 (北から)       |
| 図版 19 | 平安京左京八条三坊              | 1 | 全景・プラン 1 (西から)        |
|       |                        | 2 | 全景・プラン 4 (西から)        |
| 図版 20 | 平安京右京三条二坊 (1)          | 1 | 全景 (西から)              |
|       |                        | 2 | 園池遺構 S K 8 (北東から)     |
| 図版 21 | 平安京右京三条二坊 (2)          | 1 | S K 8 最下層出土 青磁        |
|       |                        | 2 | S K 8 第 2 層出土 白磁・青磁   |
| 図版 22 | 平安京右京六条三坊 (1)          | 1 | 全景 (北西から)             |
|       |                        | 2 | 東南部建物群 (西から)          |
| 図版 23 | 平安京右京六条三坊 (2)          | 1 | S D 20 (北から)          |
|       |                        | 2 | S E 23 (北から)          |
| 図版 24 | 平安京右京六条四坊・<br>七条一坊     | 1 | 右京六条四坊・全景 (北から)       |
|       |                        | 2 | 右京七条一坊・全景 (東から)       |
| 図版 25 | 平安京右京七条一坊              | 1 | 1 区 S D 1・S D 2 (東から) |
|       |                        | 2 | 2 区 S D 23 (南から)      |
| 図版 26 | 平安京右京九条一坊 1 (1)        | 1 | 調査区全景 (西から)           |
|       |                        | 2 | 建物 1・2 検出状況 (北西から)    |
| 図版 27 | 平安京右京九条一坊 1 (2)        | 1 | 建物 1 検出状況 (北東から)      |
|       |                        | 2 | 井戸 5 検出状況 (東から)       |
| 図版 28 | 平安京右京九条一坊 1 (3)        |   | 出土文字瓦 (1)             |
| 図版 29 | 平安京右京九条一坊 1 (4)        |   | 出土文字瓦 (2)             |
| 図版 30 | 平安京右京九条一坊 1 (5)        |   | 出土文字瓦 (3)             |
| 図版 31 | 尊勝寺跡 (1)               | 1 | 1 区 全景 (東から)          |
|       |                        | 2 | 3 区 全景 (北西から)         |

- |       |                     |   |                             |
|-------|---------------------|---|-----------------------------|
| 図版 32 | 尊勝寺跡 (2)            | 1 | 3区 SB1 (南から)                |
|       |                     | 2 | 3区 SX8~10 (北西から)            |
| 図版 33 | 長岡京左京南一条三坊・<br>二条三坊 | 1 | 1区 第2面・長岡京期遺構面全景 (南西から)     |
|       |                     | 2 | 2区 第2面・長岡京期遺構面全景 (北東から)     |
| 図版 34 | 長岡京左京四条二・三坊         | 1 | V区北半 長岡京期左京東二坊大路両側溝 (西から)   |
|       |                     | 2 | V区北半 奈良時代条里坪境 (西から)         |
| 図版 35 | 久我東町遺跡 (1)          | 1 | II期全景 (北から)                 |
|       |                     | 2 | 家屋C (北から)                   |
| 図版 36 | 久我東町遺跡 (2)          | 1 | 環濠北西部 (北から)                 |
|       |                     | 2 | 家屋C北東部SK452 (北から)           |
| 図版 37 | 植物園北遺跡 (1)          | 1 | 調査地遠景 (西から)                 |
|       |                     | 2 | No.92 トレンチ全景 (東から)          |
|       |                     | 3 | No.93 トレンチ全景 (東から)          |
| 図版 38 | 植物園北遺跡 (2)          | 1 | No.94 トレンチ全景 (西から)          |
|       |                     | 2 | No.95 トレンチ全景 (東から)          |
|       |                     | 3 | No.96 トレンチ全景 (東から)          |
|       |                     | 4 | No.97 トレンチ全景 (東から)          |
| 図版 39 | 植物園北遺跡 (3)          | 1 | No.99 トレンチ全景 (西から)          |
|       |                     | 2 | No.100 トレンチ全景 (東から)         |
|       |                     | 3 | No.92 トレンチピット2 遺物出土状況 (西から) |
| 図版 40 | 中の谷窯跡 (1)           | 1 | 1区 調査区全景 (西から)              |
|       |                     | 2 | 2区 調査区全景 (南西から)             |
| 図版 41 | 中の谷窯跡 (2)           | 1 | 1区 窯1-1全景 (北西から)            |
|       |                     | 2 | 1区 窯1-2全景 (西から)             |
| 図版 42 | 北野廃寺1               | 1 | 飛鳥時代遺構面全景 (北から)             |
|       |                     | 2 | 奈良時代から平安時代遺構面全景 (北から)       |
| 図版 43 | 慈照寺 (銀閣寺) 境内        | 1 | 第2面全景 (北から)                 |
|       |                     | 2 | 第2面・建物2 (北から)               |
| 図版 44 | 大枝山古墳群              | 1 | 大枝山21号墳全景 (南から)             |
|       |                     | 2 | 石室内全景 (南から)                 |

図版 45	南春日町遺跡	1	1区 全景（北から）
		2	1区 焼土壙1（南から）
図版 46	伏見城々下町	1	全景（東から）
		2	S K 307 断面（東から）
図版 47	円宗寺跡（1）		出土軒丸瓦（1）
図版 48	円宗寺跡（2）		出土軒丸瓦（2）
図版 49	円宗寺跡（3）		出土軒平瓦

# 第1章 発掘調査

## I 昭和61年度の発掘調査概要

昭和61年度に当研究所が実施した発掘調査件数は40件を数える。平安宮・平安京を始めとして、各遺跡で新発見並びに従来の調査・研究を補強する遺構・遺物を検出し、重要な調査成果を得ることができた。次に本年度の調査成果の概略を述べる。

**平安宮・平安京跡** 本年度の調査件数は15件で、その内訳は平安宮2件、平安京左京8件、平安京右京5件である。これらの調査で条坊関係を始めとする平安時代の遺構・遺物、平安京造営以前及び鎌倉時代以降の遺構・遺物を検出している。

中務省(1)では平安宮跡の調査特有の、小面積ながら瓦・土器などが多量に出土し、その中でも平城宮・長岡宮からの搬入瓦が大部分を占めていることが判った。鼓吹司跡(2)では平安時代の遺構は検出できず、江戸時代の墓を検出した。

平安京の調査では、まず条坊関係遺構として左京七条二坊(8)で平安時代前期の左女牛小路南側溝と鎌倉時代前期の7条坊門小路北側溝を、右京七条一坊(13)でも左女牛小路の両側溝を検出した。

左京域の宅地割に関する遺構は左京一条三坊2(4)で溝と柵列、左京七条二坊・八条二坊(8)では町割りに関する遺構として溝・道路敷・ピット列が挙げられる。当調査は南北に長く二町にわたっているため、多数の平安時代の遺構を確認している。左京六条一坊(7)においては井戸のみの検出であるが、平安時代後期から鎌倉時代後期までの井戸が見つかった。建物などは後世の削平を受け消滅したのであろう。左京八条一坊(9)では土取穴らしき土壌が多数掘られており、遺構面の大部分が失われていたが、土取穴から多量の輸入陶磁器が出土している。

平安京右京においては、右京三条二坊(11)で平安時代前期から中期の掘立柱建物と園池を検出し、邸宅の一部が明らかとなった。平安時代前期の流路から蛇形木製品・「南無光明真言」銘の杭、及び土器類、皇朝十二銭など豊富な遺物がみられる。右京六条三坊(12)では平安時代前期の建物跡を重複して確認することができ、短期間のうちに建て替えが行われた様子が明らかになった。右京九条一坊1(14)・2(15)は西寺の寺域内の調査である。(14)では礎石建物2棟と築地を検出している。建物は南北棟と東西棟である。築地は現存している東寺の北大門と同一線上に位置し、西寺の寺域は現在の東寺と同じ大きさの東西二町、南北四町

であることが判明した。しかし寺域の中心線上には明確な門の痕跡は認められなかった。(15)では食堂院回廊の礎石抜取跡を検出している。

平安京造営以前の遺構・遺物については、左京四条四坊(6)で、弥生時代後期から古墳時代初頭の溝があり、多数の土器が出土している。左京七条二坊(8)でも弥生時代後期の溝・流路、古墳時代前期の遺物包含層がみられる。右京九条一坊1(14)では古墳時代後期の竪穴住居を検出し、西寺下層の集落の様子が明らかとなった。

鎌倉時代以降の遺構・遺物は左京域の各調査で検出されている。左京一条三坊1(3)は戦国時代の防御用の堀が見つかり注目されている。左京四条三坊(5)は室町時代の六角堂の東限にあたる堀・門・池が検出されている。左京八条三坊(10)では中世の町屋の様子が明らかとなった。

**白河街区** 当該地区の発掘調査は2件である。法勝寺(16)では金堂に取り付く東回廊を検出し、法勝寺の伽藍復原研究において重要な資料を得ることとなった。尊勝寺(17)では平安時代後期の建物跡と鎌倉時代の窯が見つかった。建物は雨落溝を伴い、亀腹状の基壇も検出された。窯は3基あり瓦窯と推定される。補修用の瓦を焼成していたのであろう。

**鳥羽離宮跡** 下鳥羽遺跡まで含めて3件の調査である。第121次調査(19)では白河天皇陵(成菩提院陵)の堀と井戸を検出した。堀は陵墓側に石積みを施している。井戸は瓦と石で井戸枠としているが、底部に信楽焼の甕を据えている。出土遺物は天蓋瓔珞・和琴などがあり優美な鳥羽離宮を彷彿とさせるものである。第120次調査(18)は対象地が大規模な掘削によって、鳥羽離宮期遺構面が破壊されていることが判明し、遺構・遺物は検出できなかった。下鳥羽遺跡(20)では竪穴住居・掘立柱建物・流路を検出し、出土遺物も古墳時代前期から平安時代までの土器が豊富に出土した。

**中臣遺跡** 当該区の調査は2件である。第66次調査(21)は周辺で多数の遺構が検出されているにもかかわらず、古墳時代後期の溝が認められたに過ぎない。第67次調査(22)では古墳時代前期の竪穴住居、同後期の竪穴住居・掘立柱建物が見ついている。古墳時代前期の竪穴住居の平面形は方形を呈するが、五角形の住居が1戸ある。後期の住居には竈を付設している。

**長岡京跡** 久我東町遺跡(25)を含めて3件の調査である。左京南一条三坊・二条三坊(23)では二条第一小路の側溝を検出した他に、顕著な遺構は認められなかった。左京四条二坊・三坊(24)は外環状線道路の調査で、長岡京期の東二坊大路の路面と両側溝・建物・柵列・井戸を検出している。奈良時代以前は乙訓郡条里の坪境畦畔・坪内畦畔・条里制施行前後の水

田, 平安時代中期から鎌倉時代は建物・井戸・土壙・溝・木棺・墓・坪境など多岐にわたる遺構を見つけている。出土遺物も土器・木製品・木簡など豊富である。久我東町遺跡(25)は京都市住宅供給公社用地の小学校建設予定地で、今回は第3次調査にあたる。室町時代の環濠を伴う集落跡, 桃山時代の火葬墓を検出している。環濠内には建物・井戸・墓・溝・土壙などがみられ, また出土遺物と合わせ, 中世村落の復原研究にとって一級の資料である。

**その他の遺跡** 本年度は上記の発掘調査の他に14件の調査を実施した。これらは窯跡・寺院・古墳・集落などがある。

中の谷窯(27)は奈良時代の須恵器窯2基と平安時代中期の灰釉陶器窯1基を調査した。灰釉陶器は東海地方で生産されたという通説を翻し, 京都でも灰釉陶器窯があるという画期的な発見である。

北野廃寺1(29)・2(30)では平安時代の野寺に関する北限の溝(29), 土壇状遺構(30)を検出し, 飛鳥時代の竪穴住居もみられる。慈照寺(銀閣寺)境内(32)は庫裏建て替えに伴う調査で, 桃山時代以降現在までの庫裏の変遷がとらえられた。

本年度調査した古墳は後期に属し, 大枝山古墳群(33)・醍醐古墳群(36)・一乗寺向畑町遺跡(28)がある。大枝山古墳群(33)は古墳公園として保存される21号墳を実施した。醍醐古墳群(36)では直径25mを測る円墳で古墳群の中でも中心的な醍醐1号墳を実施した。同一墳丘内に石室が2基構築されていることが判明した。一乗寺向畑町遺跡(28)は横穴式石室の破壊された痕跡と周溝を発見している。天鼓の森古墳(34)は中学校の体育館増築工事に伴って実施したが, 古墳の形跡は認められず埴輪が出土した。

植物園北遺跡(26)は弥生時代から古墳時代の集落遺跡として知られているが, 今回縄文時代晩期の埋甕遺構を検出した。中久世遺跡(37)(38)では弥生時代から古墳時代の流路を検出している。(37)は溝から多量の土器・木器が出土した。

南春日町遺跡(35)では平安時代中期の掘立柱建物を発見したが, 大原野神社の社家町と考えられる。室町殿跡(31)は園池遺構を検出している。伏見城跡(40)では築造時の大規模な整地層を確認し, 伏見城城下町(39)では江戸時代初期の町屋の一端を明らかにした。「竹」に関する墨書木簡類の出土が多く, 注目される。(前田義明)

## II 平安宮・京跡

### 1 平安宮中務省跡

**経過** 調査地は中務省の推定地にあたり、周辺の調査をみると、建物や土壙を検出し平安宮の中でも、比較的遺存状態は良好であることが知られていた。当初試掘調査を実施し、包含層を認めたため、発掘調査に移行した。調査区は東西 4.5 m、南北 11 m に設定し、一部拡張した。

**遺構** 基本層序は上から、近・現代層が 60cm、室町時代の包含層が 10～20cm で、その下にいわゆる聚楽土と呼ばれる褐色砂泥層が認められる。平安時代の遺構は聚楽土を切り込んで成立している。検出した遺構は、平安時代前期の土壙・溝、江戸時代の土壙・井戸・ピットなどがある。平安時代前期の土壙は方形を呈し、多量の瓦類と土器類が出土した。西側は調査地外へ更に延びる。

**遺物** 今回の調査で出土した遺物は、大半が平安宮で使用されたとと思われる瓦類が占めている。他に平安時代前期、室町時代、江戸時代の土器がみられる。軒瓦には平城宮式及び長岡宮式の瓦や、京都西賀茂窯の瓦がみられるが、中でも搬入瓦が主流を占めている。また丸瓦と平瓦に関しても、平城宮文字瓦「修」「理」「在」が認められ、軒瓦と同様に丸瓦・平瓦も相当搬入されていることが判った。西賀茂角社瓦窯の「官」銘軒丸瓦や、平安時代中期と後期の瓦が少量ある。平安時代前期の土器には土壙より出土したまとまった資料がある。土師器杯・皿・高杯、須恵器杯・蓋・甕、緑釉陶器椀などである。そのほか、灰釉陶器皿・椀、須恵器鉢・円面硯がみられる。

**小結** 今回の調査では平安時代前期の土壙を検出し、また出土遺物も豊富で、良好な資料を得ることができた。しかし、何ぶんにも調査面積が狭いため遺構の性格を把握することは困難である。中務省の出土瓦については、搬入瓦が目立つことが既に知られていたが、今調査でも造営に際して、平城宮や長岡宮から搬入されていたことが明らかとなった。

(前田義明・吉崎 伸)

【平安京跡発掘調査概報】 昭和 61 年度 1987 年報告

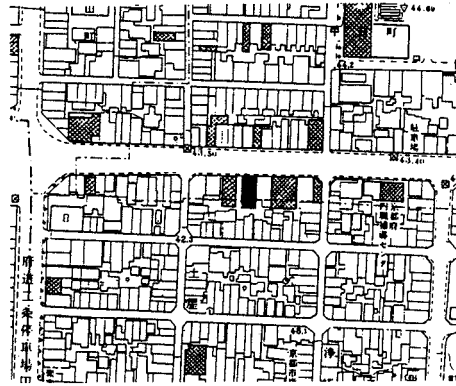


図1 調査位置図 (1 : 5000)



## 2 平安宮鼓吹司跡 (図版8)

**経過** 京都市立仁和小学校で屋内体育館が増改築されることになった。屋内体育館建設予定地東半が旧講堂跡地と重複することから、旧講堂基礎撤去時に立会調査が行われ、中世の遺物包含層などが検出された。遺跡の遺存状況が良好であることが判明した結果、発掘調査を実施する運びとなった。

調査地点は平安宮の北東隅に位置し、「鼓吹司」あるいは「漆室」が置かれたとされる。

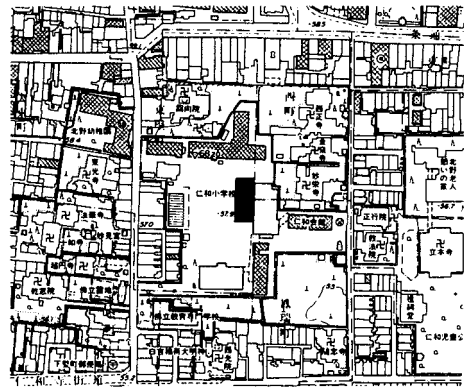


図1 調査位置図 (1 : 5000)

**遺構** 調査区の基本層序は、グランド整地層が表土面から約30cm、褐色砂泥層が20～30cmで、この層は江戸時代の整地層である。褐色砂泥層下は無遺物層となり、褐色砂礫層、黄褐色粘土層が堆積する。

室町時代後期の遺物包含層、江戸時代の土取穴・墓を検出した。このうち遺物包含層（黒褐色砂泥層）は東壁に沿ってわずかに残存していた。

調査区の大半が土取穴によって壊滅的な状況を呈している。土取穴は平面形が方形かあるいは長方形を呈し、規模は辺長1mから数mある。深さは大半が未掘であり確認していない。遺物は非常に少ないものの、土師器や陶磁器が出土した。

墓は7基検出した。土壙16は平面形が南北に長い小判形を呈し、長径約14mある。検出面からの深さは12cmである。複数の人骨が整然と埋納されている。土壙11～15は平面形が円形か小判形を呈し、径50～80cm、深さ4～18cmある。骨は雑然と納めるものもあるが、土壙15では北に頭部、両側縁に腕や脚を並べる。土壙14・15では埋納後10～30cm大の河原石を上面に1～3個置く。副葬品には、土壙11では完形の染付椀、土壙12・17では銭貨が6枚ずつ、土壙16ではキセルなどがある。

**遺物** 遺物は遺物整理箱で3箱出土した。平安時代や室町時代に属するものもあるが、量は極めて少ない。土師器、緑釉陶器、瓦がある。江戸時代の遺物は土取穴や墓から出土した。土師器、陶磁器、銭貨、金属製品などがある。銭貨は土壙墓から出土したもので寛永通寶がある。緑錆が付着しており、布目痕が残る。金属製品は土壙16から出土したもので、キセルと鉄釘がある。キセルは銅製で、雁首と吸口があり、吸口には竹製の煙管が残存している。鉄釘

は3本あり、木目痕が残存している。

**小結** 今回の調査では、平安時代の遺構を検出することはできなかったが、江戸時代の土取穴と墓を検出した。

土取穴で対象とされる“土”はいわゆる聚楽土に似た黄褐色粘土である。調査区内ではこの粘土層の上面に砂礫層が厚く堆積しており、粘土を採集する作業工程上土取穴は必然的に深くなるため、大半は現地表から2mを越す。土取りは粘土層を採り尽くす結果、各土取穴間の土壁は数cm～20cm程度残すのみである。

土取り後は整地され、墓が造られる。墓はいずれも小規模であること、骨の各部位が欠けるものや、並べて埋納したものがあることから、別所で火葬した後、主要な骨を選別して納めたものと考えられる。棺釘は土壙16を除いて出土せず、骨は直接墓壙内に納めたものといえる。

今回の調査では平安宮の官衙等については明らかにできなかったが、土取穴を除外すれば比較的遺構面は浅く今後の周辺の調査には十分期待できよう。

(辻 裕司)

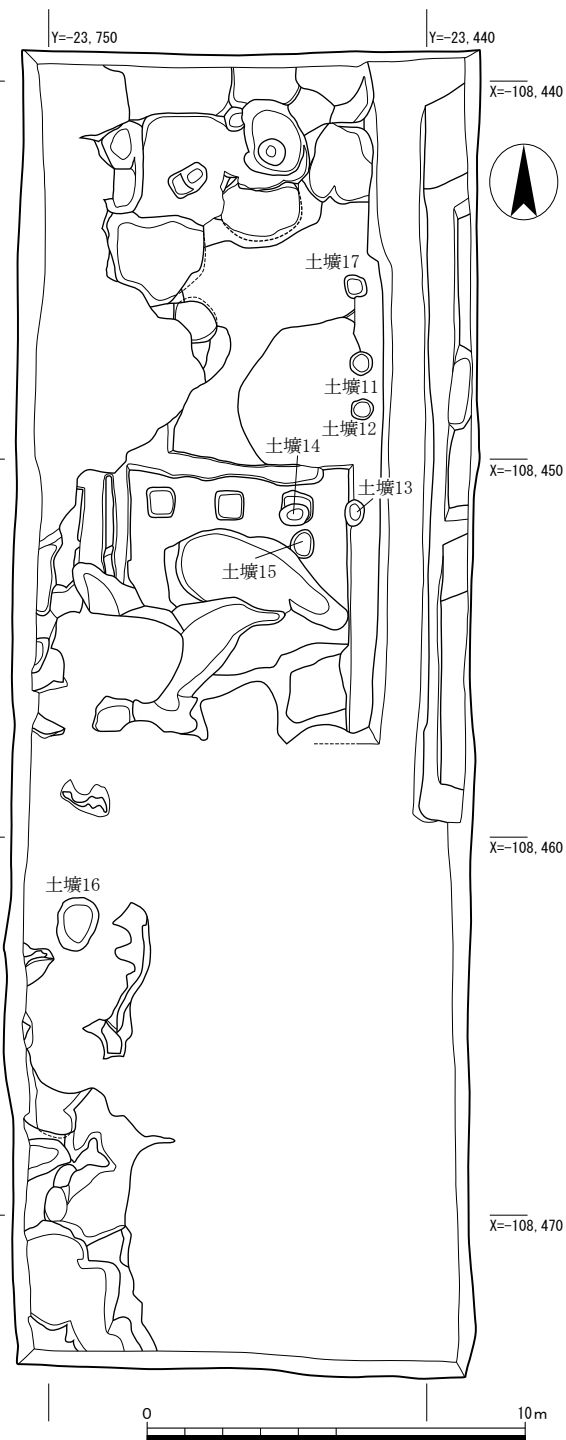


図2 遺構実測図 (1:200)

## 3 平安京左京一条三坊1 (図版10・11)

**経過** 今回、京都市上京区烏丸通り下長者町上ル龍前町605の(財)京都私学会館で新館の建築が計画された。このため工事に先立って発掘調査を実施することになった。実際の調査対象地は会館ビル西側の空き地で、町名は鷹司町となる。当該地は平安京左京一条三坊九町に位置し、一町区画のほぼ中央部に推定される。記録によると、平安時代には土御門内裏が営まれ、鎌倉・室町時代には清浄華院が存在したとある。

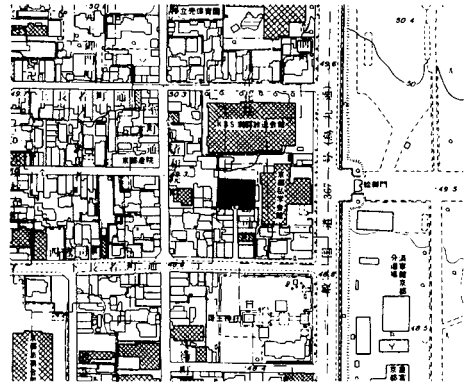


図1 調査位置図(1:5000)

調査開始は昭和61年7月7日である。調査区は東西26 m、南北18 mの大きさに設定し、最初は機械力で地表下約1 mまで盛土を除去した。調査でまず検出したのは江戸時代に廃絶した石組みの堀であり、その後は数回にわたり遺構面の掘り下げと実測・写真撮影などの作業を行った。最終的には平安時代以前の自然流路の調査を行い、同年9月4日に調査を終了した。

**遺構・遺物** 調査区の基本層序は、地表下約0.9 mまでが近・現代の整地層で、それより下層は江戸時代の整地層であるにぶい黄褐色泥砂層20cmと褐色泥砂層20cmがある。同層下面より戦国時代から桃山時代にかけての遺構面となる。更に調査区の南西部で、にぶい黄褐色砂泥層20cmを掘り下げると平安時代の遺構面になる。地山は、調査区の大部分がにぶい黄褐色砂礫層で、調査区南西部はにぶい黄橙色砂泥層である。

検出した遺構は平安時代から江戸時代のもので含めて358基を数える。平安時代の遺構には溝・土壇・柱穴がある。調査区の北寄りで検出した東西溝244は幅1.6 m、深さ0.4 mの規模で、埋土からは平安時代中期から後期にかけての遺物が出土している。溝244の東延長上で検出した溝238は幅1.8 m、深さ0.1 mで、時期は溝244よりやや新しい。調査区南では土器を埋納したと考えられる遺構を検出した。規模はいずれも径が40cmくらいの円形掘形で、いずれも土師器の皿が埋められている。土壇230は6枚の皿を伏せた状態で、土壇255は2枚の皿を合わせた状態、土壇291は6枚の皿を上向きにした状態で検出した。土師器の皿内に他の遺物は認められなかった。土師器の時期はいずれも11世紀代に比定できる。調査区の南西部で検出した小型の遺構群は、柱穴と認められるものがあるが後世の削平が激しく建物として

把握できなかった。

調査区西で検出した井戸 279 (図版 11-1) は溝 238 を切って成立する。井戸の掘形は一辺が 2.5 m の方形で、検出面からの深さ 4.4 m を測る。井戸枠の構造は一辺が 1 m の方形縦板組で内側から横棧で支える。横棧 2 段分、高さ 50cm が残存する。また、井戸内に多量の炭と巨石が投棄されているのが認められた。井戸が廃棄されたのは 13 世紀である。

戦国時代から桃山時代にかけての遺構には土壙・堀・柱穴・墓がある。主要な遺構としてあげられるのは堀 19 とそれに伴う礎石列 227 である。堀 19 は調査区の西から東へ延び、調査区中央部で南へ折れる。検出総長は 22 m である。堀の規模は幅 2.5 m、深さ 1.5 m で、断面形は U 字形を呈する。なお、堀の一部には自然石を積んだ護岸施設 (図版 11-2) がある。護岸施設があるのは南に延びる堀の東面で、堀底部から 20 ~ 50cm の大きさの石を約 9 段積み上げている。礎石列 227 は南に延びる堀の西肩に沿って検出した。礎石は 9 個あり、幅 1 m、深さ 0.8 m の布掘り状の掘形内に据えられる。礎石の配置は等間隔でなく、中央の最も大きな礎石を中心に北と南に対称形をなす。中心礎石から北へ 1.8 m・1.2 m・1 m・1 m の間隔で並ぶ。

江戸時代の遺構には柱穴・井戸・堀・土壙・石室<sup>いしむろ</sup>がある。石組みの井戸 7 基は 18 世紀代のものである。調査区北東隅では東西方向の石組みの堀 7 を検出した。堀の規模は幅 2.7 m、深さ 1.2 m で、幅 60cm 位の花崗岩の切り石を 3 段に積む。堀の北西部に水を取り入れるための 1 段高い溝が取り付く。堀の埋土は焼土を含み、幕末期と考えられる陶磁器片が出土した。

出土した遺物は整理箱にして 257 箱ある。内訳は土師器が約 80% で他は瓦類である。時代別では戦国時代から江戸時代にかけての遺物が多く、平安時代に属する遺物は約 30% 程度である。他には調査区北東部の包含層から古墳時代の須恵器が 1 点出土している。平安時代前期の遺物はわずかであるが須恵器、土師器、緑釉陶器などが出土している。平安時代後期の遺物は比較的多く溝・土壙からまとまって出土している。土器類では土師器、須恵器、瓦器、白磁などがあり、瓦類のうち軒瓦は平安宮内、鳥羽離宮、六勝寺などで出土するものと同タイプのものが多い。戦国時代の遺物は主に堀 19 から出土しており、土師器、瓦器、陶器、輸入陶磁器などがある。桃山時代以降の遺物は井戸・土壙などから出土しており、土師器の他に国産陶磁器が多くなる。

**小結** 今回の調査では平安時代から江戸時代までの遺構・遺物を検出した。平安時代では中期・後期が多く、前期の遺構は認められなかった。

平安時代中期から後期にかけての東西溝 244 は、北四門と北五門の境界付近で検出した。しかし、この溝は四行八門の推定ラインより 5 m 北に片寄っており、一町内の区画溝であるか否

は検討が必要である。土御門内裏については、12世紀前半に里内裏として造営され、久安四年（1146）には最終的に焼亡したとある。今回出土した平安時代後期の軒丸瓦・軒平瓦などはそれらの建物に使用されたことが考えられる。戦国時代の堀19は争乱時の防御用の堀として興味深く、また、清浄華院との関連も注目される。

江戸時代の井戸は比較的密集して検出されたが、当時は町屋であったことが考えられる。水戸藩邸の敷地は、

江戸時代の古地図では一町の北半部にあたり、今回の調査地には該当しない。しかし、調査区北東隅で検出した石組みの堀7については規模の大きさなどから藩邸との関連が充分考えられる。

（本 弥八郎・  
平田 泰・  
木下保明）

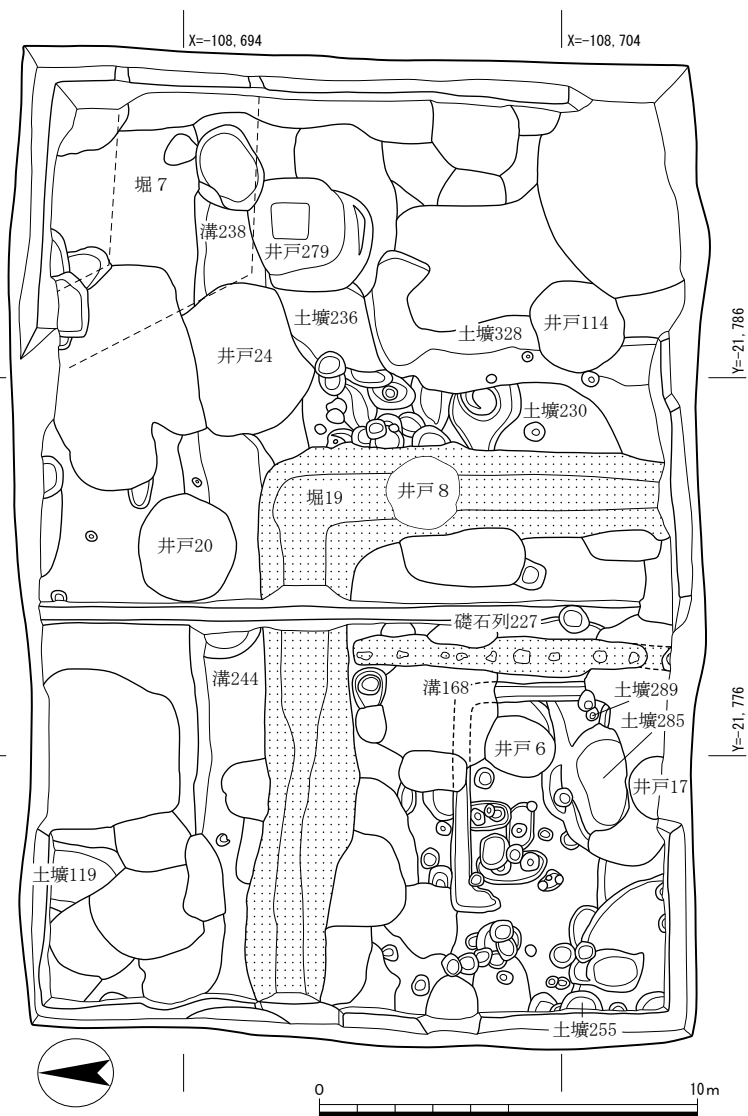


図2 遺構実測図（1：200）

#### 4 平安京左京一条三坊2 (図版12)

**経過** 調査地は平安京左京一条三坊九町に位置している。当地にビルが建築されることによる事前の試掘調査の結果、遺構の残存状況が良好であることが判明し、発掘調査を実施することになった。

**遺構** 検出した遺構は、江戸時代の土塋・井戸、戦国時代から桃山時代の土塋・井戸・石室・石組遺構・溝、平安時代の溝2条と柵列とみられる柱列1条などである。石組遺構と石室からは鉄・銅滓、埴塼などが出土している。土塋の中には

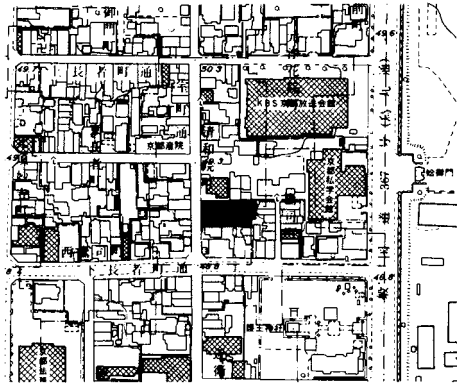


図1 調査位置図 (1 : 5000)

は作業台として用いられたと思われる比較的扁平で大きな石を据え付けたものがある。これに井戸と思われる土塋が加わって小鍛冶の施設単位をなす。

平安時代の溝は、左京一条三坊九町西一行北七門の北と東を限る宅地割の溝と思われる。ただし、南北の溝 (SD1) は推定線にはほぼ重なるが、東西の溝 (SD2) は北へ約4mずれる。柱列 (SA3) は宅地内で南北溝に沿って検出している。

**遺物** 二次堆積ではあるが、古墳時代の須恵器が出土している。平安時代の遺物には、土師器皿、須恵器の杯蓋、近江産の緑釉陶器碗、灰釉陶器の碗・皿などがある。戦国時代から桃山時代の遺物は、土師器皿、国産の陶磁器などがある。特に金属の溶解に使用されたと思われる二次焼成を受けた径5～6cmの底部が丸みを帯びた小皿、砥石、鉄・銅滓が出土し注目される。江戸時代の遺物には、土師器皿、陶磁器、染付などが出土している。

**小結** 文献によると、調査地は10世紀に村上天皇が具平親王に宅地として下賜された地で、親王の子孫である源師時 (1077～1136年) の時に土御門内裏として里内裏となった。今回の調査で検出した溝と柵列は里内裏造営前に宅地として利用されていた頃のもので、宅地が溝と柵で細かく分割されていることが判った。なお、土御門内裏の関連の遺構は検出していない。

鎌倉時代から室町時代には「清浄華院」がこの地を寺域としたとされるが、関連の遺構・遺物は検出できなかった。この後は、戦国時代の小鍛冶に携わる職人の町屋として遺構が検出される。

(木下保明・本 弥八郎・平田 泰)



図2 第1遺構面（戦国時代から桃山時代）実測図（1：100）

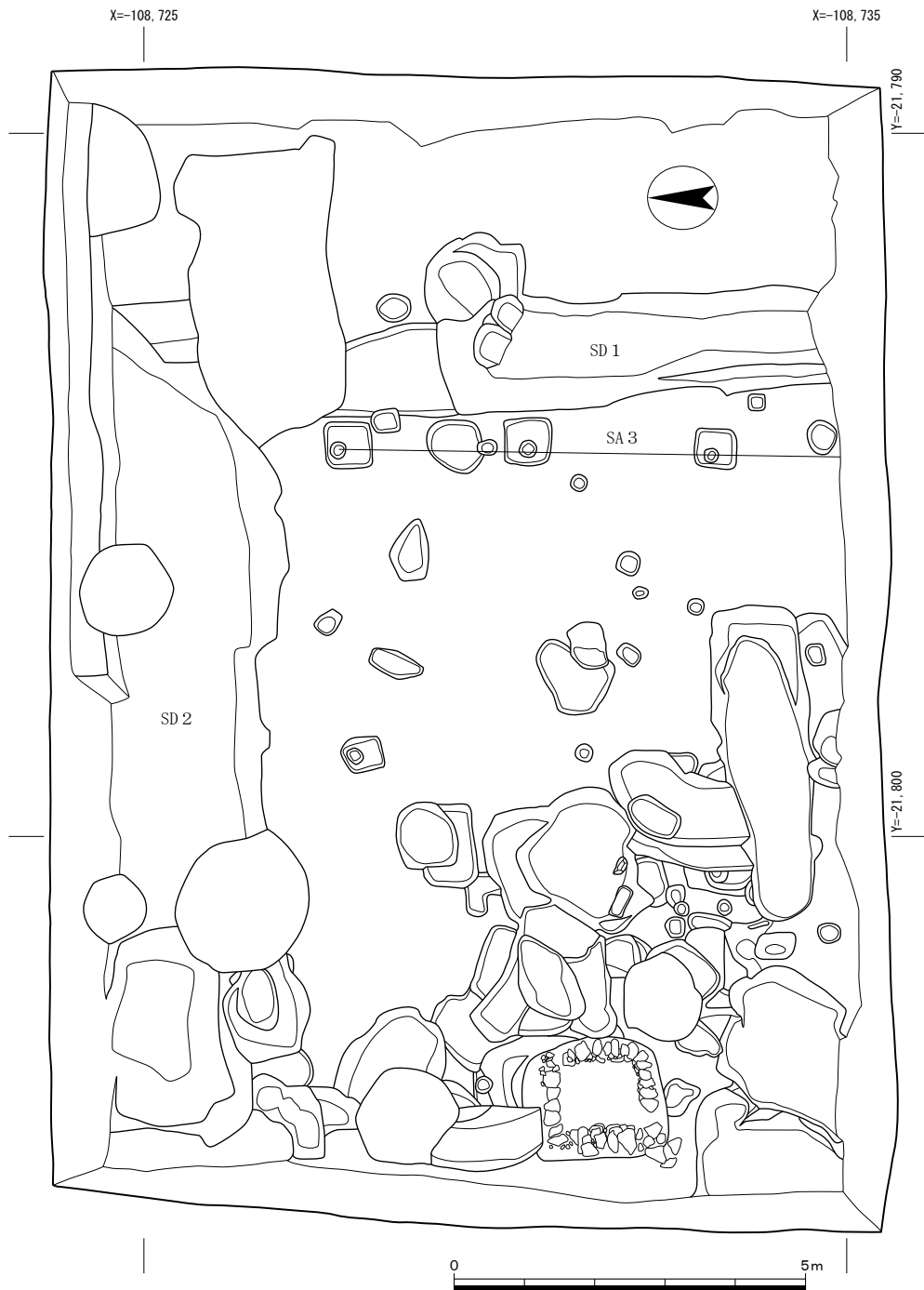


図3 第2遺構面（平安時代・戦国時代）実測図（1 : 100）



## 5 平安京左京四條三坊 (図版 13)

**経過** 調査対象地は現六角堂及びその北側の池坊会館の東隣に位置する。当地及び六角堂などを含む地域は平安京左京四條三坊十六町にあたる。六角堂は同縁起によれば平安時代以前から存在していたと伝えられるが、文献史料からは平安時代以前については疑問である。しかし、平安時代中期には確実に存在していたようだ。

発掘調査は主調査区に東西 17.4 m × 南北 22.4 m のグリッド及び北東部に東洞院大路西

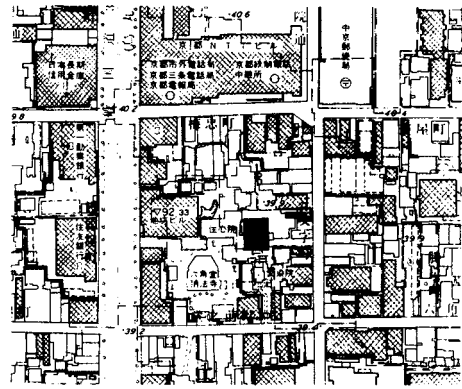


図1 調査位置図 (1 : 5000)

側溝の推定地に重ねて東西 14 m × 南北 3 m のトレンチをそれぞれに設定して調査を実施した。しかし、トレンチ調査区は中世以前の遺構面が深く、設定直後の降雨により壁面が倒壊するなど、調査の安全確保が難しく、この部分の調査は中止した。グリッド調査区も先の試掘調査の情報では遺構面が深いとみられた。このため地表下 1.5 m 付近で調査区壁沿いに安全確保用の一定幅の段を設け無事調査を完了した。

**遺構** 遺構は総計で 278 基検出している。平安時代中期以前に遡るものは確認していない。平安時代後期にはピット・井戸などが認められる。井戸 5 は方形の縦板組で東側の面には戸板がそのまま利用されていた。鎌倉時代から室町時代前半の遺構はピット等が少数認められる程度である。室町時代後期になると調査区のほぼ中央に、南北に並ぶピット列があり門と思われる痕跡も確認した。各ピットは掘り込みも深く、礎石を有するものも多い。調査区西側に並ぶピットは江戸時代以降のもので、ほぼ同じ位置で数回の造り替えが認められる。これらのピット列は六角堂の各時代の東限を示す痕跡と考えられる。落込 11 とした遺構は護岸と思われる西側に面を持つ石列を有し室町時代後期の遺物が出土する。大部分は調査区以西にあるため全形をつかむことはできないが、試掘時の情報、堆積状況から池である可能性が高い。桃山時代から江戸時代に入ると遺構数も多くなり大型の遺構が目につくようになる。多くは土取りと塵芥処理を兼ねたものと思われる遺構で、掘込 13 など下層に炭が厚く堆積し江戸時代中頃の土師器・陶磁器類が多量に出土した。

**遺物** 平安時代から江戸時代までの各種の遺物が出土した。平安時代前・中期の遺物も出土

しているが、遺構に伴うものではない。平安時代後期の遺物は、井戸などから一定量まとまって出土した。鎌倉時代から室町時代前期にかけての遺物は量的にも少なく、遺構のあり方を端的に反映している。室町時代後期の遺物はピット、落込 11 などにより一定量出土した。江戸時代になると出土量は、爆発的に増える。土取り兼塵芥処理用の大穴から土師器、染付磁器、京焼、京焼風肥前陶器、唐津系、美濃・瀬戸系などの陶磁器類が多量に出土した。京焼、京焼風肥前陶器には落款のあるものもあり注目される。

**小結** 左京四条三坊十六町・六角堂寺域内の調査と、東洞院大路の確認調査が今回の主目的であった。東洞院大路については西側溝・築地の検出を目的としてトレンチを設定したが、掘削場所の深さ 2m 以上が攪乱されており壁が次々と崩壊し危険であったため、側溝推定線の上に室町時代後期の大きな濠状落込を確認した段階で埋め戻した。

六角堂については室町時代後期の東限の堀・門・池と思われる遺構、江戸時代の東限の堀を検出した。調査区東半が江戸時代以降に攪乱されていることもあって、室町時代以前の直接六角堂につながる遺構は検出できなかったが、平安時代後期の井戸は当時の六角堂の寺域内にあった可能性は高い。六角堂の東限が時代と共に西へ移動して行く状況を確認することができた。

(平安京調査会 小森俊寛・上村憲章)

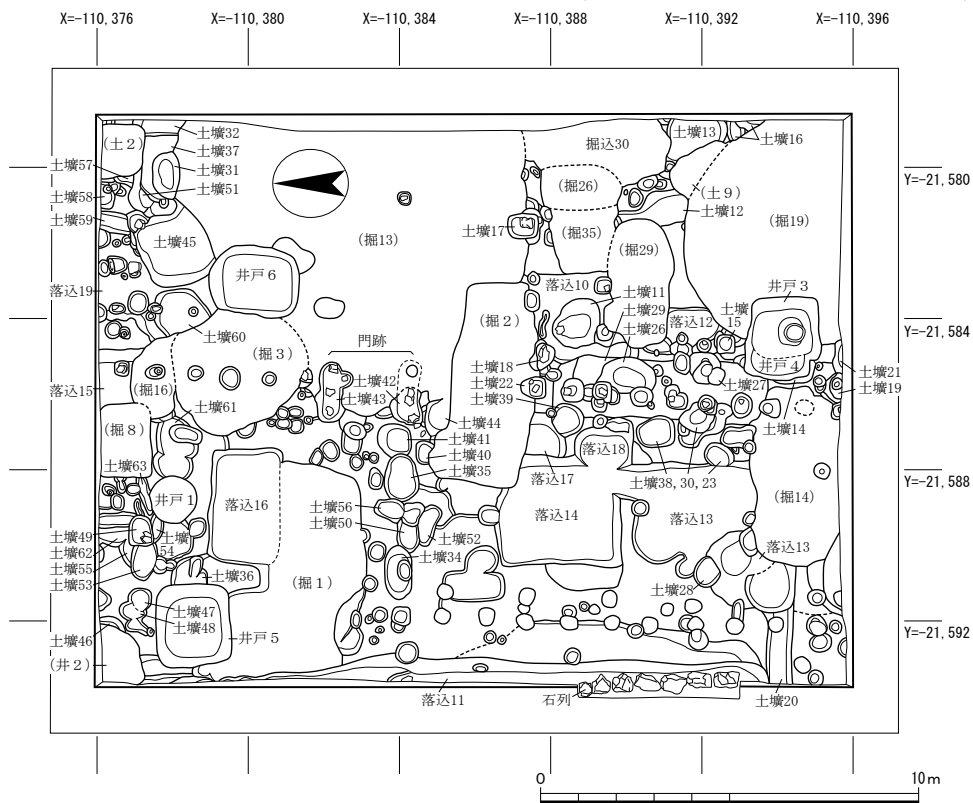


図2 遺構実測図 (1 : 200)

## 6 平安京左京四條四坊 (図版 14)

**経過** 調査地は平安京左京四條四坊七町のほぼ中央部に位置する。同町に関連する平安時代の文献史料は不明確であり特定の邸宅や諸施設の存在は推定されていない。しかし、平安時代中期から後期になると隣接地には藤原氏や源氏の貴族の邸宅が建ち並び、当地を含むこの地域は稠密都市化する左京の中心部の一画となる。当地域の高級住宅街の様相は室町時代の初めまで続くようだ。室町時代には中世の商工業都市として再編された下の町の中心から離れた周縁地となるが近辺には酒屋や土倉、油屋、綿屋などの商工業者が点在しており決して非都市化することはない。桃山時代には秀吉の都市改造対象地の一つとなり、七町の中央付近に南北方向の堺町通が設置され、以後は近世都市の一画として発展を続け現在に至っている。このように長い都市域としての歴史を持つ地域であるが、調査対象地の七町については平安時代に限らず各時代とも不明確な状態が続く。

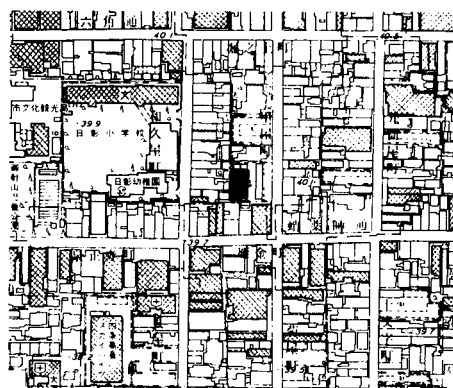
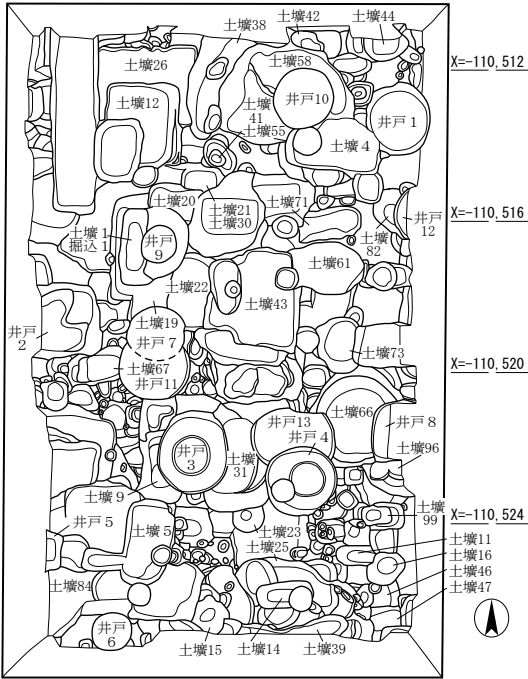


図1 調査位置図 (1 : 5000)

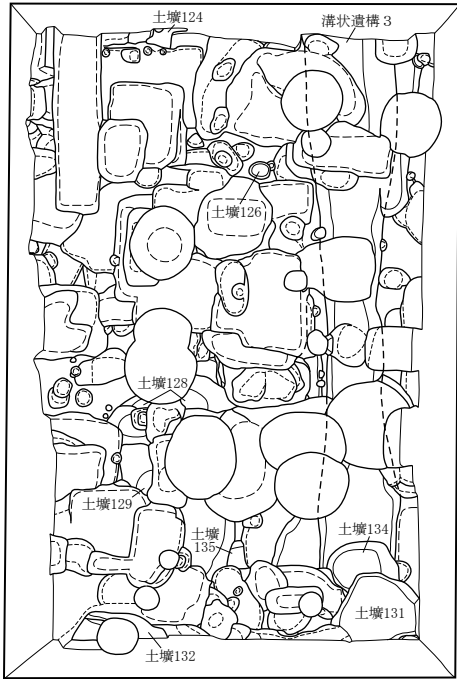
発掘調査は対象地のやや西寄りに東西 12 m×南北 18 mの調査区を設定して実施した。調査の結果、平安時代及び以後の各時代の遺構・遺物を多数検出し、七町の歴史の変遷の一端を明らかにすることができた。加えて平安京跡の下層において、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物を検出し、平安京成立以前の当地の様相も知ることができた。

**遺構** 弥生時代には既に機能していた溝1は、東肩が調査区外に位置するため実際の規模は不明であるが幅は東西で 11 m以上、深さは西肩から 1.5 mを測る大規模な遺構である。底部は南西部が相対的に低く、北東から南西へ流れていた溝と言える。自然流路か人工の溝であるのかはこの調査資料だけでは即断し難いが、人工の溝である可能性を踏まえた周辺の追跡調査が必要であろう。多量の土器類はこの溝1が埋まって少し浅くなった一時期の底部に、薄くではあるが比較的広範囲に堆積した炭層の上面から出土した。炭は、溝底部の一部が長円形(東西約 2.5 m, 南北約 6 m)に窪んだ部分に厚く、その周縁には薄く広がって堆積していた。土器類はその窪みと、その南半周辺部に多く分布していた。溝1の埋没は古墳時代に入ってからである。

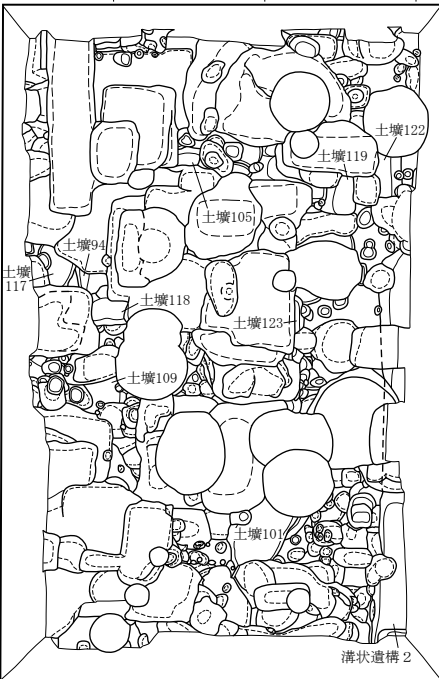
プラン 1 Y=-21,372 Y=-21,368 Y=-21,364



プラン 2



プラン1-2



プラン3-2

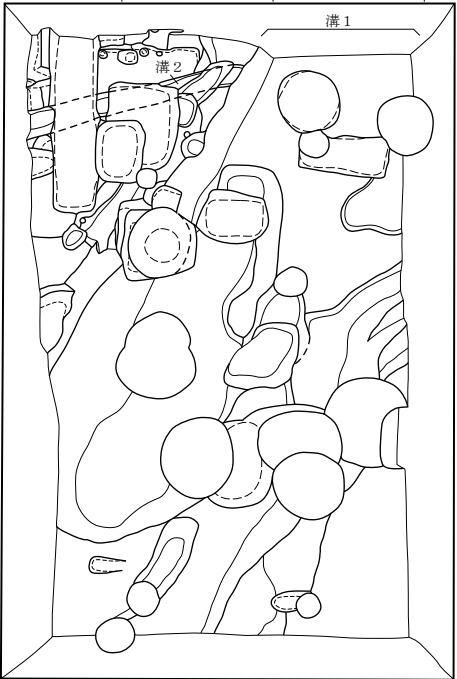


図 2 遺構実測図 (1 : 200)

溝2は残存部で幅、深さとも0.7 m前後の小溝である。溝1の西肩に取り付き西南西方向へ延びるが溝1に合流する溝でなく分流する溝であろう。また弥生時代後期、古墳時代のピットを検出したが性格を把握するまでには至っていない。

平安時代以降の各時代の遺構を多数検出したが遺構の配置や、関連から各時代の遺跡の様相が簡単に認識できることは少ない。各時代とも遺構密度が高く、相互の切り合い関係が激しく複雑であり、その上調査面積が狭小であるため遺構は多いが不明確であるという状態を呈している。ここでは性格の理解できる遺構や検出数の推移などから概観しておく。

平安時代前半代は左京域内に位置するとはいえ検出遺構数は少なく、稠密な都市域という印象はない。しかし、溝状遺構3は一町中央の町割に関連する南北溝とみられ、西肩口で検出したピット122には須恵器壺が1個、口を土器片で蓋をされ直立して埋められており地鎮具を埋納した遺構と思われる。平安時代中期初頭あるいは前期末には当七町は町割りされ、全体的かは不明だが溝の西側は宅地化したものとみている。平安時代後期に入り、中期の後半には調査区全体に整地層が積み上げられるが、この上面でも一町中央付近に位置する南北方向の溝状遺構2を検出している。この遺構のすぐ西側で検出したピット121には、完形の土師器皿が埋設されていた。この遺構も地鎮に関係するものとみている。同整地層上面からの遺構検出数は確実に増加しており、整地による生活面の整備と共に当町での人々の活動が活発になったことを示している。このような遺構の様相は鎌倉時代まで続くが後半から室町時代には、遺物出土量と同じくやや停滞した印象の時代が続く。

しかし、室町時代も末期に近づくると井戸を含む各種の遺構が増加し、人々の集住化が再開されるようだ。桃山時代から江戸時代前期にはこの狭い調査区内で、掘り替えを考えても何基かの井戸が並存しており、同町は密度の高い生活空間となっている。この状態は江戸時代を通じて続くようだが逆にみれば当時は既に現在みるような稠密な町屋が建ち並んでいたといえる。

**遺物** 弥生時代、古墳時代及び平安時代以降の遺物が出土している。弥生時代後期から古墳時代初頭（庄内式）の土器は、溝1から完形品を含め多数出土している。弥生土器甕・壺・高杯・鉢・手焙形土器、庄内式土師器甕・高杯など各種のものがみられるが、中でも甕類と高杯が圧倒的に多く、器台も比較的多い。壺・鉢・手焙形土器などは少ない。一般的に使用頻度の高いものが単に多いのか、器種の偏在に性格が見いだせるのか現時点では判断できない。甕類は体部から底部外面に煤の付着するものも多い。

古墳時代後期の土器類は出土量が少ないが、遺構に伴うものであり、遺跡解明の重要な資料である。弥生時代から古墳時代の土器類は、同期の遺構から出土したもの以外にも新しい時

代の層・遺構に混入して出土する例も多い。

平安時代以降の遺物は、平安時代前期から中期前半代の遺物も一定量出土しているが、混入品としての出土例が多い。遺構からの出土量が増加するのは中期後半代からであり平安時代後期から鎌倉時代前半までは増加傾向が続く。鎌倉時代後半から室町時代の出土遺物は、確実な遺構からの出土例も多いが相対的な意味で増加するという印象はない。室町時代でも後半代に入り末期に近づくと、遺構数の増加と共に出土遺物も着実に増える。

この平安時代から中世の遺物の内容は京域内での普遍的な様相に通じるものであり、当時の都市的な遺物の様相を示している。

桃山時代から江戸時代前期の遺物は以前に増して質・量共に豊富になる。明代の染付類に加えて国産陶磁器が増加し、中世以前の遺物とは様相も一変する。それに加えて陶磁器類に志野・織部・黄瀬戸・唐津・高取・京焼・備前・丹波・信楽など茶陶や高級食器類が多く含まれるようになる。茶陶には黒織部沓茶碗のように現存する伝世品に比肩する逸品も少なくな。また陶磁器類ではないが桃山時代の遺構から既に銅製のキセルなど、当時の流行品も出土しており、当地における同期の経済文化の華やかさを伝えている。江戸時代中期以降の遺物も数多く出土しており発展の継続をうかがわせている。

**小結** 弥生時代から古墳時代の遺構の検出は調査以前には、明確には予想していなかった。同期の遺跡で最も近い、当地の南西方向にある烏丸綾小路遺跡でも推定遺跡範囲外に位置しており、また、実体把握の情報としては例数が少なすぎるが、近隣の既調査地でもまとまった形で遺構・遺物の発見がなされていなかったことによる。しかし今回の調査により、当地域にも平安京の下層に、弥生時代から古墳時代の遺跡が存在していることが明らかになった。近辺遺跡との関連もよく考慮して、独立した遺跡の一画とみるか、近辺遺跡の範囲を拡大させてその一部とするかをみきわめる必要がある。

平安京成立以降の遺構・遺物の変遷は、当地が左京の中心地域から少しはずれているゆえ平安京における右京の衰退と左京の稠密化と再編を考える好資料の一つとなるであろう。平安時代中期（あるいは前期末）に入って以降から、実質的宅地化が始まる当地の動向は注意しておく必要がある。平安京の都市化としての枠組みの成立と、各町内での実質的宅地化は分けて検討すべきである、また、平安京から中世都市京都、更に近世京都への変遷とその動因を考えて行く上でも、今回の調査で検出した考古資料は重要なものとなるであろう。

(平安京調査会 小森俊寛・原山充志)

## 7 平安京左京六条一坊 (図版 15)

**経過** 日本たばこ産業株式会社の倉庫増築に伴って発掘調査を実施した。調査地は平安京左京六条一坊八町の北西隅にあたる。八町内では昭和57年度に発掘調査を実施している。発掘調査は10月1日より開始。重機によって盛土を排除した後、手掘りで調査を進めた。11月初めに全景写真を撮り、地元への説明会を開催、この月の半ばに終了した。

**遺構** 基本層序は、上から現代盛土層(約1.2m)・旧耕作土層(約0.2m)で、この下はすぐ地山面となる。地山面は大部分が砂礫層であるが、調査区北西部と南半部では、この上に黄褐色粘土層が堆積する。

検出した主要遺構は、平安時代後期から鎌倉時代末葉の井戸7基で、この他に江戸時代の土取穴が多数ある。

井戸は重複したものもあり、実際は10基分ある。方形・円形の掘形中央に木杵を持つものが多いが、石組みのもの(SE 80)や曲物だけのもの(SE 47)もある。木杵を持つものでは、(SE 18 A・B, SE 43, SE 100)で木杵が遺存していた。これらは方形の横棧(一辺75～99cm)の外側に縦板を巡らせる。縦板は幅20～30cmで各辺4ないし6枚用いられ、その外側に薄板をあて補強する。井戸底のレベルは、SE 47(海拔27.60m)を除き26.50mで一定である。

土取穴は調査区北西部と南半部で認められた。北西部のものは深くまで掘られ、複雑な切り合い関係がみられた。

**遺物** 各井戸から平安時代後期から鎌倉時代後期の遺物が出土している。量的にはSE 32が最も多い。内訳は、土師器(皿)、陶器(甕・鉢)、瓦器(椀・鍋・羽釜・盤)、輸入陶磁器(青磁・白磁・青白磁)、灰釉陶器(椀)、無釉陶器(高杯)、瓦(軒平・丸・平)、石硯、滑石製石釜などである。

江戸時代の土取穴では、上記以外に近世の陶磁器が若干出土している。

**小結** 今回の調査では前回調査と同じく井戸のみを検出、これに伴うはずの建物や溝・土塋

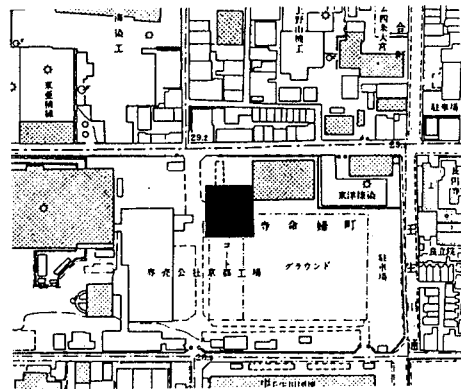


図1 調査位置図 (1 : 5000)

などはいっさい検出できなかった。これは後世の削平が大きかったためと解釈できる。検出した井戸は、SE 18 B・SE 104 が11世紀後半、SE 18 A・SE 43・SE 100・SE 32・SE 80 が12・13世紀、そしてSE 47 が14世紀前半に属すると考えている。これらは付近一帯の土地利用を復原する上で重要な資料となろう。(丸川義広)

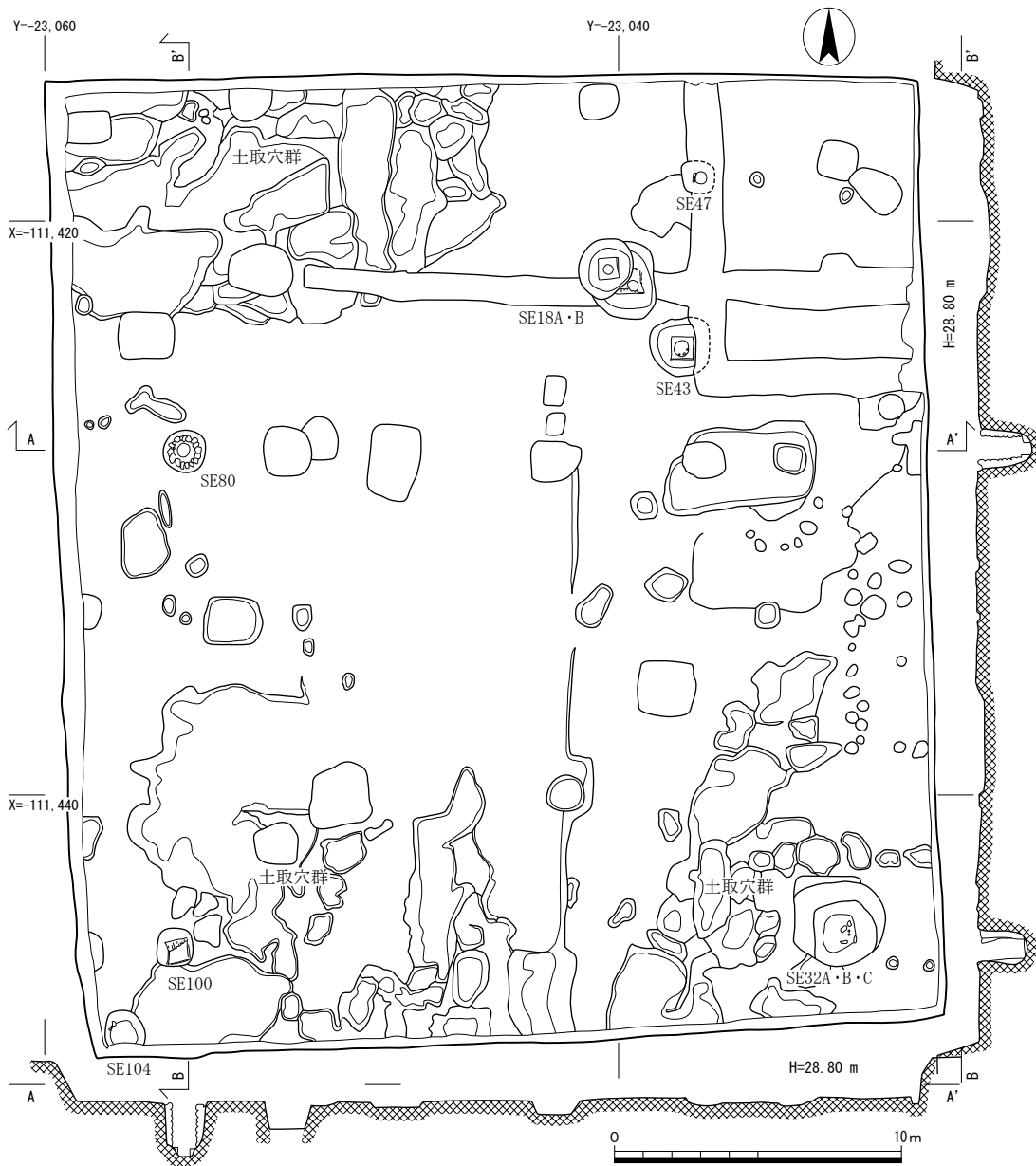


図2 遺構実測図 (1 : 250)



## 8 平安京左京七条二坊・八条二坊 (図版 16・17)

**経過** 堀川共同溝の建設に伴う発掘調査は、今年度で2年目になる。今年度は、昭和61年8月から10月までの3箇月と、昭和62年2月から3月の約1箇月に調査を実施した。調査対象区間は、前者が北側区間として花屋町通から北小路通上ルの約280m間、南側区間として木津屋橋通上ルから塩小路通までの約100m間の2区間である。調査区は北側区間にNo.6～11トレンチの6箇所、南側区間にNo.12トレンチを設定した。後者は、花屋町通上ルの約100mの区間であり、工事区も花屋町通で堀川通北行き車道を西へわたり、西側歩道沿いに変わるため、その歩道部にNo.13トレンチ1箇所を設定したにとどまる。

今年度の調査では、平安時代及びそれ以降の遺構・遺物を検出しただけでなく、弥生時代や古墳時代の遺構・遺物も多数発見している。

**遺構** No.6～13トレンチの8箇所の調査地点で、総計1110基の遺構を検出した。時代的にみると弥生時代後期、古墳時代前期の遺構を始めとして、平安時代以降から近代に至る遺構を検出している。遺構の種類別にみると、井戸34基、土壇140基、ピット705基、礎石3基、溝3条、溝状遺構11条、道路敷26枚、掘込12基、落込101基、漆喰遺構1基、攪乱墳69基である。

弥生時代の遺構は、No.7トレンチ溝4、No.10トレンチ落込31の2基で、氾濫原の一部を形成している砂・砂礫層がベースとなっている。No.7トレンチ溝4は、南北方向からほぼ直角に曲がり西に延びている。幅約1.6m、深さ約0.5mで、断面が皿状の溝である。溝の堆積土からは畿内第V様式の土器が少量出土している。形状・出土遺物からみて、方形周溝墓の南東部にあたる可能性がある。

No.10トレンチ落込31は、北西から南東方向に延びる北肩部から底部を検出している。深

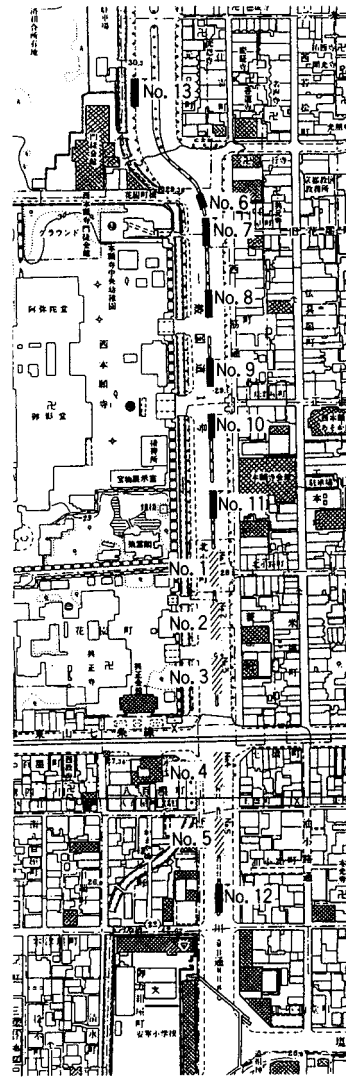


図1 調査位置図 (1:5000)

さは約 0.5 m で遺構内には砂・砂礫層が堆積しており、比較的摩滅した畿内第 V 様式の壺・甕などが出土した。氾濫原の内を流れる小流路の一部と理解している。

古墳時代の遺構は、前述の弥生時代の遺構が埋没し、更に古墳時代前期の遺物を包含する自然堆積層が堆積した後に形成されている。No. 7 トレンチ落込 4～6 は、

溝 4 とほぼ重なる位置にあり、自然堆積層の凹部に土器が投棄され埋没したものであろう。

No.11 トレンチ落込 35 も、自然堆積層をベースにする窪地の南側肩部からの底部の一部を検出したものである。砂礫層の上面から底部までの比高差は約 0.8 m を測る。遺構内には砂・粗砂・シルトなどが互層堆積しており、下層からは布留式の土器が多量に出土している。これらの遺構内堆積土と極めて類似する土層を No.10 トレンチの全面に検出している。前述の No.10 の落込 31 の上層に堆積している土層で、厚さ約 1 m である。この土層からは遺物が出土していないため即断はできないが、No.11 トレンチ落込 35 に続く土層であるとするれば、南北距離にして 60 m を越える後背湿地状の窪地が想定される。

平安時代以降の遺構は、各トレンチともに多数検出した。以下、平安京の条坊及び町割りに関連すると推定される遺構について略述しておく。

条坊関係の遺構としては、左女牛小路、七条坊門小路が調査の対象となっている。No. 7 トレンチ溝状遺構 2（平安時代前期）が左女牛小路南側溝、No. 9 トレンチ溝 4（鎌倉時代前期）が七条坊門小路北側溝の推定位置にほぼあたっている。推定位置との差は No. 7 溝状遺構 2 が 2.4 m、No. 9 溝 4 が 1.5 m で、共に推定線よりも北側に位置している。

他に、町割に関連する可能性のある溝状の遺構・路面・ピット列などを No. 9～13 の各トレンチで調査している。こ

表 1 各調査座標位置

この内の多くは一町の中心線にあたる二行と三行の境に位置する南北方向の遺構で、No.10 トレンチ溝状遺構 4・5、No.11 トレンチ溝状遺構 1・2（平安時代前期）、No.12 トレンチ道路敷（平安時代中期～後期）、No.10 トレンチピット列（平安時代後期）、No. 9

No.	北側ポイント		南側ポイント	
	X	Y	X	Y
6	-112, 042. 75	-22, 295. 82	-112, 053. 63	-22, 290. 97
7	-112, 060. 60	-22, 288. 33	-112, 083. 61	-22, 287. 94
8	-112, 114. 59	-22, 287. 42	-112, 137. 58	-22, 287. 04
9	-112, 116. 53	-22, 286. 43	-112, 189. 53	-22, 286. 15
10	-112, 209. 55	-22, 285. 50	-112, 228. 52	-22, 285. 49
11	-112, 226. 53	-22, 284. 85	-112, 289. 51	-22, 284. 47
12	-112, 565. 03	-22, 280. 71	-112, 587. 47	-22, 280. 44
13	-111, 955. 73	-22, 344. 58	-111, 977. 72	-22, 344. 04

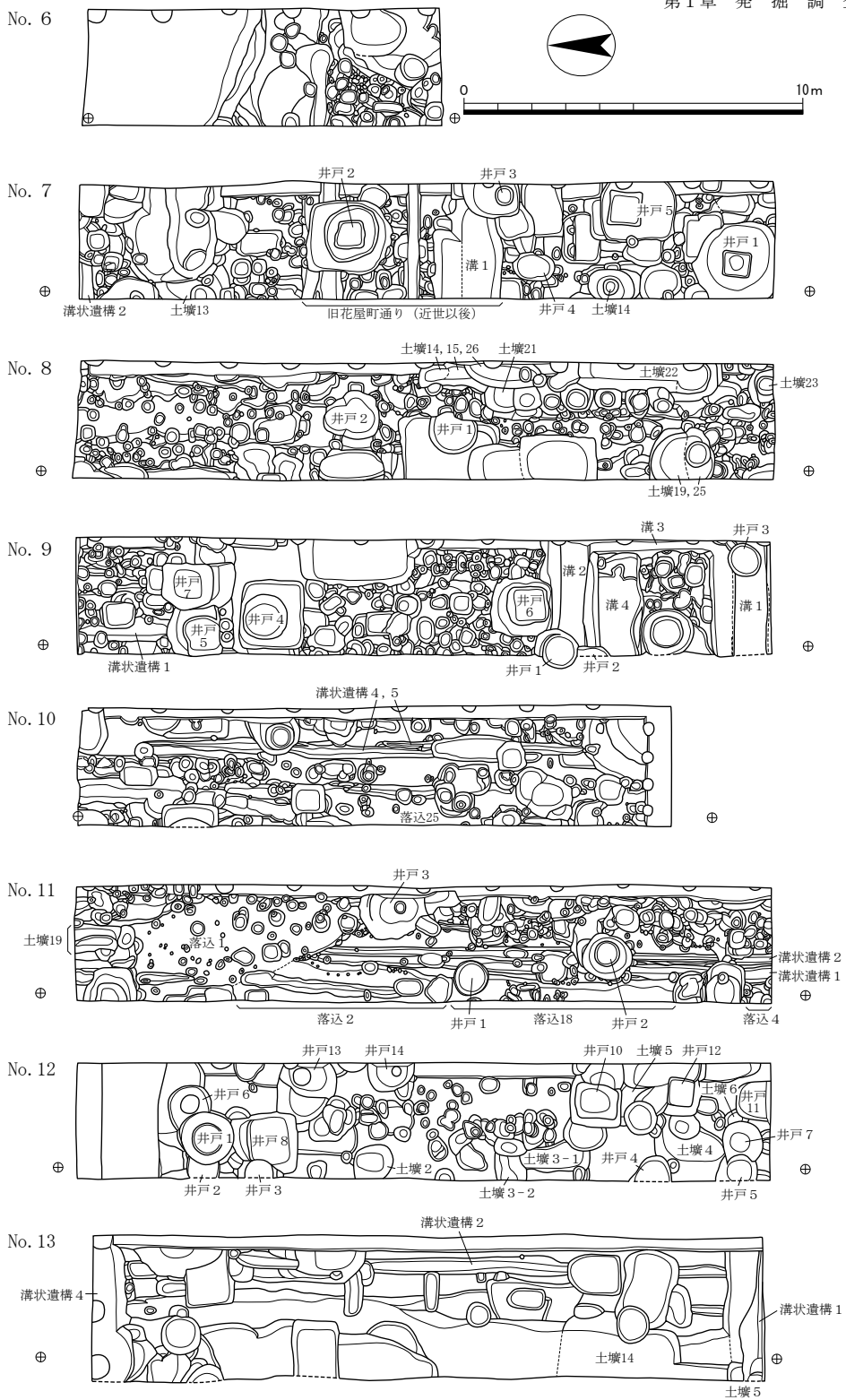


図2 No. 6~13トレンチ遺構実測図 (1:200)

トレンチ溝状遺構1などが挙げられる。平安京の地割りとしては、左京七条二坊の十町（No.7トレンチ）・十一町（No.10・11トレンチ）、八条二坊九町（No.12トレンチ）にあたり、いずれも推定線から東側3mの幅に納まる範囲内に位置している。No.13トレンチ溝状遺構1下層・4は東西方向に延びる遺構で、左京七条二坊九町東一行の一門と二門及び三門と四門の境にほぼ重なる。堀川に流れ込む溝の一部の可能性はある。

**遺物** 各調査地点から、弥生時代、古墳時代などの平安京成立以前の土器類を始め、平安時代から江戸時代及び近代まで各時代の遺物が多数出土している。遺物には土器、陶磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、銭貨、自然遺物など各種類のものが含まれているが、数量的には各トレンチとも土器・陶磁器類が圧倒的に多い。

弥生時代の遺物は、畿内第V様式に比定できる土器が主であり、古墳時代の土器出土量に比べると量的には少ない。しかし、今回の調査では溝などの遺構内堆積土から出土しているものもあり、その資料価値は高い。

古墳時代の遺物は、No.7・11トレンチで落込とした砂礫層上面の自然地形の窪みとみられる遺構から多数出土している。窪みの斜面から底部への変換点付近に多数の土器が散在して検出され、中には割れてはいるが復原すれば完形に近いものも含まれていた。この状況からみて、これらの土器は窪地の肩部あたりから投棄されたものであろう。集落の脇のゴミ捨場の様相とみている。これらの土器類は在地色が強く認められるものを多く含むが、布留式に属するものが中心で、形式的にもまとまった資料と考えている。京都盆地内の古墳時代前半代の土器研究に欠かせない資料となるだろう。

平安時代以降の遺物は、遺構から一括出土した資料が多い。中でも、平安時代、鎌倉時代のものにみるべきものが多い。

No.7トレンチ～11トレンチにかけての地区からの出土遺物は、平安時代前期から中期の資料に良好なものが多い。例えば、No.7トレンチ土壙14、No.9トレンチピット136その他からは、平安時代前期の土師器皿・杯・甕、須恵器杯・鉢・甕、黒色土器A類の皿・椀・壺、灰釉陶器椀・壺、白色土器椀などが、瓦類を伴って多数出土している。

No.12トレンチの出土遺物の様相は、七条通以北の各トレンチとは異なる。平安時代前期の遺構は少なく、中期以降に徐々に増加する。しかし、平安時代後期以後の展開は、七条大路以北と相似している。

左女牛小路以北に位置するNo.6トレンチは、同小路以南と大きく様相を異にしている。この差は平安時代以前・以降ともに指摘できるだろう。平安時代以前については、原地形の差異

が遺跡の立地を大きく左右している結果とみている。平安時代以降は、京域内の土地利用の違いからくる遺跡の性格差が反映しているものとみている。しかし、遺構・層位の残存状況にも大きな違いがあり、今後北側の調査資料の増加を待って、この様相差について検討したい。

**小結** 堀川共同溝建設に伴う発掘調査対象地域内では、昨年度の調査に合わせ、今年度実施した調査によって平安京東市の東側及び南北近接地の調査が完了したことになる。

本体工事の性格上から南北に長い線的調査しかできなかったが、東市の東部地域では既発掘調査がごく限られたものであったため、その成果への期待は大きかった。

今年度の調査においても東市を東西に貫通する七条坊門小路やその北側の左女牛小路の一部を始め、外町（左京七条二坊十・十一町）の1町内中央の町割りと関連するピット列や溝状遺構など、市の骨格をなす遺構を検出している。

東市内の調査区では、平安時代の井戸・土壙・ピットを始めとする各種の遺構・遺物を多数検出している。これらは、遺構密度や遺物の質・量・バラエティーの側面からみても、近接地の調査区との様相差を指摘できるが、更に京域の他地域との比較・研究が必要であろう。また、当地の繁栄を示す平安時代の様相と比べて、鎌倉時代以降の中世の様相は、地域的再編を思わせる遺構分布の偏在がみられ、出土遺物の内容も七条坊門小路周辺を除くと、全体的には貧弱な印象となる。しかし、近世に入ると徐々に稠密な都市化を思わせる遺構・遺物の様相を呈する。これら時代別資料は、平安京東市の衰退と再編を解明する上で多様な視点からの比較検討が必要である。

平安時代以降の歴史時代の遺跡に対する成果も大きいものがあるが、今回の調査によって歴史時代の遺跡下において弥生時代、古墳時代の遺構・遺物を発見し、当地が同時代の遺跡の一面であることを明らかにできたことは重要な成果といえる。昨年度の調査においても自然堆積層からの流れ堆積の遺物として、同時代の遺物を検出している。また堀川通の周辺地域の既調査地点でも明確な遺構からの出土という状態ではないが、関連する時期の遺物が出土していることが知られている。これら既調査の発掘資料と新たに得られた資料を総合的に検討した上で、同時代の新遺跡の発見や範囲を解明して行く必要がある。

（平安京調査会 小森俊寛・原山充志）

## 9 平安京左京八条一坊 (図版 18)

**経過** 調査地は市立大内小学校敷地南部に位置し、平安京の条坊では左京八条一坊八町の東南部に該当する。当地に体育館が建設されるため、工事に先だって南北9m、東西24.5mの調査区を設定し、調査を実施した。

**遺構・遺物** 近世の土取穴と思われる土壌がわずかな間隔をあけて多数掘られており、遺構面が大部分失われていた。そのため、それ以前の遺構としては井戸2基 (SE 20・25)、土壌1基 (SK 31) を検出したにとどまった。SE 20

は底部から約1mの縦板を桶状に組み、その上部に石組みを持つ内径0.6mの井戸で、土師器や焼締陶器など室町時代の遺物が出土した。SE 25は一辺0.9mの方形縦板組の井戸であるが、木枠はほとんど腐植して痕跡をとどめるだけであった。出土遺物には平安時代後期の土師器、瓦器、白磁などがある。SK 31は浅く、皿状に窪む土壌であるが、三方を土取穴に切られており、平面形は不明である。鎌倉時代の土師器や輸入陶磁器が出土した。以上3基の遺構から出土した遺物はいずれも少量だが、土取穴、特にSK 5やSK 14の埋土に多量の輸入陶磁器類が含まれていた。これら輸入陶磁器はSK 31出土のものと同時期で、内容も非常に類似しており、接合するものもある。

**小結** 多数の土取穴のため、検出した遺構はわずかにとどまった。しかし、多量の輸入陶磁器類の出土は注目すべき点である。この大半は遺構に伴うものではないが、周辺の遺構や遺物包含層に由来したものである可能性が高いため、その一部を掲載しておく。

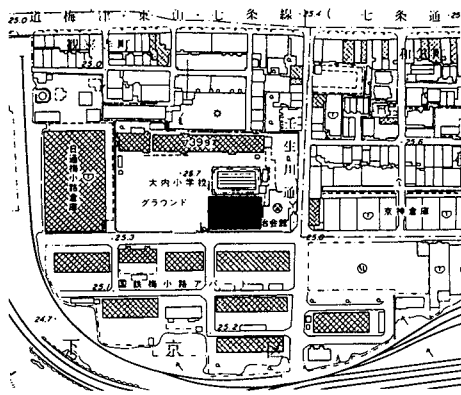


図1 調査位置図 (1 : 5000)

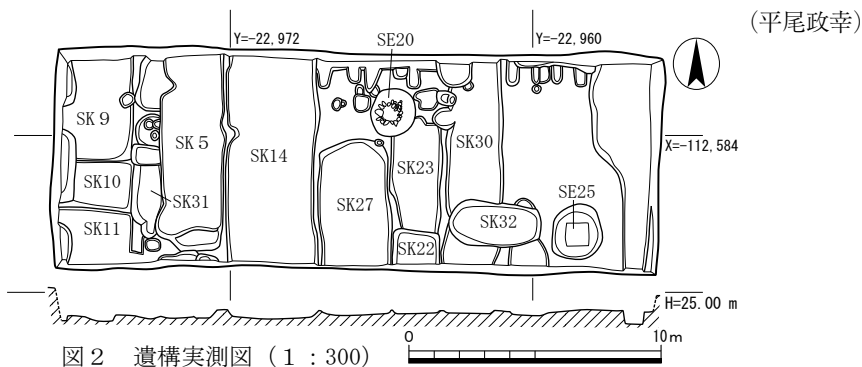


図2 遺構実測図 (1 : 300)

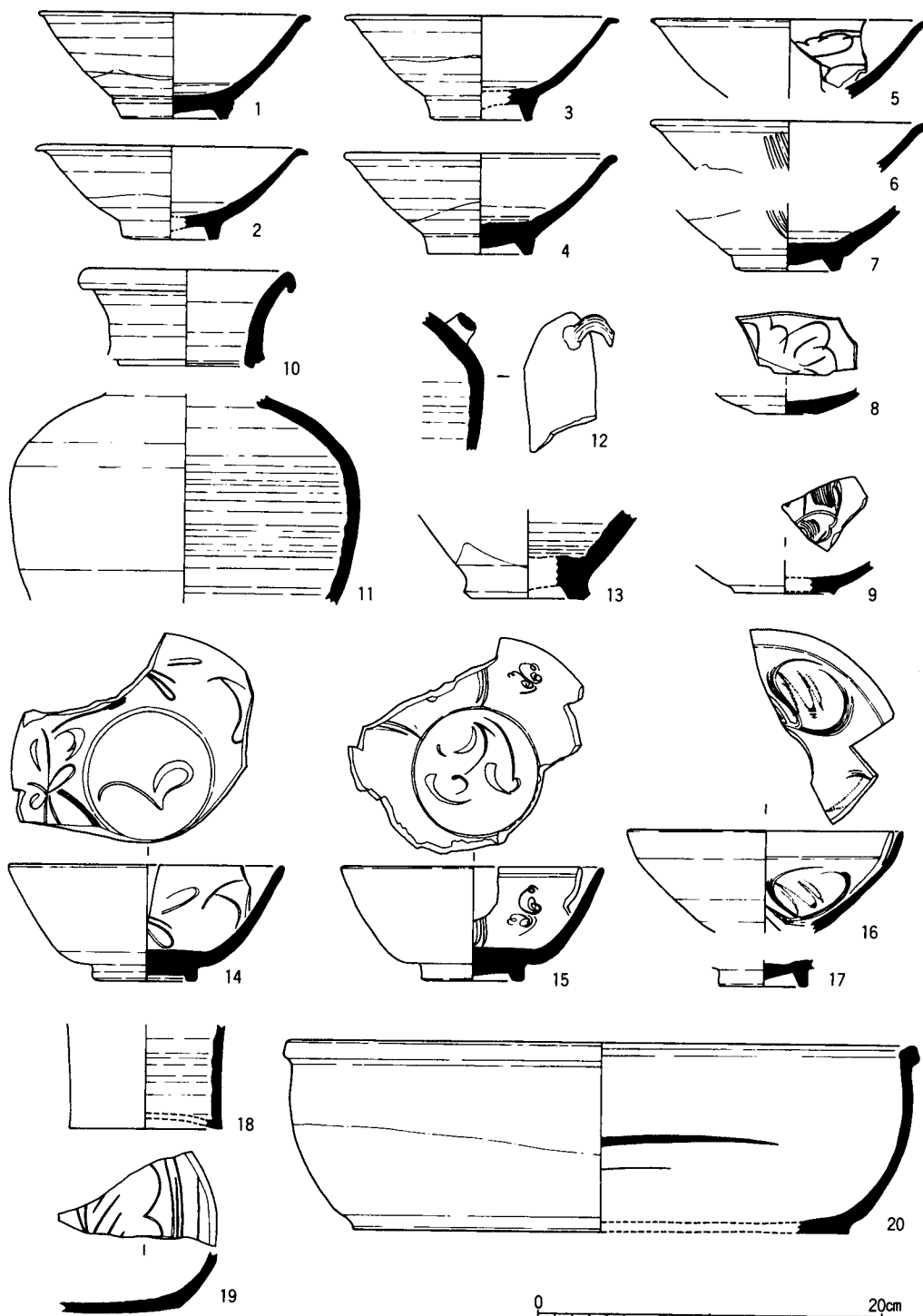


図3 輸入陶磁器実測図 白磁(碗1~7, 皿8・9) 青磁(碗14~17)  
 緑釉(壺18, 盤19) 黄釉鉄絵(盤20) (1 : 4)

## 10 平安京左京八条三坊 (図版 19)

**経過** 調査地は、烏丸通りを挟み七条警察署の東向いに位置している。同地は平安京左京八条三坊十六町に位置し、同町内の町割りでは西二行・北三門にあたと推定できる。『清眼抄』では、平安時代末期から鎌倉時代の十六町内に一条家経邸を比定するが、規模や位置などの詳細は不明である。

発掘調査は、表土下1m強の近代積土層を機械力によって掘り下げ、黒褐色砂泥粘質土層から調査を開始した。結果として、平安時代前期から江戸時代にわたる5面の基本遺構面と各種の遺構を検出した。

**遺構** 平安時代の遺構は、前期から後期のものを検出しているが、残存遺構面も狭く、検出数はごく少ない。しかし、その中でも井戸・土壇・ピット（柱穴含む）・溝などは、宅地を想定し得る遺構群である。

平安時代末期から鎌倉時代の遺構面・プラン4では、それ以前に比較して検出遺構数は飛躍的に増加する。遺構群から出土する遺物量も非常に多くなる。この状況は、プラン3・2と続き、この地が中世を通じて近世に入るまで発展し、繁栄した様相を物語っている。

中世遺構の中で注目されるものは、プラン2で検出した埋甕遺構である。甕の上半部が、下半部へ割れて落ち込んだ状態のものを2基（土壇5・7）検出している。また、プラン3ではその状況から、設置した甕の抜取穴とみられる土壇16・17・22・24などを検出している。これら埋甕の用途については、ある種の手工業者が使用していたものと考えられるが、今のところ推測の域を出ない。また、プラン2・3ではこれらの埋甕遺構に関連するとみられる建物跡の一部・井戸・塵芥処理用の土壇や、宅地区画の溝とみられる遺構など各種のものを検出している。

江戸時代に入ると、この地域には東本願寺の外郭を巡るように水路が形成される。この水路は南方へ延び、大石橋付近から鴨川に至る。プラン1では明治時代初頭に、東本願寺の焼け瓦などで埋められたこの水路の一部と船着場を検出している（掘込1）。水路の側壁は杭留めの側板で護岸されており、各杭には水路の底に寝かす形で丸太の梁が設置されていた。船着場

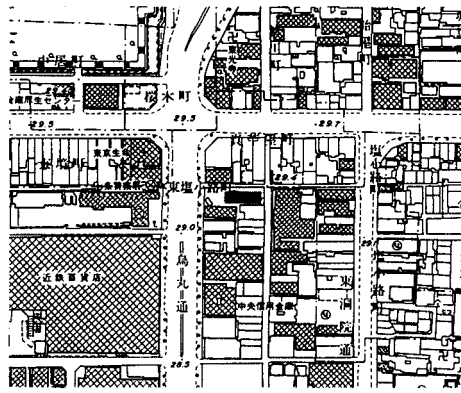
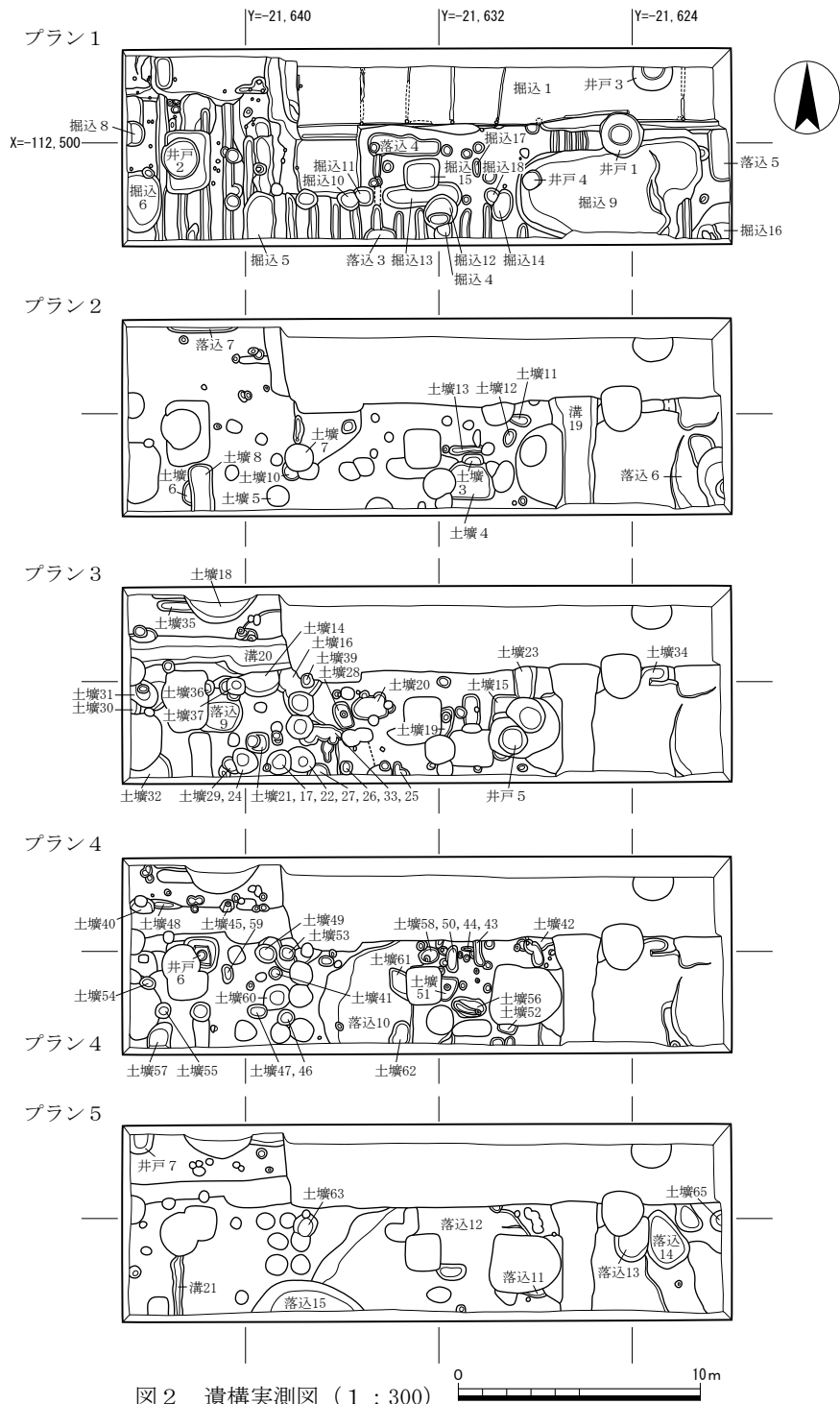


図1 調査位置図 (1:5000)





は当板を用いて2段以上の階段を作り出していた。この水路が機能していた時期の畑の畝を多数検出しており、江戸時代には水路南側は畑地化して中世とは様相が一変している。

**遺物** 出土遺物は、土器・陶磁器などが中心であり、その他の木製品、金属製品などはごく少ない。以下、主に出土した土器・陶磁器の様相について略述しておく。

平安時代の出土遺物は、検出遺構数を反映して比較的少量である。しかし土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器など基本的な種類と器形はすべて確認できる。

平安時代末期から室町時代前半代までに比定できる土器・陶磁器などの出土量は極めて多く、種類・器種も豊富である。土師器皿、瓦器鍋・釜、輸入陶磁器の白磁椀・青磁椀、須恵質土器鉢・甕、焼締陶器挿鉢・甕などがその主要なものである。瓦器椀や国産施釉陶器類は比較的少ない。土器類以外では宋銭などが一定数出土している。

室町時代後半代以降から江戸時代にかけての出土遺物は中世に比して少なく、遺跡の変化を反映している。なお、江戸時代から機能していた水路からは、幕末の様相を示す土器・陶磁器類と共に、焼け瓦が多量に出土している。瓦の中には「東本願寺」の銘のある軒丸瓦も含まれている。これらは元治元年（1864）の蛤御門の変による大火で焼失した東本願寺や付近の町屋の瓦礫であろう。明治時代初年以降これらの瓦礫の埋設によって水路はその姿を消している。

**小結** 平安京左京八条三坊十六町においては、平安時代を通じて遺構が存在しており、同町が宅地等に利用されていたことは確実であろう。今回の調査だけでは、その様相の解明は難しいが、同町内における今後の調査への期待は大きい。

中世に入って以降、当地が非常に高い密度で利用されていることが明らかになった。遺構のあり様からみて、手工業者が居住して活発な活動を展開していたものと考えられる。このような様相は中心地域からはずれているが、商工業者の町として中世前半に発展した七条町との関連を想起させる。

中世に発展したこの地も近世に入ると北側は東本願寺の門前町として都市化した状況が続くが、当地は水路の南側となり田畑化し近郊農業地帯に入ってしまう。この地域が再都市化するのには明治に入り、国鉄京都駅が建設されて以後になる。

（平安京調査会 上村憲章・小森俊寛）

## 11 平安京右京三条二坊 (図版20・21)

**経過** この調査は、京都市中京区西ノ京原町97に所在するマンション新築工事に伴って実施した調査地点は、右京三条二坊八町に相当し、東を西靱負小路、西を西堀川小路、北を二条大路、南を押し小路に囲まれた1町の東部中央に位置する。このことから南北方向には調査対象地の西方で東二・三行の境界が、中央で東一・二行の境界が、東端で西靱負小路の西築地が、また東西方向には北四・五門の境界が想定されることから、これらの宅地割りに関連した遺構・遺物の検出が予想された。ま

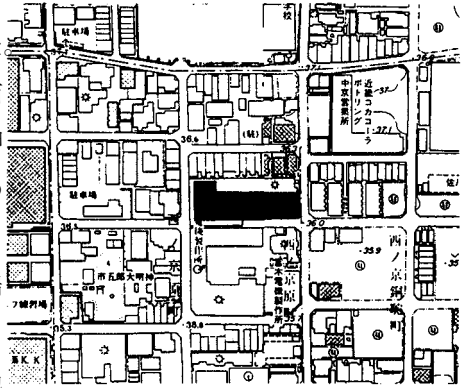


図1 調査位置図 (1 : 5000)

ず調査に先立ち対象地内に3箇所の試掘坑を設けて遺跡の有無を確認することにした。その結果平安時代の遺構が良好に残存していることが判明したため発掘調査を実施することとなった。なお工事範囲が敷地南半を占めることから調査範囲は敷地南半と西北部を対象とした矩型を呈するトレンチを設置した。調査は、まず江戸時代以降の耕作土及び整地層を機械力により除去し、遺構の検出作業を開始した。

**遺構** 基本層序は、周辺の既往の調査例とほとんど同じである。現地表下には20～40cmの現代盛土層があり、その下には厚さ15～30cmの不均一な旧耕作土層と厚さ約5cmの暗黄灰色砂泥層があり、これより下は浅黄色泥土・泥砂層の地山となる。現代盛土層と旧耕作土層は東に薄く西に厚くなる。遺構はすべて地山直上から検出した。

検出した遺構群は、総数123基あり、平安時代前期から中期に属するものと江戸時代以降のものに分けることができる。平安時代のものは、平安京の宅地割に関連するもので、江戸時代以降のものは土取りの跡とみられる。土取穴は調査区の全面積中半分以上を占める。このため平安時代の遺構は残りが悪く、わずかに調査区の西側と東端で検出したに過ぎない。

以下平安時代の主要な遺構について概略する。

検出した平安時代の遺構には、川・掘立柱建物・園池・井戸・溝などがある。

川SD4は、調査区西端で南北方向に21mにわたって検出した。幅は約6m、深さは約1mを測るが底は平坦でなく所々で深くえぐられた痕跡が認められる。この川の西肩を形成している黒色泥土層の下から9世紀前後の井戸(SE122)を1基検出した。また、川の東肩から

東にかけて東西2間・南北4間で東庇の付く南北方向の掘立柱建物を1棟検出した。身舎の北東隅の柱あたりからは完形の土器がまとまって出土する。なお庇の南端1間は省略され、その部分から南には園池の一部と考えられる石組みの施設を検出した。

池状遺構SK 8は、東西3.5m、南北3m以上、深さは50cmを測り、更に遺構は南に延びている。肩部はやや急な勾配で水際にそって人頭大の河原石を1列に据えている。検出した石の残存状態は悪いが北部は比較的保存状態が良好であった。そのうちの3石はいわゆる「北山石」と呼ばれる自然石で一番大きなものは長軸70cm、短軸25cmを測り長軸方向を水際に沿って据えている。河原石はいずれも立てて並べ、間を拳大の礫で詰めている。底は、平坦で微砂と粘土で整形されている。

一方調査区の東端では南北方向の溝状遺構SD 73を検出した。その幅は1.5m以上、深さ1mを測り、底には人頭大の石や礫を含む泥砂層などが認められることから川とも考えられる。この遺構の西に1条の柵列が認められるが柱間間隔はばらつきがある。

その西に方形縦板組横棧の井戸SE 87を検出した。井戸枠の一边は1mで深さは1.3mを測り、掘形は径2.5mの隅丸方形を呈する。井戸枠の北東・南東の隅柱の外側脇掘形内に炭を入れた竹籠が2つずつ認められた。また北東隅柱の東側横棧のほぞ穴脇に「一入」の墨書が認められた。なお縦板は建築部材の転用材が用いられている。

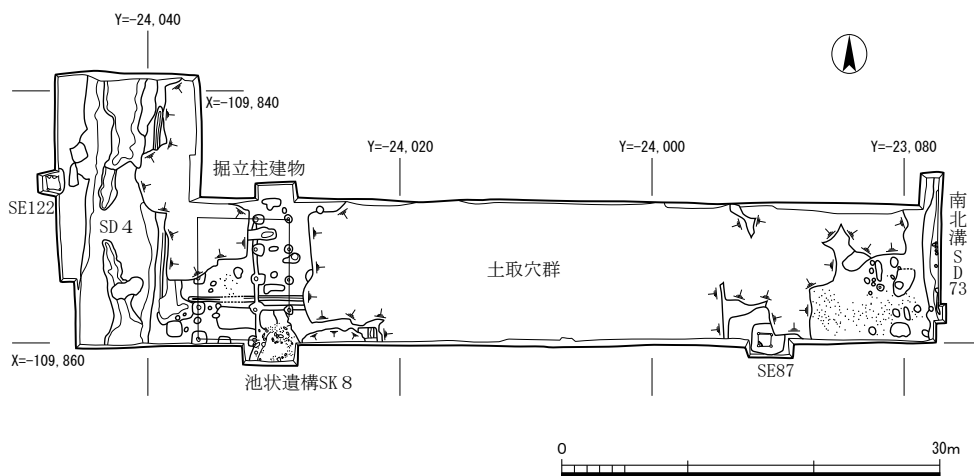


図2 右京三条二坊八町遺構配置図 (1 : 600)

**遺物** 今回の調査で出土した遺物は、古墳時代から江戸時代までに至るが、そのうち平安時代前期から中期に至るものが圧倒的多数を占める。古墳時代の遺物と鎌倉時代から室町時代前半ものは、江戸時代の土取穴に混入して出土したもので同時代の遺構から認められたものではない。出土遺物の内訳は土器類が大半を占め、次いで瓦類、木製品、銭貨、石製品などがある。これらは、川、井戸、柱穴、園池、溝状遺構、土壙などから出土するが、量的に豊富なのは川出土のものがあり、一括資料としては園池、井戸、溝状遺構、柱穴出土のものが挙げられる。

土器類には、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器などがある。川出土のものは、量的に最も豊富で上層は平安時代後期（12世紀）、最下層は平安時代前期末（9世紀後半）と時代幅が認められる。特に第4層からは緑釉陶器の連弧形内堤のある風字硯が出土する。次いで池状遺構SK8の底辺からかなりまとまって出土した。その中で通有の緑釉陶器椀・皿と共に輪花椀・陰刻花文椀、越州窯系青磁香炉・椀なども共伴していて、全体に緑釉陶器の出土が多いことが特徴といえる。この他井戸SE87からは10世紀前半、井戸SE122からは9世紀前後の遺物がまとまって出土している。

瓦類は、川SD4、池状遺構SK8、井戸SE87、溝SD73から出土し、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、鴟尾などがある。軒瓦は全部で11点出土し、調査区東部の西鞆負小路周辺の溝SD73と井戸SE87と西方の川から集中して出土する。また、鴟尾片は園池SK8の上面から出土するが、平安京の宅地内からの出土はほとんど類をみない。

木製品は、井戸の井戸枠の転用材と枠内の櫛と掘形内の籠、川出土のものが知られる。特に注目すべきものに川第4層出土の長さ98cmの蛇形木製品と「南無光明真言」墨書銘のある杭が出土したことが挙げられる。この層からは平安時代後期の土器群が共伴することからこれらの年代の下限が想定できる。

銭貨は、皇朝十二銭が45枚出土した。このうち長年大寶（848年初鑄）は川の底から11枚が1組、25枚が1組で出土した。また井戸SE87の枠内から延喜通寶1枚、寛平大寶1枚、貞観永寶2枚、承和昌寶1枚が出土し、共伴の遺物の年代を考える手懸かりとなる。

**小結** 今回の調査の成果により右京三条二坊八町の東半中央付近の平安時代前期から中期までの宅地の変遷の一端を知ることができた。検出した遺構群は9世紀前半と、9世紀後半から10世紀前半のものに分けられ、前者は井戸や流路だけに過ぎないのに対し後者は園池と建物を含む邸宅の一部とその様相が異なる。特に後者の遺構群は、園池と考えられる石組遺構と掘立柱建物とが接した配置形態をとり、その形態と10世紀前半を下らない時期であるこ

となどから、類例遺構が少ない貴重なものである。出土遺物からは当地に宅地班給を受けた人名などを特定することはできない。しかし出土遺物の中で緑釉陶器の陰刻花文・香炉・風字硯を始めとする特殊な器形が認められること、鴟尾を含め軒瓦がやや多く出土すること、川SD4から蛇形木製品や「南無光明真言」墨書名のある杭など特異なものが多いことなどから、宅地の性格や居住者の地位を考察する上で興味深い資料が得られたといえる。

(堀内明博・木下保明)

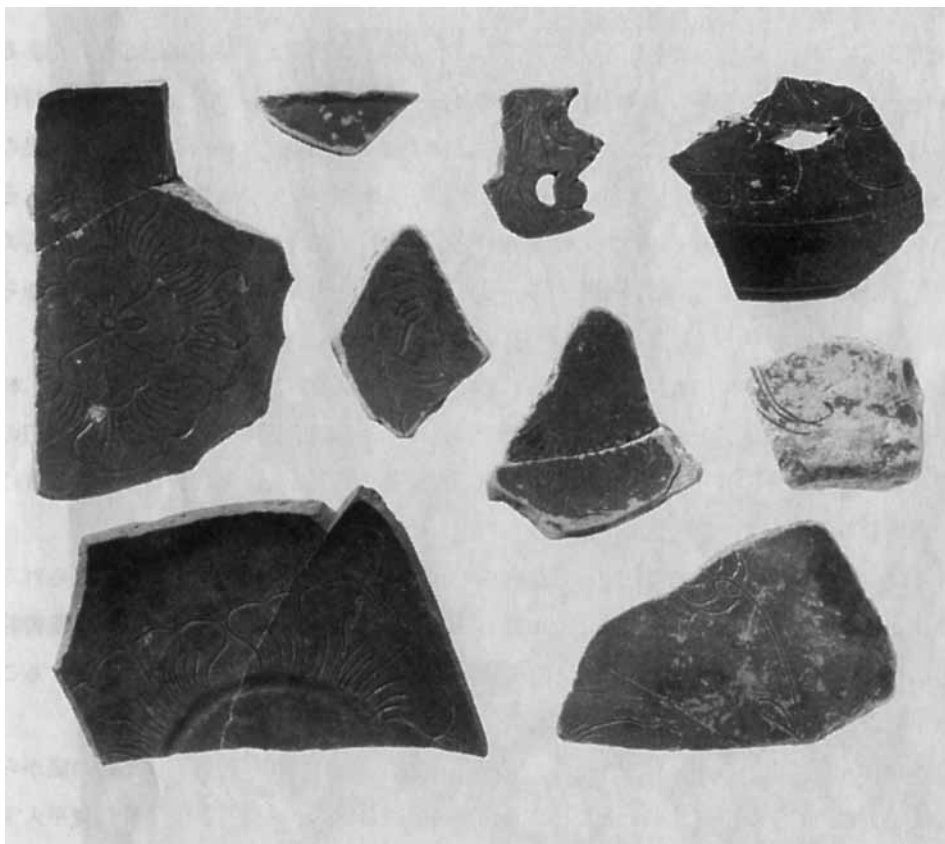


図3 SK8第2層出土緑釉陶器（陰刻）

## 12 平安京右京六条三坊 (図版22・23)

**経過** 調査地は右京六条三坊四町に該当する。同町内では1981年に今回の調査地の北西部において発掘調査が実施されており、平安時代前期の邸宅の一部とみられる掘立柱建物などが検出されている。今回の調査地は、四町の南北中央、道祖大路に接する付近に位置するが、大路西側溝及び築地は敷地東側の現春日通り西側歩道付近に推定されており、調査地内には含まれない。当初、約28×28mの調査区を設定し、平安時代の建物などを検出、その後遺構の広がり

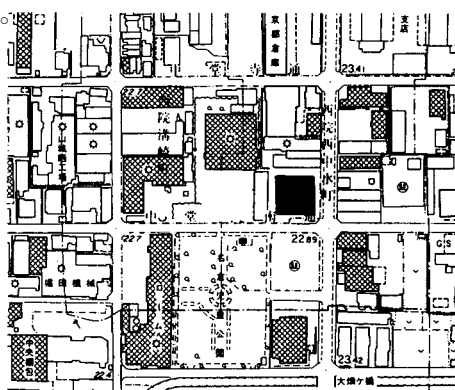


図1 調査位置図 (1:5000)

を追及するため随所に拡張区を設け最終的に942.5㎡を調査した。

**遺構** 遺構面は、調査区北部では地表下約20cm、南部では50cmと比較的浅く、それに至る層序も単純で、厚さ約5～20cmの現表土と15～30cmの旧耕作土層で構成される。その下部には、ほぼ全面にわたってわずかに粘性を帯びた茶灰色砂泥層が広がり、すべての遺構をこの面で検出した。遺構は平安時代の掘立柱建物、柵、溝、井戸、土壙などの他、古墳時代の湿地状落込(SX 350)や自然流路の一部(SX 375)を検出した。平安時代の主な遺構について概略を述べると、掘立柱建物は、全体を確認することができた6棟(SB 1・4・6・7・11・12)、全体の平面形態を確認するには至らなかったもの(SB 5・9)や部分的なもの(SB 2・3・10)、更に門と思われる2棟(SB 18・19)を含め、全部で13棟ある。また、建物SB 10の内側には東西方向のピット列2条を検出した。溝は東西方向から四町東限に沿い、南へ鉤型に折れ曲がるもの(SD 20)と、その北側に東西方向のもの(SD 21)、南北方向のもの(SD 22)を検出した。井戸はSB 11の西側に位置する方形縦板組のもの(SE 23)の他、更にその西側の湿地状落込(SX 24)中央の窪みも、形状や深さからみて井戸の痕跡の可能性はある。

**遺物** 土器類を中心に整理箱にして47箱の遺物がある。これらは各建物の柱掘形や井戸、溝、土壙などから出土したが、特に溝SD 20からまとまって出土した。SD 20出土土器類の破片数データを示すと、総破片数は3215片で、土器の種類別の比率は土師器73.7%、黒色土器2.7%、須恵器21.7%、灰釉陶器0.1%、輸入陶磁器0.1%、その他1.7%となる。百分比では

あられもないが、緑釉陶器の椀が1片ある。この土器類全体のうち椀・杯・皿などの供膳形態が約62%を占めており、その種類別の比率は土師器85.0%、黒色土器3.7%、須恵器11.2%、緑釉陶器0.1%である。

**小結** 今回の調査で明らかになった主な点は、遺構群に少なくとも5時期にわたる重複関係が認められる。また出土遺物から、これらの遺構群は9世紀初頭（SD 20 など）から後半（SE 23 など）までの時期幅に収まるが、重複状況からみると、この比較的短期間の内にかなり頻繁に建て替えが行われたことがうかがえる。SD 21 とSD 22 は結合部にあたる場所に後世の土壌があり、つながりは明らかではないが、SD 21 の位置が四町の南北中央に該当する点や、堆積土、出土遺物の時期からみて、SD 20 と対象に北方に折れ曲がる一連の溝と推定できる。とすれば、この両溝に挟まれた部分が四町内の区画道路として機能していたと考えられることなどである。

（平尾政幸・梅川光隆）

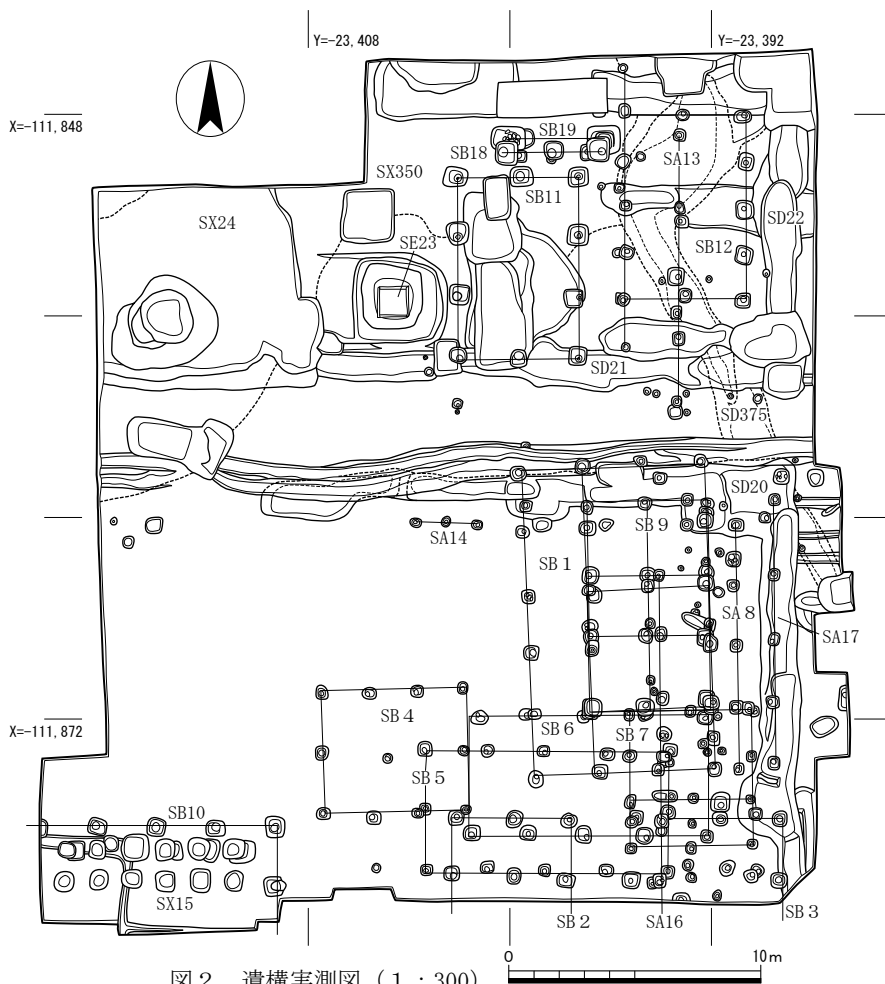


図2 遺構実測図（1：300）



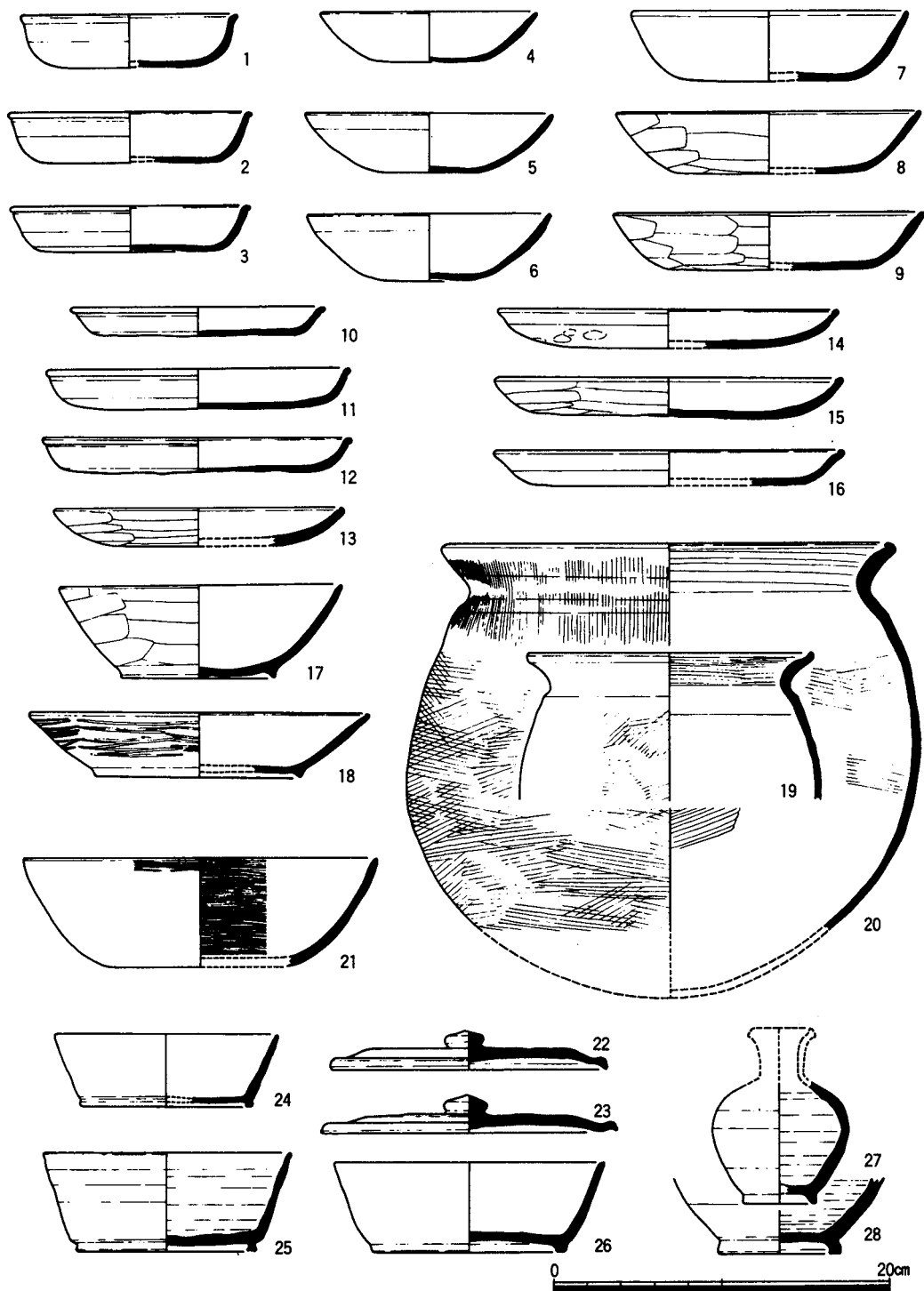


図3 SD 20 出土土器（土師器1～20，黒色土器21，須恵器22～28）（1：4）

### 13 平安京右京七条一坊 (図版 25)

**経過** 京都市中央卸売市場の施設改築に伴い発掘調査を実施した。同市場内では過去に5次にわたる発掘調査を行ったが、今回の調査地は5次調査地の北側に位置し、平安京右京七条一坊一町に該当する。敷地東端付近に朱雀大路西側溝、南端部付近に左女牛小路の遺構の存在が推定される位置にあたるがこれまでの調査で朱雀大路、北小路、七条坊門小路など条坊関係の遺構を良好な状態で検出している。中でも朱雀大路西側溝については4次、5次調査で約

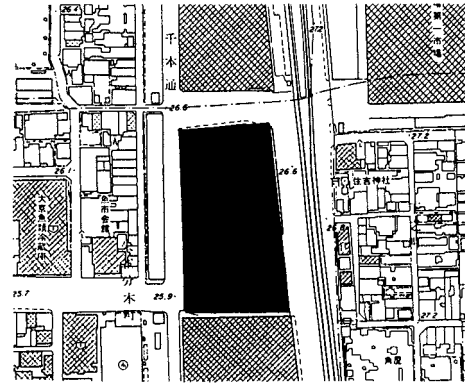


図1 調査位置図 (1 : 5000)

300 mにわたり確認している。調査は既存建物の基礎跡を避け、1区 (東西 20 m×南北 40 m)、2区 (東西 10 m×南北 70 m、後に北の一部を拡張)、3区 (東西 15 m×南北 10 m) の3箇所の調査区を設定し、条坊関係の遺構の検出を主眼に行った。

**遺構** 1区では調査区南部で、左女牛小路の両側溝と推定できる東西方向の溝2条 (SD 1・SD 2) を検出した。北側の溝SD 1は幅約 1.1 m、深さは 0.1 mと非常に浅い。堆積土は茶褐色泥砂層で、11～12世紀の土師器などが少量出土した。南側の溝SD 2は幅約 1.8 m、深さは 1.1 m前後と、SD 1に比べてかなり深く、調査区東壁から約 4 mの区間では更に 0.4～0.5 mほど深くなっていた。溝内の堆積は下層から、茶灰色砂泥層、暗褐色砂泥層、暗褐色泥砂層で、やはり量は少ないが、土師器、白磁など 11～12世紀の土器類が出土した。両溝間の心々距離は約 5.6 m、築地や路面敷の痕跡などは認められなかった。SD 1北方の一町敷地内では平安時代の遺構は検出できなかった。2区は朱雀大路西側溝推定地に設定した調査区である。中央部付近は建物の基礎によって破壊されていたが、その他の区域では平安時代後期から鎌倉時代にかけての南北方向の溝を検出した。いずれもこれまでの調査で確認している朱雀大路西側溝の延長上に位置しており、側溝としてとらえるものであるが最下部で検出した平安時代の溝SD 23以外は、肩部も不明瞭で、蛇行した自然流路状の堆積を示していた。SD 23は、幅約 7 m、深さ 0.8～1 mで、砂礫層及び泥土層が互層状になった複雑な堆積状況を示し、底部付近から土師器、白磁などの土器類、上層部からは多量の瓦が出土した。2区ではその後、北部を西側に拡張して築地などの遺構検出を試みたが、近世の土取りと思われる土壌を

検出したにとどまり、平安時代の遺構はみあたらなかった。3区は、左女牛小路が朱雀大路と交わる位置に設定した。ここでは両道路の交差部の状況を明らかにすることを試みたが、基礎跡のため遺構が著しく破壊されており、SD 23の延長上に砂層、シルト層など流路状の堆積を確認した他には顕著な遺構は検出できなかった。少量の土器類の他、木製品や牛、馬の骨などが出土した。

**遺物** 遺物の大半は、土器類及び瓦類で、整理箱にして511箱にのぼるが、その大部分(492箱)が瓦類で、主にSD 23から出土したものである。瓦類はそのほとんどが丸瓦・平瓦で、その他少量の軒瓦や文字瓦が含まれる。土器類は土師器の他、須恵器、瓦器、白磁、灰釉系陶器などがある。これらの土器類は主に2区北部のSD 23の底部近くから出土したもので、11～12世紀に位置付けられる。3区からは多量の牛・馬の肢骨、下顎骨と共に人の頭蓋骨及び下顎骨の一部が出土した。頭頂部の大きさや歯の発達状態から未成年のものと同定できる。

**小結** 今回の調査では条坊関係遺構に重点をおき、作業を進行した。それは市場の旧建物配置図から、今回設定した調査区以外の場所ではその基礎のため遺構が損なわれていると判断したからである。調査の結果、条坊街路の側溝などについては当初の目的はほぼ達成できたと考えているが、一町内の施設に関しては、比較的基礎による破壊の少ない1区においても検出できなかった。こうした傾向は、過去のこの地域で実施した調査でもみられるが、その原因については周辺の調査成果との比較や、旧地形の復原などいくつかの点を検討する必要がある。

(平尾政幸・加納敬二)

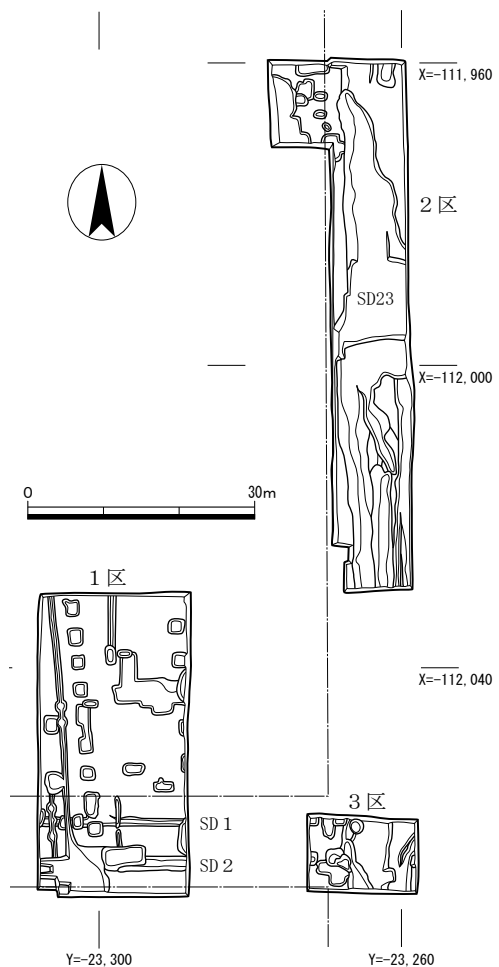


図2 遺構実測図 (1 : 1000)

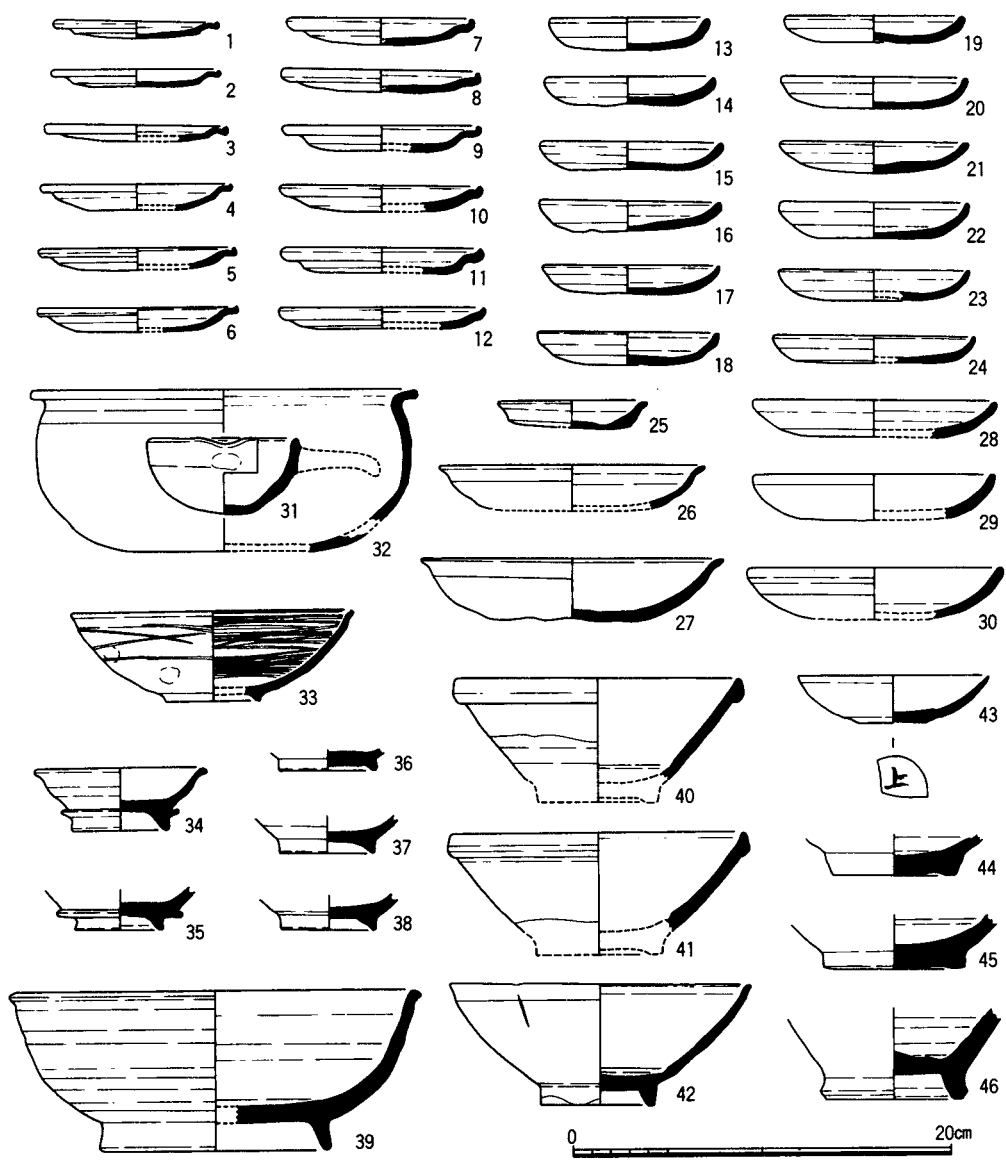


图3 SD 23 出土土器（土師器1～32，瓦器33，灰釉系陶器34～39，白磁40～46）（1：4）

## 14 平安京右京九条一坊1 (図版26～30)

**経過** 調査地は南区唐橋門脇町に位置する。当地にマンション建設の計画が持ち上がり、建設工事に先立って発掘調査を実施した。調査地は平安京右京九条一坊十・十一町に相当し、西寺食堂院跡の北側に位置する。西寺跡の主要伽藍については、奈良国立文化財研究所、鳥羽離宮跡調査研究所、平安博物館、当研究所などによる発掘調査で造営当初の姿がほぼ明らかにされている。しかしながら西寺々域及び北方域については、調査例も少なくその実態につい

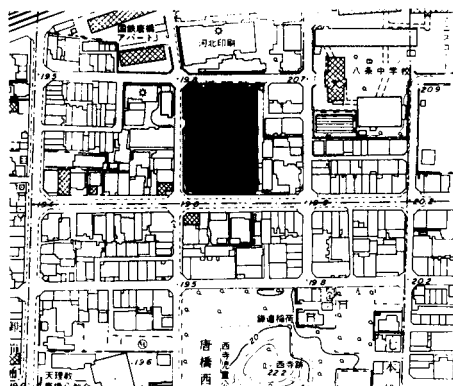


図1 調査位置図 (1 : 5000)

てはほとんど明らかではない。いずれにしろ、西寺が東寺と同様な伽藍配置で造られているならば、今回の調査区内には東西方向の築地と門が検出できるはずであると推定し、その位置を中心に調査区を設定し、調査を始めた。調査の結果、東西方向の築地、礎石建物、溝、井戸、土壌などの西寺跡に関係する遺構を数多く検出した。また、その下層からは、古墳時代の竪穴住居、土壙を発見した。

**遺構** 今回の調査では、古墳時代から江戸時代までの各遺構を数多く検出したが、ここでは西寺跡に関係する主な遺構について述べる。

礎石建物は2棟検出した。建物1は、調査区南西側で検出したもので、梁間2間、桁行7間の南北棟で、身舎の東西に庇の付く建物である。建物2は、建物1の東側で検出した建物で、すべての柱穴は検出していないが、建物中軸線が西寺々域の中軸線と重なる梁間2間、桁行7間の東西棟と推定している。この2棟の建物を取り囲むように掘られた溝7を検出している。溝幅1.5～2.3m、深さ約20cmを測る。埋土は褐灰色砂泥層である。遺物は瓦、土師器、須恵器などが出土しているが溝3・4に比べれば少ない。

築地は東西方向で検出面での規模は幅約2.6mを測り、北側と南側に側溝を布設している。側溝(溝3・4)の幅は2.3～2.6m、深さ15～30cmを測る素掘りの溝である。溝内(黄褐色砂泥層、灰褐色砂泥層)や築地周辺部の土壌内から相当量の瓦が出土しており、瓦葺きの築地塀であったことを示している。この築地の検出位置は、現存している東寺の北大門に取り付いている築地塀とほぼ同一線上にあたる。

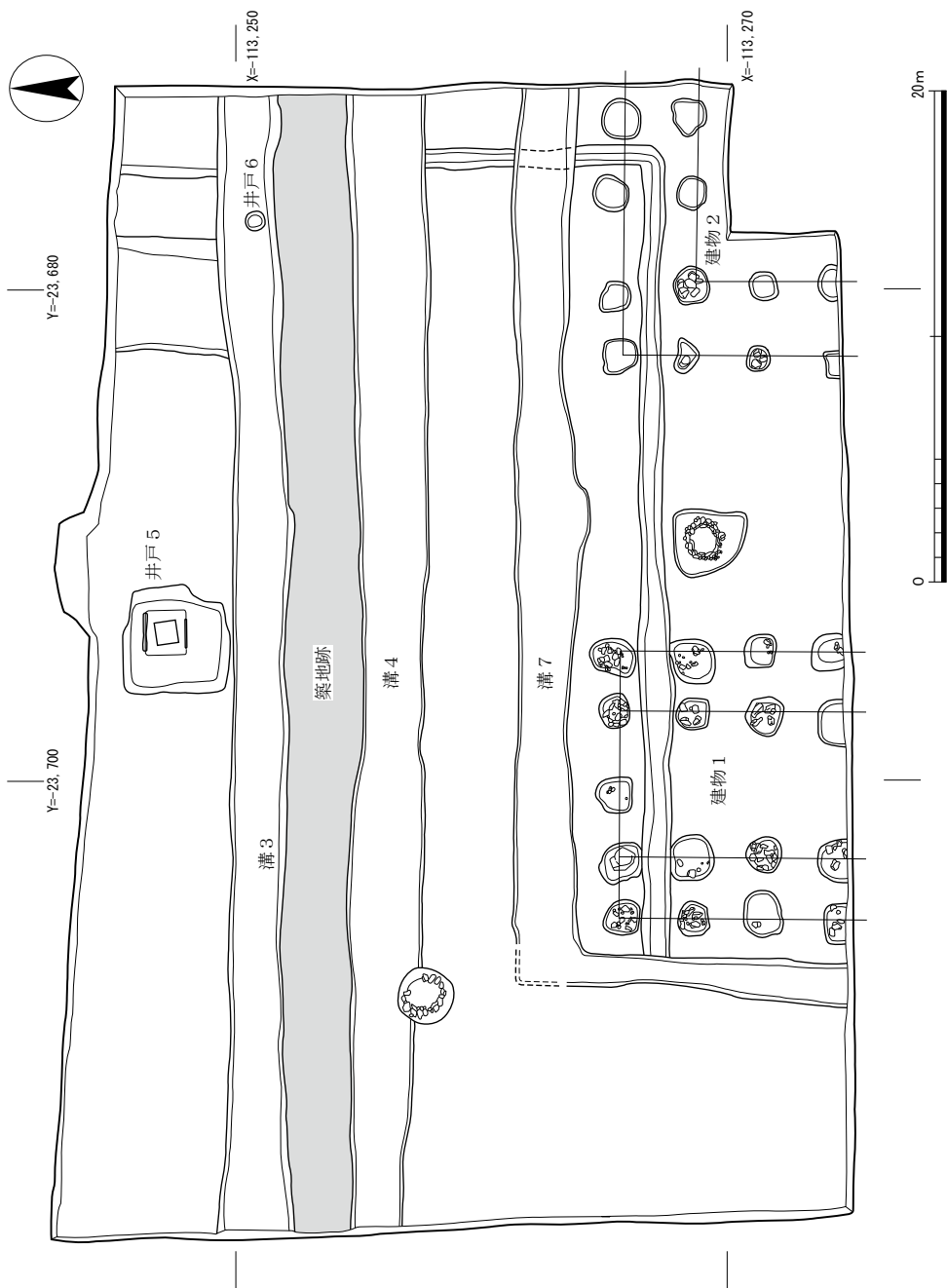


図2 遺構実測図 (1 : 300)

井戸は築地の外側で2基検出した。井戸5の掘形は一辺が約4mの方形で、新旧2時期にわたる木枠組みを検出した。新旧とも掘形内の木枠はほとんど取り外されていたが、底部近くには井桁組みの木枠が一部残っていた。底部に曲げ物を1段据えていた。

井戸6は、直径80cmを測る小型の井戸で溝3と重複する。井戸枠などの施設は残っていなかったが、底部には直径約40cmの曲物を布設していた。この2基の井戸埋土から多量の瓦類が出土した。

古墳時代の竪穴住居は、平安時代に削平されたため残存状況は極めて悪いものであった。こうした中、8棟ほど住居を検出した。

**遺物** 古墳時代から江戸時代までの各遺構から、遺物整理箱で約1200箱分出土した。遺物の大半は平安時代の瓦類で、土器類や古墳時代の遺物は少ない。平安時代の土器には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、三彩釉陶器、中国製磁器、製塩土器、焼締陶器、瓦器などがある。平安時代前期の土師器や須恵器の中に「大炊」、「国厨」、「酒殿」、「寺」、「造」など墨書されたものが多数出土した。

瓦類には軒丸瓦、軒平瓦（緑釉3点）、丸瓦、平瓦（緑釉5点）、鬼瓦、埴、緑釉熨斗瓦などがある。軒瓦の中には「西」、「寺」、「西寺」銘を配するものが数10点出土している。また丸瓦の凸面、平瓦の凹面に「西寺」、「西年」、「西浄」、「西廣」、「為」、「土」、「瓦」などの文字を有するものが126点出土している。なお、枚方市牧野坂瓦窯からは、図3の18～20・24と同印の平瓦や丸瓦が出土している。

**小結** 今回の調査で検出した築地の位置が、現存している東寺の北大門に取り付いている築地塀と、ほぼ同一線上にあることから、西寺の寺域は現在の東寺と同じ大きさの東西2町、南北4町であることがほぼ明らかになった。しかし調査区内においては、東寺の北大門にあたる位置には門の痕跡は検出できなかった。このことから西寺の北大門は穴門であった可能性がある。また食堂院と築地の間で検出した2棟の礎石建物は、遺構の重複、出土遺物などから11世紀～12世紀には廃絶したものと考えられる。更にこの建物の配置は、東寺の配置（未調査、東寺所蔵の江戸時代に描かれた配置図）とは少し異なっていることが確認できた。また古墳時代の竪穴住居が発見できたことは、周辺地に同時期の大規模な集落跡が遺存する可能性があり、今後の調査には注意が必要である。

（磯部 勝・鈴木久男・堀内明博）

註（財）枚方市文化財研究調査会 西田敏秀氏のお世話により同印であることを確認した。

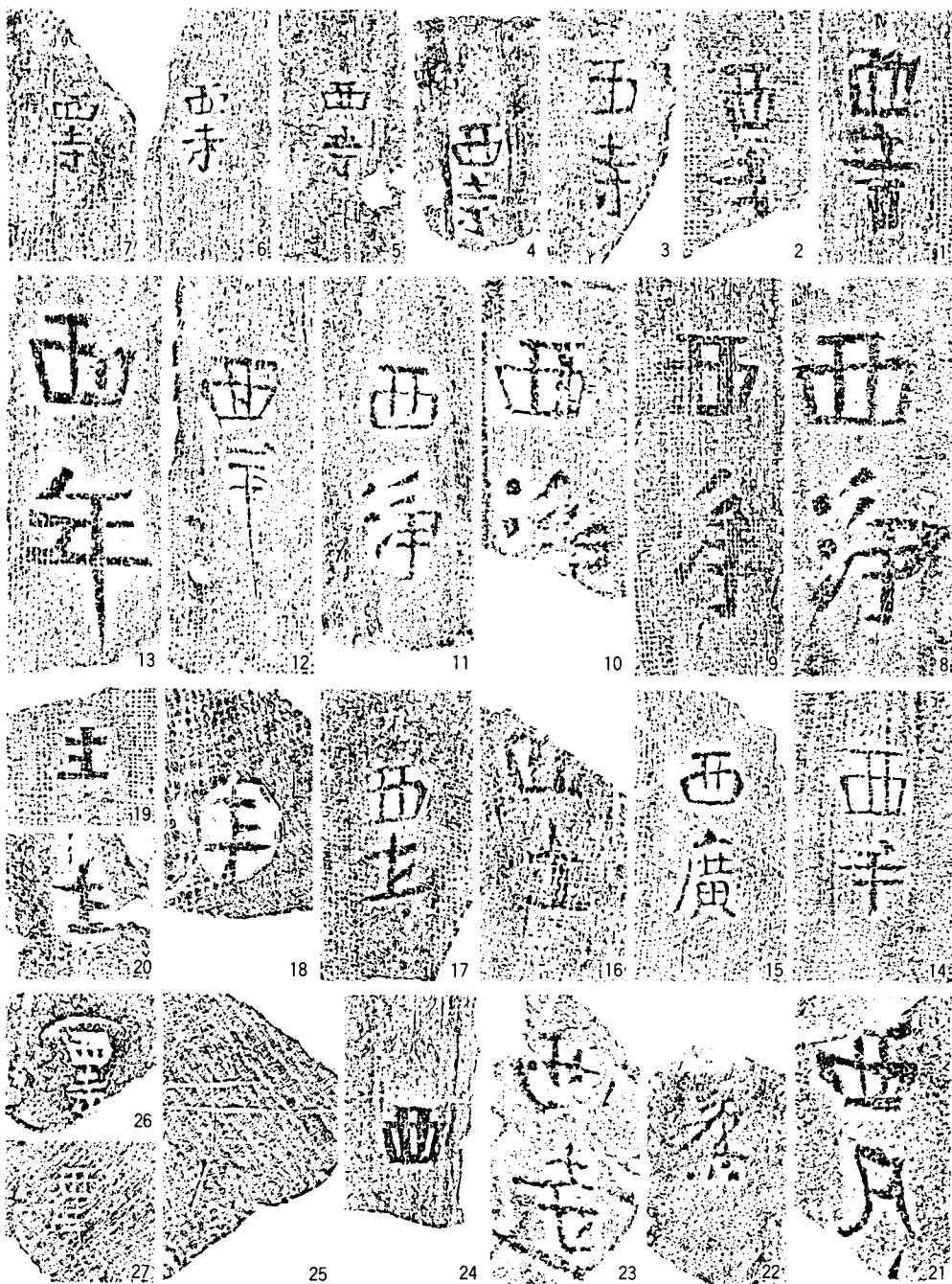


図3 文字瓦 平瓦凹面：「西寺」1～7，「西浄」8～11，「西年」12～14，「西廣」15，  
「西土」16・17，「土」18～20，「西瓦因」21，「固為」22 平瓦凸面：「西寺」23，丸  
瓦凸面：「西」24，「西寺」26・27，不明（へラ描）25（1：2）



## 15 平安京右京九条一坊2

**経過** この調査は、南区唐橋西寺町に所在する民有地の新築工事に伴って実施した。調査地は、史跡西寺跡の一角で現在の西寺公園の北、伽藍推定復原によると食堂院の西回廊に推定される。西寺跡の調査は、関連調査を含めると24次に及び、寺院に関連する遺構群のみならず古墳時代の遺構群も確認し、下層遺構の存在も認識されるようになった。今回の調査においてもこれらに関連する遺構の存在が予想された。調査の結果食堂院関連の遺構とその下層に平安時代初期の遺構や奈良時代の遺物包含層が認められた。

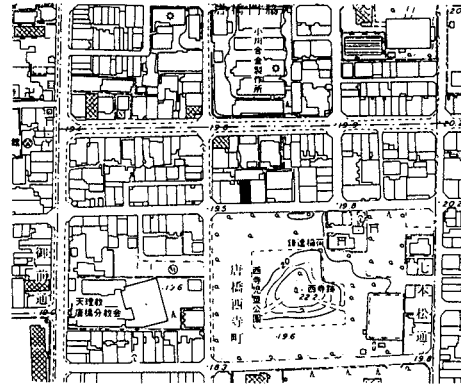


図1 調査位置図（1：5000）

**遺構・遺物** 今回の調査により、西寺関連のものは、食堂院西回廊西側柱列の礎石抜取痕と柱列に沿う南北方向の溝状遺構がある。柱抜取穴の間隔は、南北方向に約3.6mを測り、抜取りの時期は出土遺物から平安時代後期と考えられる。その底には瓦片と共に花崗岩の碎片が散乱することから礎石の材質は花崗岩と考えられる。回廊基壇は、明確な痕跡は認められなかったが、整地層により盛土されていることが判明した。なお、調査地内では、基壇の外装施設は確認できなかった。一方柱抜取痕に沿うように南北方向の溝状遺構が認められ、埋土中からは、炭と共に土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器など9世紀中頃の遺物が多量に出土した。

回廊基壇の整地土層下より柱穴2基、土壙状遺構を確認した。柱穴2基は、南北方向で間隔は3mを測り、その南に一辺2.6～2.9m、深さ16cmを測る浅くて不定形を呈する土壙状遺構がある。埋土中から、おびただしい量の炭と共に窯体片・焼土・銅滓・ルツボ片などが出土した。これらのものは、共伴遺物から9世紀前後と考えられ、鑄造に関連するものであることから工房跡の一部の可能性が高い。その成立面下には奈良時代の流路堆積層の一部を確認し、層中から、墨書銘のある須恵器杯Bなどの遺物が出土した。

**小結** 調査の結果、食堂院回廊の柱抜取りと西寺造営時に伴う、なんらかの工房に関連する遺構群が確認できた。 (堀内明博)

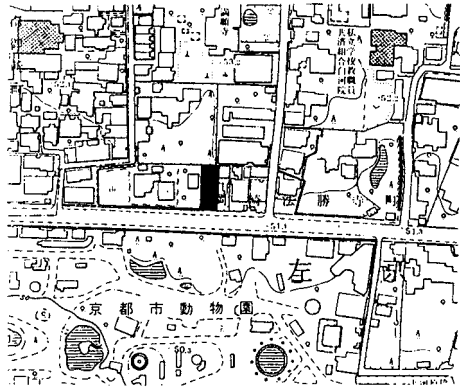
『平安京跡発掘調査概報』昭和61年度 1987年報告

### Ⅲ 白河街区

#### 16 法勝寺跡

**経過** 民家の新築に伴い、発掘調査を実施した。調査地点は六勝寺中の筆頭伽藍である法勝寺跡の中央東寄りに位置する。調査の結果法勝寺金堂の東回廊を検出した。

**遺構** 調査区の基本層序は、上から現表土層、にぶい黄褐色砂泥層、にぶい黄褐色泥砂層がそれぞれ厚さ約20cmで堆積する。にぶい黄褐色泥砂層上面で後述する各遺構を検出した。



検出した遺構には、雨落溝、礎石据付穴、瓦溜、下層遺構、礎石抜取穴などがある。

雨落溝は、南縁の溝を除き、北・東・西縁の各溝を検出した。溝底には河原石を敷く。礎石据付穴は14基検出したが、いずれも礎石抜取穴によって削平を受け遺存状況は悪い。瓦溜は3基検出した。元暦二年(1185)の大地震に伴うもので、多量の瓦が出土した。下層遺構は、溝状を呈する。北肩口は調査区中央以東では北東から南西方向を示し、調査区中央で折れ西行する。下層で古墳時代後期、上層で平安時代後期の遺物が出土した。

**遺物** 各遺構から遺物整理箱で128箱出土した。内容は、土器類、瓦類、礎石などがある。遺物のうち瓦類の出土が最も多い。瓦類には、丸・平瓦、軒丸・軒平瓦の他、ヘラ記号や刻印を施すものがある。土器類では、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、無釉陶器、輸入陶磁器などがある。土師器が多数を占め、他は、小片で少ない。

**小結** 法勝寺回廊を構成する各遺構が検出できた。結果、回廊は調査区内で直角に折れ曲がることから回廊や金堂との位置が推定でき、法勝寺復原研究に極めて重要な遺構であることが判明した。また回廊は桁行・梁間とも1間が約3mの等間であること、外側柱筋と北縁・東縁雨落溝心々間が約2.7m、内側柱筋と西縁雨落溝心々間が約2.75mあることが判明し、文献史料からうかがえる回廊の規模を彷彿とさせる資料といえる。また土器・瓦類が比較的まとまって出土しており、法勝寺及び法勝寺造営前の当該地における歴史の変遷を考察する上で、更に資料を提示できるものといえよう。(辻 裕司)

## 17 尊勝寺跡 (図版 31・32)

**経過** 調査地は尊勝寺跡推定寺域の北東部に位置し、岡崎遺跡にも含まれる。周辺では数次の調査を実施<sup>註1</sup>し、多くの遺構を検出した。調査地西側の第6次調査<sup>註2</sup>で建物・瓦溜、西隣する道路の立会調査では大炊御門大路末に該当する溝状の遺構を検出した。調査目的は、寺域内の伽藍の解明及び下層遺構の検出である。

**遺構** 基本層序は上から第1層 褐色土層（現代層 70cm）、第2層 黒色泥土層（近世包含層 20cm）、第3層 褐色砂泥層（中世包含層 20cm）、第4層 黒褐色土層（平安時代後期整地層 5cm）、第5層 黄色粘土層（無遺物層）である。第4層上面は平安時代後期以降、第5層上面は弥生時代から古墳時代の遺構面である。第4層はSB1を除く1・3区全域で検出し、北では薄く南は厚い。第4層上面は北から南へ緩やかに傾斜し、標高は3区中央部で47.5mである。

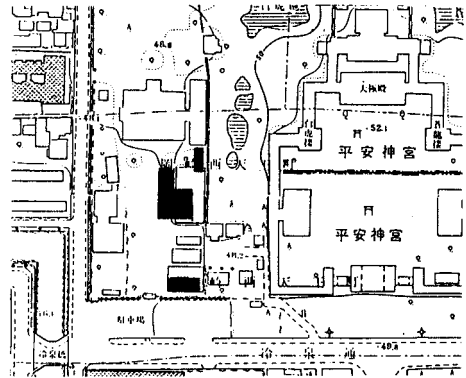


図1 調査位置図 (1:5000)

**弥生時代・古墳時代** 3区南半部で流路SD 64（幅約5m、深さ1.5m）を検出した。肩口は湾曲し、底は凸凹があり、北東から南西方向に流れる。埋土は3層に大別でき、下層は黒色泥土層、中層は暗灰色砂泥と砂の互層、上層は黒灰色砂泥層である。下層は弥生土器、中層は弥生土器と古墳時代の土師器・須恵器、上層は平安時代の土師器・須恵器・瓦を含む。したがって流路は弥生時代から古墳時代に自然堆積で埋まり、その後寺院造営前まで窪みとして残存し、寺院造営時に整地されたものと考えられる。

1区東端部で南北流路SD 7（幅2m以上、深さ0.5m）を検出した。底は凹凸がある。埋土は黄灰色の粗砂と灰色粘土が互層となって堆積し、弥生土器・土師器が少量出土した。

**平安時代後期** 第6次調査で検出した建物SB1（5×2間東西棟、二重庇）の南東隅を3区で、北東隅を4区で検出した。今回は新たに雨落溝の構造と方位を確認した。雨落溝（幅40cm、深さ10cm）の両肩口に、自然石の平坦面を上にして並べ化粧を施す。建物側の石列は外庇の礎石の南・東辺に面を合わせ、雨落溝と並行に幅30cmで2列並べ、礎石に接する石は溝に直角に据える。使用石材は長さ20～30cm、幅10～20cmである。外側の石材は溝と並行に幅50cmで2列、あるいは3列並べる。使用石材は建物側より大きく、長さ30～40cm、

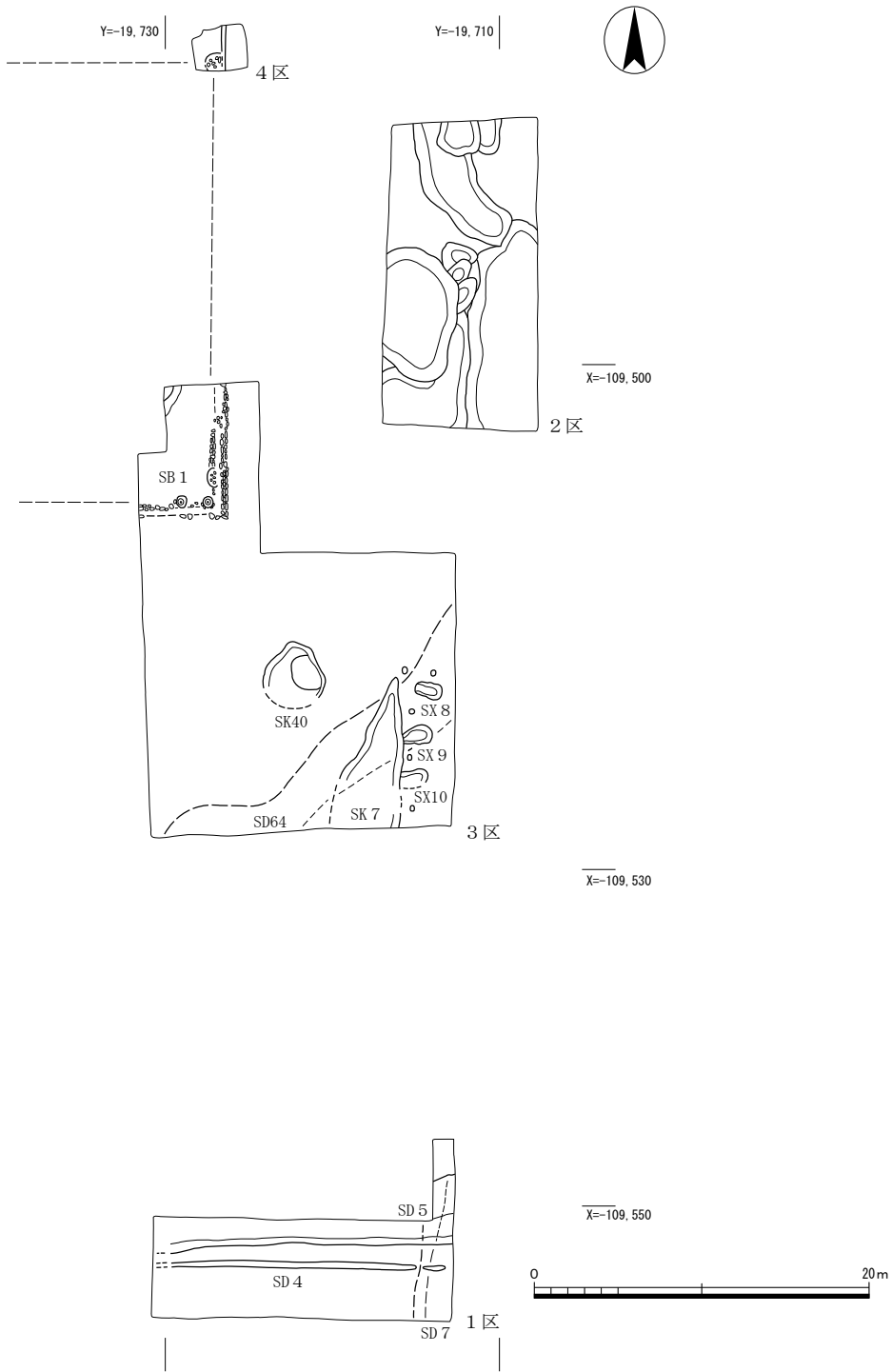


図2 遺構実測図 (1 : 400)

幅20～30cmである。建物の基壇は、第5層上に黒色泥砂をつき固め、亀腹状にする。上面はかなり削平を受けるが、雨落溝上面からの残存高は約40cmである。建物の方位は、北で東に0°41'45"振れる。

1区で東西溝を2条検出した。SD4（幅40cm、深さ10cm、断面U字形）は中央部で検出した。埋土は茶灰色砂泥層で、土師器、須恵器が少量出土した。SD5（幅2.6m、深さ0.7m、断面U字形）は北端部で検出し、底部に凹凸がある。埋土は灰色砂泥と黄色砂の互層で、流れた状況がみられる。埋土中から土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁、瓦器などが出土し、平安時代後期に埋没している。SD4と同一方向で、心々距離は約3mである。

鎌倉時代・室町時代 3区南部で窯3基SX8～<sup>註3</sup>10を検出した。窯は東から西へ緩やかに下がる傾斜地に造られ、上部が削平を受ける。各窯は約1.5m～2mの間隔を持ち、焚口は西を向く。焼成部の残存長1.3m～1.5m、幅0.8m、焚口幅0.5mである。床面の傾斜は約2°で焼成部と燃焼部の境に20cm以上の段がある。燃焼部の東側はベース面が赤褐色に焼け、焼成部の痕跡と推定できる。操業面は2面確認し、第2次操業面は固く焼き締まる。壁はスサ入り粘土や平瓦片・塼で補修する。窯体内には炭・灰が堆積し、平瓦・塼・窯壁片が出土した。周辺では柱穴を検出し、柱筋が通ることから窯の覆屋と推定できる。

SK7はSX8～10の西側で検出した土壌（南北8m以上、東西幅3～4m、深さ20～30cm）で、西側はなだらかに傾斜し東側は立ち上がる。埋土は暗灰色泥砂層で、炭や焼土ブロックを多く含み、SX8～10の灰原と考えられる。埋土中は瓦が最も多いが、土師器皿・鍋も含む。軒瓦には巴文や均整唐草文があり、丸・平瓦には歪んだものもある。

3区中央で土壌SK40（径約3m、深さ20～30cm）を検出した。埋土は炭・焼土で、瓦、土師器の他、窯体片などを含む。

2区全域で瓦溜（一辺3～6m、深さ1～2m）を検出した。平面は不定形で、連続する。埋土は暗灰色砂泥層で、上部に瓦を多量に投棄する。土師器、須恵器、瓦器を含む。

**遺物** 遺物は整理箱に568箱出土し、瓦類、土器類、土製品があるが、大半が瓦である。

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦があり、主に瓦溜や建物周辺から出土した。時期は3区SK7・40出土のものを除き平安時代後期である。平安時代の軒丸瓦は171種457点出土し、主なものには複弁蓮華文（10種61点）・単弁蓮華文（37種89点）・巴文（118種280点）で、巴文が多い。産地は山城産が6割、播磨産が1割で他に丹波産が少量みられる。軒平瓦は175種262点出土し、主なものには均整唐草文（18種42点）・偏行唐草文（34種66点）・剣頭文（59種66点）・巴文系（19種33点）・幾何学文（12種12点）がある。産地は山

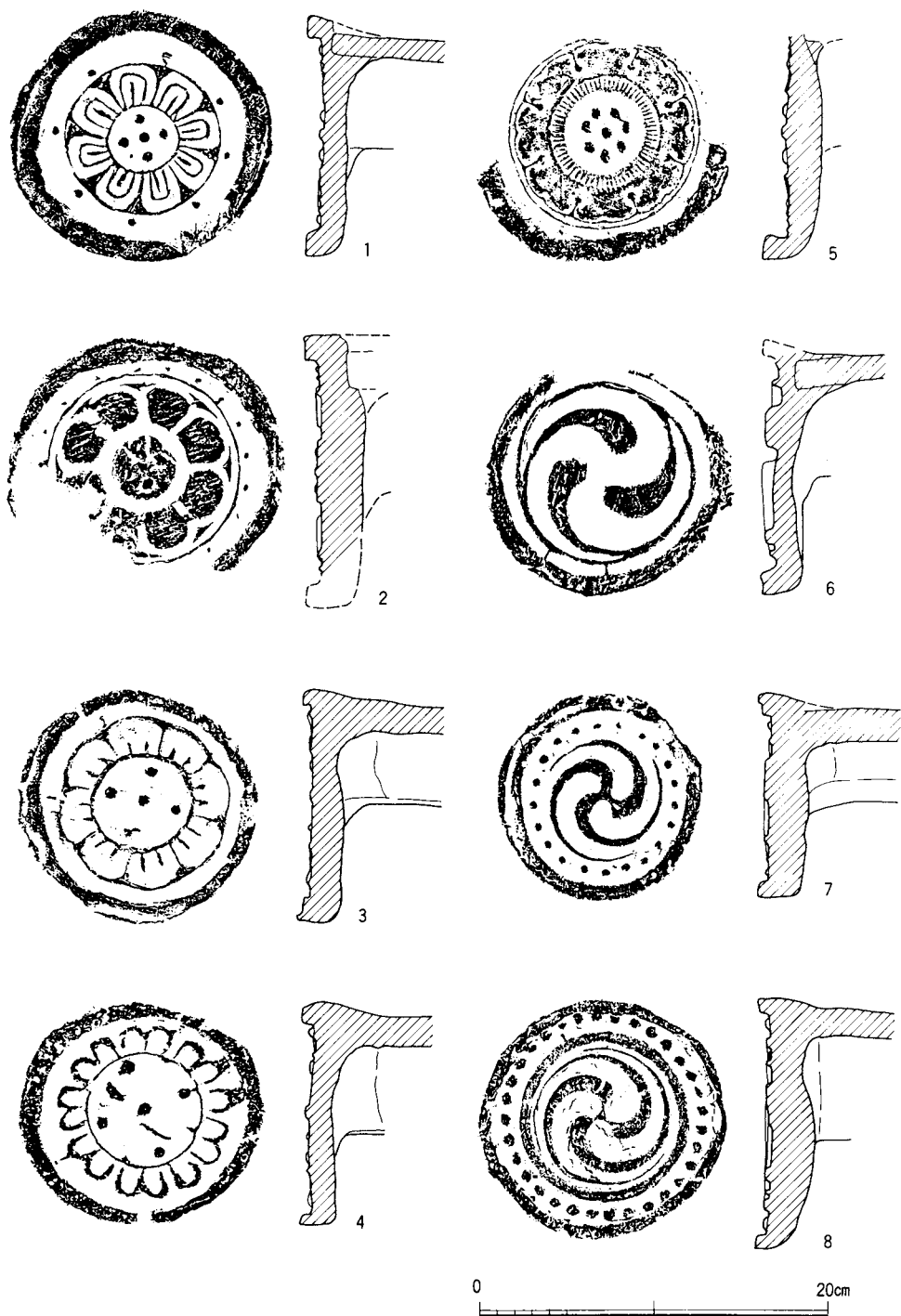


图3 出土軒瓦拓影·实测图 (1 : 4)

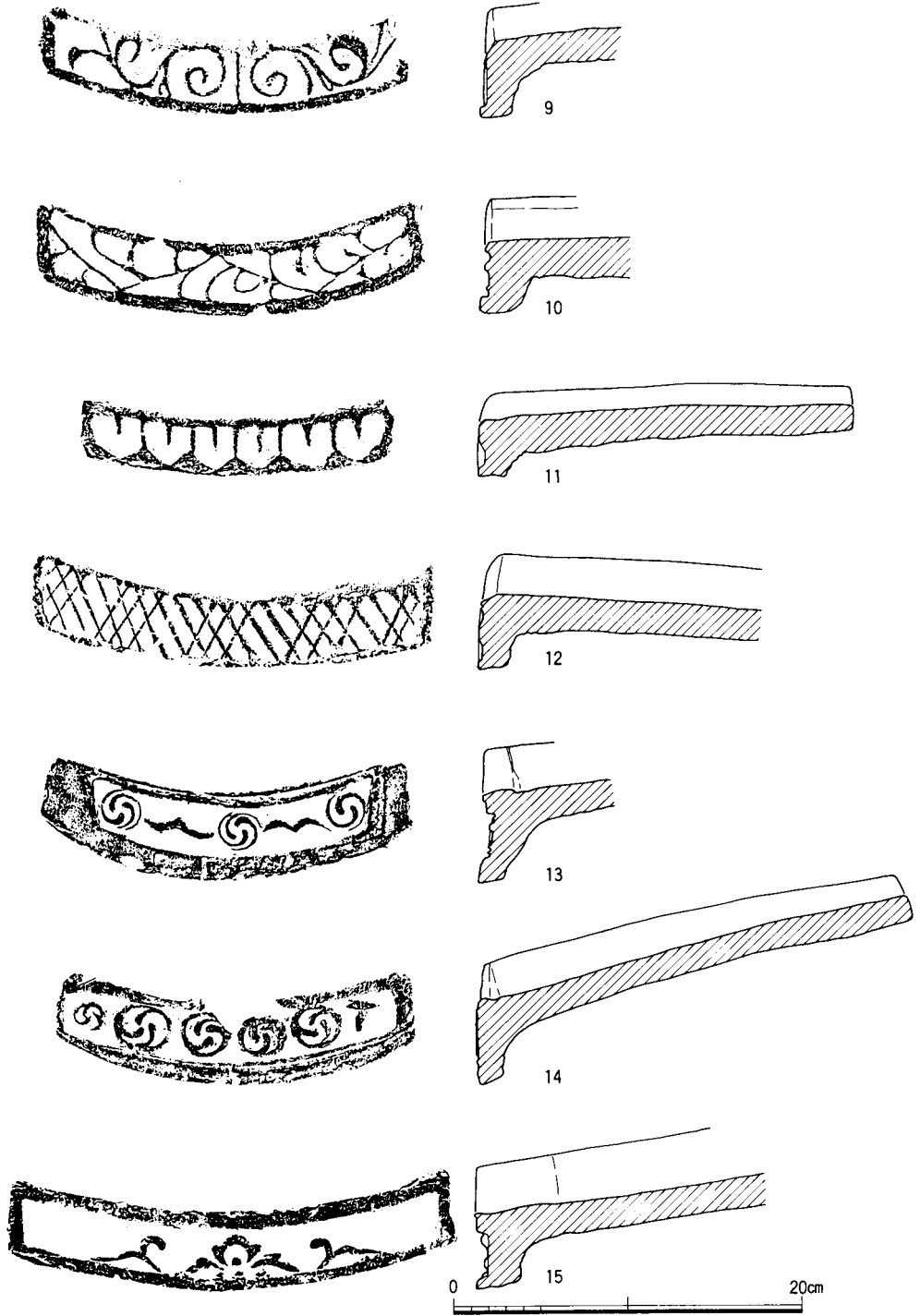


图4 出土軒平瓦拓影・実測図(1:4)

城産が7割、播磨産が2割で、他に大和産・丹波産が少量みられる。平瓦の中には凸面に段の付く「段瓦」があり、調査地周辺で類例がみられる。

土器類には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器などがある。縄文時代から古墳時代の土器はSD7・64などから混在した状態で出土し、小片で量も少ない。平安時代後期の土器は包含層や後世の遺構から出土したが、量は少ない。造営時整地層・第4層からは11世紀末の土師器皿が出土した。中世から近世の土器は包含層や遺構から出土した。2区瓦溜・3区SK7・40からは13世紀後半の土師器皿・鍋、須恵器鉢、瓦器椀などが出土した。他に土製品として緑釉を施した土塔が1点出土した。

**小結** 弥生時代から古墳時代の遺構には1区・3区で検出した流路がある。調査地の北側第32・37次調査では弥生時代中期の方形周溝墓を検出し、今回の発見と合わせ、古墳時代以前の集落の様相を復原する上での一助となろう。

平安時代後期の遺構には建物と溝がある。3・4区のSB1は第6次調査で規模が知られているが、今回の調査で正確な位置や方位、また雨落溝の構造、地業の様子などを確認できた。雨落溝は第1次調査金堂回廊、第25次調査阿弥陀堂などと規模・構造が類似する。SB1周辺は造営時に丁寧に整地しているが、建物に取り付く回廊や他の建物は検出できなかった。調査地西側の第45次調査では建物（推定観音堂）を検出している。この建物とSB1は東西に並び心々で約80m離れる。これらの建物は伽藍中軸や建物配置を復原する上での定点となろう。SB1の南約40m地点でSD4・5を検出した。この溝の方位は第32次調査検出東西溝とはほぼ一致することから、寺域内の区画の溝と推定できる。

鎌倉時代の遺構には窯・瓦溜などがある。窯は削平が著しく構造は明確ではないが、有階の平窯と考えられる。西側の灰原や周辺の土壌からは焼け歪んだ瓦が出土したことから瓦窯と推定できる。時期は灰原や周辺土壌出土の土器から13世紀後半と考えられる。瓦窯の規模は小さく、補修用の瓦を焼成したと推定できる。2区で検出した瓦溜はSB1から約20m離れた場所に造られ、出土した瓦はSB1に葺かれたものである可能性が高い。これらの瓦の大半は、製作手法や瓦当文様から尊勝寺創建後の差し替えなど補修用の瓦と考えられる。

(上村和直・辻 裕司)

註1 工楽善通・藤村 泉『尊勝寺発掘調査概報』六勝寺研究会 1973年

註2 調査次数は京都市埋蔵文化財研究所偏『第9回調査成果交流会資料 山背の寺院跡』1986年による

註3 SX8～10を杉山信三所長は建物の焼失した痕跡と考え、3区東側に建物（薬師堂）を想定している。



## IV 鳥羽離宮跡（調査位置図は図版2-2）

## 18 鳥羽離宮跡第120次調査

**経過** 調査地は北向不動院の西隣に位置する。当調査地は1985年6月21日に試掘調査を実施し、地表下45cm付近で建物基壇と考えられる遺構の一部を検出した。しかしながら建設予定地が資材置場となっていたため、改めて1985年8月22日に再度の試掘調査を行った。この時5箇所に試掘トレンチを設けたが、地表下250cmまで重機によって破壊されていることが判明し、また6月21日に検出した遺構も同様に業者によって破壊されていた。しかし一部破壊を免がれたところが点々と存在していたが、その後も破壊が続いた。そこで1986年8月11日当調査地について国庫補助による発掘調査を実施する運びとなった。

調査はまず破壊状況を把握するため調査地の境界に沿ってトレンチを数箇所に設定し、重機で掘り下げを実施した。その結果境界のぎりぎりまで破壊されていることが判明した。その後も破壊を免れているところを探すために調査地内にトレンチを設けたが、調査前に仮設建物の建っていたところだけが一部残存していることが明らかとなった。調査はこの場所についてのみ実施した。

**遺構・遺物** 遺構は南北方向の溝を一部検出したにとどまった。時期は江戸時代と考えられる。この他にはごく近年の大規模な土取穴のみである。出土遺物には平安時代後期から江戸時代後期までの土師器・須恵器が少量出土した。いずれも小片で計測できるものはない。

**小結** 当調査地に東殿関係の遺構があったことはまちがいない。このような遺構が何等の記録も残すことなく世の中から消えてしまったことは残念至極である。

（鈴木久男）

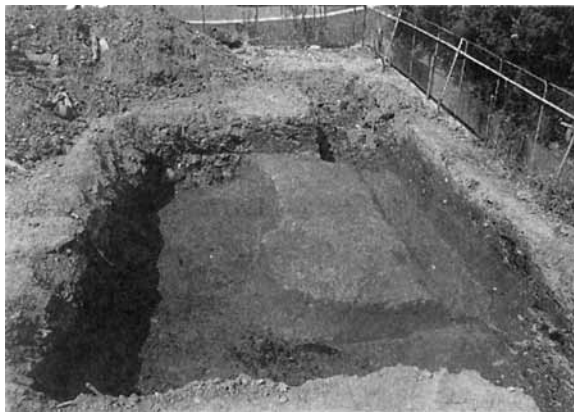


図1 調査区全景（北西から）

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和61年度 1987年報告

## 19 鳥羽離宮跡第 121 次調査

**経過** 今調査は成菩提院陵（白河天皇陵）の北側に接する水田地で実施した。調査地の東側で行った第 91 次調査では、直角に折れ曲がる平安時代後期の堀を検出した。また調査地の西側で行った第 96 次調査では、先の第 91 次で検出した堀の延長が南へ折れ曲がる隅の部分を発見した。したがって今調査はその中間にあたり、堀の検出を主眼として実施した。

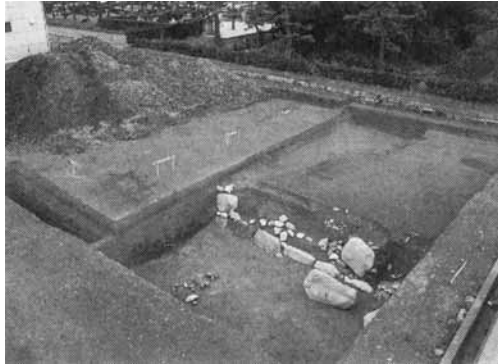


図1 調査区全景（北西から）

**遺構・遺物** 今回検出した主要な遺構は堀・井戸である。堀は東西方向で、幅 5.7 m～6 m、深さ 1.5 m ほどを測る。堀の北岸は素掘りのままの状態であるが、南岸は自然石を積み上げて護岸している。しかし最下段の石を残して、ほとんどが安土桃山時代に抜き取られていた。調査区東壁近くでは比較的旧状をとどめており、この石垣は最低 4 段以上を積み上げていたと思われる。石の積み上げ方はまず石の長軸を堀と平行に据え、その上に人頭大の石を 3～5 個置き、更にその上に 1 段目と同様なものを積み上げる。この石積みの特徴は、大きな石と石の間に小振りの石を横に並べて使っていることである。井戸は瓦と河原石や凝灰岩を積み上げて井戸枠を構築したものである。瓦と凝灰岩は鳥羽離宮の建物に使われていたものを再利用している。また井戸の底には、底部を打ち欠いた信楽焼の甕を据え付けていた。このような井戸の検出は、鳥羽離宮跡で初例にあたる。

出土遺物には瓦・土器・金属製品・木製品・埴輪などがある。瓦には山城系・播磨系・尾張系がみられる。金属製品には装飾金具の天蓋瓔珞・垂木先金具・刀子、木製品には和琴・独楽などがある。和琴は 6 弦の琴で、現代の琴とは形状を異にする。

**小結** 第 91 次や第 96 次では護岸の石が大半抜かれていたが、今調査では比較的良く保存されていたところがあり、旧状の一端を知ることができた。この堀の成立年代は先に実施した調査成果や今回の成果から 12 世紀代の前半と考える。瓦については通称「有段瓦」と呼ばれている一群があるが、今回の調査によって軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の組合せを確認することができた。

（鈴木久男・前田義明）

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 61 年度 1987 年報告

## 20 下鳥羽遺跡

**経過** 下鳥羽遺跡は、鳥羽離宮跡の南方に位置する、弥生時代から中世に至る遺跡として周知されている。ところがこれまでに下鳥羽遺跡では顕著な遺構は検出されておらず、当該期の遺構の検出が待ち望まれていた。

当該地に倉庫が建設されることになり、事前に発掘調査を実施した。調査区は調査対象地の北端に接して設定した。

調査の結果、古墳時代から平安時代に至る遺構を検出した。次に概要を述べる。

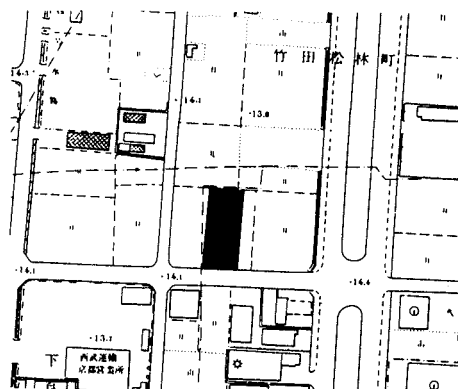


図1 調査位置図（1：5000）

**遺構・遺物** 検出した遺構には、竪穴住居1戸、掘立柱建物2棟、焼土壇1基、溝状遺構1基、流路1条、低湿地状遺構の他、耕作に伴う溝6条などがある。遺物は各遺構や遺物包含層から整理箱で85箱出土した。このうち12箱が木質遺物で流路から出土した。

竪穴住居は調査区中央北寄りで見出した。平面形は方形を呈し、検出面までの規模は東西方向が約5.6m、床面までの深さ約15cmある。主柱穴は4箇所ある。柱間は心々間で約2.2～2.6mある。覆土中より古墳時代後期に属する土師器、須恵器が出土した。

掘立柱建物は調査区北西隅で1棟（建物1）、建物1に東接して1棟（建物2）を見出した。建物1・2とも掘形から古墳時代後期に属する土師器、須恵器が出土した。

流路は調査区南半で見出した。わずかに蛇行するもののほぼ東西方向を示す遺構である。東西の調査区外へ延びる。奈良時代から平安時代中期に属する土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、無釉陶器、瓦、土製品、木質遺物、種実が出土した。

低湿地状遺構は南拡張区で見出した。軟弱な微砂・粘土層が厚く堆積する。検出面からの深さは約2.8mある。上層からは古墳時代後期の土師器、須恵器の小片が、中層からは土師器、初期須恵器が、下層からは古墳時代前期の土師器が多量に出土した。

**小結** 下鳥羽遺跡における発掘調査は、緒に付いたばかりであり、遺跡の具体的な内容は今回の調査でその一部が明らかになったに過ぎない。しかしながら調査で得られた資料はいずれも重要で多岐にわたり、今後の調査・研究に明るい見通しを付けることができた。

『下鳥羽遺跡発掘調査概報』昭和62年度 1988年報告 (辻 裕司・磯部 勝)

## V 中 臣 遺 跡

### 中臣遺跡第 66 次調査

**経過** 宅地造成に伴い事前調査として実施した。調査地は栗栖野の集落が立地する低位段丘の南崖に接した水田部にあたる。周囲の道路部分では3次・5次調査を実施しており堅穴住居や溝が、また北側の59次調査では掘立柱建物と古墳の基底部が確認されている。



図1 調査位置図(1:5000)

**遺構** 基本層序は、北側で耕作土層直下が地山となるが、南側では現地表下70cmの間に現耕作土・盛土・旧耕作土・床土の各層が堆積する状況であった。

検出した主要遺構は溝3条と柱穴2基で、いずれも古墳時代後期に属する。このうちSD1としたものは調査区の西南にあり、西北西から南々東方向に流れる溝で、3次調査で検出したものの続きである。溝幅4.3m、深さ0.5mあり、埋土は下部の水の流れを示す粗砂・砂礫層、上部は褐色系の泥土層で整地されていた。SD2は調査区の南端付近で検出したもので、5次調査で認められていたものの続きである。溝幅1m、深さ0.25mあり、底部付近で水の流れを示す泥砂層が認められた。東端で検出したSD3も5次調査で検出したものの続きであるが、この溝は調査区に入っすぐ消滅する状況がみられた。

柱穴はSD2の付近で2基検出した。直径40～50cm、深さ50cmあり、直径15cmほどの柱痕跡が認められた。しかし、それぞれ対応する柱穴は認められなかった。

**遺物** 整理箱に2箱出土した。中心はSD1から出土した古墳時代後期のものであるが、いずれも小片にとどまった。これらの内容は、土師器甕・甑、須恵器杯・蓋・高杯・甕などである。また、他の遺構からは平安時代の緑釉陶器・灰釉陶器、近世・近代の陶磁器も少量出土している。

**小結** 今次調査は周辺の調査成果か遺構が多数検出されるものと予想されたが、顕著な遺構は上記したものにとどまった。このうち、SD1はその規模や内容から水路として機能していたものと想定できるが、集落内でどのような位置関係にあったのか不明な点も多く、今後のこの周辺の調査に期待される部分が多い。(丸川義広・木下保明)

『中臣遺跡発掘調査概報』昭和61年度 1987年報告

## 22 中臣遺跡第67次調査

**経過** 調査地点は、旧安祥寺川寄りの低位段丘上にあり、中臣遺跡の南部に位置する。周辺部における既往の調査成果によると、縄文時代、弥生時代後期から古墳時代後期の遺構群が濃密に分布し、中臣遺跡の中でも重要な位置を占める地域の一つであり、当該地にもこれら遺構群が遺存していると予想できた。本調査は、造成工事を契機として実施した。

**遺構・遺物** 検出した主な遺構は、古墳時代前期の竪穴住居8戸・土壇8基など、同後期の竪穴住居1戸・掘立柱建物2棟・溝2条などで、その他に古墳時代前・後期の遺物包含層を検出している。

古墳時代前期の竪穴住居は、平面形が方形を呈する7戸と五角形を呈する1戸がある。方形竪穴住居は一辺2.6～6.2m、五角形竪穴住居は一辺4～5mある。主柱穴は、方形竪穴住居が2・4箇所、五角形竪穴住居が5箇所に配置されている。同後期の竪穴住居は、平面形が方形を呈しカマドを北壁中央部付近に付設している。掘立柱建物2棟のうち、調査区内で完結した1棟に付いてみると、3×4間で梁行4m、桁行6.5mある。溝は調査区中央部と南半部で検出し、両溝とも断面U字形を呈する。

遺物は、整理箱で69箱出土した。古墳時代前期の土器は、大部分が在地産であるが、生駒西麓産とみられる搬入品の甕が数点ある。同後期の土器類は土師器、須恵器が大半であるが、円筒埴輪の小片が少量ある。なお、古墳時代前期の遺物包含層に混入した状態で、簾状文・直線文を施文した弥生時代中期の在地産壺の体部小片が出土している。

**小結** 古墳時代後期の溝のうち、南側に位置する溝は南東―北西方向から北東―南西方向へ直角に向きを変えている。このような形状からみて、単に用・排水路の機能を果たすだけの溝とは考え難く、集落内を区画する性格を併せもつ溝と想定できる。そうであるならば、集落の構造を復元的に考える上で重要な意味合いがあり、今後継続される調査の中で追求すべき重要な課題の一つである。

(平方幸雄・菅田 薫)

『中臣遺跡発掘調査概報』 昭和61年度 1987年報告

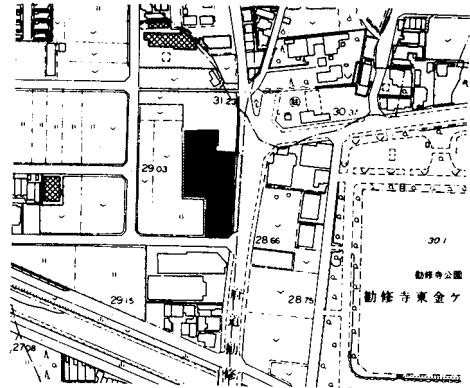


図1 調査位置図(1:5000)

## VI 長岡京跡

### 23 長岡京左京南一条三坊・二条三坊 (図版 33)

**経過** 本調査は西羽東師川河川改修工事に伴う第7次調査である。昨年度実施した第6次調査では、長岡京左京南一条三坊・二条三坊を貫く形で調査区を設定し、一条第二小路、南一条大路の両側溝と坊内の区画溝を検出するという成果を収めている。今年度の調査地は昨年度実施したB地区のすぐ北側で、二条第一小路の推定位置にあたるため、これらの検出を主目的に調査した。

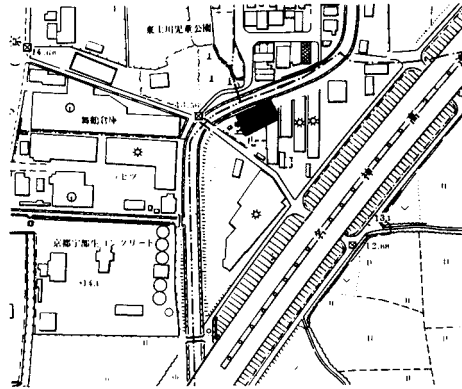


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構** 調査地の層序は、粘土、泥土を主とした後背湿地性の堆積層からなっている。基本層序は、上から現代盛土層が約40cmあり、以下1m付近までは旧耕作土・床土層が互層となって堆積している。この下には鉄分を含む層が約15cmあり、以下、青灰色泥土層(15~20cm)、黒灰色泥土層(約25cm)、灰色粘土層(約10cm)となる。調査の最終面となるのは灰白色粘土層である。

第1面 黒灰色泥土層上面において土壇1基・東西溝2条・南北溝11条を検出した。出土遺物から鎌倉時代のものと考えられる。

第2面 灰色粘土層上面で検出した遺構には、東西溝4

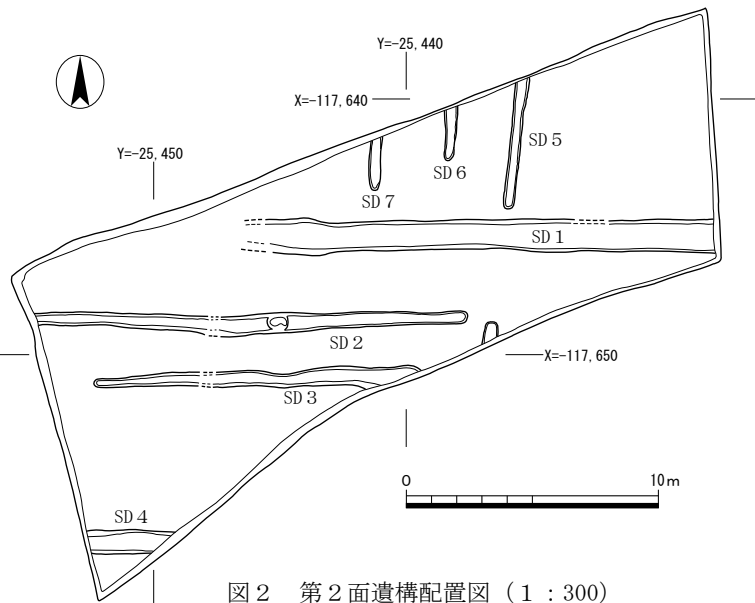


図2 第2面遺構配置図 (1:300)

条・南北溝3条がある。出土遺物から長岡京期と考えられる。東西溝はSD1が幅1.4m、深さ0.3mで最も大きく、他の溝は、幅0.7m、深さ0.2m程度である。南北溝は更に小規模である。出土遺物はSD2を除き極めて少ない。

なお、最終面といえる灰白色粘土層は、その上部に炭を含む箇所があり、ここを中心に縄文時代後期の土器が含まれることを確認した。

**遺物** 青灰色泥土層、黒灰色泥土層及び第1面の各遺構からは、鎌倉時代に属する土師器(皿・羽釜・甕)、瓦器(椀・鍋)、陶器(甕)、輸入陶磁器(青磁・白磁)、瓦、人骨、馬歯や加工した木片が出土している。これらは小片が多く、まとまったものはない。第2面の各溝及び灰色粘土層からは、長岡京期に属する土師器(皿・甕)、須恵器(杯・蓋・壺・鉢)、瓦、加工した木片が出土している。図示した土器はこのうちのSD2より一括出土したものである。(1)は土師器皿で、灯明皿に使用されている。(2)～(4)は須恵器蓋・杯・壺で、特に壺は完形のため内部が観察し得ない。

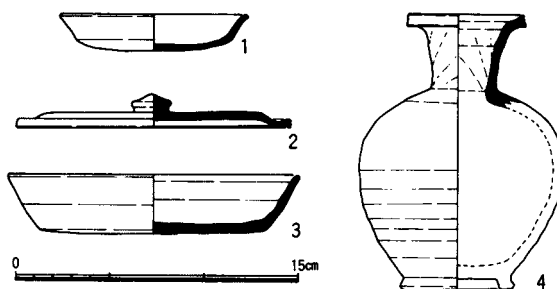


図3 SD2出土土器実測図(1:4)

この他、灰白色粘土層上面の炭混土層からは、縄文時代後期に属する鉢の破片が出土している。1つは口縁部内面に2条の沈線を持ち、端部にわずかに縄文が残る。別の個体は口縁部外面に縄文を施す。いずれも、北白川上層式に属するものである。

**小結** この調査では、鎌倉時代と長岡京期に属する上下2つの遺構面を確認、その各々で溝や土壙を検出したが、建物遺構や井戸といった生活に関連する遺構は検出できなかった。これは調査地一帯が長岡京期には後背湿地のような環境下にあり、このため生活場所には適さなかったことが原因であったと想定できる。しかし、第2面では長岡京期の遺物を含む溝SD2を始め比較的残りの良い溝群を検出している。このうち、長岡京の条坊に関して言えば、SD2が二条第一小路の北側溝に、SD4が南側溝に推定できる位置にあるが、今後の検討が必要である。なお、断ち割りを行ったところ、灰白色粘土層中に縄文時代後期の土器が含まれること、灰白色粘土層は地表下2.5mまであり、この下は砂、砂礫層で湧水が激しいことなどを確認した。これらの所見は、調査地一帯の地形環境を考える際に重要となろう。

(丸川義広・上村和直)

## 24 長岡京左京四条二・三坊 (図版 34)

**経過** 昭和57年度より継続している外環状線計画地の調査である。今年度は昨年度実施したT区とU区の間でV区の調査を実施した。なお、当調査は長岡京左京第164次調査にあたる。調査地には東二坊大路が推定され、条坊と宅地内の状況が確認できるものと予想された。更に両側の調査から、条里制遺構や平安時代から鎌倉時代の遺構が推定された。調査は都合上、北半と南半に分けて実施した。

**遺構** 上層より第1面(平安時代中期から鎌倉時代)、第2面(長岡京期)、第3～6面(奈良時代水田I～IV)、第7面(古墳時代水田)を調査した。第1面では建物・井戸・土壇・溝・木棺墓・坪境などを検出した。第2面では東二坊大路両側溝・路面・建物2・井戸3・柵列2・土壇・溝・川状遺構などを検出した。第3～

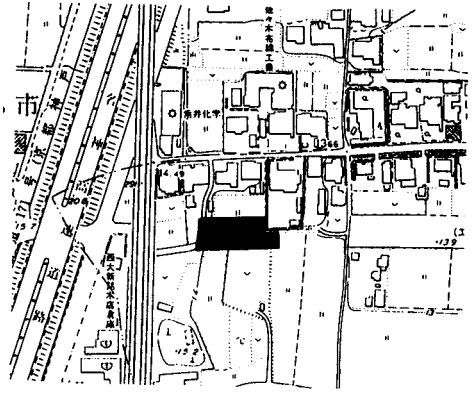


図1 調査位置図 (1 : 5000)

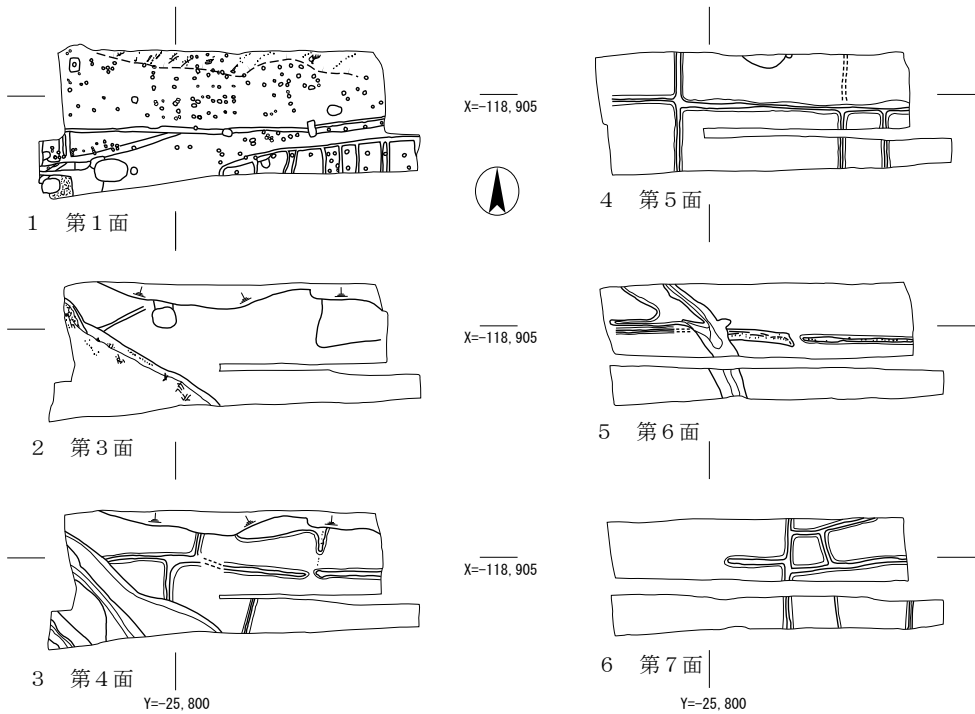


図2 第1面～第7面遺構実測図 (1 : 1000)



5面では乙訓郡条里制に伴う坪境畦畔・坪内畦畔を検出した。第6面では条里制施行前ないしは施行時前後と思われる水田を検出した。これ以下は当地域一帯にみられる弥生時代以降のベース層となる緑灰色粘土層・更に下層では縄文時代頃の流入堆積層と思われる砂礫層を確認した。第1面から第6面までの標高差は1.2～1.5 mを測る。

第1面は、旧耕作土層下で平安時代中期以降鎌倉時代に至る集落跡の遺構群である。北端に当時代の旧小畑川の流路（SD 132）を検出した。流れを弱めるため、あるいは岸を守るためか、流れに対し斜め方向にしがらみを構築しておりその数は、約40 mの間に10条を数える。この川の南側に井戸（SE 82）、柱穴、木棺墓（SX 121）、土壙（SK 282）、石敷遺構（SX 279）などを検出した。また調査区の中央以南に東西方向の数条の溝群を検出したが、これは時期幅があり平安時代から近世の遺物を含んでいる。下層の奈良時代の条里坪境とほぼ同位置にあり条里制地割りが踏襲されている。

第2面長岡京跡相当面では、上述した遺構を検出し、特に東二坊大路両側溝を検出した成果は大きい。検出した位置は先年長岡京市内の調査で得られた資料とほとんど一致している。西側溝の南半で杭列が密集してみられる区間があり、橋と考えている。建物や井戸には少なくとも2時期以上の造り替えがみられる。建物SB1はSB2に建て替えられ、SB1は2×3間の東西棟（桁行1.6 m等間、梁間1.9 m等間）、SB2は2×3間の母屋に北庇を付けた東西棟（桁

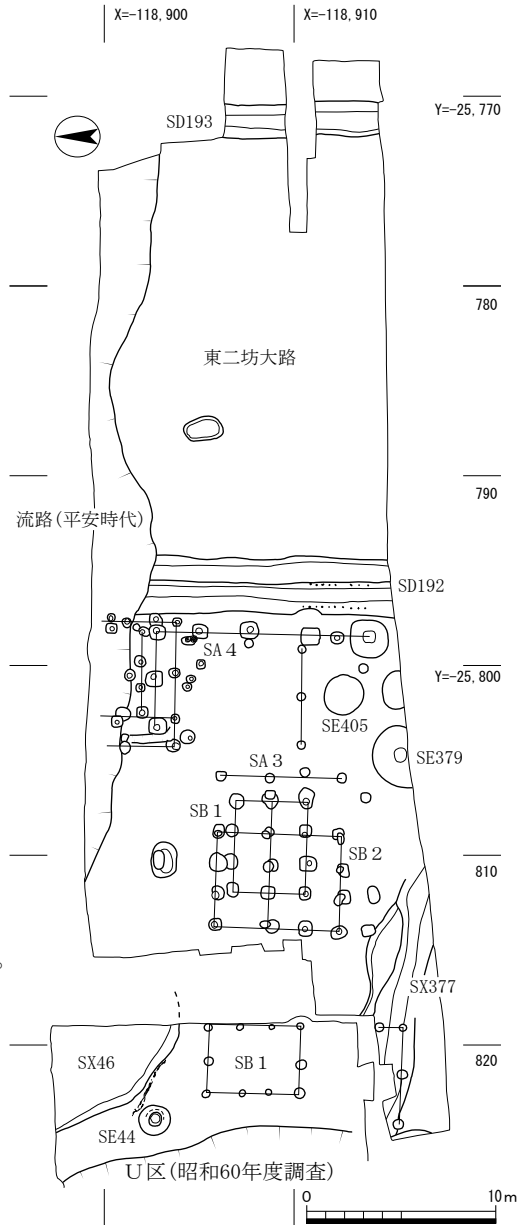


図3 長岡京期遺構実測図（1：400）

行・梁間ともSB1と同じ、庇2.7m)である。SB2には東側に柵列SA3を設けているが、梁間が揃うことから、土底的なものとも考えられる。建物の東南部に井戸・土壇の一群が造り替えられている。西南部には湿地状堆積SX377があり、後述する木簡が出土している。この第2面では長岡京期よりも古い溝SD239を検出した。すべて砂礫層で埋まり、岸には杭列やしがらみなどの護岸施設を検出した。当期の旧小畑川の流路である。

第3面から第6面までは水田である。最下層の水田は条里制に伴う水田とこれよりも古い時期の水田畦畔が混在しているが、これより上層の水田はすべて条里制に伴うものである。各水田の埋没は旧小畑川の氾濫によるものである。

**遺物** 長岡京期(第2面)出土の土器類を図6に示した。土師器、須恵器と少量の黒色土器、瓦、製塩土器がある。その他に木製品・木簡などがある。第2面の総出土破片数6711片に占める割合は、土師器50.16%、須恵器30.35%、黒色土器A類0.43%、灰釉陶器1.24%、瓦2.87%、製塩土器13.75%となる。

土師器は特殊な用途の人面墨書土器(19)などを除いて、食器類(1~9・25・26)と調理器類(20~22)に分かれ、7:3で食器類が多い。食器類は大半が皿で、他に杯・杯B・椀A・高杯などがみられる。調理器類は大部分が甕で、胎土に砂を多く含む羽釜がごく少量ある。須恵器は食器類(10~17・23・24)、調理器類(18)と貯蔵器類がある。食器類は杯A・杯Bと若干量の皿がみられる。杯Bは7:5で杯Aに勝る。また杯Aは大半が灰白色をなし、焼成が甘くなっている。須恵器は、甕が細片に割れ東二坊大路路面に敷き詰められていたため数量比がかなり高くなる。墨書土器(6・19・23~26)は図示したもの他、21点出土した。

図4に示した木簡は4を除きSX377から出土した。1は「黒米五斗」。2は「地子米五斗」。3は「地子米」。4は「進上謹解 $\times$ 」と読める。これらの語句のうち、地子米

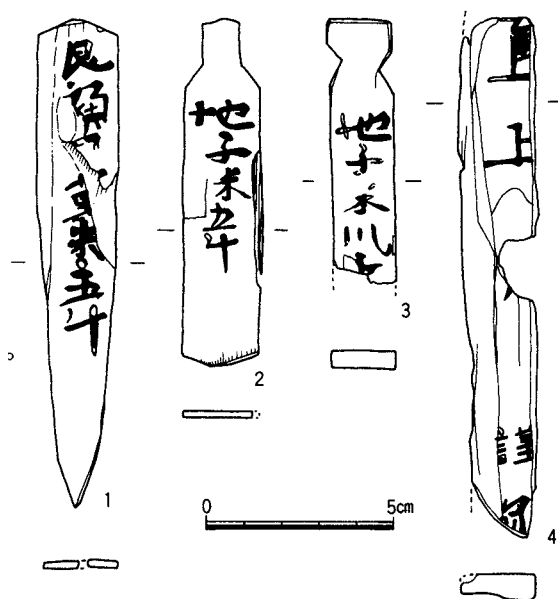


図4 出土木簡実測図(1:2)

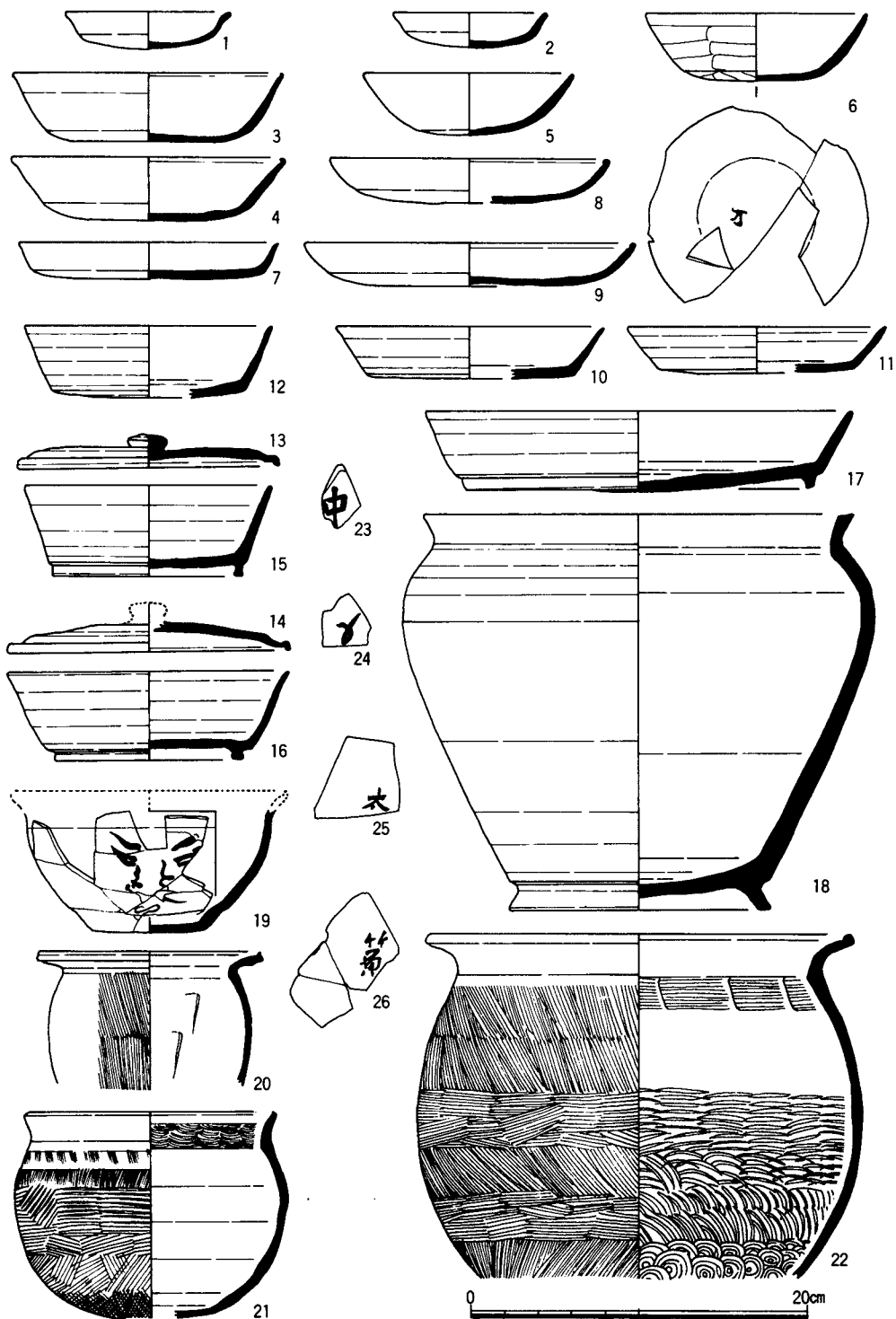


図6 長岡京期（第2面）出土土器（1：4）

は白米で官人などの常食にあてられたものである。1～3は荷札、4は習書的なものである。

第1面出土の土器を図5に示した。土師器、須恵器と少量の黒色土器、瓦器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、瓦などがある。(27～29)は木棺墓S X 121の出土である。棺内の北隅に瓦器碗1個と土師器皿7個が納められていた。12世紀後半代のものと考

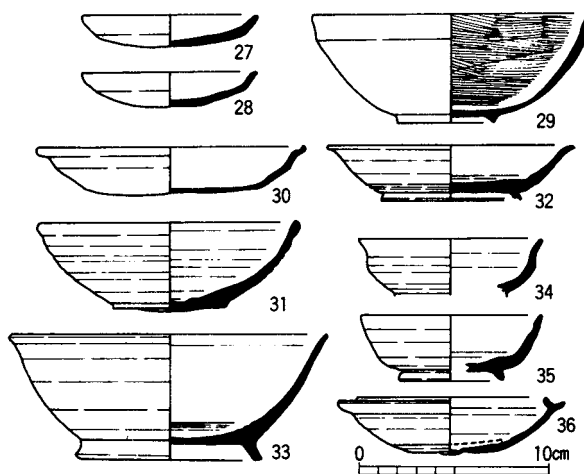


図5 第1面および水田出土土器(1:4)

えられる。土師器皿(30)、須恵器碗(31)、緑釉陶器皿(32)、碗(33)はS X 279の出土である。緑釉陶器は京都北郊系、近江系、東海系が混在する。また、須恵器にも緑釉陶器の皿と同じ器形のものがある。第1面は、10世紀中頃から11世紀初めにかけての遺物が主体である。第3面から第6面の水田出土の土器が図5(34～36)である。(36)は第4面水田II出土の古墳時代終末期の須恵器杯身である。(34・35)は第6面の水田IV出土の須恵器杯である。両者ともやや類例の少ない器形である。7世紀後半代のものと考えられる。

**小結** 平安時代以降の遺構群は、現代の菱川の集落到続くものと考えられるもので、その始まりは調査の結果から、小畑川の氾濫が当一带に影響を及ぼさなくなった10世紀中頃と判ってきた。こうした中でT・U・V区に検出した一連の建物群は、数個の家が集まり、10世紀から12世紀にかけて生活を営んできた区域といえよう。

長岡京期の東二坊大路は、従来の大路検出例と同様に側溝心幅約24mを測る。両側溝は幅・深さともほぼ同規模で検出した。大路東側はT区の調査区にあたり、推定川原寺の遺構群を検出している。西側の町の区画では、U区と合わせて少なくとも3棟以上の建物を検出したことになる。出土した遺物では、地子米に関する木簡があり、U区出土のもの合わせ、この付近での出土数は7点を数える。

奈良時代の条里制水田はT区から続くもので、旧小畑川の氾濫堆積に伴う各々の水田面を検出した。いずれも多少の移動はあるものの埋没した条里坪境を踏襲している。時期幅については今後の整理に委ねたい。(長宗繁一・鈴木廣司)

## 25 久我東町遺跡 (図版 35・36)

**経過** 当調査は、京都市住宅供給公社用地の内、小学校建設予定地を対象とした調査である。昭和59年度に実施した第二次調査地の南に隣接する区域を対象とした久我東町遺跡第3次調査にあたる。第一次調査の試掘調査の段階で室町時代及び平安時代の遺構を確認している。

**遺構** 検出した遺構には、桃山時代の火葬墓3基、室町時代の環濠を伴う集落跡、平安時代後期の沼状遺構などがみられるが遺跡として

では、室町時代の環濠集落である久我東町遺跡が主体をなしている。第2次調査で検出した東西方向の溝が今回調査区の北西部で折れ曲がり、南東方向に延びることが判った。更に、環濠内で多くの建物などを検出した。

環濠は、北及び西辺を検出した。数回の造り替えがみられ、位置及び規模が異なる。大まかに3期の変遷があり、古い時期（Ⅰ期）には集落の北西部にのみ設け全周はしていない。Ⅱ期にはAからBへの変遷があり、大幅な拡幅が行われている。Ⅲ期は第2次調査で検出した東西方向の溝となり、集落の終末ないしは廃絶後の時期となる。Ⅱ期Bの時期が環濠集落として最大の時期であろう。この時期の調査区の南端部に、乙訓郡椋下里二十五坪と阿刀里三十坪との境を示す東西方向の里境溝が連続していることも判った。

環濠内には建物・井戸・墓・溝・土壇など多量の土器と共に検出した。全体の配置は、北西の一画に空地を溝で画し、他の部分に南北方向に密に建物を配置している。複数の建物から構成される家屋（複棟形式）と、1棟の建物からなる家屋（単棟形式）がみられる。建物の構造は、柱穴底部に根石を据えるものが大部分であるが、素掘りのままの柱穴も多い。特異な構造としては、柱間に束石状の小礎石を密に並べる家屋があることが挙げられ、その範囲は1棟の半分ないしは一部分にみられる。また、家屋の内部に土壇などの配置を知ることができ、検出例もあり、床と土間などの内部の利用状況を復原できる可能性もある。建て替えや部分改築が多く、いまだ復原に至っていない部分が多い。今後の整理・研究に待ちたい。現段階で示せる範囲で以下を説明する。

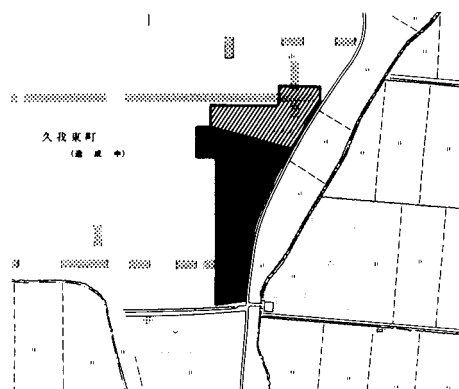


図1 調査位置図 (1:5000)

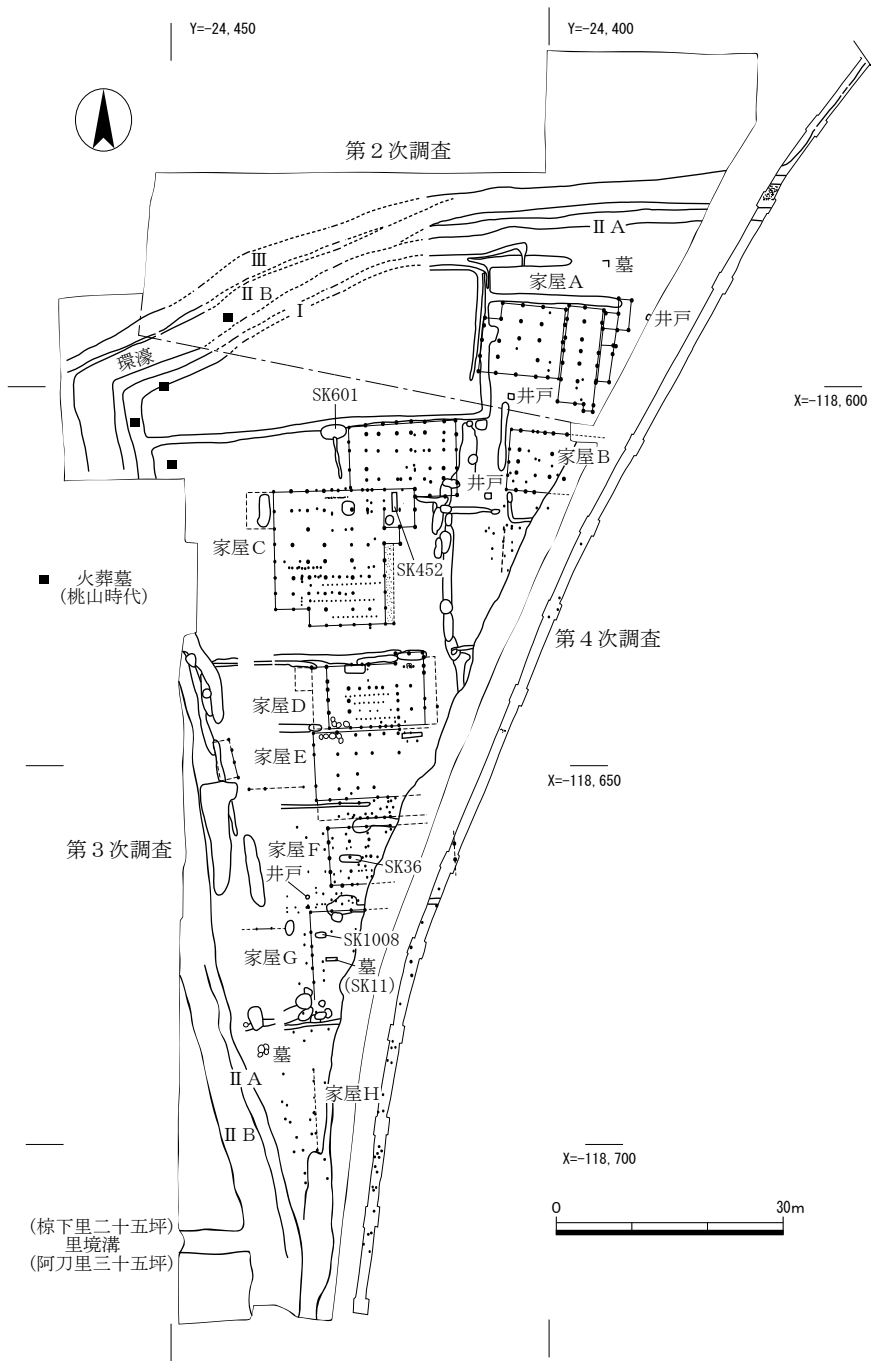


図2 遺構配置図 (1 : 1000)

家屋Aは昭和59年度に報告したもので、複棟及び附属屋からなる。

家屋Bは単棟で東西4間以上南北6間の建物である。西半部は井戸に近く溝や土壙を多く検出した。柱穴の数が多く、建て替えなど複雑な状況にある。南側にも柱筋の通る柱穴群があり別の単棟の家屋が想定できるが、家屋Bとの関連等については不明である。

家屋Cは当集落を代表する主要家屋である。複棟で南の建物が主屋、北側の建物が副屋である。主屋は東西7間、南北8間で、南北4間を床張り、北半4間を土間とする。南半4間には、柱筋ないし柱の間に東石状小礎石が、水平に密あるいは疎に並べられ、この上に横材が据えられていたことが判る。北2間分は改築が何回か行われ柱位置の改変がみられる。この部分に竈ないし囲炉裏と思われる焼土や焼灰の堆積した土壙を検出した。北東部には2間分の張り出しを持ち、流しと思われる土壙などの施設を設けている。根石の構造は他の家屋と異なり、柱穴は深く掘り下げ、2個ないしは大きなものを使用し、精緻に設計されている。副屋は東西7間、南北3間で、北辺の西3間は東西方向の溝に規制されたらしくやや振れている。ただし、溝が埋没した後に小石や石敷遺構があり北辺部では改築が何回も行われ、複雑である。主屋との関係、周囲の遺構配置からすべて土間として利用していたものと思われる。

家屋D以南の家屋配置はほぼ同軸の方向に統一されており、家屋Cを含めて計画的に南北方向に配置されたものと考えられる。家屋Dは中央部に家屋Cで検出したのと同様の東石状石列が配されていることから、床張りの間と土間が復原できる。規模は家屋Cの主屋の半分にあたり、明確に階層差を示している。北東部に流しと思われる石敷き部分と土壙を検出した。家屋Dと家屋Eとの境は複雑であり、同じように以南の家屋の復原は多数の柱穴からなり煩雑な状況にある。家屋Dの復原を元に、土壙や溝の配置から同規模の家屋が時期を変え、建て替えられたものと考えられ、家屋E以南の配置を想定できる。家屋Fの南西に井戸を検出した他、家屋Gの廃絶後に木棺墓（SK 11）、家屋Hの北西に土壙墓などがあり土地利用に変遷のあることが判る。

**遺物** 基本的な器種構成は、多量の土師器・瓦器と若干量の国産陶器・輸入陶磁器などからなり、昭和59年度の第2次調査の室町時代の遺構群の遺物出土傾向と大差はない。しかし前回が久我東町集落の北端部であったのに較べ、今回の調査は集落の本体である可能性があり出土遺物の質・量ともに充実したものとなっている。また、遺跡に伴い遺物も大きく2時期に分けられる可能性がある。図4に取り上げた遺物は（1～26）がⅡ期の遺構SK 11・36から、（27～48）がⅠ期の遺構SD 601、SK 452・1008から出土した。

Ⅰ期の土師器は白色系の胎土（30・31）、糸切り底（32）やヘラキリ底（36）がみられるが、

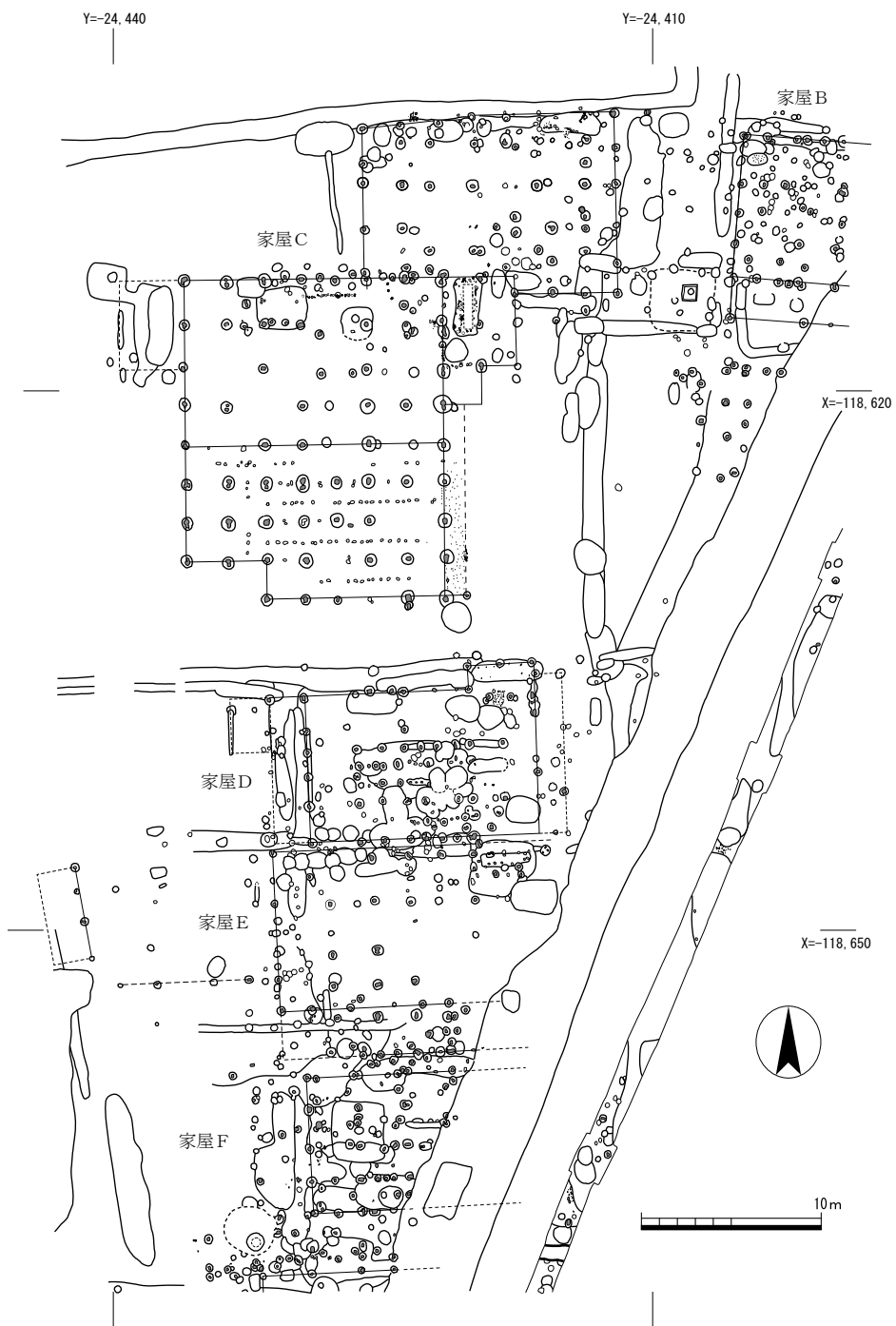


图3 中央部遺構実測図 (1 : 400)



両期ともこれらの土師器は少量である。瓦器碗の高台は、雑ながら大部分が円形に近く馬蹄形のもの少ない。

Ⅱ期の土師器は、白色系の胎土のもの（5・13・14）や、糸切り底のもの（7・8・15）もみられる。瓦器碗は大小がある、いずれもごく簡略化されたヘラミガキが施され、過半の高台は砂粒の多い粘土を馬蹄形になすり付けたようなものになっている。

I期の遺構S D 601では総出土数5328片で土師器69.63%、瓦器28.85%、陶器Ⅰ類0.99%、陶器Ⅱ類0.02%、輸入陶磁器0.32%、瓦0.13%である。機能ごとでは食器95.25%、調理器4.11%、貯蔵器0.40%、その他0.24%となる。両期の遺構とも食器類の比率が非常に高いが、遺跡全体の傾向を示すものではない。なお、第二次調査では井戸や土壇・環濠で調理器類の出土が約28%を占めており、一部の土壇では55%を越すものもある。また食器類が約95%の高率を示すS K 36やS D 601に類似した性格を持つ土壇を数基検出しているが、土師器の皿3に対し瓦器の碗1の比率や、出土する器種に限られるなどの共通点がある。

Ⅱ期の遺構S K 36出土遺物の器種ごとの百分率をみると、総出土数3858片で、土師器73.46%、瓦器23.51%、陶器Ⅰ類1.81%、陶器Ⅱ類0.13%、輸入陶磁器0.23%、瓦0.21%他となる。機能ごとでは食器95.80%、調理器2.75%、貯蔵器0.75%、その他0.70%である。

**小結** 第一次調査から第三次調査で判ってきた久我東町遺跡の性格としては、当遺跡が環濠集落と推定できる状況にあること、集落内には多くの家屋が存在すること、その時期は14世紀前半を中心とする時期にあることなどである。遺構・遺物が多量であることまたその内容も豊富であり、今後の整理に伴い当遺跡の性格を更に明らかにして行きたい。

環濠と集落の変遷、家屋個々の復原と変遷、土間・床間・土壇・諸施設の配置による住居内の復原などの問題、またその土壇より出土した多量の土器の構成、土器の変遷、平安京内などの出土遺物との比較と時期の決定、土器構成からの土壇の性格付けなど解決すべき問題は多い。当時代の環濠集落としての位置付け、家屋の構造など中世遺跡としての面にも関連して行くものである。

（長宗繁一・鈴木廣司）

注 陶器Ⅰ類は、平安時代以前の須恵器と、中世の須恵器の系譜を引く陶器類と区別するために、陶器Ⅱ類は、いわゆる焼締陶器のことで鈴木が便宜上使用している。

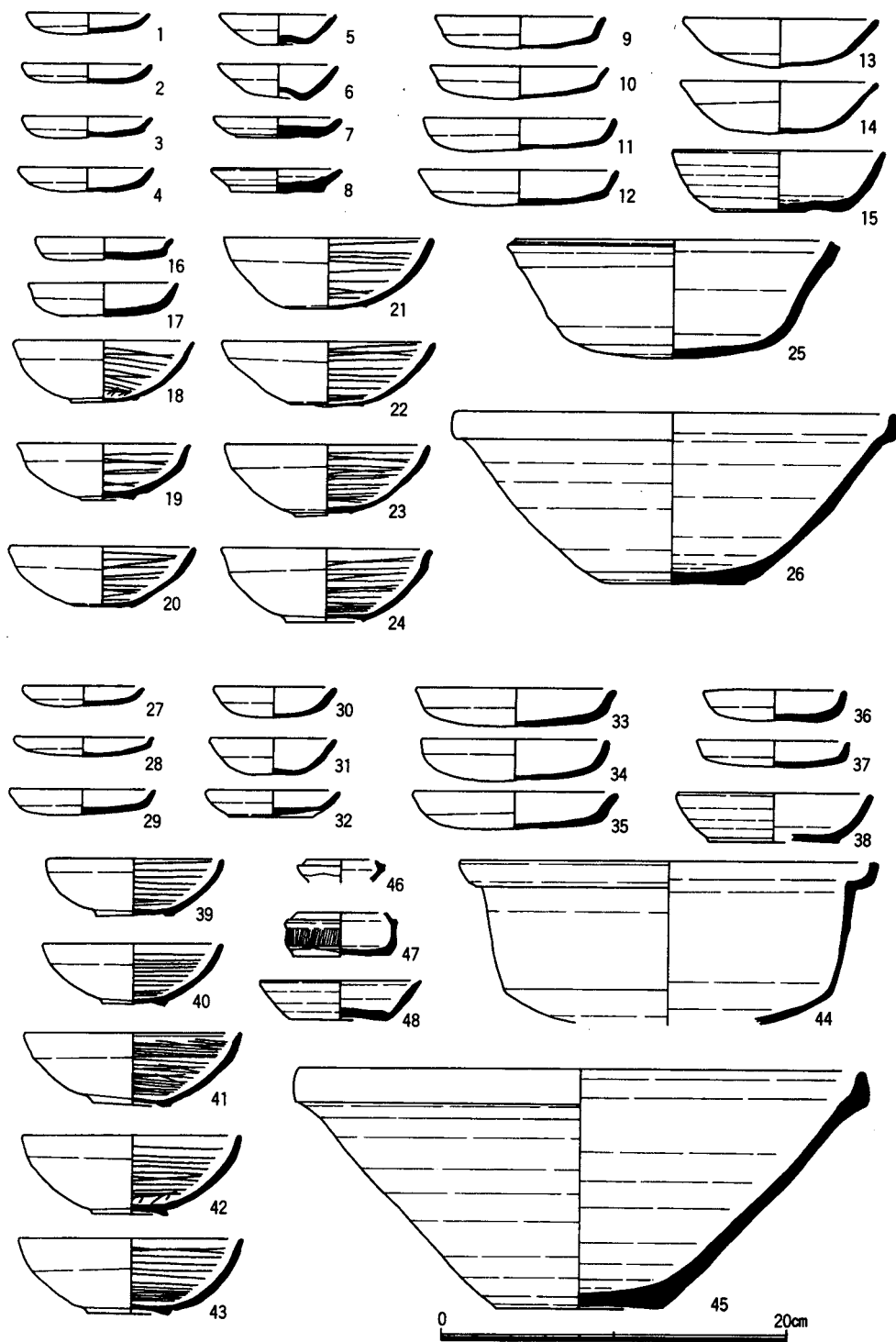


图4 出土遺物（土師器 1～15・27～38，瓦器 16～25・39～44，  
陶器 I 類 26・45，青白磁 46・47，白磁 48）（1：4）

## VII その他の遺跡

## 26 植物園北遺跡 (図版 37～39)

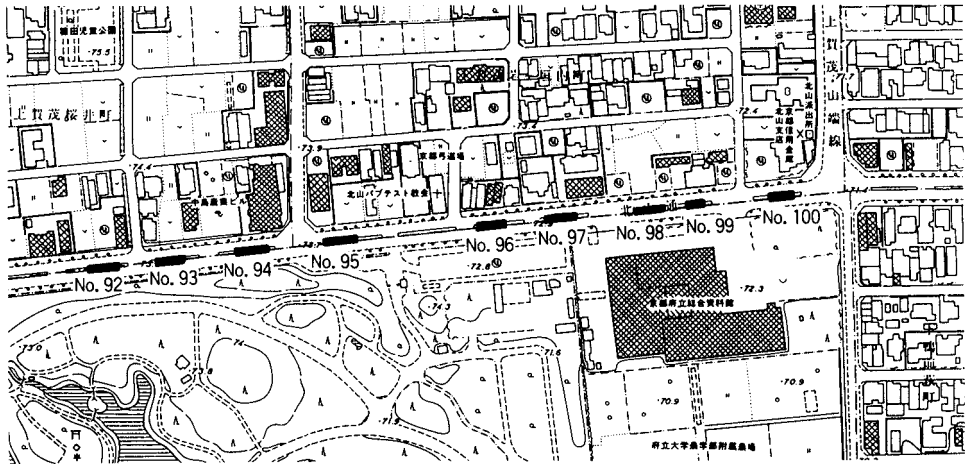


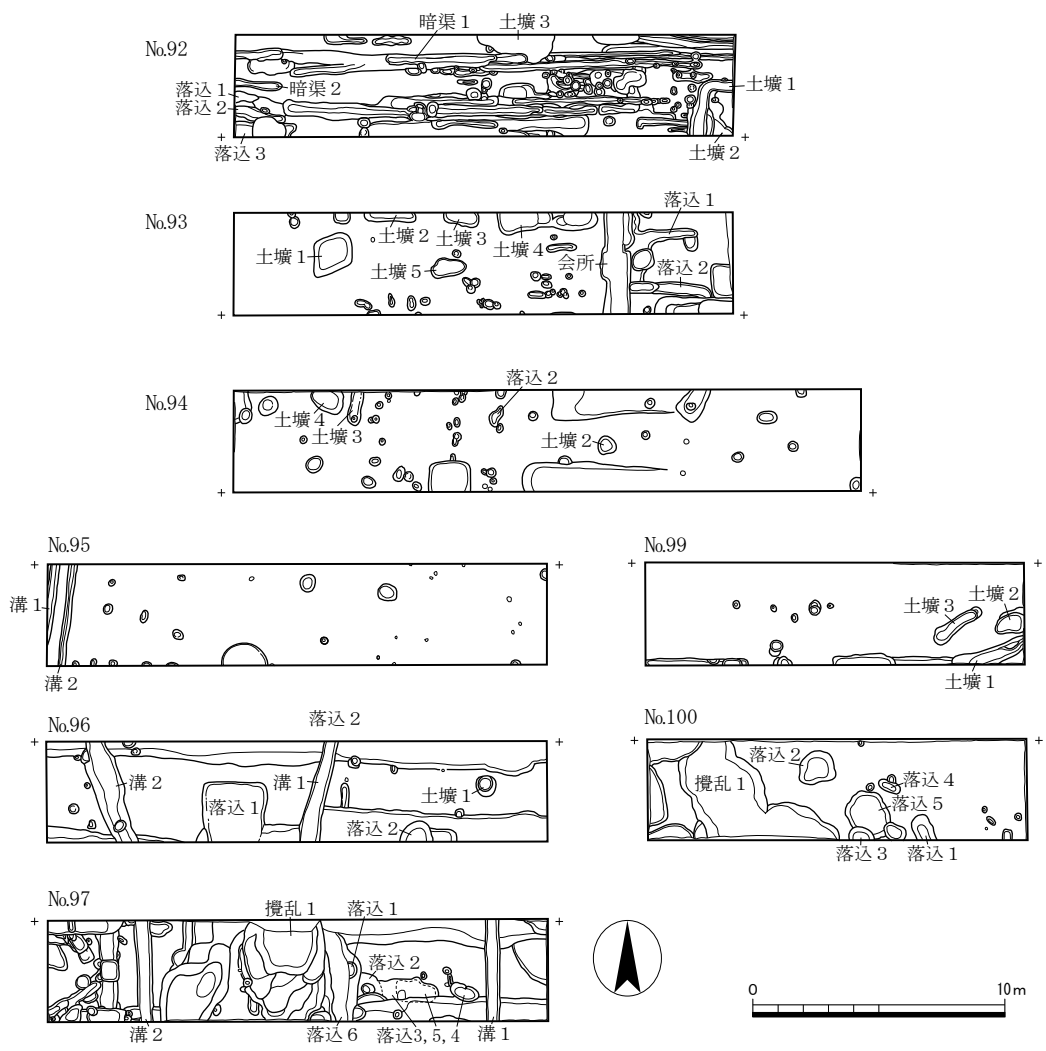
図1 調査位置図 (1:5000)

**経過** 本調査は、京都市高速鉄道烏丸線北進工事（北大路～北山）に伴う発掘調査である。計画路線は北大路駅から北進し、鴨川の下をシールド工法によって潜り、東方へほぼ90度曲がって植物園北側の北山通へと出る。北山通部分は、駅舎を含めてすべてオープンカット工法によって工事が進められる。この北山通部分が、植物園北遺跡範囲内に位置しており、工事に先立ち同遺跡の様相を明らかにするために発掘調査を実施することになった。

発掘調査の実施にあたっては、道路上での調査であるため諸々の制約が伴った。このため発掘調査は、南北4m、東西20mを基本的な規模とするトレンチを一定間隔で、連続的に道路中央に設定する方法をとった。トレンチは、烏丸線内遺跡調査のトレンチ番号に連続してNo.92からNo.100とした計9箇所である。

この調査を実施したことによって、縄文時代晩期から弥生時代、古墳時代、平安時代及びそれ以降の歴史時代のものも含む各時代の遺構・遺物を検出することができた。この成果により植物園北遺跡に対して多くの新知見が得られた意義は大きい。

1986年11月より地下鉄工事が本格的に開始されることになった。このため本調査後に残った地点の課題を整理し、交通局とも諒解のもと地区ごとに工事に対する立会調査を実施する予定であった。これに基づいて同年11月25日から布掘り工事の立会調査を開始した。以後、



No.	西側ポイント		東側ポイント	
	X	Y	X	Y
92	-105,612.48	-21,467.44	-105,610.14	-21,446.57
93	-105,607.44	-21,422.82	-105,605.13	-21,401.95
94	-105,626.30	-21,373.13	-105,598.99	-21,347.30
95	-105,590.38	-21,306.48	-105,588.04	-21,258.61
96	-105,579.12	-21,206.18	-105,576.78	-21,185.31
97	-105,574.30	-21,163.25	-105,571.96	-21,142.38
98	-105,567.63	-21,103.74	-105,565.29	-21,082.87
99	-105,563.73	-21,068.99	-105,561.95	-21,053.09
100	-105,557.75	-21,015.60	-105,555.97	-21,999.70

図2 遺構実測図 (1 : 300)

工事の進行を見計らいながら同11月26日・12月2・5日・12月9～11日と調査を継続した。しかし工事手順の問題から短時間の断面観察や遺物採集もままならぬ状態が続いた。この間に工事手順の調整を打診したが変更不可能ということになった。このような状態での立会調査を継続しても致しかたないとして、以後工事に対する立会調査を中断することになった。

今回一連で実施した発掘調査及び若干の立会調査の終了によって、過去13年間にわたる地下鉄烏丸線に関連する調査は完了したことになる。

**遺構** 縄文時代晩期以降、弥生時代、古墳時代及び歴史時代の遺構を各トレンチにおいて検出した。しかし、各時代の遺構数は決して多くなく、遺構を群レベルで性格を把握できるまでには至らなかった。

縄文時代晩期の遺構はNo.92トレンチで検出したピット2である。小規模な掘込であるが、晩期末に比定できる2個体分の深鉢片が押しつぶされたような状況で出土した。遺構の中央部には、その深鉢片に重なるような状態で比較的偏平な大礫を1個検出した。この遺構は、土器や礫の検出状況からみて小規模な合わせ口甕棺墓の可能性が大きい。

弥生時代の遺構はNo.94トレンチのピット33で、検出状況から削平された遺構の残欠とみられ、全形態は不明である。また、縄文晩期の遺構との関係も注意しておく必要がある。

古墳時代の遺構はNo.96・97トレンチで落込などを若干数検出している。他にも堆積土の共通性などからNo.96トレンチの溝2は、同時代に埋没した遺構であると推測できる。これらの遺構は、出土遺物から古墳時代末期には埋没していたものと判断している。

飛鳥時代から平安時代中期までに比定できる遺構は、少数のピットを挙げるにとどまる。しかし、No.99トレンチを中心に、一部No.98トレンチでも検出している茶褐色泥砂層からは平安時代前半代のものを主に、この時代幅の各時期の遺物が多数出土している。この遺物包含層の状況から判断して同時代の大規模な遺跡の縁辺部を調査したといえるだろう。

平安時代後期の遺構はNo.92・94～96トレンチなどで一定数検出した。混入遺物も加えるとすべての調査区においてこの時期の遺構か遺物を検出している。No.92トレンチで検出したピットには、礎石を伴うものがあり柱穴と推定でき、加えて付近には直接地山に据えられた礎石も検出している。また、土壙1・2とした遺構は全体としてはL字の溝状を呈し、肩部に大礫を設置している部分がある。これらの遺構は検出地域的にも相互に関連した遺構群とみられる。性格は推測の域を出ないが、出土遺物に京域内でも例の少ない青白磁碗などが含まれている点も踏まえて、貴人の別業的な邸宅の一角である可能性も大きい。

中世以降の各歴史時代の遺構も点々と検出しているが、当地域がほとんど耕作地帯化してし

まった時代を示しているものが多い。

**遺物** 一連の発掘調査によって、縄文時代から近世に至る各時代の遺物が出土した。出土量は、平安時代前期と後期のものが比較的まとまって出土している。

No.92 トレンチのピットから出土した2個体の縄文時代晩期の深鉢は、胎土や基本的な成形技法は共通しているが、口縁部に付く刻目突帯の位置などで形態的には若干の差がある。しかし両者とも同形式に属し、晩期末に比定されている長原式に併行する資料である。

No.94 トレンチのピット 33 からは、弥生土器が一定量出土したが残存状況は良好とは言えない。しかし、口縁部の遺存するものもあり型的には畿内第Ⅰ様式に属し、弥生時代前期に比定できるものと判断している。この弥生土器の甕と、前述の縄文時代晩期の深鉢は、現時点では型式学的には別々に論じなければならない資料である。しかし、他の同時代の遺跡からの類似品出土状況や、縄文時代晩期から弥生時代への過渡期の状況を考えるならば、両者が並存した時期も検討しなければならない。

No.99 トレンチの茶褐色泥砂層から出土した資料には、土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などの土器類及び少量の瓦類と、量的には土器に匹敵する焼けた小土塊粒が出土している。土器の型式編年では比較的長い時間幅の遺物が混在した状態である。古墳時代後期から平安時代中期までの各時代のもが含まれているが、質・量的には平安時代のもが中心である。これらの資料は材質的に軟らかく、残存状況の悪いものを含むが、全体的には遺物包含層出土資料にも関わらず遺存状況が比較的良好なものも多く、近地点に存在する遺構が推測される資料も各種ある。須恵器には、未製品として廃棄されたとみられる生焼け資料も多い。生産跡が近地に存在していたことを物語っている。土師器は、杯・皿など以外に煮沸用具である甕なども多く出土しており、生活色が強く、集落跡の近辺であることを示している。これら以外にも緑釉陶器や焼けている小土塊粒とした資料や瓦など視点の据え方によって問題点の多い多彩な資料が含まれている。

No.92 トレンチの平安時代後期の遺構から出土した遺物には、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などがある。この中で輸入陶磁器の質が注目される。太い玉縁の白磁碗や四耳壺など比較的ポピュラーなものに混じって平安京域内出土資料にも類例の少ない非常にシャープで高級感のある青白磁碗などが少量であるが出土している。このような資料は、量の多少に関わらず、出土した遺構・遺物の性格を解明する上で重要な意味を持つであろう。

**小結** 植物園北遺跡は、今まで弥生時代後期から古墳時代にわたる集落跡を中心とする大遺跡とされていた。しかし、今回実施した一連の発掘調査では既知の時代の遺構・遺物は少

数認めただけのみであるが、一方では予想外の古い時代の遺構・遺物や、新しい時代の遺構・遺物を検出し、植物園北遺跡の時代的広がりを明らかにする証を多数得られた。

縄文時代晩期、弥生時代前期の遺構・遺物の発見は、当遺跡内において人々が同期には既に生活していたことの物証であり、遺跡成立年代の認識を大きく修正する必要がある。この結果、新たに空白期となる弥生時代中期の遺跡が存在している可能性も大きくなり発見が待たれる。当遺跡の既知の時代においては、遺構検出状況からみて当調査地は集落跡からややはずれた田・畑などの生産跡が点在する遺跡の周辺部であったようだ。また時代の下った平安時代前期から中期の遺物や、同後期の遺構・遺物を検出したことによって、平安時代の遺跡が確実に存在していることが明らかになった。

このように発掘調査により、多種多様な成果が得られたことを述べたが、この成果は周辺地域での調査成果と統合することによって当遺跡の解明に大きな力となるであろう。

(平安京調査会 小森俊寛・原山充志・長戸満男)

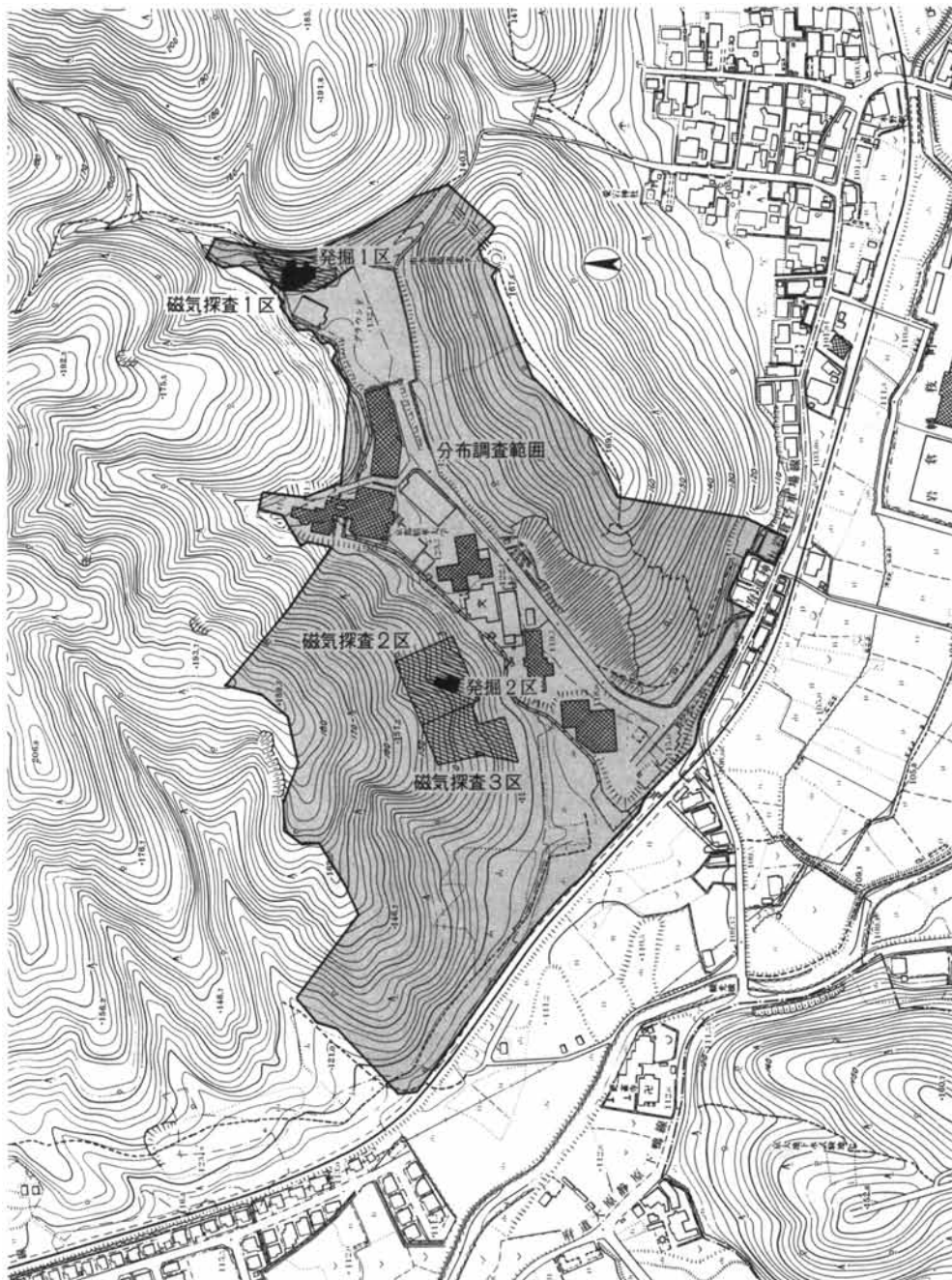


図1 調査位置図 (1 : 5000)



**経過** 岩倉の地は京都盆地の東北部にあり、南方を松ヶ崎丘陵によって画され、残る三方も北山や比叡山などに囲まれた小盆地である。調査地は、岩倉盆地の西北方にある木野の小谷沿いの山腹に位置している。現在は、この小谷と周辺山腹が京都精華大学の敷地となっている。岩倉及びその周辺地域は古墳時代末期には須恵器の生産が開始されており、以降飛鳥時代から奈良時代、平安時代にかけては、須恵器と瓦の生産地帯として早くから知られていた。平安時代初期の官窯として著名な栗栖野瓦窯や小野瓦窯は、それぞれ岩倉盆地内に位置している。この地における瓦の生産は平安時代末期まで続く。また、平安時代には緑釉陶器や土師器の生産も行われていた。中世以降にも、幡枝や木野は土師器生産が知られている。木野では近年まで土師器（かわらけ）の生産は続いていた。このように岩倉の地は、京都盆地の中にあっても窯業生産の古い歴史と伝統を持つ土地柄であった。

発掘調査は、昭和61年12月の分布調査、翌年1月の磁気・電気探査<sup>註1</sup>などの成果を踏まえて確定した1区から3区の調査区を対象として昭和62年3月2日から開始した。

当初の調査計画では、1区においては想定された2基の窯を対象とした全面調査、2・3区は遺跡の有無及び広がりを確認するためのトレンチ調査を中心に実施する予定であった。先行して開始した2・3区のトレンチのうち、3区では遺物は出土したが明確な遺構は検出できずに調査を終了した。しかし2区においては、トレンチ調査区内において多数の遺物が出土する流土で埋没した谷筋を検出した。また、調査区内に新たに設定した数箇所のテスト・ピットでは、窯体・灰層を検出することができた。出土遺物には、平安時代の灰釉陶器と判定できる陶片やその生産に使用された独特の焼台が含まれており、極めて注目される結果となった。確実な灰釉陶器窯の発見は近畿地方以西では初めての例であり、その学術的価値は極めて高いといえる。このため、大学当局と緊急に協議を行い、2区についても窯体調査を含む発掘調査を実施することになった。

**遺構** 1区は大学キャンパスの最奥部山裾の西向き傾斜地に位置している。1区1-1号窯（中の谷1号窯）、1-2号窯（中の谷<sup>註2</sup>3号窯）の2基の須恵器窯、1-1号窯の灰原、方形の焼土壙1基を検出した。

1-1号窯は、半地下式の窖窯である。天井部は崩落していたが、その他の部分については残存状況が良好である。窯体は焚口部から煙道部までほぼ完存しており、50cm以上の深さで側壁が残存している。全長は、水平距離で9.5m、最大幅1.8m、焼成室の床面傾斜度は20～27°であるところがほとんどである。窯体の構造及び規模は奈良時代の須恵器窯では平均的なものである。床面や側壁部には、修復部や塗り重ねが確認できる。幾度かの使用と修復が繰り返

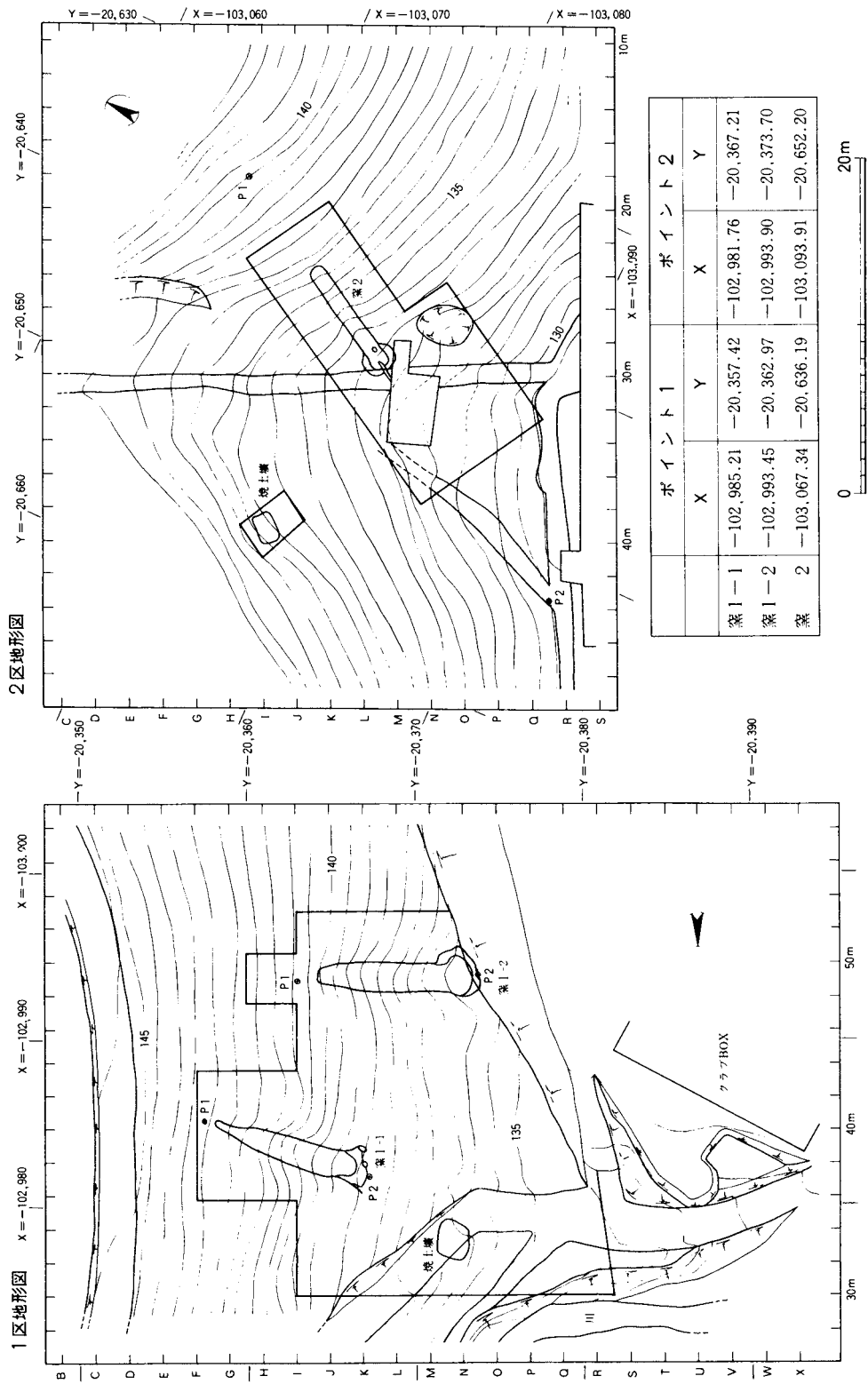


図2 1・2区地形図 (1:400)

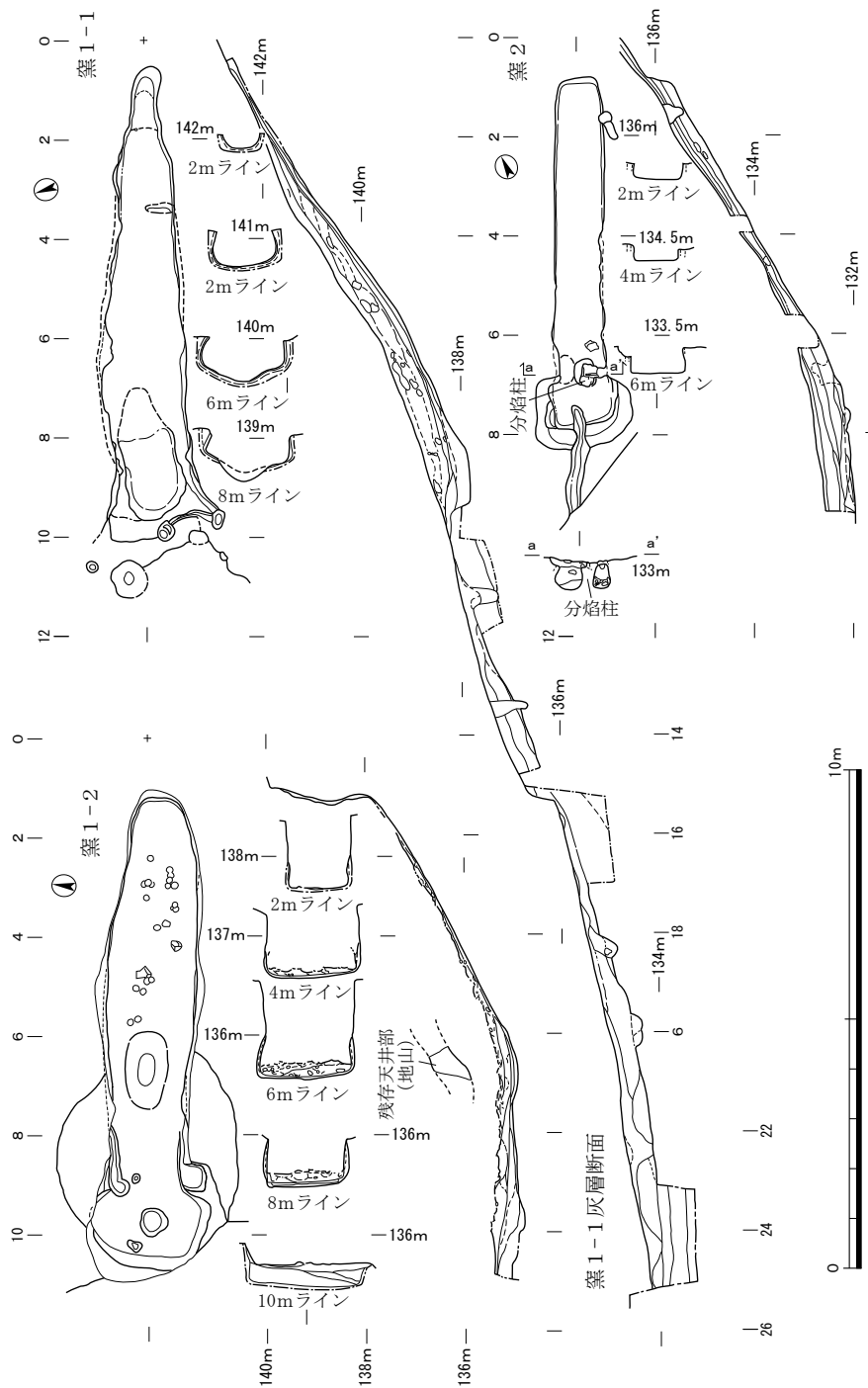


図3 窯跡実測図 (1 : 150)

返されたことは明確である。窯体及び床面からの出土遺物はごく少なかった。

1-1号窯の灰原は、焚口部脇の狭い前庭部から下部の斜面に沿い南西部に広く堆積しており、厚い部分では50cmを越える。灰・炭・焼土・窯壁片などが混在した状況で堆積し、そこからは生焼けや、溶着したり焼け歪んだりした須恵器片が多量に出土している。

1-2号窯は、岩盤をくり抜いて構築された地下式の窖窯である。天井部も一部残存しており、全体としては焚口部から煙道部まで完存していた。加えて、床面には破損しているとはいえ焼成途中の遺物も残っており、残存状況は非常に良好であった。焼成室の床面傾斜角度は20度で煙道部にかけて徐々に急傾斜になる。側壁や天井部では岩盤が直に焼けている部分と、修復して貼り付けた壁土が焼結した部分がある。修復して何度も使用したものとみられる。飛鳥時代から奈良時代の京都近郊の瓦陶兼業窯には、この地下式の窖窯と類似した構造と規模を有するものが多い。

この窖窯（1-2号窯）は、検出状況から判断して、製品の焼成作業を行っていた途中で天井部の大半が崩落して放棄されたものであろう。そのため、窯詰めしていた製品は割れて散乱し、焚口部の方へ流れ出しており、焼成室では炭化した燃料の上に陶片が堆積していた。このような検出状況は、他に類例の少ない非常に貴重な資料である。床面から出土する遺物をすべて整理すれば当時の1回の焼成時の窯詰め状態や器種構成、生産量などを明らかにできるであろうし、また焼成室の炭化材は燃料の種類を教えてくれるであろう。

2区は大学本館の裏山裾部の南向き斜面に位置している。灰釉陶器窯である2号窯（中の谷4号窯）、同灰原、焼土壙2基を検出した。2号窯は、半地下式の窖窯である。窯体過半部は焚口部から煙道部までほぼ完存しているが天井部はすべて崩落していた。全長は焚口部から煙道部まで水平距離にして7m、最大幅は1.1m、焼成室の床面傾斜角度は30～33°である。全長に比べて床面が狭く、非常に細長い特徴的な形状を呈しており、灰釉陶器焼成のための改良とみられる。窯体と床面からの出土遺物はごく少ない。

灰原は南へ下がる谷筋に沿って広がっている。灰層は厚い部分でも30cm弱の堆積層である。灰層からは、灰・炭・窯壁片などと共に多量の焼台と灰釉陶器の破片が出土している。他に少量の緑釉陶器とその焼台に使用された陶片が出土した。

焼土壙は1区でも同様の遺構を検出している。両者とも方形の掘込で側壁部が灰色から赤色に焼変しているが、底部は焼けていないなど共通した特徴を持つ遺構である。炭窯とする意見もあるが、構造・焼け具合など不明確な点も多い。

**遺物** 1区1-1号窯では、窯体内埋土中からは少量の須恵器片しか出土しておらず、また

床面にもほとんど残存していなかった。しかし、焚口部下方斜面に位置する灰層からは多量の須恵器や窯壁片が出土した。この灰層出土須恵器は、生焼け・焼成途中で歪んだもの・融着したもの・破損したものなど製品にならなかったものばかりである。器種は、杯身・杯蓋・鉢・各種壺・甕などがある。

1区1-2号窯では灰層がまったく残っておらず、遺物の大半は窯体内からの出土である。これらの須恵器は焼成途中に天井が崩落して破損し、傾斜した床面を下方へ移動しているが、窯体外へはほとんど流れ出していないと考えられる検出状況であった。このような窯詰め内容をほぼ反映する一括資料は全国的にみても類例はごく少ない。1回の焼成における器種構成とその生産量が明らかにできるであろう。現時点での概観ではこれらの須恵器は杯身・杯蓋・高杯・鉢・鉄鉢・播鉢・甌・各種壺・甕がある。

両窯からの出土須恵器は型的には平城京の土器編年や大阪府の陶邑古窯群の須恵器編年などを参考にすると奈良時代前半代に比定できるものである。

2区2号窯でも窯体内から陶片の出土はごく少なかった。遺物は主に窯体下方の灰層及びその下の小谷筋を埋める流土中から出土した。遺物には灰釉陶器碗・短頸壺・広口壺・鉢などがあり、他に無釉の同種の陶片と焼台が出土している。また少量であるが緑釉陶器片、同素地や色見陶片の他、緑釉陶器の焼台に使用された陶片などが出土している。

これらの灰釉陶器は碗類の特徴などから、型的には岐阜県東濃地方の古窯群の編年における虎溪山期及び愛知県猿投古窯群における東山72号窯にほぼ併行する資料といえる。しかし、器種構成的には皿器形がほとんど認められない点や、壺類の占める割合が高いとみられる点など、併行期の東濃諸窯の資料に比べて片寄った様相を示している。今後整理で検討を要する問題である。

**小結** 今回実施した発掘調査によって、京都精華大学の新校舎建設に伴うキャンパス拡張予定地での一連の遺跡調査は終了した。分布調査から着手し、次の段階には磁気探査、電気探査などの理化学的方法による調査を実施した。それらの予備調査を踏まえて、調査区の設定を行い、本調査として発掘調査を実施することができた。このように基本的な遺跡調査手順をほぼ省略することなく調査が進められた例は近年少なくなってきた。その意味でも貴重な調査例となるであろう。灰釉陶器は、奈良時代末期に須恵器から発展して形成された高火度釉を施した日本で最初の陶器であり、生産の本格化は平安時代に入ってからである。低火度釉の緑釉陶器と共に古代後半を代表する日本製の陶器とされる。灰釉陶器は、愛知県の猿投古窯を中心として岐阜県・静岡県・三重県の一部など東海地方において発展し、同圏においてだ

け生産され、平安京を始めとする他地域に供給されていたという認識が定説であった。しかし、最近になって、東では福島県の会津若松において灰釉陶器窯が発見されたと報ぜられている。今回の発掘調査の大きな成果の一つは、京都において灰釉陶器窯を発見し、その窯の発掘調査が実施できたことにある。この発見は、今日までの窯業史の通説的な理解の変更を迫るものである。

奈良時代の2基の須恵器窯の調査によって、岩倉地域ひいては京都盆地の須恵器窯の実体解明への大きなステップを踏み出すことができた意義は重要である。

(平安京調査会 小森俊寛・上村憲章)

註1 分布調査、磁気・電気探査については、第2章Ⅲ-12 中の谷窯分布調査を参照。

註2 窯番号の、1-1号窯・1-2号窯・2号窯とした番号は、今回の調査で便宜的に用いたものである。この窯群は「中の谷窯群」と呼ばれており、今回調査した地点よりも谷奥に「中の谷2号窯」と名付けられた窯が確認されている。

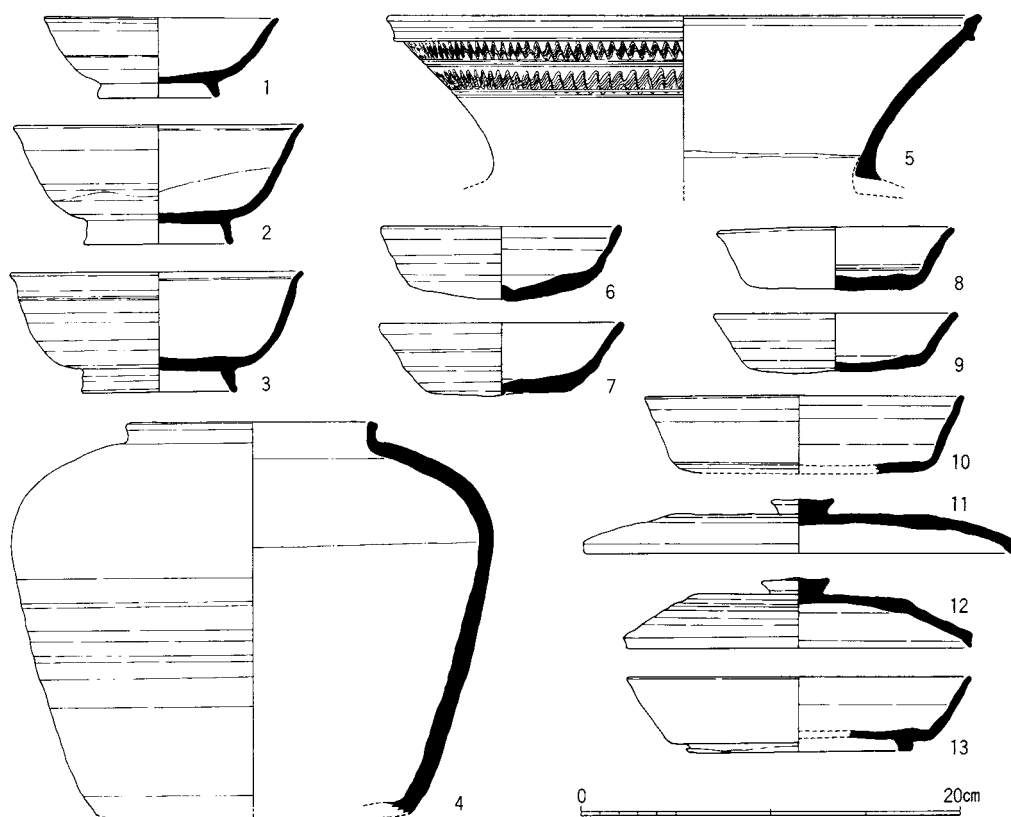


図4 出土土器実測図 2区窯2出土(1~4) 1区窯1~2出土(5~13)

(1:4,5は1:6)

## 28 一乗寺向畑町遺跡

**経過** 左京区一乗寺向畑町17-1他においてビル建設の計画が立てられた。当地は縄文時代前期・後期の遺物の出土で知られる一乗寺向畑町遺跡にあたるため、試掘調査を実施した。その結果、縄文時代の土器を含む土層や、平安時代の遺構を検出したことから、発掘調査を実施することになった。

**遺構** 堆積状況は、厚さ約30cmの耕作土層下にそれぞれ厚さ約10cmの褐色泥砂層・茶褐色泥砂層が続き、淡褐色砂層の遺構面となる。

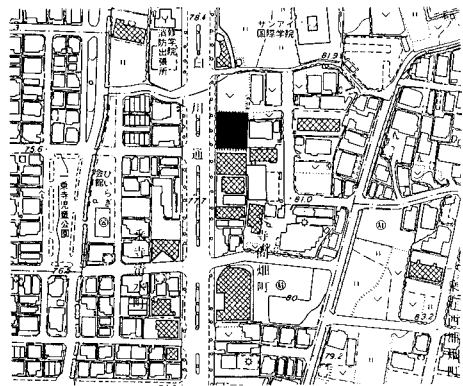


図1 調査位置図(1:5000)

遺構は、すべて淡褐色砂層上面で検出しており、古墳時代と平安時代のものがある。試掘調査で検出した縄文時代の遺物を含む土層はすべて後世の二次堆積であることが判明し、縄文時代の遺構は検出できなかった。

古墳時代の遺構は横穴式石室の痕跡と、古墳の周溝とみられる溝がある。石室は掘形と床面の一部とみられるわずかな石敷を除いてすべて破壊されていた。掘形は長さ約9m、最大幅約5mを測る。形状や周辺の地形からみて南西方向に開口部を持っていたと思われる。周溝は、石室南側の一部を検出したのみであるが、幅約4m、深さ約1mを測る。

平安時代の遺構は、前期の遺物が多量に出土した大型で浅い土壇の他に、小規模な土壇やピットが数基あるが、いずれも浅く形状も不整形なものが多い。

**遺物** 縄文時代の遺物には後期に属する土器類、磨製石斧、石錘、石鎌などがあるが総量は少ない。古墳時代の遺物は土師器、須恵器、金環、鉄製品などが主に石室・周溝などから出土したが、原位置を保つものはない。平安時代の遺物には土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色無釉陶器の土器類の他、軒丸瓦1点と少量の瓦がある。

**小結** 今回の調査で検出した古墳は、周溝の形状や石室の位置から、径20m前後の円墳と推定できる。また、出土遺物から6世紀末から7世紀初頭のものともみることができる。このことは発見した古墳1基に限らず、この地域に群集墳が存在していた可能性を示すものであり京都盆地の歴史をとらえる上で重要な資料が得られたといえよう。(平尾政幸・本 弥八郎)

『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』昭和61年度 1987年報告

## 29 北野廃寺1 (図版 42)

**経過** 調査は社屋建設に伴うものである。工事に先立って実施した試掘調査では、平安時代から室町時代の遺構を多数検出した。これらの遺構は北野廃寺に関連する可能性が高いため発掘調査を実施する運びになった。

調査区は、当初L字形に設定したが、調査の進展に伴って南端部を拡張したため、結果的にはコ字形になった。

**遺構・遺物** 調査区は、北から南へ緩やかに下がる傾斜地であり、堆積する土層も地形に

左右されているが、基本的には以下のようなものである。まず、調査区全体に近・現代の盛土が厚さ40cm前後あり、その下に灰黄色砂泥層や灰褐色砂泥層・褐色砂泥層が10cm前後堆積している。更にその下層には黒褐色砂泥層が堆積している。中世の遺構は、灰黄色砂泥層を除去した段階で、平安時代以前の遺構は黒褐色砂泥層下で検出できる。

調査では主に飛鳥時代から平安時代に至る遺構を検出した。

飛鳥時代の遺構は竪穴住居を2棟(住居6・7)検出したが、いずれも隅丸方形で、一辺4m程度の小型のものである。東端にカマドを有するもの(住居7)もある。また、調査区東端部にもう1棟が考えられるが、大半が調査区外であるため詳細は不明である。

奈良時代から平安時代の遺構は、溝・掘立柱建物・柵列などがある。溝は東西と南北方向の2条を検出した。東西溝(溝1)は、新旧2時期にわたって造り替えられている。古い時期の溝は幅2.5m、深さ0.6mの素掘りで、新しい時期の溝は幅1.9m、深さ0.5mで、一部に石積みの護岸の痕跡を認めた。南北溝(溝2)は幅1.4m、深さ0.3mを測る素掘りの溝で、埋土から土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などの遺物が多く出土している。掘立柱建物は調査区南端で1棟検出した。東西2間分を確認したが大半は調査区外に延びる。柱穴の掘形は一辺0.7mの方形で、柱間は2.6mを測り、かなり大型の建物であるらしい。柵列は東西方向のものを2列検出した。北側で検出した柵4は東西3間分を確認し、西端で南へ2間程で直角に折れ曲がる。また南側で検出した柵5は東西4間分を確認した。

この他に中世の柵列や集石遺構などを若干検出している。

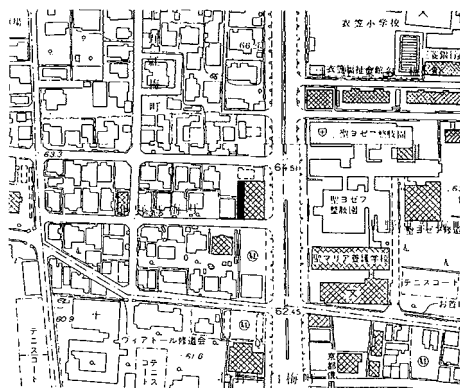


図1 調査位置図 (1:5000)



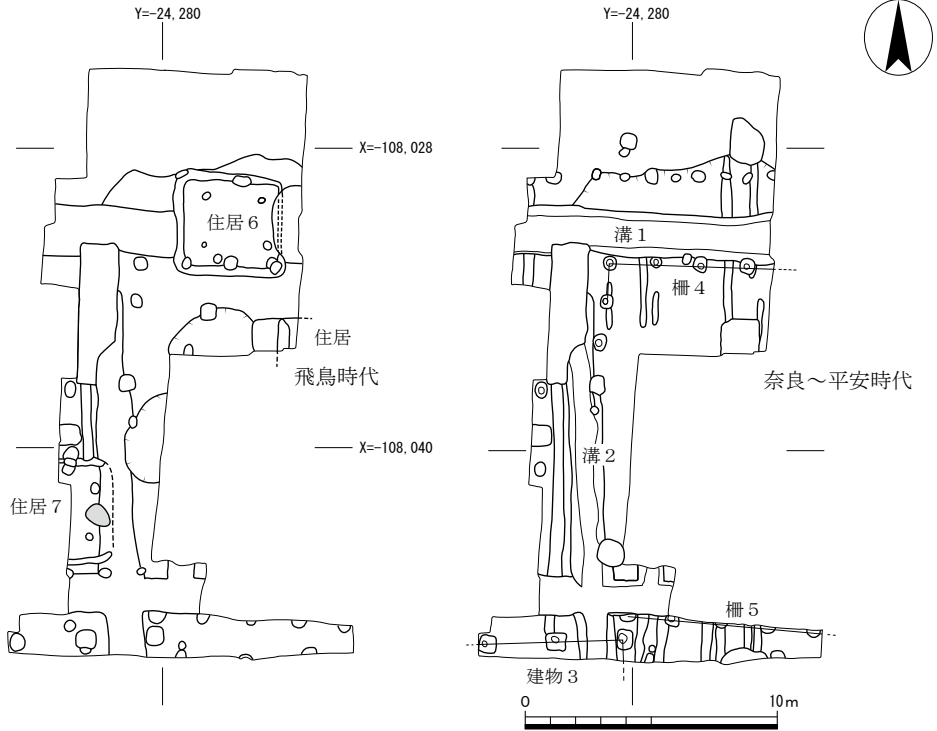


図2 遺構実測図 (1:300)

**小結** 検出した遺構は3時期に分けられる。まず飛鳥時代、北野廃寺が創建され始めた頃の遺構で、これには竪穴住居群があてられる。瓦片が住居内から出土していることから、北野廃寺創建時、当地には竪穴住居からなる集落が営まれており、寺院造営の進展に従ってその一部は寺域の中に取り込まれて行くと考えられる。

次が奈良時代から平安時代、すなわち北野廃寺及び野寺（常住寺）として再編されて行く時期の遺構である。これには溝1・2、建物3がある。この中で溝1はその方向や規模、あるいは周辺での広域立会調査などの成果からみて、北野廃寺の北限の溝である可能性が高い。今回の調査でも、溝より南側で奈良時代と考えられる軒瓦や丸・平瓦、鴟尾片などが出土しており、奈良時代にはこの部分が寺域の一部であったことを裏付けている。この他包含層中からは「野」と墨書した平安時代の土師器が出土しており、平安時代には野寺（常住寺）の寺域内であったことは確実であろう。

最後は野寺廃絶後の遺構で、柱筋の方位などの状況から柵列がこの時期にあたるものと考えられる。

(吉崎 伸・鈴木久男)

『北野廃寺発掘調査概報』昭和61年度 1987年報告

## 30 北野廃寺2

**経過** 調査地は北野白梅町交差点の南西部に位置しており、北野廃寺の推定範囲に含まれる。当地と道路を挟んだ北側で昭和54年度に実施した発掘調査では、古墳時代から室町時代に至る多くの遺構を検出しており、今回の調査でも成果が期待された。調査は、試掘調査で遺構が残存していることを確認した後に実施した。調査区は南北20

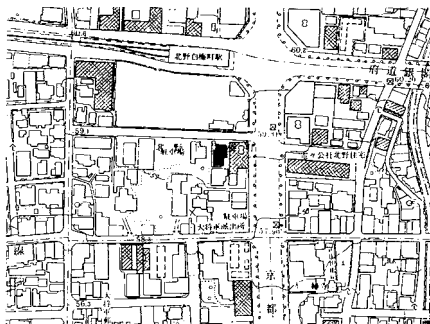


図1 調査位置図(1:5000)

m、東西7mに設定し、平安時代の瓦溜や石組列を検出した。また遺構が調査区外の東へ延びるため拡張作業を実施し、室町時代の土壇などを検出した。最終的には谷状に落ち込む自然地形の調査を実施し今回の調査を終了した。

**遺構・遺物** 谷状の自然地形は流路とみられ、最大幅約8m、深さ1.2mで調査区の北西隅から南東方向に延びる。流路内の堆積土は上部0.5mが黒褐色砂泥層で、この層は平安時代の整地土と考えられる。それより下層はすべて砂礫層であり、飛鳥時代の瓦、土師器、須恵器などが出土する。瓦溜(焼土層)は調査区北半部で検出した。瓦を多量に含む焼土層の厚さは5~10cmである。出土した瓦のほとんどは二次的に火熱を受けた小破片で、この焼土層は寺院の火災後に整地されたものとみられる。瓦以外の出土遺物には平安時代の土師器、須恵器が若干量ある。調査区の東側では南北方向の土壇(高さ5~10cm)を検出した。土壇が認められるのは南部7mの間で、標高の高い北部では削平されている。土壇の東西幅は東壁下までの3.6mを確認できる。西側土壇の下には径が3~10cmの川原石を50cm幅で敷き詰める。土壇は簡単な版築によるもので、版築土から9世紀の土師器片が出土している。他には土壇部を掘り込んだ室町時代の土壇や南北溝がある。

**小結** 今回検出した土壇は版築土内の出土遺物から考えて平安時代の野寺に関係する施設であると考えられる。土壇の性格については回廊・基壇建物・道路などが考えられるが、土壇上面が削平されているために現時点ではいずれとも判断できなかった。土壇は更に南と東に延びており、今後の調査に期待したい。流路遺構は昭和54年の調査で検出した流路遺構の延長である。今回の調査では、平安時代に自然地形である窪地を整地し、その上で土壇を構築したことが判明した。

(本 弥八郎・木下保明)

『北野廃寺発掘調査概報』昭和61年度 1987年報告

## 31 室町殿跡

**経過** 調査地点は、推定室町殿（花の御所）内の北東寄りに位置する。民家建て替えに伴い試掘調査が行われ、庭園遺構の一部と考えられる石組遺構が検出された。このため発掘調査に切り替え、調査を実施する運びとなった。

調査区は、敷地面積が狭小かつ遺構面が深いことから、敷地の北部に1区、南部に2区の2箇所を設置した。

調査の結果、石組遺構・礫敷遺構などを検出した。なお、調査終了後隣接地との擁壁工事に際し立会調査を行った結果、敷地北半の東西端から隣接地にかけて庭石を検出した。

**遺構** 調査区内では、庭園等造成時の積土層（中央部で厚さ約80cm）により北に高い陸部と、南に下がる低位部が形成される。この地形はその後も踏襲され、層序はほぼ全体に南へ向け緩傾斜を呈する。積土層の上面は、現地表下0.9～1.5mにあり、陸部に相当する1区北半ではこの積土層の上面で整地層や焼け面、石組遺構などを検出した。石組遺構は長径1.7m、短径1.3mの掘形底部に5～25cm大の根石を置き、根石上に長径40cm・75cm大の自然石を2個据える。石組遺構の南には10～38cm大の偏平な礫をまばらに敷く。一方、低位部に相当する2区では礫敷遺構を検出した。5～24cm大の礫を密に敷き詰める。

なお、立会調査では庭石を3個検出した。東端のものは緑泥片岩とチャートで、長軸2.04m、短軸1.40m、西端のものは緑泥片岩で、長軸2.35mある。土層観察から、この庭石は前述した積土層に下面を据える。上半は焼土層に覆われ、一部焼けた箇所がある。

**遺物** 遺物は整理箱で13箱出土した。内容は、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、陶磁器、輸入陶磁器、土製品、石製品、瓦などがある。土器類は細片が多い。

**小結** 室町殿については、文献、指図、屏風図絵などによって、建物配置や庭園の規模などおおよその姿をうかがい知ることができるが、四至を始めとして具体的に把握できる資料は極めて少ない。調査区は小面積ながらも庭園の一部と考えられる遺構やその変遷の一端を明らかにできたことは、今回の調査における成果といえよう。（辻 裕司）

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 1987年報告

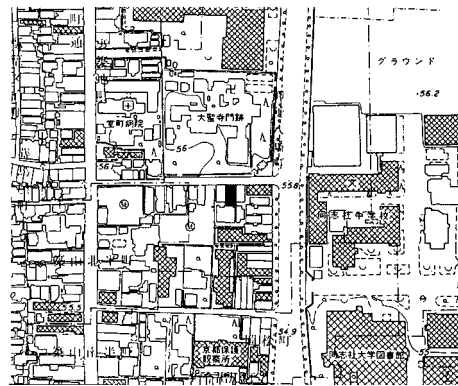


図1 調査位置図（1：5000）

## 32 慈照寺（銀閣寺）境内（図版 43）

**経過** 今回の調査は庫裏建て替えに伴う発掘調査である。当初試掘調査を実施したところ、旧庫裏の痕跡が重複して遺存していることが判明したために本調査に移行した。調査区は計画されている新庫裏とほぼ重なるように設定した。調査は庫裏解体後整地された地表面から開始し、順次掘り下げを行った。新しい順にみると、第1遺構面から第5遺構面まで確認でき、最下層では縄文土器の出土する土石流の跡を認めた。



図1 調査位置図（1：5000）

**遺構** 第1遺構面は天保八年（1837）の棟札が付く調査前に解体された庫裏跡である。礎石は1個だけ残されていたが、他はすべて抜き取られており、礎石据付穴を検出した。北半と南半では整地層に違いが認められ、後に北へ増築されたことを示している。第2遺構面は江戸時代中期から後期に属し、建物・井戸・溝・土壇・石敷遺構などがある。建物は天保八年の庫裏の前身と思われる、一部柱穴が重複している。西側中央部では瓦敷を検出したが、周辺に円形に焼けた跡が4箇所認められ、竈の痕跡と推定した。第3遺構面と第4遺構面は江戸時代前期に相当すると思われる、池状遺構・石組井戸・石組溝・土壇などを検出した。第4遺構面では整地が数度行われ、複雑な様相を呈していた。特に南部では顕著である。池状遺構に石組みはみられないが、肩部に黄色の粘土を張りつけ、底部に腐植土が堆積していた。また南西部では底部と肩部に粘土を張った長方形の土壇を3基重複して検出したが、貯蔵用の穴であろう。南部では整地層をはがすと、大土壇が多数認められ、下層に大きな石が多量に埋まっていることが判明した。その石には割った痕跡が認められ、大文字山からの土石流の花崗岩を取り除くために掘られたと推定した。大土壇以北は安定した自然堆積である。第5遺構面では室町時代から桃山時代にかけての遺構を検出した。桃山時代の主要な遺構には掘立柱建物・溝・土壇などがある。掘立柱建物は小規模な建物である。一部には柱根の残っている柱穴もみられた。溝は建物に並行して東西と南北に通る。南北溝は4mの長さの間がとぎれ、通路を想定させる。室町時代に遡る遺構は溝と土壇がある。溝は桃山時代以降と異なって曲線的で、土石流の外側に掘られている。土石流の埋土からは縄文時代の土器が出土した。

**遺物** 今調査で出土した遺物は整理箱で101箱出土しているが、江戸時代の土器と瓦が大  
半を占めている。その中でも中期以降の陶磁器が多く出土した。通称クラワンカ椀と呼ばれる  
染付・印判手の染付・京椀などがある。しかし通称広東椀と呼ばれる染付はみられない。江戸  
時代前期の土器には土師器皿・唐津皿・美濃天目椀・伊万里椀・塩壺・播鉢・甕・中国製染  
付椀・皿などがある。中国製染付には釉上彩の皿で、いわゆる芙蓉手の椀がみられる。桃山時  
代と室町時代の土器は少量で土師器皿・輸入陶磁器・国産陶磁器・瓦などがある。縄文土器  
は小破片ばかりであるが、中期に属すると思われる。

**小結** 調査の結果足利将軍義政の造営した東山殿に関する遺構は溝一条にとどまった。こ  
の溝は土石流に沿って掘られているため、当時は土石流の巨石が地表面に顔を出しており、自  
然石を庭園の一部として利用したことが考えられる。またこれらの石は江戸時代に取り除かれ  
たことが判明した。桃山時代の掘立柱建物は庫裏あるいは雑舎と推定でき、建て替えや拡張が  
繰り返されたことが明らかになった。江戸時代の東西溝は北側ほど新しく、またそれに伴って  
建物が大きくなり北へ徐々に拡大されたことを物語っている。元文三年(1738)の修理願書の  
付図は第2遺構面の建物にほぼ一致し、この庫裏の年代を位置付ける資料となった。

(前田義明・梅川光隆・吉崎 伸)

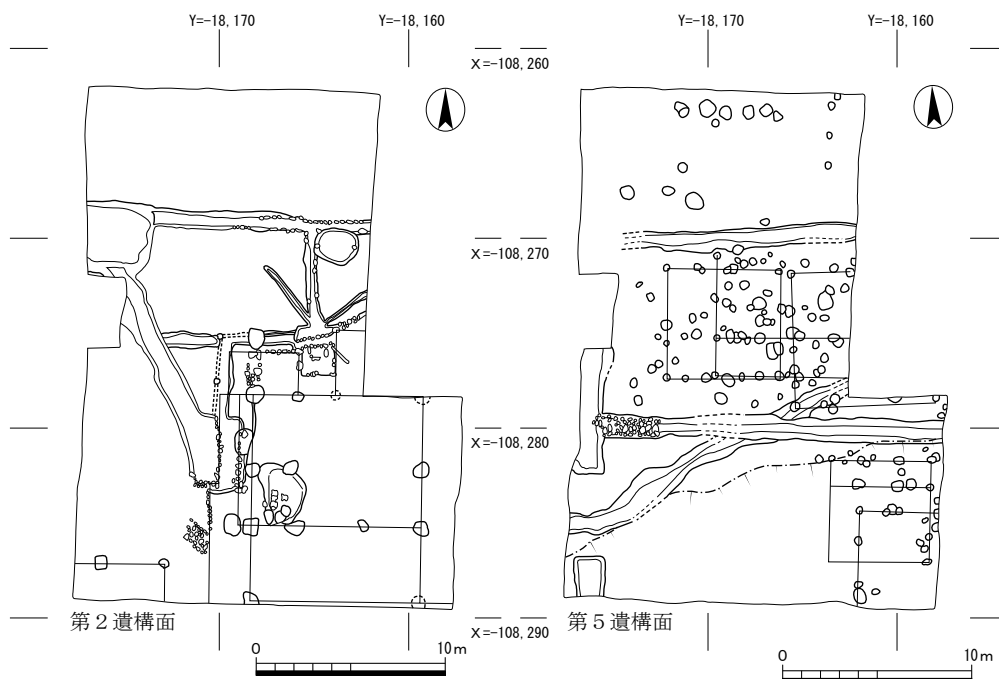


図2 遺構実測図(1:400)

### 33 大枝山古墳群 (図版 44)

**経過** 桂坂ニュータウンの造成地内にある大枝山古墳群では、中心部に位置する古墳 13 基が保存され、古墳公園として整備・活用が図られることになっている。

この調査は公園整備の一環で、保存される古墳 1 基 (21 号墳) を対象に実施した。石室内部を公開できる状態にするための事前調査である。このため調査は、石室内と埋没している開口部を当初の床面まで掘り下げることとし、断ち割り等の作業は必要な部分にとどめることにした。発掘調査は 1987 年 2 月末に開始。

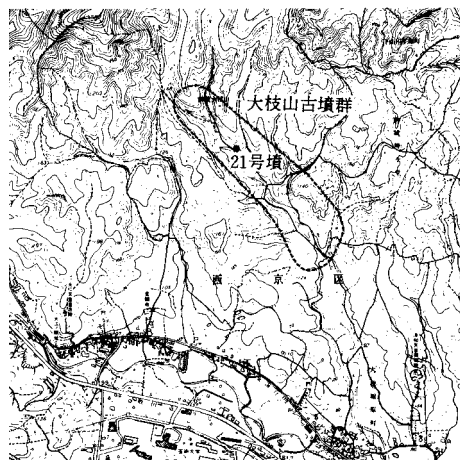


図1 調査位置図 (1 : 5000)

掘り下げを進めた結果、羨道は良好に遺存しながらも、玄室は一部攪乱を受けていること、盗掘のため遺物は小片のものが多くことなどが判明した。3月後半に全景写真を撮影。石室実測は従前図を追加作成した。そして、作図に必要な箇所は部分的な断ち割りを行った。4月初めに調査を終了。更に、崩れかかった東壁の一部を積み直し、公開のための修復を行った。

**遺構** 墳丘 丘陵斜面に立地する古墳である。竹藪となっていた関係で墳丘はかなり平坦になっている。現状で直径約 15 m、高さ 2.5 m を測るが、本来は 22 号墳同様、直径 20 m 前後の規模を有していたと推定される。調査では開口部の約 1.2 m 下で炭を含む層を検出し、須恵器や鉄器が出土した。しかし、従前の古墳で検出してきた、羨道の端から連続して墳丘前面に施す葺石は検出できなかった。

**内部主体** 両袖の横穴式石室で南南東 (N-24°-W) に開口する。石室全長は 10.1 m、玄室は長さ 3.55 m、幅は奥で 1.7 m、羨門付近で 1.5 m、高さ 2.6 m。羨道は長さ 6.55 m、幅 1.15 m、高さ 1.8 m を測る。床面は玄室のみ敷石を施すが、奥壁や東西の袖石付近は攪乱されて残存しない。閉塞は奥壁から 6~7 m 付近で人頭大の石が集中する箇所がみられたが、閉塞とするには、従来の古墳より奥まった位置にあること、積み方が低いことなど問題が残る。

**遺物** 石室内・開口部から、須恵器 10 点 (杯 1・蓋 4・無蓋高杯 2・長頸壺 2・壺蓋 1)、土師器 1 点 (高杯)、鉄器 4 点 (鍬 3・刀子 1)、銀環 2 点 が出土した。

石室内では玄室敷石面上で長頸壺蓋が完形で出土している。しかし、蓋・高杯・長頸壺な

どは羨道・開口部から小片となって出土しており、その接合状態から、玄室内の遺物は多くが室外に運び出されたものと推定される。鉄器は玄室で刀子が、羨道で鉄鏃1本が、開口部で鉄鏃2本が出土している。銀環は玄室と羨道で1個ずつ出土している。なお、開口部には炭を含む層があり、この中には10世紀代の土師器が含まれていた。

**小結** 大枝山古墳群は1980・1983年に発掘調査を行い、4・5・14・22・23・25・26号墳で各々墳丘・主体部・出土遺物の内容が明らかとなっている。今回調査した21号墳は保存・公開を前提とした調査であったため墳丘部分は未調査であるものの、主体部・出土遺物では従前と同じような成果を得たといえる。ただしその中で異なる点があるとすれば、墳丘の前面に施される葺石が検出できなかったこと、床面の敷石は玄室のみに施されていたこと、閉塞の位置や状態が異なっていたこと、出土遺物については、長頸壺の蓋や複数（2個）の銀環が初めて出土したこと、などであろう。

ところで、大枝山古墳群の横穴式石室については現在までのところ、玄室長が3.6mで両袖のもの（A類）と、3.1mで片袖のもの（B類）、同じく3.1mで両袖のもの（B'類）、2.4mで片袖のもの（C類）、に類別できることが判明している。今回調査の21号墳はこの内のA類に属するのであるが、同じA類の石室を持つ古墳が両隣（20・22号墳）に位置する点に注意される。これは4号墳（A類）と5号墳（C類）、22号墳（A類）と23号墳（B類）の組合せ例のように、近接する古墳相互では常に一方に規模の大きいA類石室の古墳が存在し、この方が先に造られたことが判明しているからである。このようにみると、20・21・22号墳の3基は、玄室長さは同じであるものの、玄室幅が21号墳でやや狭い点が重要である。更に21号墳より出土した須恵器は、明らかに22号墳より出土したものに比べ新しい特徴を有している。以上の点から、同じA類石室が並ぶ3基では今回調査の21号墳が最も遅れて造られたと考えておきたい。

（丸川義広）



図2 玄室内遺物出土状態（南東から）

### 34 天鼓の森古墳

**経過** 京都市立桂中学校の敷地には天鼓の森古墳が位置するため、体育館増築工事に伴い発掘調査を実施した。1986年5月に立会調査、6月に試掘調査を実施し、古墳時代の遺物包含層を検出したため、体育館予定地についても発掘調査を実施する運びとなった。調査は384㎡を対象に7月終わりから9月中旬にかけて行い、平安時代後期・鎌倉時代の道路状遺構、古墳時代の遺物包含層、更に下層の調査などを行った。しかし推定されていた天鼓の森古墳の形跡は認められなかった。

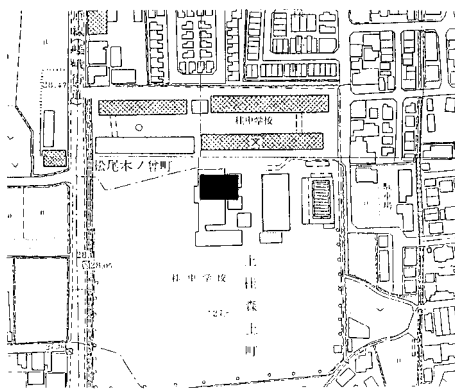


図1 調査位置図 (1 : 5000)

**遺構** 基本層序は上から現代盛土層 (0.25 m)、旧耕作関係の層 (0.45 m) があり、以下、灰褐色泥砂層 (0.1 m)、灰色砂泥層 (0.2 m)、茶褐色砂泥層 (0.3 ~ 0.5 m) で、地山の灰色砂礫層に達する。現地表から灰色砂礫層上面まで1.3 ~ 1.5 mある。灰褐色泥砂層には平安時代後期・鎌倉時代、灰色砂泥層には古墳時代の遺物を含む。また、茶褐色砂泥層からは1片だけ縄文土器が出土している。灰褐色泥砂層上面を第1面、茶褐色砂泥層上面を第2面、灰色砂礫層上面を第3面とした。

第1面 北半区で道路状の遺構を検出した。礫で固められた路面状の部分と、側溝に比定される東西溝2条がある。溝は幅0.6 m、深さ0.4 mあり、埋土は灰色泥土層、両溝の心々間距離は4.5 mを測る。路面状の部分は10cmほど土を入れ、溝間では拳大の礫を敷く。溝の南にも小礫の敷かれた部分が広がる。



図2 第1面全景 (東から)

第2面では土壙を2基検出したが、遺物は出土しなかった。

第3面は東半分のみで調査を



行った。斜め方向の溝1条と不定形な落込みを200個程検出したが、出土遺物はない。

**遺物** 平安時代後期・鎌倉時代のもは、灰褐色泥砂層や東西溝から出土している。内訳は、土師器（皿・甕）、須恵器（甕）、瓦器（椀・盤・羽釜）、灰釉陶器（椀）、白磁、瓦、滑石製品、銭貨などであるが、まとまったものはない。

古墳時代のもは灰色砂泥層より出土している。土師器（甕・甑）、須恵器（杯・蓋・甕・甗）と埴輪がある。これを図4・5に掲げた。

埴輪はすべて円筒埴輪である。赤っぽい軟質のもの（いわゆる土師質）と、青っぽい硬質のもの（いわゆる須恵質）がある。しかし、表面は軟質でも芯は硬質のものが多く、焼成方法に差がなかったことを示す。調整の状態を元に、A～F類に分類した。A類は軟質で、粗いハケを向かって右上がりに施す。D類はA類の軟質化したものである。B・C・E・F類は細かいハケを向かって右上がりに施す。ハケの施す順序は、A・D類が反時計巡り、他が時計巡りである。全体の数量はA・D類が8割以上で圧倒的に多い。A・D類はその作り方から左利き人物の製作によるものとされるので、これが多い点は注目してよい。内面にススを受けたものが多くみられる。特に、A・D・F類に認められる。A・D類にはススのないものもみられるが、あるものはA類で8割、D類で6割を占める。タガは総じて低台形で、断面が三角形に近いものも認められる。なお、同じ層からは土師器・須恵器が出土している。図化し得た須恵器杯（23～25）は6世紀後半に属する。この他、埴輪の持つ年代みに近いものとして内面の叩き目を磨り消した甕の破片（28～30）が含まれるが、数は少ない。

**小結** 天鼓の森古墳の検出を目的に調査を進めたが、古墳時代の遺物包含層を検出しただけで天鼓の森古墳の形跡は認められなかった。しかし包含層の存在は、周辺に古墳時代の集落遺跡が所在する可能性を示すものとして重要である。そして、出土した埴輪にススの痕跡があるのは、これらが集落内で竈などに利用されていたためと理解すべきであろう。

天鼓の森古墳、清水塚古墳の位置を右図に示した。これによると、調査地は両者の中間付近にあたる。出土した埴輪が両古墳のものであったかは、古墳自体の年代も確かでなく、確証がない。今後の調査で明らかにしたい。

最後に、天鼓の森古墳や周辺の古墳に関しては柵橋信文氏より、また円筒埴輪に関しては川西宏幸氏・木村泰彦氏に教示を受けた。記して感謝いたします。

（丸川義広）

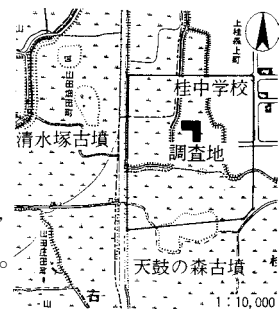


図3 昭和始め頃の調査地

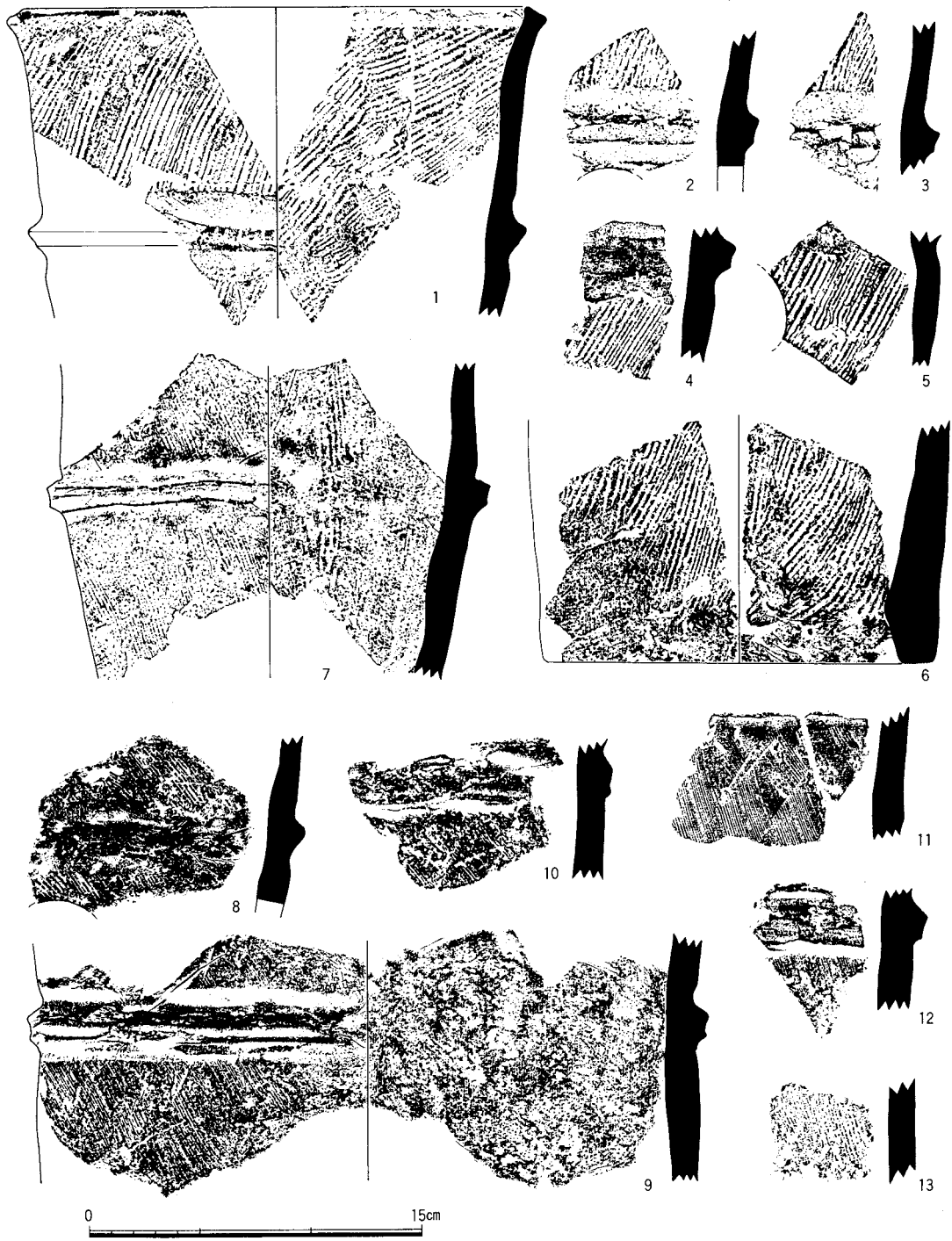


図4 拓影・実測図1 埴輪 (A類1~6, B類7, C類8, E類9~13) (1:3)

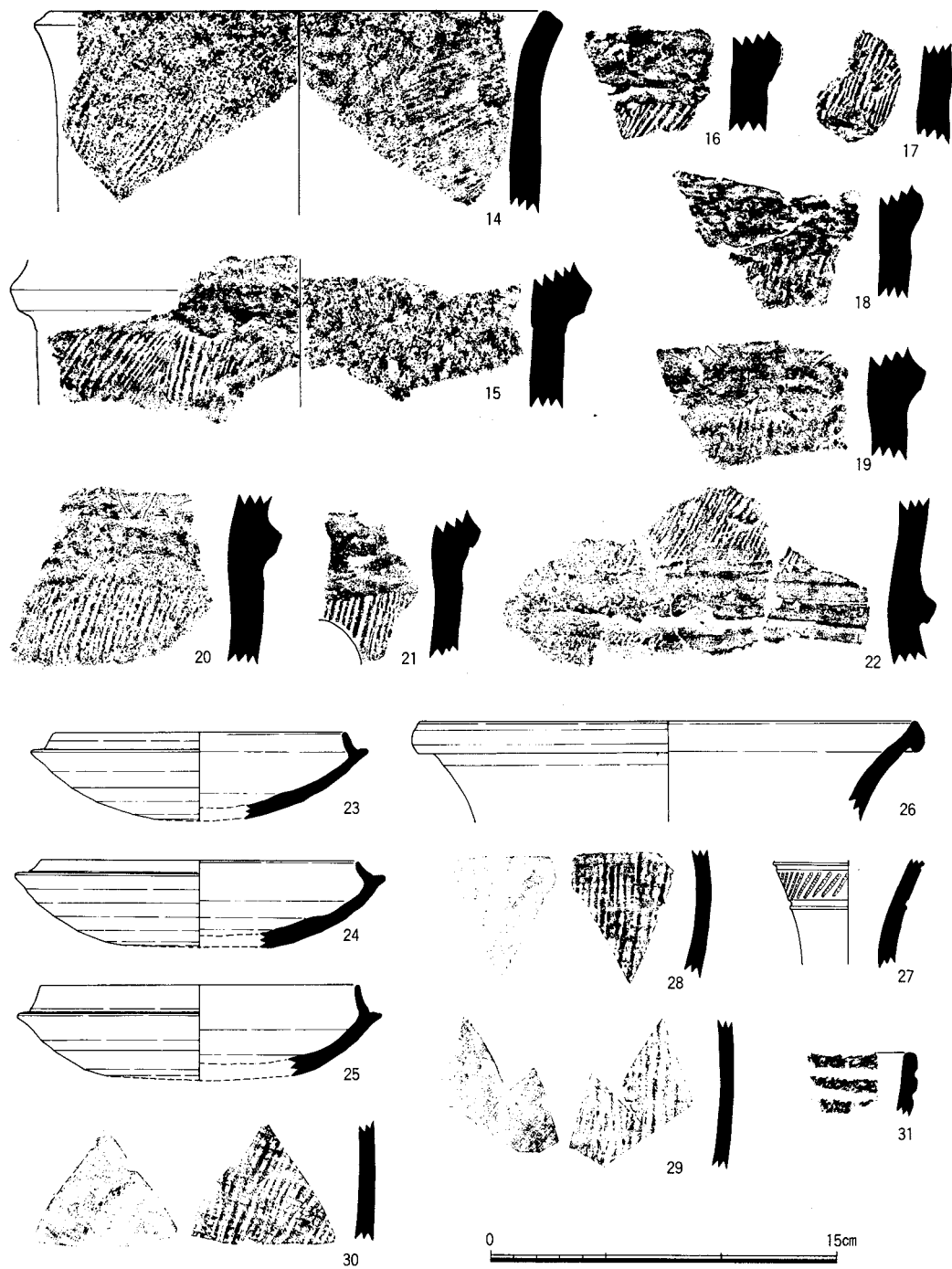


図5 拓影・実測図2 埴輪 (D類 14～22), 須恵器 (23～30), 縄文土器 (31) (1 : 3)

### 35 南春日町遺跡 (図版 45)

**経過** 調査は土地基盤整備事業に伴う事前の発掘調査である。調査地は西京区大原野南春日町の南端にあたり、現状の地目は田圃である。地形からみると西山から南東にかけて延びる段丘の中位に位置する。当地を含む地域及び周辺一帯では1982年に当研究所が遺跡分布調査を実施し、遺物散布地を確認している。1984年から85年にかけて同地域一帯で試掘調査を実施し、その結果当地点で平安時代の遺構を検出している。

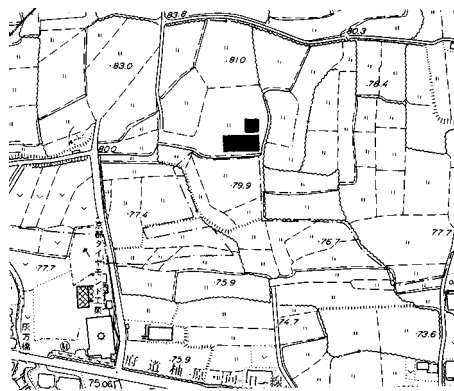


図1 調査位置図 (1:5000)

整備事業の計画で、当地が削平の対象となったため、調査を実施することになった。調査にあたっては、遺構を検出した試掘地点を中心に、調査区を2箇所設定した。規模は1区が東西30m、南北10m、2区が東西10m、南北10mである。

調査の結果、平安時代中期の掘立柱建物、土壙、焼土壙、柱穴群、溝などを検出した。

**遺構** 遺構は地山面である黄褐色砂泥層面で検出した。地山までの堆積土層とその厚さは、上から現耕作土・床土層が約30cm、旧耕作土、床土及び盛土層は約28cm、黒灰色砂泥層(鉄分を多量に混入する遺物包含層)が約20cmであった。検出した遺構は402基であり、平安時代のものが大半を占める。

1区で多数の柱穴を検出したが、建物として復原するには至っていない。

焼土壙は2基ある。1は長方形で、規模は長辺1m、短辺0.7m、深さ0.4mである。側壁は堅固に焼き締まっており、周縁部は焼土化していた。また、土壙内の埋土上層には焼土が詰まっていた。下層は炭混じりの砂泥層で小石を多く混入していた。2は隅丸の長方形で、長辺0.8m、短辺0.6m、深さ0.25mである。側壁・周縁部は1に類似している。

**遺物** 出土した遺物は1・2区合わせて、遺物整理箱で16箱出土した。遺物内容を見ると、土器類には土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、無釉陶器、輸入陶磁器、瓦器がある。土器類以外には瓦、土錘、フイゴ、鉄滓などがある。

遺物は大半が遺物包含層である黒灰色砂泥層から出土したが、包含層から出土した遺物の時期は平安時代から中世のものである。遺構及び包含層から出土した平安時代の遺物を見る



図2 遺構実測図 (1 : 200)

と緑釉陶器、無釉陶器の出土量が多い。いずれも平安時代中期に属する。緑釉陶器の器種は碗・皿がほとんどである。産地については小塩産のものが多く認められるが、碗の中には高台を貼りつけた近江産と思われるものが数点みられる。無釉陶器は緑釉を施すまえの素地と考えられ、器形も緑釉陶器と同様で、小塩産のものがほとんどである。輸入陶磁器には白磁2点があり、1点は壺の破片である。また金属生産遺物として考えられるフイゴ、鉄滓の出土は焼土壙との関連で注目される。

**小結** 調査の結果、平安時代の遺構・遺物を多数検出することができた。以下全体について概観してみる。

まず遺構検出状況を見ると、1区東半部に柱穴、土壙等の密度が高く、西半部と2区は希薄である。1区東半部では柱穴の重複状況からみて建物を幾度も建て替えたと考えられ、東半部が中心的な居住地であろう。居住地の性格については、当地の北西約900mの地点に鎮座する大原野神社との関連が留意される。大原野神社は嘉祥三年(850)藤原氏の氏神として公祭化され、以後天皇の行幸、藤原氏系貴族の参詣が幾度も行われたことが平安時代の古文献にみられる。当地周辺は明治六年作成の大原野地籍図によると、小字名は下西代となっているが、地元では下社家と呼称・伝承されている。社家とは神職集団及びその居住地の総称である。このことから、調査で検出した平安時代の遺構群は、当該期の大原野神社を管理・運営していた社家跡と推定することができる。

また、50mほど北に大原野神社に到達する古道が認められる。当古道が平安時代から近世にまで踏襲されているとすれば、大原野神社への行幸・参詣道としての可能性が高い。更に古道沿いに社家跡が位置するという関係が興味深い。

出土遺物については遺構・遺物包含層から出土した緑釉陶器が挙げられる。緑釉陶器は皿・碗で小塩産のものと近江産のものがあり、大原野での土器供給関係の動向を知る上で注目される。(加納敬二)

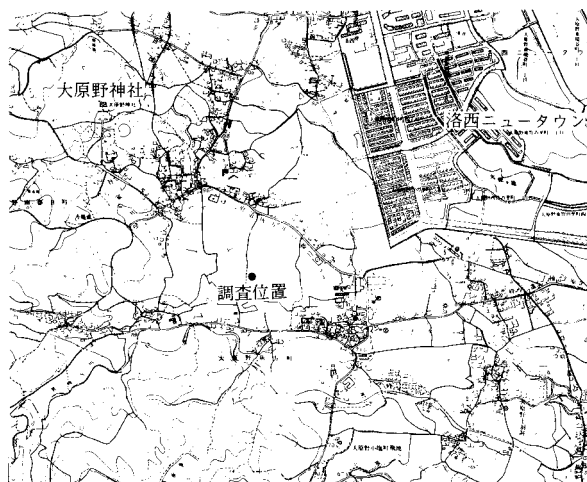


図3 調査地周辺地図(1:30000)

## 36 醍醐古墳群

**経過** 醍醐古墳群は総数 20 基からなる群集墳である。1号墳は直径 25 mを測る円墳で、他の大半は1辺 10 m前後の小方墳である。

1号墳は早くから墳丘が耳形に削られていたため、地元では「耳塚」と呼び親しまれ、信仰の対象になっていた。しかし、周辺の開発に伴い、1号墳もいずれ造成の手が加わることが心配され、昭和 61 年度の国庫補助事業として発掘調査を実施することになった。

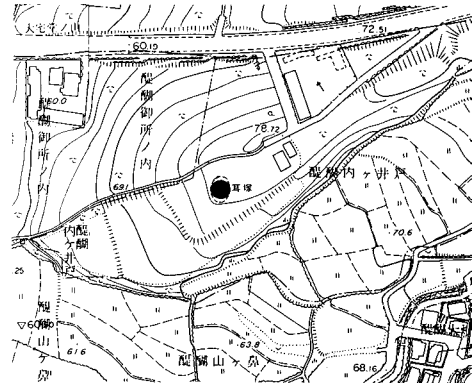


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構** 墳丘 直径約 25 mの円墳で、墳丘高は約 3 mを測る。遺存する墳丘には葺石などの外部施設はみられなかった。

**内部主体** 調査の結果、本墳では同一墳丘内に石室が2基構築されていることが判明した。第1石室は南南西方向に開口する両袖式の横穴式石室である。玄室部は墳丘のほぼ中央に位置している。墳丘の削り取られた部分に位置するため、遺存状態は極めて悪い。石室規模は、全長 7.5 m以上、玄室長 3.7 m、同幅 1.7 m、羨道部幅は推定 1 mである。第2石室は第1石室北西側の墳丘斜面に構築されたもので、石室形態は無袖式の横穴式石室である。石室の遺存状態は良好で、天井石も奥壁寄りに3枚残っていた。石室規模は、全長 3.5 m、幅 1 mを測る。石室内の高さは最高 1.6 mである。

**遺物** 第1石室からは須恵器多数と鉄製品が出土している。須恵器では杯・蓋・高杯・甕・甕・脚付壺・装飾付子持脚付壺・器台・特殊扁壺などがあり、鉄製品では鉄刀の鐔・円頭太刀柄頭・馬具の革金具がある。これらは後世の攪乱が著しく原位置をとどめていない。第2石室では須恵器の杯・蓋・高杯・甕などがほぼ原位置で出土している。

**小結** 第1石室と第2石室が構築された前後関係については、墳丘規模と石室規模及び墳丘内における位置的な関係などでみた場合、墳丘の中心部を占め、直系 25 m墳丘規模にふさわしい石室規模を持つ第1石室が当初に構築されたものと位置付けられよう。これは第1石室出土須恵器の年代が6世紀末葉に、また第2石室出土須恵器が7世紀前葉に位置付けられる年代みとも一致するものである。(京都市埋蔵文化財調査センター 北田栄造)

『醍醐1号墳発掘調査概報』昭和 61 年度 1987 年報告

## 37 中久世遺跡 1

**経過** 調査地は中久世遺跡にあたり、平安時代から中世にかけ久世荘が営まれた地域である。試掘調査の結果、遺構の残存状況が良好なため発掘調査に切り替えた。調査区は南北 14 m、東西 15.5 m である。

**遺構・遺物** 調査区東部は平坦地が残り、上面で弥生時代から古墳時代の溝・土壙・ピット、古墳時代後期の溝（SD7）などを検出した。また西部では弥生時代から古墳時代の溝（SD1）を検出した。

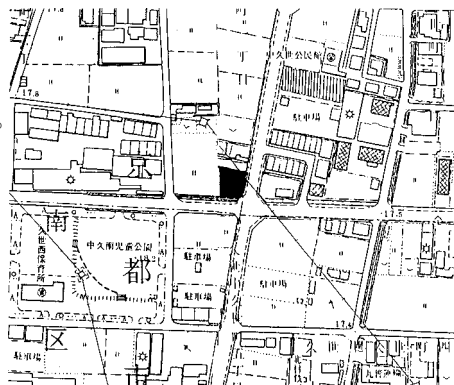


図1 調査位置図 (1:5000)

SD1は北から南西に流れる素掘りの溝である。肩はなだらかに下がり、底は平坦であるが、一部窪み、底で木組を検出した。溝幅は不明、深さは最深で1mである。溝内の埋土は大きく上下2層に分かれ、いずれも泥土と砂の互層である。下層からは弥生土器壺・甕・鉢・高杯・器台・ミニチュア土器が出土した。時期は畿内第Ⅲ～Ⅳ様式である。土器以外に石包丁・石剣・石鎌・磨製石斧・叩石・砥石などの石器も出土した。

上層からは弥生土器壺・甕・鉢・高杯・器台・ミニチュア土器・手焙形土器、土師器壺・甕・鉢・高杯・小型丸底壺が出土した。時期は畿内第Ⅳ様式から布留式に位置付けられる。上層の下部から鋤・鍬・石斧の柄・鉢・盤などの木器が出土した。

SD7は北から南へ流れる溝で、幅3.8～5m、深さ0.3～0.6mの断面はU字形である。溝底両側には径0.3～0.8mの楕円形の土壙が並ぶ。埋土は灰色砂泥層で、弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土した。

**小結** 既往の調査では、中久世遺跡の中央部で北西から南東方向に流れる旧河川を検出し、この両側に集落が広がることが判明している。調査地は遺跡の北西部にあたる。SD1は弥生時代中期から古墳時代初頭の溝で、地形の傾斜に逆らっているため、人工的な溝と推定できる。溝の東肩部では、投棄された多量の土器・木器を検出し、溝の東側に居住地域の存在をうかがわせる。溝の位置や規模などから考え、この溝は集落の周囲を巡る水路などの用途を持ったものと考えられる。出土した多量の土器・石器・木器は、この時期の生活内容を考える上での基準資料となろう。(上村和直)

『中久世遺跡発掘調査概報』昭和61年度 1987年報告



## 38 中久世遺跡2

**経過** 調査はビル建設に伴うものである。調査地は、弥生時代から古墳時代の中久世遺跡にあたり、平安時代から中世には久世荘が営まれた地域である。調査地周辺では数次の調査を実施し、多くの遺構を検出している。調査地東側では弥生時代中期の流路・土壙・溝、南側では弥生時代の溝、長岡京期から平安時代の建物跡などを検出した。今回の調査では弥生時代から古墳時代・平安時代の遺構検出を目的とした。調査は南北16m・東西12mの調査区を設定して実施した。

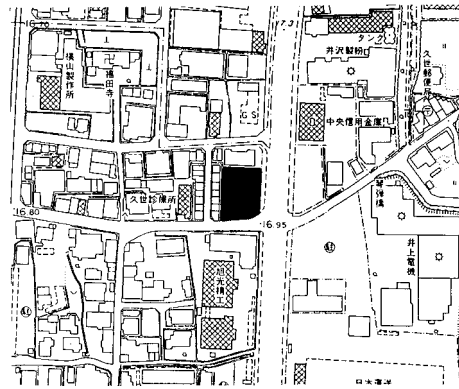


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 調査地の層位は大きく5層に分かれ、いずれも遺物包含層である。第1～4層はいずれも粘土層で、沼地状の堆積を呈している。第5層は粘土・腐植土・砂が互層堆積し、流路と考えられる。第5層底面は東から南西に緩やかに傾斜し、凹凸がある。

遺物は整理箱で6箱分出土した。土器・石器・木製品などがあるが、大半は土器である。弥生土器は第3～5層から出土し、特に第4層に多く出土した。時期は弥生時代中期から後期で、器形には壺・甕・高杯などがある。

古墳時代から奈良・平安時代の土器には土師器、須恵器、瓦器、陶器などがあるが、量は少なく、小破片が多い。

石器には石包丁がある。第4層から出土し、弥生時代中期のものと考えられる。

**小結** 今回は、中久世遺跡の集落跡に関連する遺構を検出することに主眼をおき調査を行ったが、弥生時代の流路、及びそれ以降の沼地状の堆積を確認するにとどまった。

これまでの調査では、遺跡の中心部で自然の地形に沿って、北西から南東方向に流れる旧河川を多く検出している。これは各時代にわたり何度も河川が流れを変え重複したためと考えられる。今回検出した流路も、この一部と推定できよう。(上村和直)

### 39 伏見城々下町 (図版 46)

**経過** 伏見区今町 659 他の約 1700m<sup>2</sup>の敷地を対象に京都市伏見中央図書館新築工事に伴う発掘調査を、昭和 61 年 10 月 8 日～11 月 25 日にかけて実施した。調査は昭和 61 年 10 月 1 日～7 日にかけて行われた試掘調査の結果、桃山時代の遺構・遺物が検出されたためである。

本調査の結果、平安時代前期、桃山時代、江戸時代の溝・土壇・井戸・柱穴などの遺構を検出した。出土遺物は桃山時代、江戸時代の陶器、磁器、土師器、瓦、木製品（漆器・木簡）、金属製品などである。調査面積は約 440m<sup>2</sup>である。

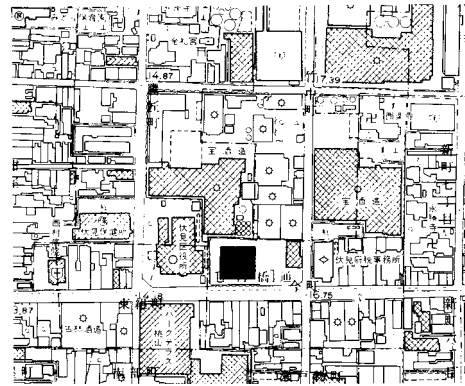


図1 調査位置図 (1 : 5000)

**遺構** 検出した遺構総数は 415 基を数える。大多数が江戸時代中期・後期に属する。

平安時代前期の遺構は、調査区西方に検出した南北溝 (SD 77)、南辺に検出した土壇 (SK 143 E) がある。SD 77 は幅約 50cm、深さ 20cm を測り、ほぼ真北方向に向く。SK 143 E は南北 1.5 m 以上、東西 50cm、深さ 40cm の不定形土壇で用途は不明である。

桃山時代、江戸時代前期の遺構は井戸 (SE 50・59・70)、土壇 (SK 58・143・162・221・222・307)、建物 (SB 78・220)、柵 (SA 3) などを検出した。SE 50・59・70 はいずれも素掘り井戸である。このうち SE 59 は平面が円形を呈し、径 1.1 m、検出面からの深さ 5.25 m (底部の標高 9.05 m) を測る。SK 58・143・162・221・222 はいずれも小規模で浅い土壇で

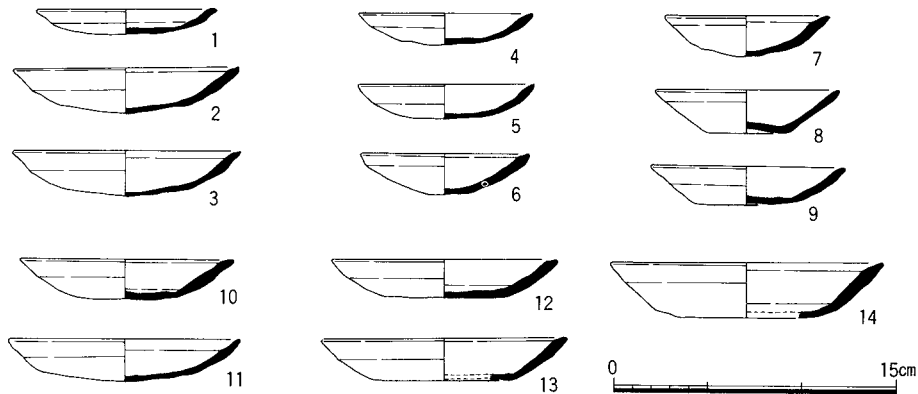


図2 SK 143・出土土器実測図 (1 : 4)

あるが、S K 307は東西4 m、南北5 m、深さ2 mを測る。東側に昇降のためのスロープを持つ。調査時は腐植土の厚い堆積が認められ、漆器椀などの木製品を多量に包含していた。

江戸時代中期・後期の遺構は、比較的規模を大にする土壌（S K 19・43）がある。S K 19は南北7 m、東西5 m以上、深さ80 cm。S K 43は南北5 m、東西4.5 m、深さ80 cmを測る。

**遺物** 出土遺物は、平安時代前期の土師器、桃山時代、江戸時代前期から後期に属する土師器、陶器、磁器、金属製品、木・竹製品、漆製品、石製品などが出土した。

平安時代前期の遺物はS D 77 から出土した土師器甕の小片にとどまる。

桃山時代から江戸時代前期の遺物はS K 307を中心に多量に出土した。その内訳は土師器、陶器（唐津・瀬戸・美濃系）、輸入磁器（明染付）、国産磁器（初期伊万里）、金属製品（刀子・金具）、木・竹製品（建築部材・木簡類・箸・籠・下駄・人形）、漆製品（椀・皿ほか）、石製品（硯）などがある。土師器皿（図2-4～14）は口径から3種類の規格の存在が確認できる。いずれも内面底部を縦方向にナデ、体部から口縁にかけてナデ上げる。器壁は厚く、内面体・底部境界に弱い凹線が巡るが不明瞭な個体も認められる。また、S K 143出土土師器皿（図2-1～3）はS K 307出土に比べ、器壁がやや薄く、より前出的な要素が濃い。S K 307出土の漆器椀・皿は、51個体が確認できる。このうち30個体が口径・器高の計測可能なもので、3形態に分類することができる（図3）。I類は口径12～13 cm、器高3～4 cmのもの（図4-5～7）で皿と考えられる。II類は口径13～14 cm、器高5.5～6.5 cmの椀（図

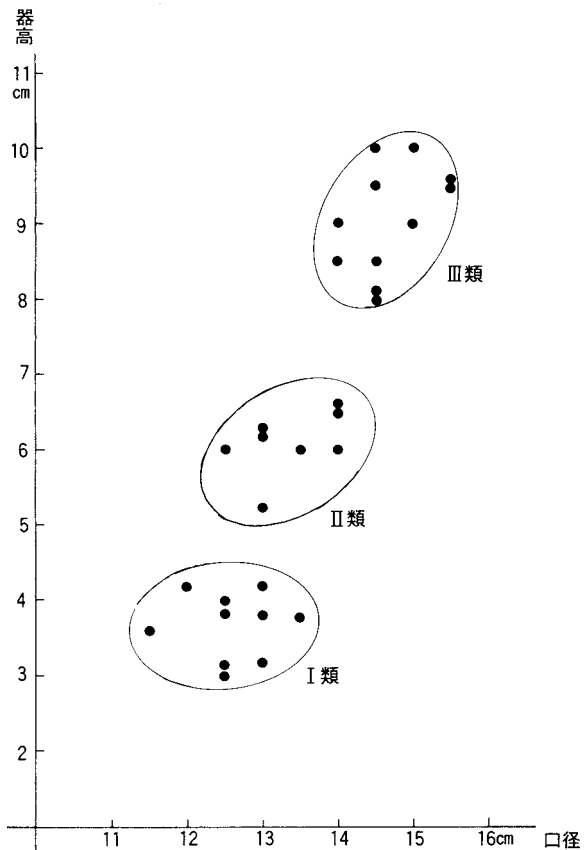


図3 S K 307 出土椀・皿法量分布図

4-3・4)。Ⅲ類は口径14～15cm、器高9cmを中心として3cmに達する高い高台を持つ椀（図4-1・2）である。また、法量以外にも漆文様・塗漆の状態から、いくつかの特徴的な傾向がうかがえる。文様は原則として黒漆地に朱漆で描かれるが、朱漆の外表面部に黒漆による文様を描いた皿が1点認められた。出土51点中、内面に朱

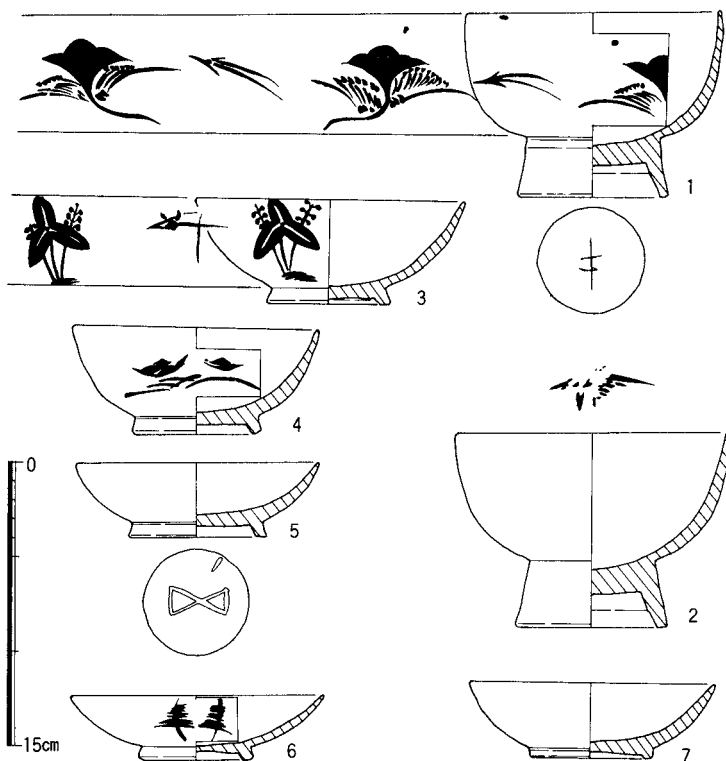


図4 SK 307 出土漆器椀・皿実測図（1：4）

漆、外面に黒漆を塗布するものは28個体あり、内外面ともに黒漆のもの20個体、内外面ともに朱漆のものは3個体を数えた。このうち体部外面に文様を描くもの21個体、見込みに描くもの12個体、合わせて33個体となり、全体の3分の2は何らかの文様を持っているといえよう。更に計測可能な30個体を類別に観察するとⅠ類では、内面朱漆、外面黒漆のもの4個体・内外ともに黒漆のもの7個体中、文様を持つもの10個体、持たないもの1個体。Ⅱ類では、内面朱漆で外面黒漆のもの7個体、内外面とも黒漆のもの1個体中、文様を持つもの6個体、持たないもの2個体となる。Ⅲ類では、内面朱漆で外面黒漆のもの7個体、内外とも朱漆のもの3個体中、文様を持つもの4個体、持たないもの6個体を数えた。このことは、口径・器高の大きいものは内外ともに黒漆で文様を持つものが多いが、逆になるほど内面朱漆で外面黒漆のもの及び内外ともに朱漆で無文様のものが増加する傾向を示している。文様の絵柄については、植物文（松・銀杏・竹・梅・<sup>おもだか</sup>沢瀉・<sup>かき</sup>花卉秋草）、動物文（鶴・亀・鳥類）、器物文（扇面・傘）、紋章文（鶴丸）などであるが、全体的に抽象化された文様が多く認められる。また、高台内面に打ち欠きのあるものが、体部の確認できる50個体中16個体を占め、約3分の1の

ぼる。記号風に刻み込むものまでである。この刻み込みが製作時のものか、投棄時のものかは不明であるが、その意図に関しては興味深いものがある。

その他、この土壌からは木簡類の出土がある。積文は「真竹おれ竹一そく□」・「下地たて竹□」・「上うす竹三本」・「衛門尉様」・「上谷□二口」などが判読できる。前者3点が付け札・後者2点が曲物底板への墨書文字である。

上記以外の主要な遺物として、SK 307 から金箔瓦当（五三桐文）、SE 271 から黄銅製

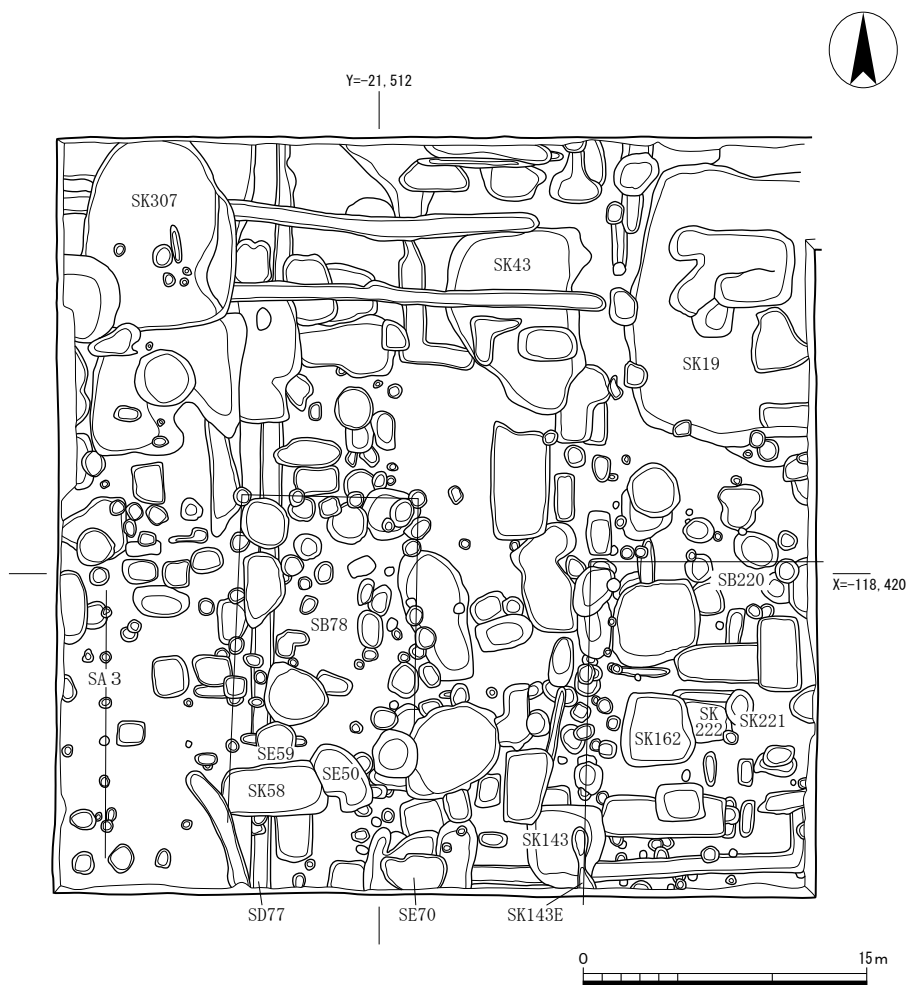


図5 遺構実測図（1：400）

簀, 京焼小椀(道八銘)などが出土している。

**小結** 検出した遺構の時期は平安時代前期, 桃山時代, 江戸時代前期から後期, 近代以降に分けられる。

平安時代前期の遺構は, 南北溝(SD 77), 土壙(SK 143 E)を検出した。当該地南側の調査でも平安時代前期の溝を検出した報告<sup>註</sup>があり, これとの関連も考慮すべきであろう。

桃山時代の遺構では, 井戸(SE 59), 土壙(SK 58・143・162・221・222)がある。これは調査地点が伏見城西端にあたる総構の堀(現・濠川)に近接しているものの, 築城と同時か直後に既に居住空間が形成されたことを示している。なお, 古絵図によれば当地区は「仙石左門」屋敷地に比定されている。

江戸時代初期に入ると遺構数の増加がみられ, 規模自体も大きくなる。建物(SB 78・220), 柵(SA 37), 井戸(SE 50・70), 土壙(SK 307)などがその主要なもので, 特にSK 307には粘土塊を積み重ね保管していた形跡や, 「竹」に関する墨書木簡類の出土が多いことなど, この土壙の性格や用途と共に居住者の職業に深く関係したことが推測できる。江戸時代初期の町屋の様相の一端を示すものとして興味深い。

一方, 江戸時代中期から後期及び近代以降にも引き続き豊富な遺構群の展開があることは, 活発な町屋としての居住区間を連続して営んだ裏付けと考えられよう。なお, この後調査地を中心とした地区は, 戦時中には軍需工場の設置・拡張によって民家の撤去が行われ, 戦後は保健所の建設, その移転後に駐車場となるなどの土地利用の変遷を経た。

(平田 泰)

註『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度 京都市埋蔵文化財研究所

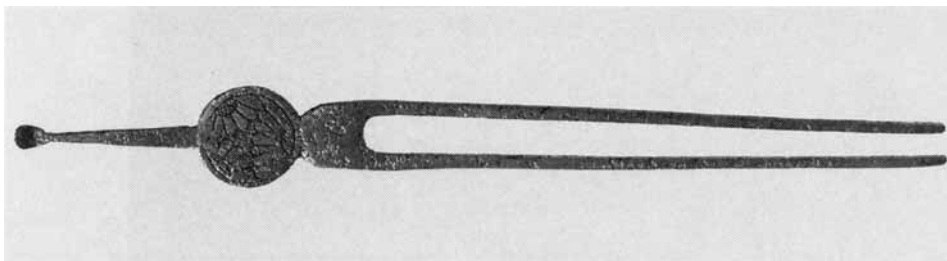


図6 黄銅製簀

## 40 伏見城跡

**経過** 調査地点は、桃山丘陵から北西へ延びる一支脈上に位置し、江戸時代に作成された「伏見城御城古図」によれば、松平伊豫守の屋敷地として描かれている部分に相当する。本調査は、近畿農政局淀川水系農業水利調査事務所庁舎建設工事を契機として実施した。当初、遺構の有無などを確認する目的で24×5mのトレンチを1箇所設定して開始した。その結果、桃山時代から江戸時代の礎石据付穴などを検出し、これらの遺構が対象地全面に広がっていると予想できたことから全面調査を実施した。

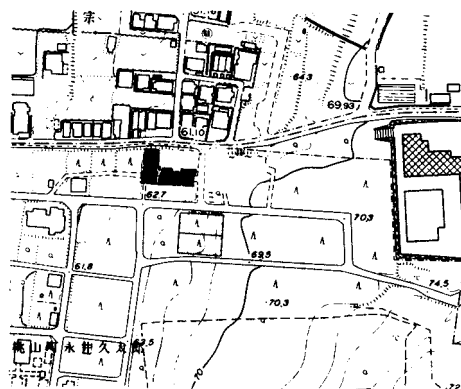


図1 調査位置図 (1:5000)

**遺構・遺物** 調査地点の旧地形は、東南から北西にかけてかなり急激な傾斜を示す。桃山時代にこの急斜面を埋め立てて、平坦面を形成する整地作業を行っている。このため、整地層は何層にもわたって堆積しており、厚い箇所では現地表下4m以上ある。遺構は、すべて整地層上面で検出したが、調査区東端部付近のみ再整地されており、遺構検出面を上下2面確認した。主な遺構には、礎石建物・井戸・溝・柱穴・土塋などがあり、2・3トレンチ以南で検出した。出土した遺物、遺構の重複状態などからこれらの遺構は桃山時代から江戸時代初期と江戸時代中期以降に大別でき、更に桃山から江戸初期の遺構は再整地される前後の2時期が認められる。桃山時代から江戸時代初期の主な遺構の概要を記すと、SB1は、20cm前後の自然石を用いた礎石建物で、東西・南北方向に1間分を検出した。P1は、掘形の径が約2.4mあり、根固めとして10～50cm大の自然石を使用している。

SE1は、素掘り円形の井戸で径約1.6m、深さ5m以上ある。SE2は、再整地層下で検出した素掘り円形の井戸で径約1.8m、深さ5m以上ある。確認した深さまで砂礫を主体にした混土層が充満しており、再整地の際に埋め立てられたとみえる。SD1は、L字形を呈する溝で、上幅0.4～1mあり、溝底は南に向かって下がる。

遺物は、整地層及び各遺構から整理箱で14箱出土した。主な遺物を列挙すれば、古墳時代の須恵器、円筒・形象埴輪、桃山時代から江戸時代の土師器、唐津・美濃・瀬戸・備前焼などの国産陶器類、瓦類、釘などの鉄製品がある。なお、埴輪類はすべて小片で主に整地層か

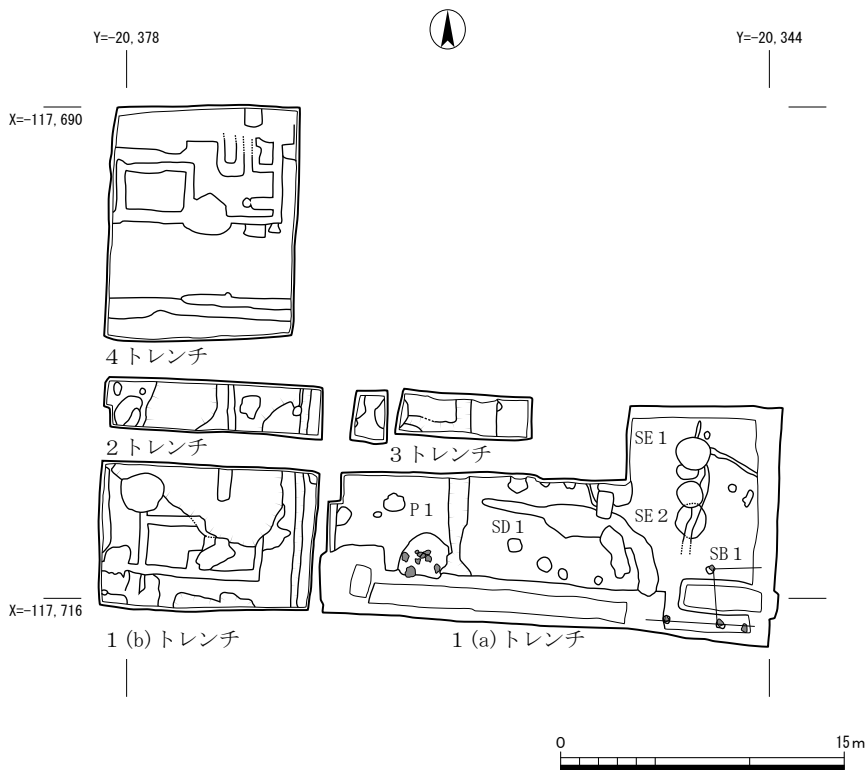


図2 遺構平面図（1：400）

ら出土した。形象埴輪は家形埴輪の一部とみられる。

**小結** 調査地点の約10m東側は比高差3mほどの崖となり、それより更に東側では緩やかな傾斜を示す平坦面が形成されている。「伏見城御城古図」をみると、この崖付近に屋敷地の境界が描かれている。この古絵図が正しいとすれば、当該地周辺に関しては、後世にあまり大きな地形の改変を受けていないと考えられる。礎石据付穴P1の掘形の規模、根固め石の状態などから重層構造の建物を想定できるが、調査区内で検出し得たのはP1のみであり、建物の規模などはまったく不明である。また、調査地点は、同絵図によれば松平伊豫守の屋敷として描かれているが、それと判る遺物などはまったく出土せず、今後の周辺部での調査に期待する他ない。なお、伏見城築造時に伴う整地層から少量であるが、古墳時代の須恵器、円筒埴輪、家形とみられる形象埴輪などが出土している。造成が大規模であるため即断はできないが、古墳が周辺部に存在していた可能性が考えられる。（平方幸雄）



## 第2章 試掘・立会調査

### I 昭和61年度の試掘・立会・分布調査概要

本年度の試掘・立会・分布調査には文化庁国庫補助事業による調査(860件)と原因者負担による調査(32件)がある。遺跡別には平安宮68件,平安京左京292件,平安京右京189件,長岡京21件,鳥羽離宮跡38件,中臣遺跡21件,その他の遺跡231件であった。

#### 文化庁国庫補助事業による調査

本年度に実施した調査は,試掘調査89件,立会調査771件の計860件である。このうち,特に遺跡の残存状態の良好な16件については発掘調査に切り替えた。(当研究所で調査を実施したのは13件である)以下,調査成果の概要を地区ごとに述べる。

**平安宮・京** 平安宮内の立会調査では特筆すべき成果はなかった。試掘調査では,中務省で平安時代前期から室町時代の遺物包含層,土壌などを検出し,発掘調査に切り替えた。また東雅院西辺部では,平安時代前期の遺物を含む土壌を検出し土器の一括資料を得た。

平安京域の調査で得られた主な条坊遺構,及び遺構の遺存状況の良好な調査地には以下のものがある。左京域は,二条二坊で大宮大路の路面,二条四坊で二条大路の路面,三条一坊・六条一坊で朱雀大路東側溝,同じく三条一坊では三条大路北側溝,三条二坊で三条大路の路面,五条四坊で東京極大路の路面,八条二坊では猪熊小路の路面,八条四坊では東洞院大路の路面などを見つけている。右京域においては,一条四坊で勘解由小路北側溝と路面を検出し,溝内から平安時代後期の土器類が多量に出土した。四条二坊の両洋学園内の試掘調査では,三条大路南側溝及び建物などを検出し発掘調査の必要性が考慮されたが,工事が先行して遺跡が破壊されるといった事態が生まれた。五条三坊では五条坊門小路南側溝,六条三坊では六条坊門小路北側溝,八条一坊では西大宮大路の路面・七条大路南側溝,八条二坊では梅小路南側溝,八条三坊では七条大路南側溝及び路面,九条一坊では九条大路の路面などを見つけた。

条坊関係遺構以外では,左京二条二坊の試掘調査で平安時代後期の池及び洲浜状遺構を検出したが,現状保存されることになった。また左京四条四坊・五条四坊の試掘調査では平安時代後期から室町時代の遺物包含層,土壌などが良好に遺存していることから発掘調査に切り替えた。右京二条三坊の試掘調査では,平安時代中期の建物跡・土壌などを検出したため発掘調査に切り替えている。右京八条二坊の試掘調査では平安時代後期の池状遺構の埋土から

斎串・独楽形木製品などが出土した。

**平安京以外の地区** 法金剛院境内では平安時代後期の池を検出した。森ヶ東瓦窯ではロストル式の平窯の本体を発見した。音戸山古墳では石蓋をした骨壺を見つけている。北野廃寺での2箇所の試掘調査では平安時代の遺構を検出し発掘調査に切り替えている。北野廃寺ではもう1箇所ですべて平安時代の遺物包含層、古墳時代の堅穴住居を検出したが、現状保存されることになった。北白川廃寺では寺域を区画する東西溝を見つけた。法勝寺跡では根石を持つ柱穴・溝を検出し、発掘調査に切り替えた。下鳥羽遺跡・中久世遺跡でもそれぞれに良好な遺構を見つけ発掘調査に切り替えた。

**原因者負担による調査** 原因者負担で実施した試掘・立会及び分布調査は、平安宮2件、平安京11件、長岡京1件、鳥羽離宮跡1件、中臣遺跡3件、白河街区1件、その他の遺跡13件の32件である。このうち平安京左京六条一坊、勸修寺旧境内、久我東町遺跡、中の谷窯、特別史跡特別名勝 慈照寺、天鼓の森古墳、伏見城々下町の7件は、遺構の残存状況が良好であり発掘調査に切り替え実施した。以下調査の成果の概略を述べる。

平安宮梨本(1)では、室町時代後期から江戸時代の遺構に削平され梨本宮に関係する遺構は検出できなかった。京域内の各調査(2～8)は特筆すべき遺構は検出していない。左京六条一坊(付表2-4)では、土壙・井戸などを検出し、発掘調査に切り替えた。

京域外では、鳥羽離宮跡(9)は古墳時代から平安時代後期の土壙・流路、遺物包含層などを発見している。山科本願寺跡(10)では、土壘・石垣・堀、焼土層など本願寺に関連する多くの遺構を発見し、寺域を知る重要な成果を得た。久我東町遺跡(11)では、平安時代後期から室町時代の柱穴、遺物包含層などを検出している。中の谷窯の分布調査(12)では須恵器、窯壁片、焼土層、炭層など、窯に関係する多くの資料が見つかり、発掘調査になった。峰ヶ堂城跡の分布調査(付表2-29)では城跡関連遺構5箇所、古墳15基、塚1基などを新たに発見し、遺跡範囲が大きく広がることが判った。円宗寺跡(13)では、平安時代から江戸時代までの遺構を数多く発見した。特に円宗寺の寺域を区画すると考えられる東西・南北方向の2条の溝を見つけたことは大きな成果である。また流路と考えられる遺構から多量の緑釉瓦が出土し貴重な資料を得た。仁和寺院家跡(14)では、平安時代から江戸時代までの土壙・溝・井戸・流路などを発見し、寺域の範囲の概要を知ることができた。また土師器皿が焼土層、焼け石、炭片などと共に多量に出土したことは、土師器の窯に関係するものと考えられる。

(磯部 勝)

## II 平安宮・京跡

### 1 平安宮梨本（図版9-1）

**経過** 調査地は上京区智恵光院通り下長者町上ルの辰巳児童公園内に位置する。平安宮の梨本推定地にあたるが、調査結果では平安時代の遺構は検出できなかった。しかし、室町時代後期の大規模な遺構及び江戸時代の遺構を検出している。

**遺構・遺物** 掘込1とした遺構は、調査区全面に広がっておりその全形は不明である。底部についても調査中に現地表下4mまで掘り下げたが確認できなかった。堆積状況・規模・出土遺物の時期などから戦国時代の濠状の大規模遺構の一面を調査したと考えている。

平安時代の遺物は、新しい時期の遺構内堆積土への混入品として出土している。層・遺構に伴っていない点が惜しまれる。

室町時代後半の遺物は、京域内の同期資料に類例の多いポピュラーなものであり、日常生活用品を中心とする遺物である。江戸時代及び以降に位置付けられる遺物も同様の様相を呈している。

**小結** 平安時代の遺構と土層は、室町時代に比定できる大規模遺構によって削平されており、当調査地点では検出できなかったものと考えている。しかし、混入品としてはあるが平安時代の遺物が出土しており、今後の周辺の調査に期待される。また室町時代後半代の大規模遺構の全形や性格の解明についても同様のことが言える。

（平安京調査会 小森俊寛）

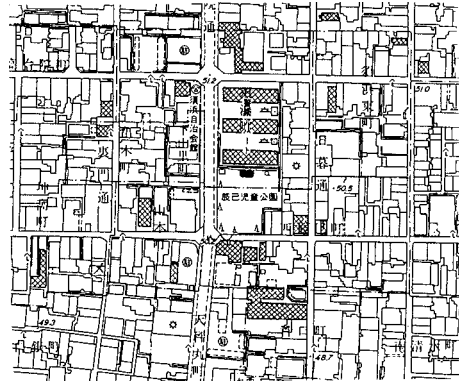


図1 調査位置図（1：5000）

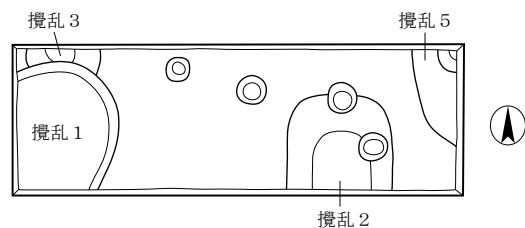


図2 遺構実測図（1：100）

## 2 平安京左京九条四坊

**経過** 調査地は、南区九条東山王町 27 にある京都市立山王小学校である。昭和 61 年 6 月 28 日から 7 月 1 日の間、旧校舎の基礎撤去が行われ、立会調査を実施した。その結果、調査対象地の大半が既存建物基礎により攪乱を受けていることが判明した。しかし、基礎以外のところにおいては中世の遺物包含層、土壙状遺構などが残存していることが判明した。当該地は平安京左京九条四坊二町に相当し、建物などの遺構の存在が想定されるため、改めて発掘調査

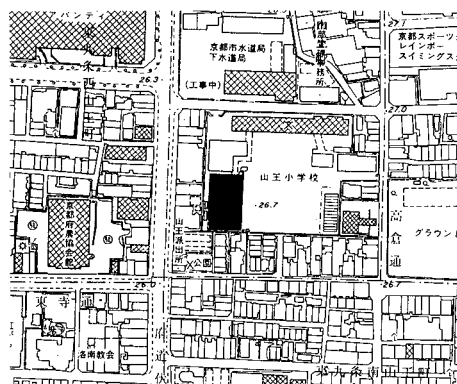


図1 調査位置図 (1 : 5000)

を行うことになった。調査は昭和 61 年 7 月 23 日から 7 月 27 日の 4 日間実施した。調査面積は、東西 3 m、南北 10 m の計 30㎡であった。

**遺構・遺物** 基本層序は、敷地全体に盛土が 40～50cm あり、その下に旧耕作土層、以下灰黄色砂泥層となる。灰黄色砂泥層は無遺物層である。灰黄色砂泥層上面において土壙・小穴など 44 基検出した。調査面積の割には遺構の密度は高いが、各遺構は平面的に不定形な形状を呈するものが多く、遺構の残存深も 30～40cm ほどで、比較的浅い。

出土遺物は、各遺構より土師器皿、須恵器鉢・甕、陶器皿・椀・甕、瓦器椀・鍋・羽釜、白磁椀、青磁椀など平安時代から江戸時代のものが混在した状態で出土している。

**小結** 各遺構の切り合いが複雑で、個々の遺構の形状を的確に把握することが困難であった。最終的には、島状に地山が点在するような状況を示した。各遺構の前後関係は、遺物の出土状態及びその年代などにより、江戸時代の一時期の遺構群とみられる。この近辺では古来、九条土と言われる良質の粘土が産出するところで、今回検出した包含層・土壙状遺構も、いわゆる土取穴に類するものと考えられる。

(家崎孝治)

### 3 平安京右京三条一坊 (図版9-2)

**経過** 防火用水タンク建設に伴い、事前に実施した試掘調査である。調査地は中京区西ノ京船塚町の朱雀公園内の一画である。平安京右京三条一坊十六町の西辺北端部近くに位置し、西大宮大路の築地と東側溝が検出できる可能性が大きかった。しかし、後世の土取穴などがあり築地と側溝を検出することはできなかった。

**遺構・遺物** 溝1とした遺構は、単位境が三角錐状に残る点や、砂礫上面に達して掘り止めている点、加えて遺物の混在状態など、この地域の既調査で確認されている、類例の多い土取穴が連続している状態とみられる。調査区内でも3単位以上あり、切り合い関係が想定できるが、堆積土に差異がなくプラン上でも切り合いは確認できなかった。

上述の土取穴群に対して、西半が平坦な高みとなり残る。また土取穴の西肩ラインが道路の東限に沿うように直線的である。このような状況からこの平坦な高みは路面の残存部ともみられるが、結論は周辺調査成果との検討の中で出すべきであろう。

平安時代から室町時代に至る各時代の遺物のほとんどは、溝1とした遺構内の堆積土から出土している。量的には遺構の年代比定の根拠となっている江戸時代の遺物よりも多い。しかし、底部の各所から少量の国産染付椀片などが出土することを確認しており、遺構の埋没年代はやはり江戸時代を遡ることはない。

**小結** 西大宮大路に関連する遺構と断言できるものは検出することができなかった。しかし、周辺既調査との検討が必要な問題や今後の周辺調査への課題はいくつか挙げられる。その一つは調査区西半の平坦な高みの位置付けである。また、土取穴群の直線的に連続する西肩ラインの意味などは解明すべき課題といえる。

(平安京調査会 小森俊寛)

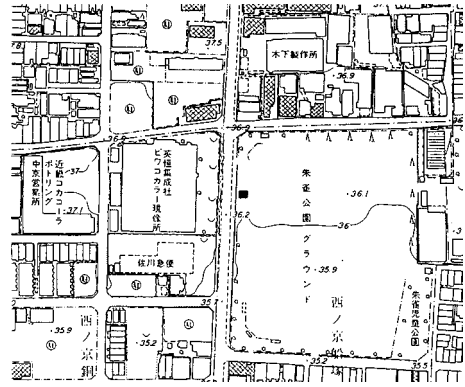


図1 調査位置図 (1 : 5000)

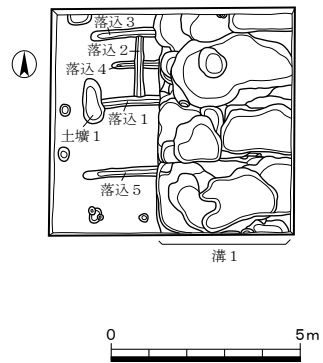


図2 遺構実測図 (1 : 200)

#### 4 平安京右京四條四坊1

**経過** 右京区西院笠目町9-15の京都市交通局梅津車庫で昭和61年5月12日から26日にかけて京都外国語大学キャンパス整備計画に伴う試掘調査を実施した。調査地は右京四條四坊十三・十四町の西辺地区及び西京極大路に比定される。調査対象地は約2万㎡に及ぶ。調査の結果、調査地の西半に流路、東半に湿地が検出され、平安時代に属する遺構は皆無であった。調査区は西側に2箇所（1・2区）、北側に1箇所（3区）、東側に1箇所（4区）の4箇所を設定した。調査面積は約230㎡である。

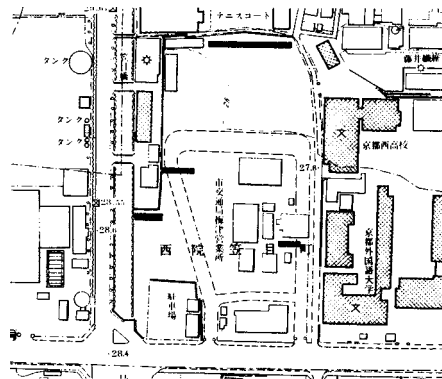


図1 調査位置図 (1 : 5000)

**遺構・遺物** 流路の下層から上層にかけての堆積土中には、平安時代前期から江戸時代に属する遺物を包含する。これらは旧天神川の氾濫原の一部と考えられる。東側検出の湿地跡も同じく平安時代前期から江戸時代にかけての遺物を下層から上層にかけて包含している。またこの湿地に切り込む形で室町時代後期から江戸時代に属する規模の異なる流路を数条検出した。出土遺物の量は少ないものの、器種には富む。土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦器、陶器、国産磁器など、平安時代前期から江戸時代に至る各時期のものが出土した。

**小結** 昭和55年度の下水道工事に伴う立会調査<sup>註1</sup>の成果では、山ノ内池尻町、西院笠目町を中心とする東西500m、南北500mにわたる湿地・沼沢地が形成されているとの見解が得られている。本調査地東側の湿地状堆積は、上記湿地帯の西辺の一部であろう。下層に平安時代前期の土器類を包含することから、少なくとも平安京造営当初から、江戸時代に至る長期間にわたって一帯が湿地であったことが考えられる。ただ、この湿地の堆積を切り込む溝が数条あることから、この溝の属する室町時代以降、溝や水路を必要とする耕作地としての土地利用が始まったことを示している。近代以降には、「梅津車庫」の前身である「京都府自動車検査所・京都自動車教習所」として開発が進むが<sup>註2</sup>、そのために厚さ1m以上の盛土を必要とした理由も、湿地故の軟弱な地盤を考慮した結果といえよう。 (平田 泰)

註1 『西部幹線山ノ内（その2）公共下水道工事に伴う立会調査』調査資料 昭和55年度

註2 『東梅津』1/3000地形図 大正11年測図、昭和10年修正 京都市土木局 昭和11年

## 5 平安京右京四条四坊2

**経過** 調査地は、右京区山ノ内苗田町42である。当該地は、平安京右京四条四坊十五町の西側を通る西京極大路に推定される場所である。試掘調査を実施するにあたっては、現在ある駐車場の機能を損なわずに、なおかつ敷地全体の遺跡把握を可能とするため、L字形の調査区を設定した。調査区は東西に4箇所、南北に1箇所を設定した。調査面積は、2m幅で、5箇所合わせて42mの長さの計84㎡である。調査は昭和61年10月4日から10月7日の間、3日間実施した。

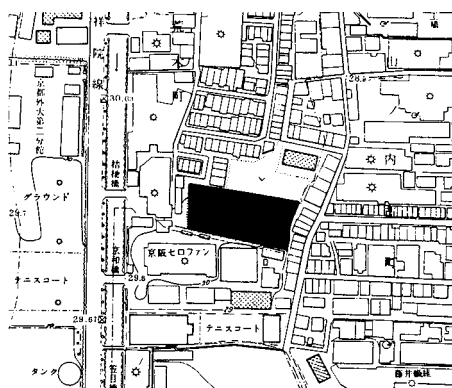


図1 調査位置図(1:5000)

**遺構・遺物** 敷地全体の基本層序は、西端の1トレンチで盛土が厚さ2.2mで、東に行くに従い浅くなり、5トレンチの東端で厚さ1.2mを測る。1～3トレンチでは、盛土以下黄褐色泥土層、黄褐色砂礫層の流れ堆積となる。4～5トレンチでは、盛土下に旧耕作土層が残存し、以下灰オリーブ色砂泥層(20cm)、オリーブ黄色砂泥層(10cm)、灰オリーブ色泥砂層(20cm)、灰オリーブ色混礫泥砂層(10cm)、灰色泥砂層(20cm)、オリーブ褐色砂礫層となる。地表下1.7mの灰オリーブ色泥砂層上面において、人・牛の足跡を多数検出した。足跡の埋土は灰色の砂である。各土層より遺物を検出することができなかった。

**小結** 当該地は、周辺に比べ1mほど高くなっており、調査着手前にはそれが如何なる理由に拠るものか不明であった。調査の結果、当地が近年ゴミの集積地であったことが判明した。4・5トレンチで検出した人・牛の足跡は水田遺構であることを示すが、出土遺物がなく時期は不明である。また、西京極大路に関連する条坊遺構及び延喜式の京呈の項より知れる平安京を取り巻く堀状遺構の存在を確認することはできなかった。



(家崎孝治)

図2 足跡検出状況(南から)

## 6 平安京右京五条三坊

**経過** 調査地は、右京区西院日照町1にある京都市立四条中学校内である。校舎改築に伴い、工事に先立ち試掘調査を行うことになった。当該地は平安京右京五条三坊十六町に相当し、「小泉」に比定される場所である。調査にあたっては、旧校舎の基礎部分を避けて南北に1箇所、既存基礎の状況を知るために1箇所の計2箇所の調査区を設定した。調査面積は36㎡

である。調査は昭和61年7月16日に実施し、その日の内に終了した。

**遺構・遺物** 基本層は、敷地全体に約1.2mの盛土がなされており、その下に耕作土層(10cm)があり、以下黒褐色砂泥層(10cm)、褐色砂泥層となる。黒褐色砂泥層は江戸時代の遺物を含む。褐色砂泥層はこの近辺に通常みられる、弥生時代以降の遺跡の成立する面であり、ベースとなる土層である。褐色砂泥層上面において土壇・溝・小穴など10数基を検出した。各遺構は残存深が5～25cmと比較的浅く、幾分削平気味であり、また顕著な構造的特徴を有するものではなく、いずれも耕作に伴うものとみられる。遺物は、各遺構より土師器皿、陶器椀、青磁椀などが少量出土している。一部中世のものを含むが大半は江戸時代のものである。

**小結** 旧校舎の建物基礎が地山まで達しており、調査対象地の大半が既に攪乱されていることが判明した。平安時代の遺構を検出することはできなかったが、その理由としては、後世における耕地化に伴う削平を受けた結果と考えられる。なお、当該地が文献上「小泉」となっており、その解釈を巡って意見の分かれるところであるが、今回の調査においては、ベースである褐色砂泥層はきわめて堅固な土壌で、還元層及び地下水の浸透した状況などは観察できなかった。

(家崎孝治)

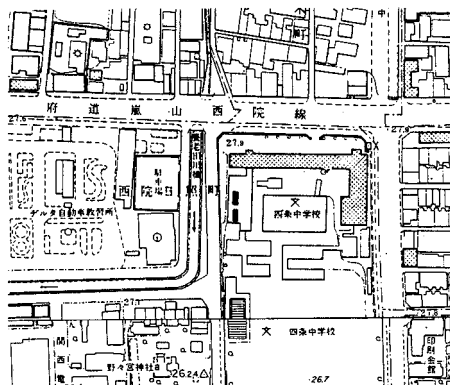


図1 調査位置図(1:5000)



## 7 平安京右京六条四坊 (図版 24-1)

**経過** 調査地は、右京区西京極豆田町の東大丸児童公園内に位置する。平安京右京六条四坊四町に位置し、同町内では南半中央付近のやや西あたりと推定される。防火用水タンク建設に伴う事前の試掘調査である。調査の結果、検出遺構は南北方向に延びる溝を1条検出したにとどまるが、溝1のベースである各土層からは、古墳時代から室町時代にわたる各時代の遺物が出土している。

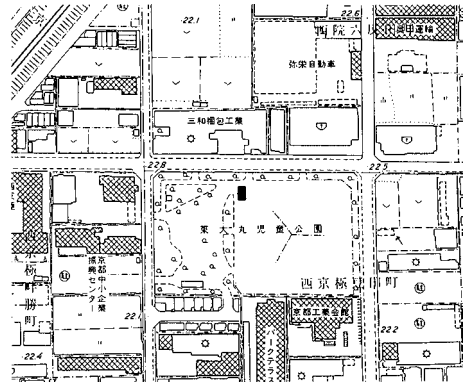


図1 調査位置図 (1 : 5000)

**遺構・遺物** 溝1は南北方向にほぼ直線的に延びる、断面が浅いU字状を呈する溝である。幅は2～2.3 m程度、深さは0.6～0.7 mを測る。溝内には単一の明褐色砂礫層が堆積しており、洪水などの自然的要因で一気に埋没したものと考えられる。遺構の性格は江戸時代の付近の様相や、直線的で、人工的に設置されたとみられる点などから、この付近の田畑を対象とする農業用水路とみられる。

溝1のベースとなっている遺物包含層からは古墳時代の須恵器杯身・甕、平安時代の土師器皿・甕、須恵器杯・壺・甕、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、輸入陶磁器の白磁壺、丸瓦、平瓦の他、鎌倉から室町時代に比定できる各種の土器・陶磁器類も出土している。溝1からは染付など国産施釉陶磁器類、焼締陶器、棧瓦など、江戸時代に比定できる遺物が出土している。溝1の江戸時代の遺物を含めて、この溝のベースとなっているシルト層群出土遺物も程度の差はあるが、その多くは角が磨滅している。近辺からであろうが定位置を離れて流れ堆積したものと考えられる。大半が自然堆積層中からの出土とは言え、幅広い時代と種類には注意が必要だろう。

**小結** 土層とその包含遺物の堆積状況からみて、河川の氾濫と低湿地状態が連続していた地域と考えられる。黒色泥砂層（昭和初期の積土）以下の土層は、全て自然堆積層とみられるが灰色シルト層Ⅰ～灰オリーブシルト層上面は、田圃として利用されていたようだ。

(平安京調査会 小森俊寛)

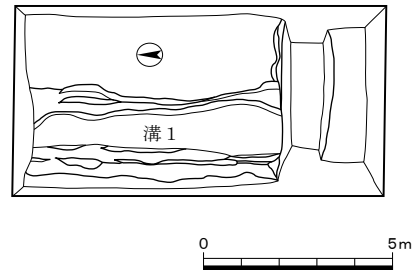


図2 遺構実測図 (1 : 200)

## 8 平安京右京七条一坊 (図版 24-2)

**経過** 防火用水タンク建設に伴う試掘調査である。調査地は下京区西七条東八反田町 31 に所在する京都府警花屋町住宅地に位置し、平安京跡においては右京七条一坊十町の北西部に推定される。調査の結果、近世及びそれ以前の遺構は検出できなかった。

**遺構・遺物** 近代の掘込みなどを検出したにとどまる。自然地形の凹凸及び凹部内の堆積状況とそこに堆積する近代の整地層からみて、近代まで低湿地状態が続いていたと思われる。

砂礫層で形成されている地山微地形の凹部には、湿地状態であったことを示す自然堆積のシルト土層が堆積して地山上面全体の平坦化が進んでいるが、その上面でも遺構はみられなかった。

最も古い出土遺物は、明治時代以降の包含層から混入品として出土した江戸時代に比定できる土師器皿で、他は明治時代以降のものである。平安京以来の都市が続いた京域内の地点において、江戸時代以前の遺物がまったく出土しないことの方が特殊状況といえる。

**小結** 江戸時代以前の遺構が皆無であり、遺物も江戸時代のものが若干量しか出土しないという状況については、正しい理解を示しておく必要がある。我々が当地の調査を実施していた時、当官舎敷地内の南部でビルの基礎工事が行われていた。この基礎掘削は表土下 2.5 m 程度まで達しており、その掘形壁面の比較的広い範囲で土層観察を行えた。観察できた調査地南の隣接地の状況は基本的には自然堆積砂礫層上面の凹凸と、そこへのシルト土層の堆積及び遺構が皆無である点など調査地とまったく同様であった。

このような当地域の状況からみて、常に都市域もしくは都市域の近接地であったにも関わらず、低湿地状態という立地条件の劣悪さが主要因となり常に未開発地域として取り残されてきた可能性が大きい。(平安京調査会 小森俊寛)

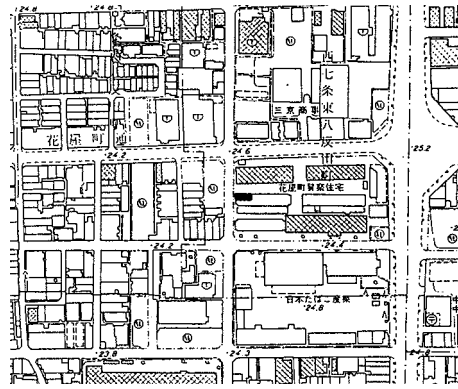


図1 調査位置図 (1 : 5000)

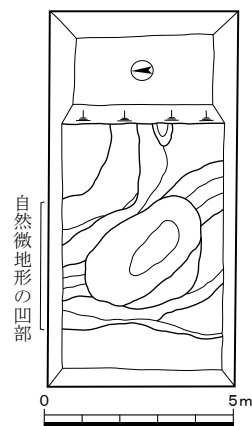


図2 遺構実測図 (1 : 200)

### Ⅲ 平安京域以外の遺跡

#### 9 鳥羽離宮跡

経過 この調査は京都市伏見区竹田踞川町、田中宮町、蕎屋町の各道路敷（約 2200 m）で、伏見排水区竹田系統竹田（その4）公共下水道工事に伴い実施した調査である。

調査地は鳥羽離宮跡の南東部に位置する。この地域では発掘・立会調査例が少なく、鳥羽離宮跡においては遺跡空白部の多い地区である。このことから今回の調査では、個別遺構の発見だけでなく遺構面の広がり、範囲を知ることを重点においた。また本工事前に数箇所の人孔部分で、試掘調査を実施することになった。試掘調査を実施したのは、図示した 19 箇所延べ約 45m<sup>2</sup>である。調査の結果、古墳時代から平安時代後期の土壌、遺物包含層、道路、湿地状遺構などを検出した。

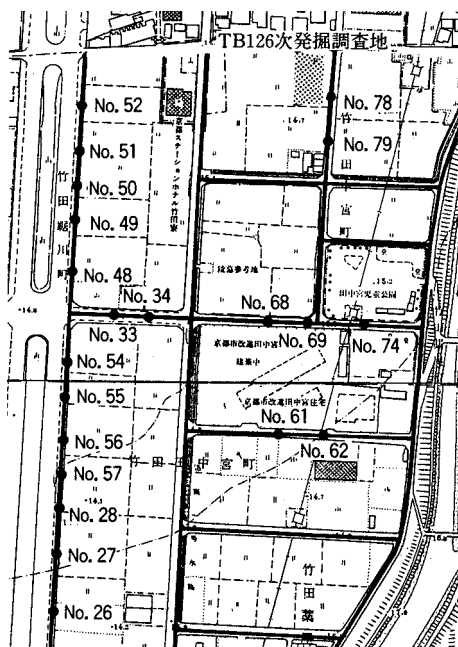


図1 調査位置図（1：5000）

**遺構・遺物** 平安時代の遺物包含層を検出した地点は、No.26・28・50・51・61・62・78・79である。No.78・79地点では、近接地の発掘調査（鳥羽126次調査）で検出している平安時代から鎌倉時代の遺構面の広がりを確認した。古墳時代の土壌は、No.62の平安時代の遺物包含層の下層（灰褐色砂泥層）で見つけた。陸部での基本層序は、地表下65～100cmまでが道路舗装部と盛土で、以下にぶい褐色砂泥層、褐灰色砂泥層、灰褐色砂泥層、砂礫層である。地表下100～180cmに堆積している砂礫層は土師器、須恵器、瓦の磨滅したものが包含されており、大規模な氾濫跡と考える。出土遺物は少なく、小片なものが多い。平安時代の遺物には土師器、須恵器、瓦器、瓦などがある。古墳時代の遺物はNo.62の土壌から出土した土師器の壺がある。

**小結** 今回の調査で平安時代の遺物包含層や、古墳時代の土壌などが発見できたことで、氾濫などの影響を受けなかった微高地では鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡などの遺構が遺存する可能性があり、今後も調査が必要である。  
(磯部 勝)

## 10 山科本願寺跡

**経過** 京都市山科区西野町・音羽町一帯で山科本願寺関係の下水道工事に伴う立会調査(山科排水区音羽系統音羽「その1」, 山科排水区安祥寺系統西町「その8」, 山科排水区安祥寺西町「その7」, 山科排水区安祥寺系統西町「その6」公共下水道工事)を実施した。調査は範囲が広大で, 施工業者も複数に別れるため, 1～4区に分けて実施した。

1～2区は土塁と堀に囲まれた山科本願寺の推定地で, 3区は山科本願寺の東部地域, 4区は山科本願寺の南殿推定地に当る。ここでは各種の遺構が検出された1区・2区・4区について報告する。調査は1987年4月1日～1988年5月16日まで実施した。

**遺構** 1区 No.49～2区 No.78 間で堀と土塁を検出した。1区の No.80～97～100～102 間で流路・土塋を検出した。1区 No.89～90 間で幅4m以上, 深さ1.6m以上の自然流路を検出した。堆積土層は灰褐色砂礫層と灰茶色泥砂層である。遺物は出土しなかった。

2区の No.37～61 間は遺構が特に密集していた。北部には6層の厚さ0.6m前後の路面があり, 径10cmの礫の詰まる土塋があり, この上層には焼土層があった。土塋の掘形は垂直で, 均一に礫が詰まることから, 石垣の裏込めか盲暗渠と推定されるが東西規模が不明であり, 結論を下すことはできなかった。No.50～52 間は土塁と堀の検出が期待されたが, 遺構の検出はできなかった。

4区の No.101 から南で石垣を検出した。石垣の上面は地表下1.4mで径0.2～0.5mの石を2段積み, 間に小石を挟んでいる。

**道路関係の調査** 古道に関係する調査が必要と判断した地点は, 夜間の立会調査を実施した。4区では奈良街道関係の調査を実施したが, 一部で現路面下層の2～3枚の路面埋土を確認したが, 近世以降のものであった。府道渋谷山科停車場線関係では, 西野岸ノ下町, 音羽町で夜間の調査を実施したが, 各調査地点では水田耕作土上に路面があり, 路面は近世以降のものである。

**遺物** 調査で室町時代から近世の遺物が出土した。土師器・瓦質土器・須恵器・陶器・磁器などがあり, 国産陶器は瀬戸・美濃天目椀, 備前甕・播鉢, 信楽甕・播鉢, 唐津椀など, 中国陶磁器は青磁椀・盤, 白磁椀, 青花椀などがある。瓦は少量出土したが軒瓦はなかった。

**小結** 調査の結果, 山科本願寺に関連する遺構を各所で検出することができた。本願寺関係の遺構の集中する範囲は, これまでの発掘調査の成果と符合し, 遺構の種類も地下式石室が目立つなど合っている。

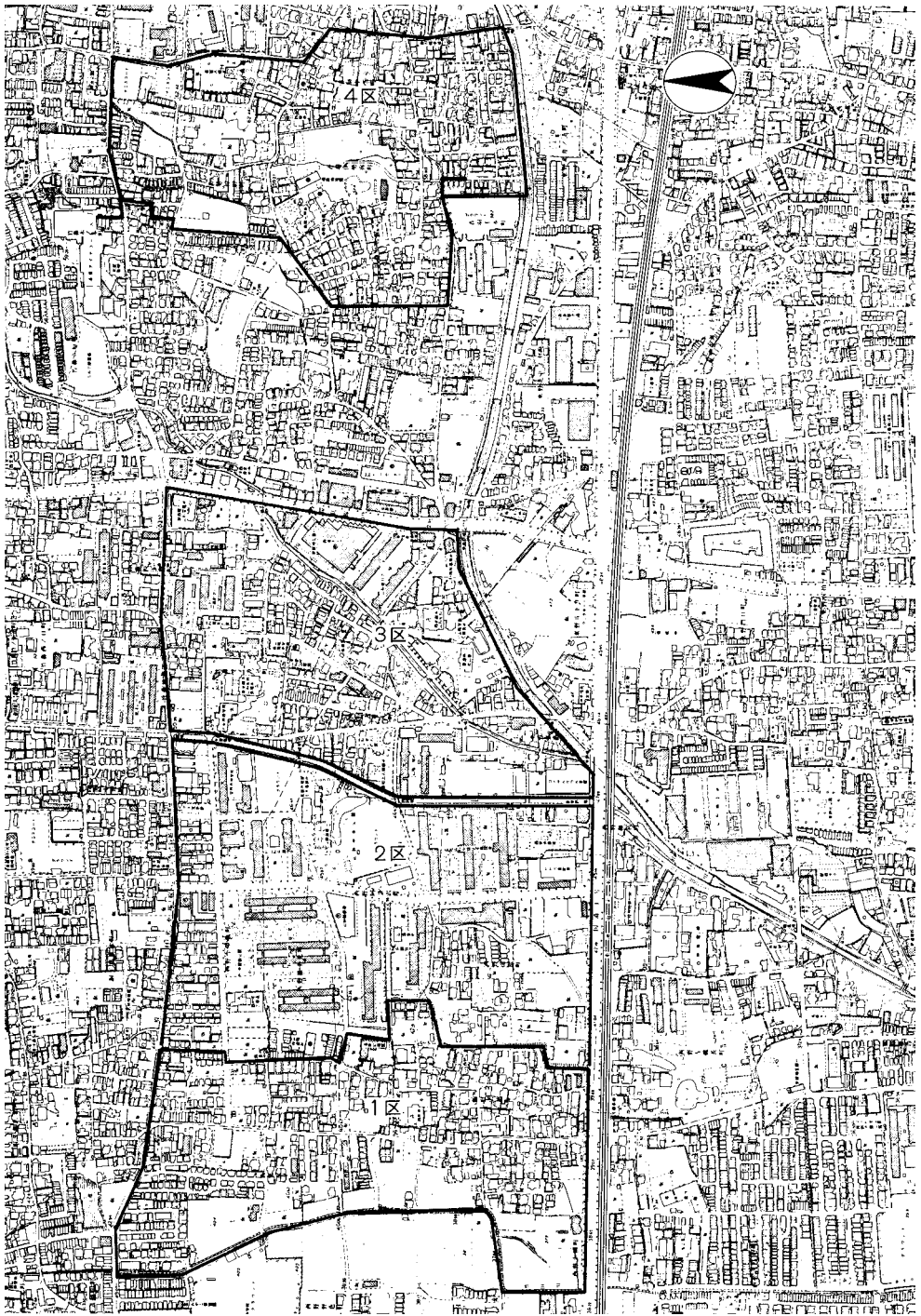


図1 調査位置図 (1 : 10000)

しかし、立会調査の成果と絵図の関係をみると、土塁と堀の検出が予想された2区のNo.51～52間で、遺構が検出されないなど問題も残った。しかも、寝殿・御影堂・阿弥陀堂などの中心になる建物は検出されず、その所在は不明である。これまでの調査によって各所で焼土層は見ついているが、焼けた瓦は未発見である。

本願寺の立地は下層に河川の堆積層が広範囲にあり、しかも本願寺を遡る遺構・遺物が検出されないことから、集落として展開した時期は本願寺の成立に重なるものと考えられる。本願寺には寺内町・寺外町があったとされるが、関連する遺構は土塁・堀の西辺部に広がっており、その範囲は西野町の西側を南北に走る道路までである。

南殿の推定地では、石垣・土塋など本願寺に関連する各種の遺構を検出した。遺構の範囲は現存する光照寺域より西に広がり、約150mの方形の寺域が考えられる。また、音羽森廻り町・中芝町の若宮八幡宮からその南部にかけては中世の遺跡が広がっている。

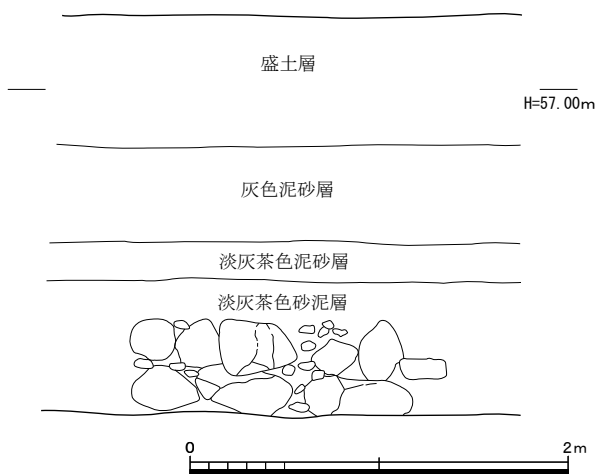


図2 4区検出の石垣 (1:40)

出土した遺物には、一部14世紀のものがあるが大半は本願寺の年代と重なる16世紀のものが大半である。

本願寺は広大な面積を占め、遺構の残りも良好であるが、調査例も少なく、特に南殿関係の調査は皆無である。従って今後集中した調査が必要である。また、今後歴史的な道路に関する立会調査も必要である。

(百瀬正恒)

## 11 久我東町遺跡

**経過** 外環状線計画地の試掘調査で、昨年度実施した区間の西方水田地帯に位置する。

今年度は延長 120 m の区間に 6 箇所のトレンチを設定し、遺跡の有無及び性格の把握に努めた。昨年度の東方区間ではまとまった遺構・遺物の検出はなかったが、今年度区間は、室町時代より文献にあらわれる志水の集落の北方に位置し、小字名「内階戸」と呼ばれる区域を含んでいる。

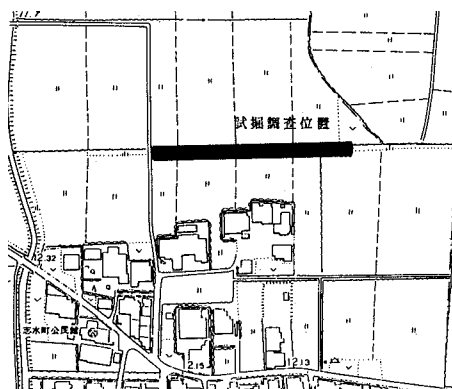


図1 調査位置図 (1 : 5000)

**遺構・遺物** トレンチは東方より1トレンチとし順次西に設定し、西端に6トレンチを設定した。1～4トレンチでは遺物の散布はみられるものの明確な遺構は検出できず、わずかに3トレンチに柱穴状のピットを1個、2トレンチで東へ落ちる沼状遺構を検出したのみである。

これに対し、現集落の北側に当る5・6トレンチでは多量の遺物を含む包含層を検出し、6トレンチでは礎石らしき石2個も検出した。

遺物は、各トレンチで出土したが、5・6トレンチに集中しており、他のトレンチでは小片が数個出土したに過ぎない。時代的には、平安時代後期と室町時代のものが出土している。前者のものは5トレンチに集中し、後者は各トレンチから出土している。

**小結** 調査の結果、5・6トレンチで多量の遺物を含む包含層を検出することができた。おそらく志水の集落が12世紀頃成立し、今日まで続いてきたものといえる。5トレンチでは上層にも整地層・溝状遺構を検出しており、重複した変遷をうかがうことができる。

以上のようなことから、「内階戸」と呼ばれる区間を含めた道路計画区域の全面調査が必要となってきた。次年度以降の発掘調査でその全容を知ることができるものと期待できる。なお、当試掘調査は「久我東町遺跡」として実施したが、調査結果などを考え併せると、前述の遺跡とは別の集落と判断できることから、「羽束師志水町遺跡」と名付けるべきものといえる。

(長宗繁一・鈴木廣司)

## 12 中の谷窯分布調査1（調査位置図は第1章Ⅶ-27に掲載）

**概要** 京都精華大学現キャンパス周辺の拡張予定地全体を対象として昭和61年12月8日～13日までの6日間にわたり遺跡分布調査を実施した。調査方法は、地表面上の遺物などの散布状態及び地層露頭部分の状況を1～2mメッシュでの観察を軸とした線密な踏査によって地図上に記録しつつ、全体を把握する方法を取った。踏査の対象地は山林の傾斜地がほとんどであり、このような地域では等高線を軸線として一定間隔で地表面検出作業を随時行いながら調査を進めた。また踏査による現状認識に疑問点の残る地域では、より積極的な情報収集を目的として必要地点にテストピット（T.P.）を設置する方法も用いた。なお、調査中に発見した遺物は位置などを記録して全て採集した。

**東部地区** 窯1（既発見の中の谷第1号窯）付近では、灰層の広がりや遺物散布状況を把握し、窯体の確認作業を行ったが、京都大学考古学研究会が報告している状況認識を変えるような新知見は得られなかった。現状の方法だけでは窯体位置の確認まではできない。

**南部地区** キャンパス南側の地域は、相対的な高度も高く傾斜も急であり、尾根線上付近は岩盤露頭部分も多い。この地域では窯などは発見していない。

**西部地区** キャンパス北西部地域の斜面中腹以下は、地形的には窯の存在している可能性の高い地域である。今回の調査では、窯2とした付近とT.P.14地点で遺物を採取して未発見の窯の一端を確認することができた。窯2とした付近ではA・B・C地点などで須恵器杯・壺片、窯壁片、焼土、炭層の一部を見つけており、これらの検出状況と地形などから窯体が推定できる。T.P.14では厚い流土下で、須恵器甕片、平瓦片、炭小片を検出した。窯2とは

表1 分布調査表

地区	表記	日付	内容
東部	窯1	12/8	中の谷第1窯。灰層の広がりを確認、窯体の位置を推定する。遺物採取。写真撮影。
南部	表採1	12/8	山裾にて瓦質の土器小片1片採取（近世以降）。
西部	窯2	12/9	A地点で窯壁片、須恵器片集中。B地点でも窯壁片、須恵器片各1片採取。C地点で灰層の一部を認め窯体の位置を推定する。
"	表採2	12/9	土師器小片2片（近世か）採取。
"	表採3		須恵器片1片採取。
"	地点1	12/9～12	駐車場の崖面で焼土かと思われる土と炭が混じる流土を認めるがテストピットにより単に赤みを帯びた地山の一部であることが分かる。また炭を含んだ流土も凹みの一部に溜まったものであり全面に拡がるものではないことが分かる。
"	地点2	12/10	山肌を削った際に流土中に焼土かと思われる小さな粒子が混じる状況が認められT.P.2を設定して調べるが窯が存在する直接的な証拠は見つからなかった。流土中のこの赤い粒子はかなり広い範囲で認められる。
"	T.P. 1～10	12/11	窯等の存在する証拠は見つからなかった。柱状図作成。
"	T.P. 11～14	12/12	T.P. 14より須恵器の甕の破片3片、平瓦の破片1片出土。柱状図作成。
"	T.P. 15～16	12/13	T.P. 14の情報で窯を想定してテストピット設置したが何も見つからず。柱状図作成。T.P. 9～16写真撮影。



小尾根を挟む地点であり付近斜面に窯が残存している可能性が大きい。

**小結** 踏査を軸とした分布調査にも有効性と限界がある。今回の分布調査で、新たに窯を発見し、また新発見につながる可能性のある資料を採集している。これらは具体的な成果であるが、分布調査により重要な点は窯など遺跡の存在する兆候のない地域が一定の基準に基づいて明らかにできる点である。この結果、試掘調査あるいは発掘調査の対象地域が絞り込め、明確な目的意識で裏打ちされた調査区の設定が可能になる。未知数の部分を含む広域を対象とする場合、調査の第一歩として是非実施する必要がある。

しかし、分布調査で最も問題となることは、厚い流土などにより埋没しきった遺構に対してはほとんど無力なことである。このため兆候のなかった地域についても遺物の有無についてなどの限られた情報だけでなく正確な微地形や状況観察などが加えられた上で別方法の調査の要不要が決定されなければならないだろう。

#### 中の谷窯分布調査2

**経過** 昭和61年12月に実施した分布調査の結果、新たに窯の存在を断定できる資料や、可能性を指摘できる資料を収集した。その成果から、精華大学キャンパス周辺の拡張予定地で、次段階の調査が必要な3箇所を選定した。これにより、大学当局と協議の上、3地域に対しては理科学的方法を用いて、遺構の位置・方向・規模などの輪郭を明らかにするため予備調査を実施することになった。調査方法は調査地内の主要遺構が窯ということもあり、窯体確認に有効な磁気探査を第1に行い、さらに一般的な平地の遺構検出の有効な手段と目され、実験的改良が進められている電気探査をも実施することになった。

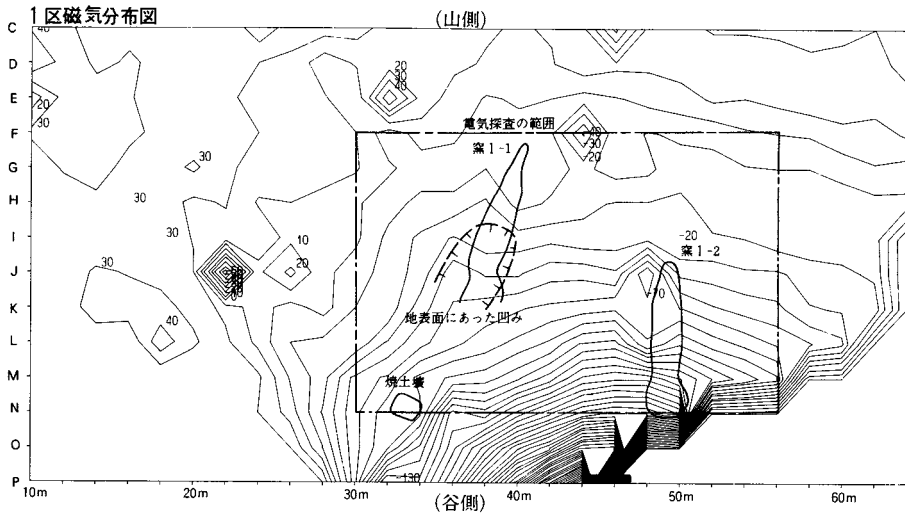
磁気探査 窯1を含む地区を第1地区、窯2を中心として第2地区、T.P.14周辺地を第3地区とする。磁気探査は3地区（約4780㎡）を対象として実施した。<sup>註1</sup>

探査結果は、全般に大学校舎に起因する磁気異常、すなわち鉄の影響が大きく、探査の妨げになっている。

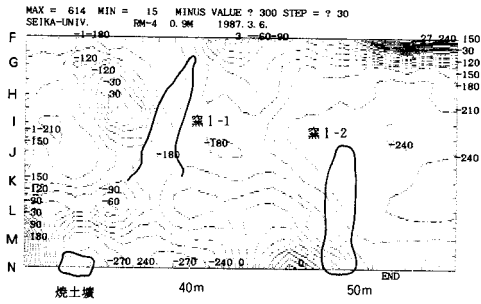
第1地区 測定範囲の約半分は西南の建物の影響がでている。そのため窯体推定位置はこの影響下に埋没してしまっている。しかし、可能性のある部分が2箇所あるが、大きなノイズ中にあり確実性には欠ける。

第2地区 第1地区以上に校舎などの影響が強い。ノイズに埋没した部分に若干磁力線の乱れる箇所があるが、これを窯体と断定することは難しい。

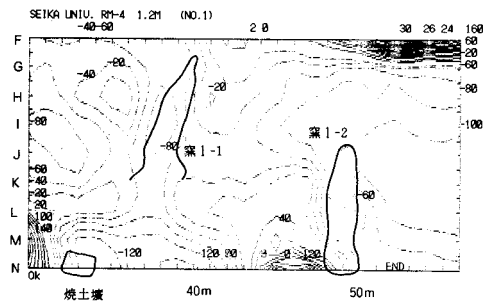
第3地区 東側と南側にやはり校舎と駐車場の影響がでている。またこの特徴は小さなまとまりの磁気異常がみられる点である。通常窯体が示す形態の反応ではないが、何らかの手段



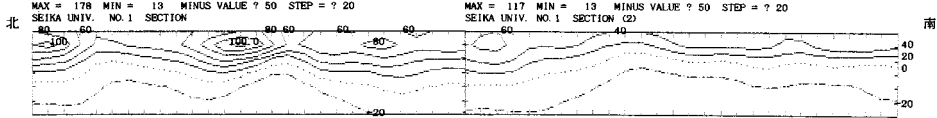
1区電気探査解析図(見かけの深さ0.9m)



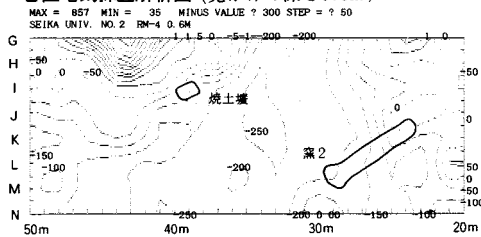
1区電気探査解析図(見かけの深さ1.2m)



1区電気探査断面解析図-Jライン(見かけの深さ0~5m)



2区電気探査解析図(見かけの深さ0.6m)



2区電気探査解析図(見かけの深さ0.9m)

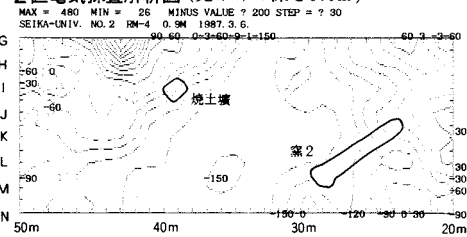
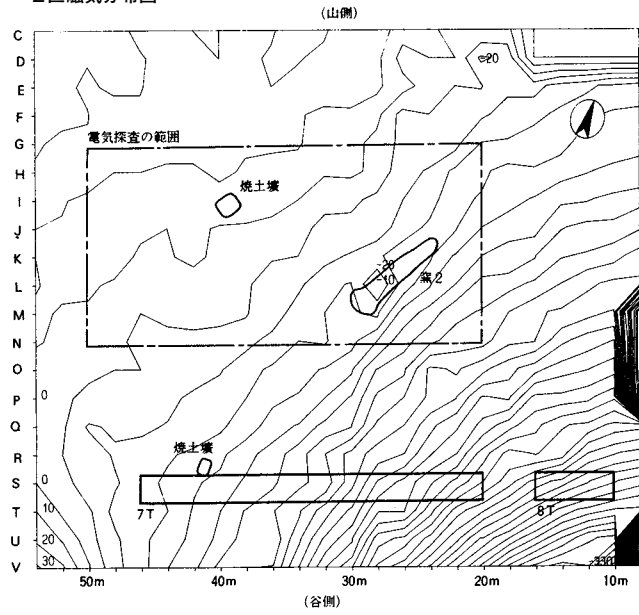


図2 磁気探査・電気探査資料

2区磁気分布図



3区磁気分布図

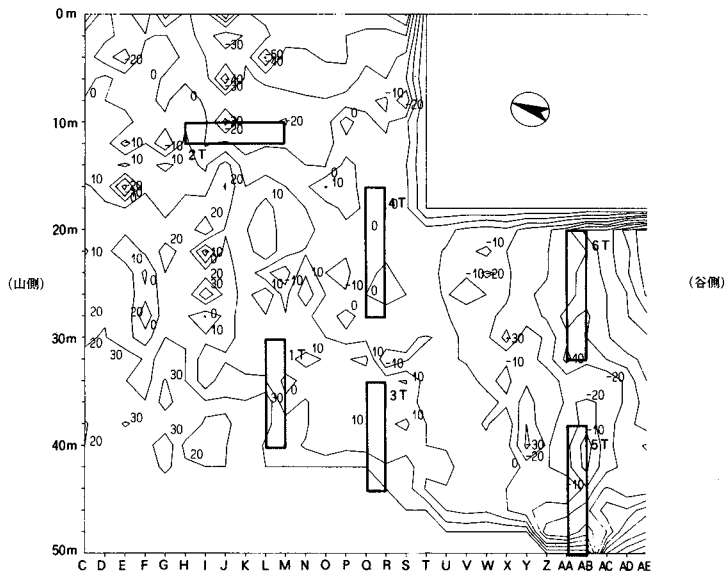


図3 2・3区磁気探査布図

で窯体の有無を確認しておいた方が良いと思われる箇所が何箇所かある。

電気探査 電気検査の作業は、発掘調査の直前に実施した。結果的には明確な成果をあげることができなかった。しかし、将来実施工具の改良や解析技術が進歩すれば有効な結果を得られるものと考えられる。

分布調査 磁気探査対象地に対する低雑木の伐採や清掃作業によって露出した地表を十分に観察した結果、発見し確認できた新資料について追報しておく。

第1地区 窯1の南側10 m程度のグラウンド崖面上端部で薄い灰層と須恵器片を確認した。これは現状では窯1の灰層と別物とみるのが妥当と考える。加えてこの灰層の上方斜面には、窯1の灰層上方斜面の等高線に直行する長楕円形に類似した窪みが確認できる。この結果、第1地区には2基の窯体が残存している可能性が大きいといえる。なお、新たに確認した灰層は、残存状況からみて灰層本体はグラウンド造成時に破壊されていると思われる。

第2地区 特になし。

第3地区 T.P.14の下方にある竹藪を清掃後、2箇所須恵器の小片を各1点ずつ採取した。少量とはいえこの地区に未発見の窯が存在している可能性が強くなった。

**小結** 分布調査の成果、追報した新資料及び磁気探査の結果を踏まえて、3地区に対する調査方法及び調査目的を示す。

第1地区 複数の窯体が残存している可能性が大きく、両者の窯体構造を解明し、近地点に存在する窯の変遷内容を明らかにする必要がある。窯1とした窯に伴う灰層は比較的残存状況も良好である。灰層の堆積状況を明らかにし、窯体中・灰層中に含まれる全遺物を層位に基づき採取する。窯体出土遺物・灰層出土遺物などにより、窯の操業年代や時間幅、規模などを明らかにする。このため、第1地区では両窯推定位置及び灰層を含めた地区南半を中心に全面発掘が必要と考える。

第2地区 窯2とした窯の推定位置及び灰層を含む斜面を第1地区同様に全面発掘する必要があると考える。さらに地形上、窯体の存在する可能性がある対面する斜面に2箇所程度トレンチを設定し確認調査を実施しておく必要がある。

第3地区 磁気探査の結果、確認調査が必要とされた地点を含め、遺物採取地点及び周辺地形からみて最低6箇所程度の地点で遺構（窯・工房など）の有無を確認するトレンチが必要と考える。

(平安京調査会 小森俊寛・上村憲章)

註1 磁気探査と電気探査は奈良国立文化財研究所の西村康氏にお願いした。

## 13 円宗寺跡 (図版 47～49)

**経過** 京都市右京区御室小松野町, 御室芝橋町, 御室大内町で公共下水道工事に伴う立会調査を行った。

調査地は平安時代中期から後期にかけて双ヶ丘北東部一帯に建立された「円」の字を冠した4つの御願寺・四円寺の一つである円宗寺跡に推定される。調査地の北接地には平安時代



図1 調査位置図 (1 : 5000)

中期に建立された仁和寺の伽藍が規模を縮小しながらも, 広域に広がっている。調査の主要な目的は, それらに関連する遺構・遺物の検出及び遺物包含層の広がり確認とした。

調査方法については, 工事掘削前に立会調査が実施される道路に, まず 10 m 間隔を基本に地層断面実測点を設定し, その各測点の水準測量を行った。それを元に, 掘削時には土層及び遺構断面図の作成, 写真撮影などの記録作業を行った。

**遺構** 平安時代中期から江戸時代にかけての遺構及び遺構包含層を検出した。検出した遺構の総数は 22 基で, 時期別にみると平安時代中期・後期のものが 15 基と大半を占める。各遺構の検出地点については (図1) に示した。また遺構の性格・規模などに関しては (表1) にまとめた。ここでは平安時代の主要な遺構について概述する。

平安時代の遺構は中期と後期の2つに大別できる。中期の遺構には調査区域中央部やや東で検出した流路 1・2・6 がある。3つの流路は南北方向に流れを持つ同一のものである。No. 6の地点以北で幅が広がるが, 流路幅は 20 m 以上, 深さ 0.7 ~ 1.35 m である。流路と同時期の遺構には土塋 4・11 が東半部に位置する。

後期の遺構は, 5・8・9・12・15・16の土塋があげられ, いずれも東半部に集中している。土塋群の南では井戸 14 を検出した。井戸は一辺 1 m の方形で, 木枠組みであった。西半部で

は溝 20・21・22 を検出した。それぞれの規模は類似しており、堆積状況も近似していたことから、同一の南北溝と判断した。溝 7・8 についても、同一の東西溝の可能性が高く、南北溝と一体をなす区画溝としてとらえることができる。

平安時代の遺物包含層の分布状況は（図 1）で示したように、遺構の密度と同様に調査区東半部に分布密度は高く、さらに調査区外の南へ延びる様相を呈する。

表 1 検出遺構一覧表

番号	遺構	規模	座 標	標 高 (m)	遺 物	時 期	備 考	
1	流路	21.50	0.75	X-108,150 Y- 25,840	72.61	土師器, 須恵器, 瓦 (緑釉瓦含む)	平安時代 中	南北堀状遺構。瓦多量に 含む。
2	流路	23.50	0.70	X-108,194 Y- 25,830	68.05	瓦	〃	1 と同一の南北堀状遺構。
3	溝	1.40	0.40	X-108,190 Y- 25,790	68.09	瓦	平安時代	南北溝。
4	土壇	3.60	1.10	X-108,181 Y- 25,720	68.63	土師器, 瓦	平安時代 中	
5	土壇	1.50 ~	0.25 ~	X-108,281 Y- 25,747	65.34	土師器, 陶器, 瓦	平安時代 後	瓦多量に含む。
6	流路	20.00	1.35	X-108,294 Y- 25,810	61.90	土師器, 緑釉陶 器	平安時代 中	1・2 と同一の南北堀状遺 構。
7	溝	1.40	0.30	X-108,150 Y- 25,879	71.76	陶器	近世	寺域北限の東西溝か？
8	溝	1.80	0.45	X-108,141 Y- 25,802	71.18	土師器, 瓦	平安時代 後	7 と同一の東西溝か？
9	土壇	6.80 ~	0.46	X-108,210 Y- 25,776	67.48	土師器, 瓦	〃	
10	井戸	1.10	2.00	X-108,218 Y- 25,775	66.69	土師器, 陶器	近世	素掘り。
11	土壇	3.45	0.70	X-108,232 Y- 25,774	64.17	土師器, 瓦	平安時代 中	
12	土壇	5.50	0.34	X-108,250 Y- 25,700	64.89	土師器, 須恵器, 瓦	平安時代 後	土師器多量に含む。
13	溝	1.15	0.20	X-108,276 Y- 25,768	63.87	瓦	〃	東西溝。
14	井戸	1.0	2.10	X-108,297 Y- 25,767	62.88	土師器	〃	木枠。
15	土壇	2.30	0.35	X-108,200 Y- 25,755	65.54	土師器, 陶器, 瓦	〃	瓦多量に含む。
16	土壇	3.20	0.35	X-108,273 Y- 25,753	65.45	土師器, 須恵器, 瓦	〃	瓦多量に含む。
17	溝	1.18	0.35	X-108,190 Y- 25,935	71.15	陶器, 瓦	近代	南北溝。
18	溝	0.90	0.35	X-108,240 Y- 25,973	68.16	土師器	平安時代 後	寺域西限の内南北溝か？
19	溝	0.90	0.35	X-108,150 Y- 25,973	72.42	陶器, 瓦	近世	東西溝。
20	溝	1.70	0.52	X-108,160 Y- 25,971	71.55	土師器, 須恵器, 陶器, 瓦	近世	7・8 と同一の東西溝か？
21	溝	1.00 ~	0.12	X-108,190 Y- 25,970	71.55	なし	不明	寺域西限の南北溝か？
22	溝	1.45 ~	0.51	X-108,232 Y- 25,970	70.05	土師器, 瓦	平安時代 後	寺域西限の南北溝か？

**遺物** 出土遺物は遺物整理箱に123箱であった。遺物の破片総数は13402片で、その内訳は土師器2152片、黒色土器4片、須恵器24片、緑釉陶器10片、灰釉陶器1片、陶器90片、陶磁器14片、瓦10921片、塼50片、凝灰岩135片、金属製品1点である。統計比率は瓦が81%で極めて高く、次いで土師器が17%で、その他の土器類は1%に満たない。

出土した瓦のほとんどは平安時代に属し、中期と後期に分けられる。平安時代中期の瓦には緑釉瓦がある。緑釉瓦は208点を数え、流路1から一括で出土した。出土した緑釉瓦には軒丸瓦3点、軒平瓦3点、丸瓦163点、鬩斗瓦40点が認められる。特に軒丸瓦の中には二重圏線からなる単弁十葉蓮華文で、文様下方の花弁上に篆書体で「左」の字が陽刻されている特殊なもの（図2-1）も認められる。

平安時代後期の瓦は総数で10921片あった。出土地点別に数量を比較すると2トレンチ包含層が4539片と最も多く、次いで4トレンチの包含層が1678片・土壌5から1564片と続く。いずれも調査区域東半部にあたる。軒瓦の総出土数は64点あった。出土地点別にみると4トレンチ包含層から30点、次いで2トレンチ包含層から10点と、瓦総数の比較傾向と類似している。なお、軒瓦の産地は、栗栖野系11点、南都系9点、丹波系9点、播磨系7点を数える。

表2 出土軒瓦一覧表

番号	瓦当の種類・文様	成形・調整手法	胎土・色調・焼成	産地	備考
1	緑釉軒丸瓦 単弁十葉蓮華文	瓦当部と丸瓦部とは共土で成形する一本造り技法によっている。	胎土は良好、焼成はやや軟質。	不明	文様下方の花弁上に篆書体で「左」の字が陽刻されているが、大部分剥落している。
2	軒丸瓦 複弁蓮華文（八葉か？）	瓦当部がつぶれている。一本造り技法による成形。	砂粒、小石含む、淡黄褐色、軟質。	不明	
3	軒丸瓦 複弁蓮華文	瓦当裏面は下端まで整然とした布目痕が筒から連続している。一本造り技法による成形。	砂粒、小石含む、淡黄褐色、軟質。	不明	
4	緑釉軒丸瓦 単弁蓮華文	瓦当部上端はタテ方向のケズリを施す。	細かく若干の砂含む、淡黄褐色、やや軟質。	不明	
5	軒平瓦 均整唐草文	瓦当端部と外縁部に丁寧なケズリ痕が残る。	やや粗い、黒灰色、硬質。	小野瓦窯	
6	軒平瓦 偏行唐草文	瓦当上端から平瓦部まで布目痕が認められる。	やや粗い、黒灰色、やや軟質。	森ヶ東瓦窯	
7	軒平瓦 均整唐草文	瓦当下端平垣部はヨコ方向のケズリを施す。屈曲部はナデ調整。	やや粗い、灰黒色、やや軟質。	平岡八幡宮 東横瓦窯	
8	緑釉軒平瓦 唐草文	瓦当部外縁部はケズリ痕が認められる。	良好、やや軟質。	不明	
9	軒平瓦 均整唐草文	瓦当端部及び外縁部にケズリ痕が残る。	やや粗い、黒灰色、やや軟質。	小野瓦窯	No.5と同文。
10	緑釉軒平瓦 唐草文	瓦当部外縁部にわずかにケズリ痕が残る。	小石含む、やや軟質。	不明	
11	軒丸瓦 単弁十一葉蓮華文	瓦当部表面に暗灰色系の自然釉附着。瓦当部外縁部にケズリ痕が残る。	石粒多し、灰白色、硬質。	播磨系	

12	軒丸瓦 複弁八葉蓮華文	摩滅著しい。	やや粗い、灰黒色、 硬質。	丹波系	
13	軒丸瓦 単弁八葉蓮華文	瓦当部周縁はナデによる調整。	砂粒含む、青灰色、 硬質。	不明	小型の瓦。
14	軒丸瓦 複弁八葉蓮華文	瓦当部外縁部はケズリ痕が残り、裏面等は粗いナデによる調整。	砂粒含む、青灰色、 硬質。	播磨系	
15	軒丸瓦 複弁蓮華文	瓦当部裏面はナデによる調整。	良好、灰黒色、軟 質。	南都系	
16	軒平瓦 唐草文	瓦当部裏面、平瓦部は粗いヨコナデによる調整。	石粒多し、淡灰色、 硬質。	播磨系	
17	軒平瓦 唐草文	瓦当部外縁部及び平瓦部表面は、ヨコ、タテ方向のナデ調整、裏面はタタキ目を消すためのナデ調整。	石粒多し、青灰色、 硬質。	播磨系	
18	軒平瓦 唐草文	瓦当部表面頸部に横位の縄タタキを施す。瓦当部は折り曲げにより形成されている。	良好、黒灰色、や や軟質。	丹波系	
19	軒丸瓦 四葉宝相華文	瓦当部側面は横方向のナデ調整、指紋残存。瓦当面に範傷2箇所認められる。	良好、青灰色、硬 質。	南都系	
20	軒丸瓦 複弁八葉蓮華文	瓦当部外縁部下端は横方向のケズリが施され、瓦当部裏面は指圧の痕残り。	砂粒含む、灰黒色、 硬質。	栗栖野瓦窯	瓦当面に範傷が斜方向直線に認められる。
21	軒丸瓦 複弁八葉蓮華文	瓦当部側面はケズリ痕が残存、裏面はナデ調整、一部指圧痕認められる。	砂粒含む、灰黒色、 硬質。	南都系	
22	軒丸瓦 複弁八葉蓮華文	瓦当部側面はケズリを施し、裏面等はナデ調整。	砂粒含む、灰色、 硬質。	南都系	
23	軒丸瓦 単弁十六葉蓮華文	瓦当部外縁部、及び裏面頸部はケズリが施され、その他は粗いナデ調整。	砂粒含む、灰黒色、 硬質。	南都系	
24	軒丸瓦 複弁六葉蓮華文	瓦当部側面、平賀部表面はケズリが施され、裏面等はナデ調整、指圧痕も残る。	砂粒含む、灰白色、 硬質。	南都系	
25	軒丸瓦 複弁蓮華文	摩滅著しい。	砂粒多し、黒灰色、 やや軟質。	不明	
26	軒丸瓦 複弁六葉蓮華文	瓦当部側面、裏面、平瓦部等にナデ調整が認められる。瓦当面2カ所に範傷がある。	良、黒灰色、やや 軟質。	不明	
27	軒丸瓦 単弁八葉蓮華文	著しく摩滅している。	石粒多し、黒灰色、 硬質。	不明	
28	軒丸瓦 複弁八葉蓮華文	瓦当部側面はケズリを施す。平瓦部側面にもケズリ痕は認められるが、他はナデ調整。	石粒多し、灰黒色、 硬質。	南都系	
29	軒丸瓦 三ツ巴文	瓦当部側面、裏面共に粗いナデ調整。裏面にしほり込み痕跡、そのための指圧痕がある。	石粒多し、灰白色、 硬質。	近京窯	瓦当部と平瓦部ははめ込みによる接合か。
30	軒丸瓦 複弁八葉蓮華文	瓦当部外縁部及び側面は丁寧なケズリを施す。その他はナデ調整。瓦当面1カ所に範傷がある。	石粒多し、灰黒色、 硬質。	南都系	
31	軒丸瓦 単弁十五葉蓮華文	瓦当部外縁部及び側面、裏面の一部までケズリを施す。その他はナデ調整、瓦当部に自然釉付着。	石粒多し、灰白色、 硬質。	播磨系	
32	軒平瓦 唐草文	瓦当部外縁部及び側面はケズリを施す。瓦当部裏面は顕著な横位のタタキ痕が認められる。	石粒多し、灰色、 硬質。	丹波系	
33	軒丸瓦 複弁蓮華文	破損著しい。	石粒多し、黄褐色、 軟質。	不明	
34	軒平瓦 右行唐草文	瓦当部外縁部及び側面はケズリを施す。その他は粗いナデ調整、瓦当部裏面に指圧痕残存。	良好、黒灰色、硬 質。	栗栖野瓦窯	平瓦部広端凸面側に、別粘土を盛り、頸部をさらに別粘土で補強している。
35	軒平瓦 唐草文	瓦当部外縁部及び側面は丁寧なナデ調整。その他は粗いナデ調整。	石粒多し、青灰色、 硬質。	播磨系	
36	軒平瓦 唐草文	瓦当部外縁部はケズリを施す。その他は粗いナデ調整。	石粒多し、青灰色、 硬質。	播磨系	



**小結** 調査で得た成果は大きく3点に大別することができる。まず第1点に緑釉瓦が多量に廃棄された流路を検出したことである。流路は調査区のほぼ中央部を流れ、上流は調査区外の仁和寺境内に位置し、下流は双ヶ丘裾部に推定できる。緑釉瓦が多量に出土した地点から調査区外北東約100 mに当る仁和寺境内北東隅で1976年に円堂院の発掘調査を当研究所が実施している。円堂院は延喜四年(904)仁和寺の一堂として建立され、緑釉瓦が葺かれていたこと<sup>註1</sup>が発掘調査で確認されており、また現在も当地付近に散布している。そのことから流路に投棄された多量の緑釉瓦は、円堂院廃絶後に廃棄されたものと考えられる。第2点に平安時代後期の遺構群を調査区東半部で集中して検出したことである。また、平安時代後期の瓦を多量に含む包含層も遺構と重なる状況で検出したことも付加し得る。東半部における平安時代後期の遺構及び包含層検出地点を面的にとらえんとすれば、各地点を一括することにより、出土遺物の性格からその範囲内に建物が想定できる。予想できる建物の性格などについての詳細な部分は、推定範囲内での発掘調査にその理解を預けるが、今回の調査で遺構・遺物包含層から出土した多量の瓦から、複数の主要な建物が調査区東半部に立地していたことが推定できる。第3点には平安時代後期の区画溝を検出したことである。溝は調査区西半部の南北方向と、北半部の東西方向で、北端部でつながることが判る。溝は西北に傾いており、現状でその傾きは、仁和寺の現東限にあたる南北道路と同じ傾きである。南北道路は当地一帯の「葛野郡条里」を踏襲していると考えられており、当溝がそのことを意識して設定されたか否かは興味深い。

円宗寺は延久二年(1070)後三条天皇御願寺として創設され、行幸・宗教行事などが盛大に催されたが、天福元年(1233)主要伽藍以外の堂舎が荒廃し、応安二年(1369)には大風で全壊している。<sup>註2</sup> 同寺の寺域については、古文献などの資料に欠け、四円寺中の他の寺との相対関係で類推されていた。しかし今回の調査成果により、同寺の堂舎位置・寺域比定が可能な考古資料を得ることができた。(加納敬二)

註1 木村捷三郎「仁和寺円堂院私考」『造瓦と考古学』真陽社 1977年

註2 杉山信三「第三章 仁和寺の院家建築」『院家建築の研究』吉川弘文館 1982年

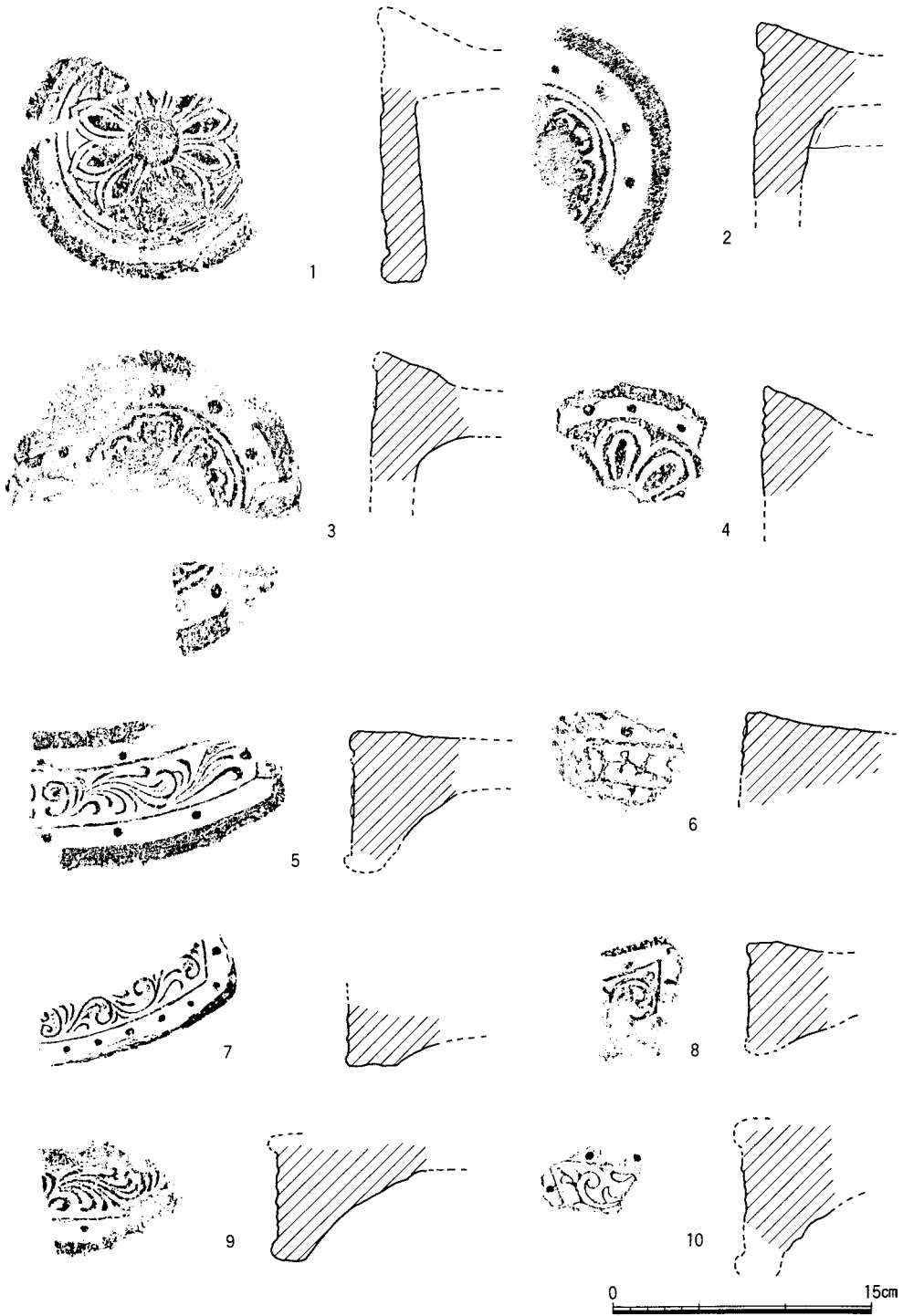


图2 出土軒瓦拓影・実測図 流路1 (1:4)

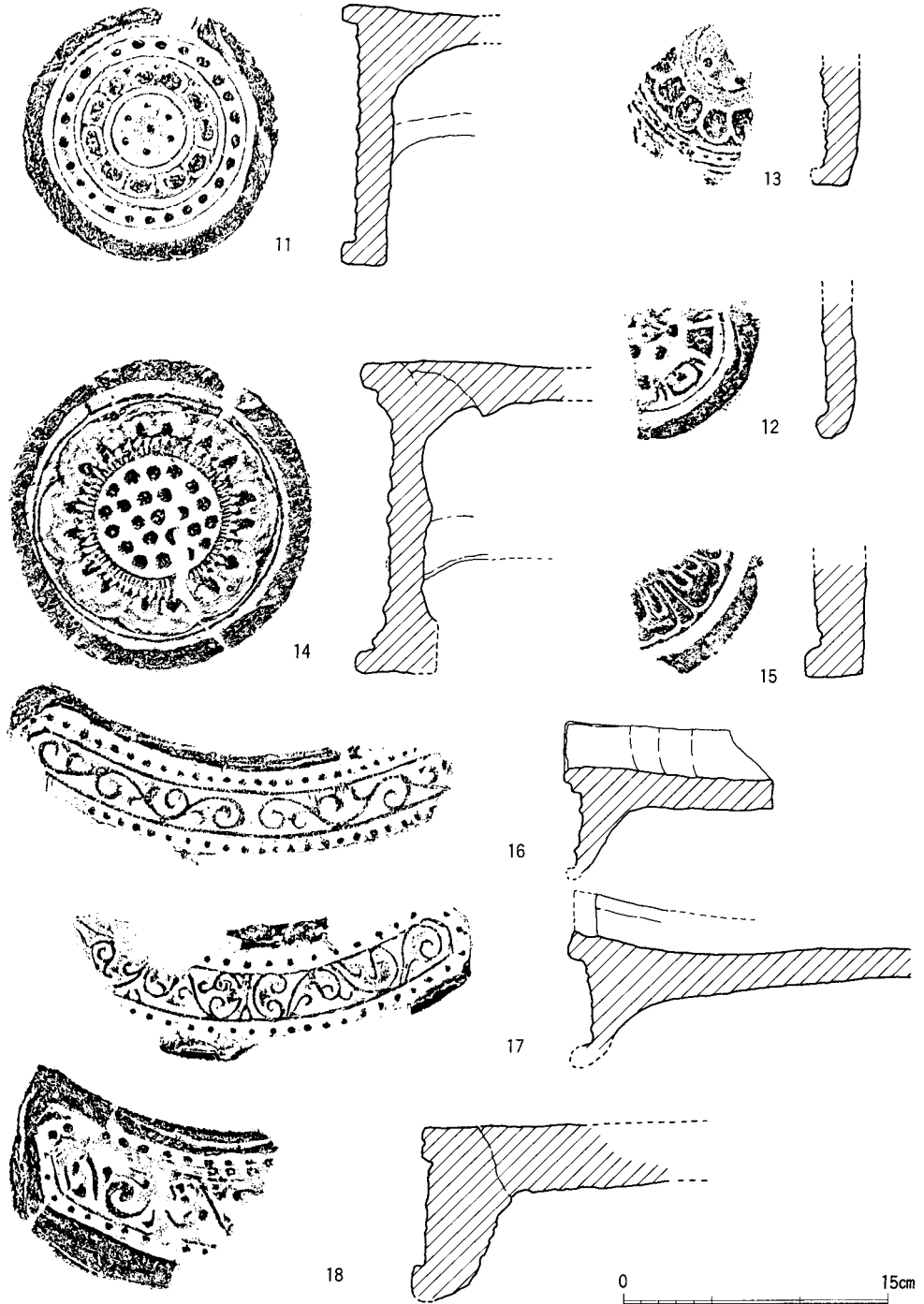


図3 出土軒瓦拓影・実測図 2トレンチ包含層 (11・12・16・17)  
土壌5 (13～15・18) (1 : 4)

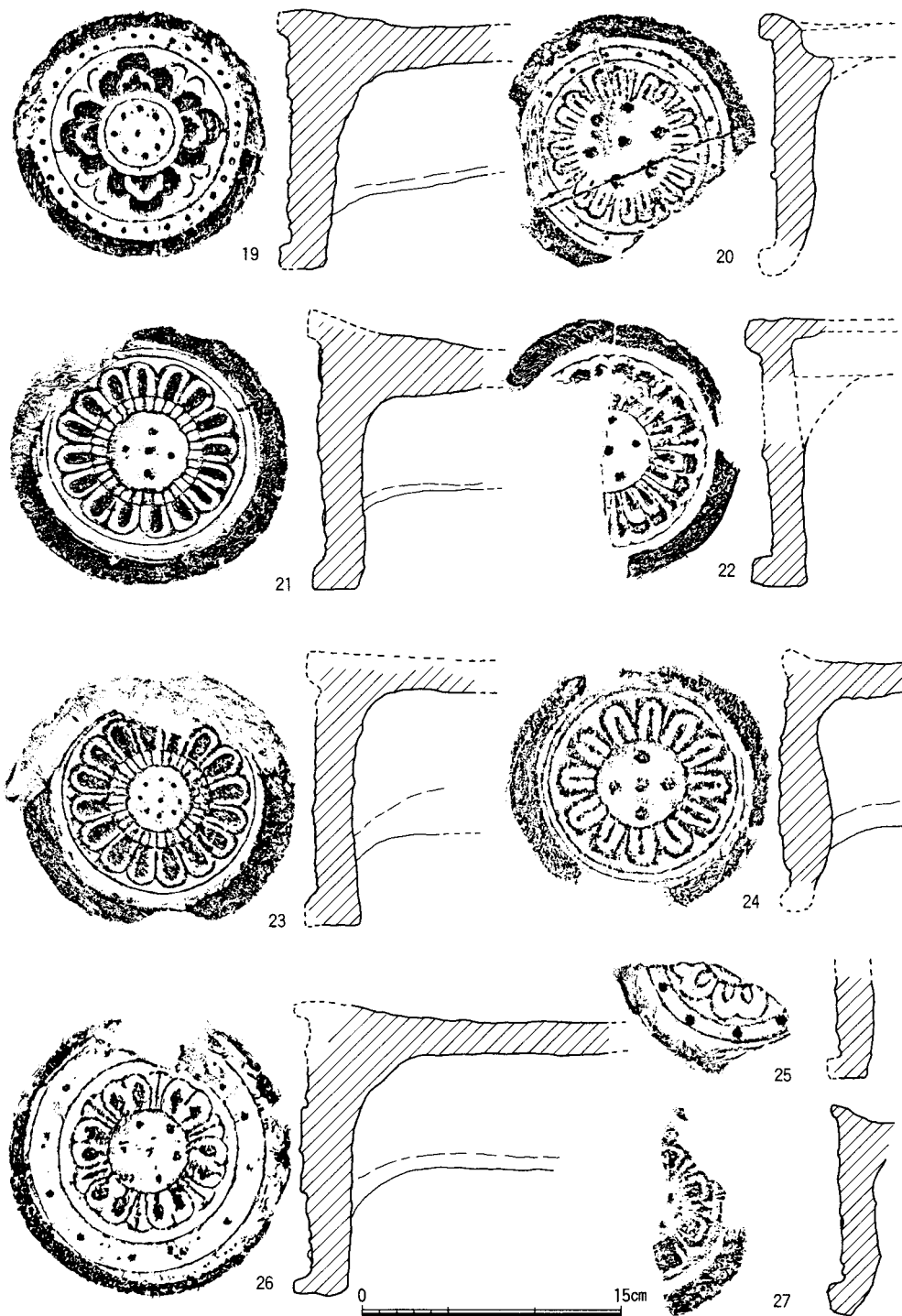


図4 出土軒瓦拓影・実測図 4トレンチ包含層 (1:4)

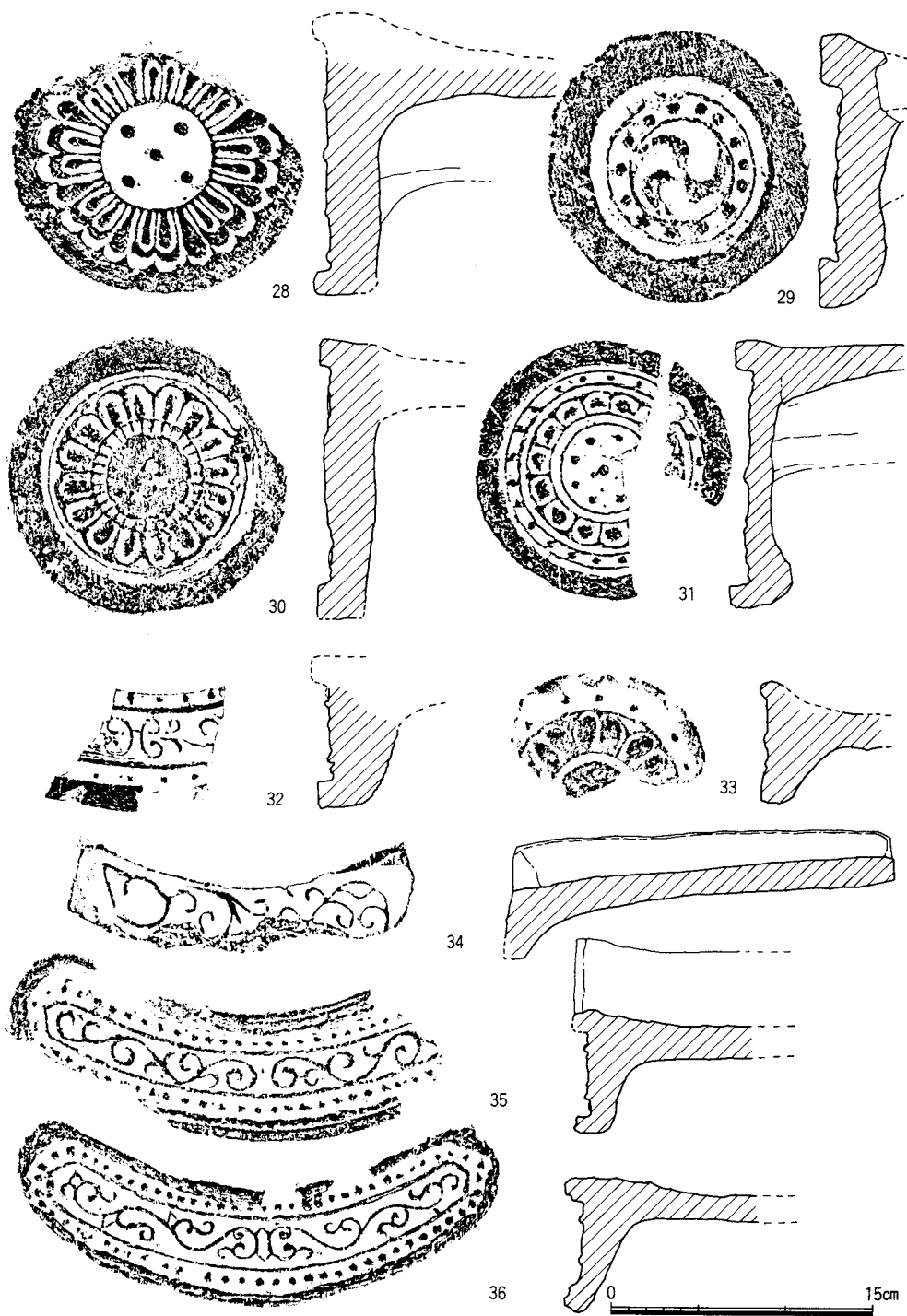


図5 出土軒瓦拓影・実測図 4トレンチ包含層 (28・30・31・34～36)  
9トレンチ包含層 (32・33) 溝16 (29) (1:4)

## 14 仁和寺院家跡

**経過** 西部第二排水区西部(第二)系統,常盤(その1)・常盤(その2)公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は,右京区常盤山下町,御池町,神田町,音羽町,一ノ井町,古御所町,宇多野御屋敷町で,一帯は仁和寺院家跡に推定されている。

調査の結果,仁和寺院家跡及び土師器窯に関連する遺構・遺物を検出した。調査期間は昭和62年1月1日から翌年3月31日までであった。

**遺構** 検出した遺構は,平安時代中期・後期,戦国時代,桃山時代,江戸時代,その他に分けられる。平安時代中期の遺構では,土壙と南北流路・溝・井戸・遺物包含層などを検出した。こ

のうち10世紀後半に属するものには,土壙1基と南北流路1条がある。11世紀前半に属するものは井戸2基・南北流路1条・遺物包含層などがある。

平安時代後期の遺構には,12世紀後半に属する溝3条・遺物包含層を検出した。

戦国時代及び桃山時代の遺構は,整地土層を検出したにとどまった。江戸時代の遺構には溝2条,遺物包含層などを検出した。17世紀前半に属すると考えられる。

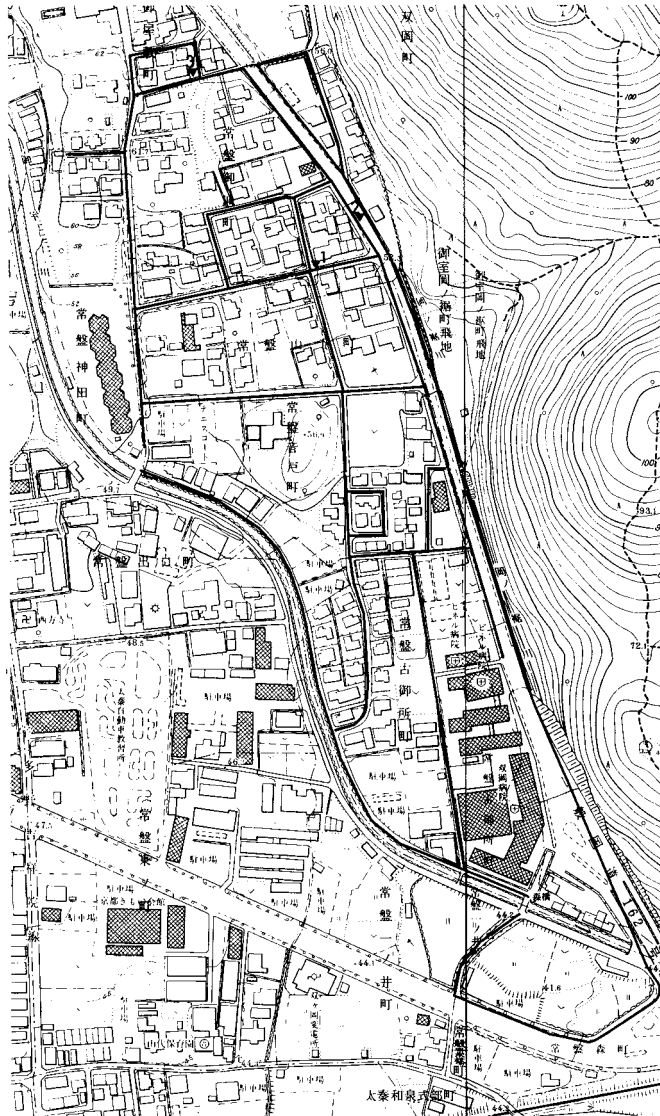


図1 調査位置図(1:5000)

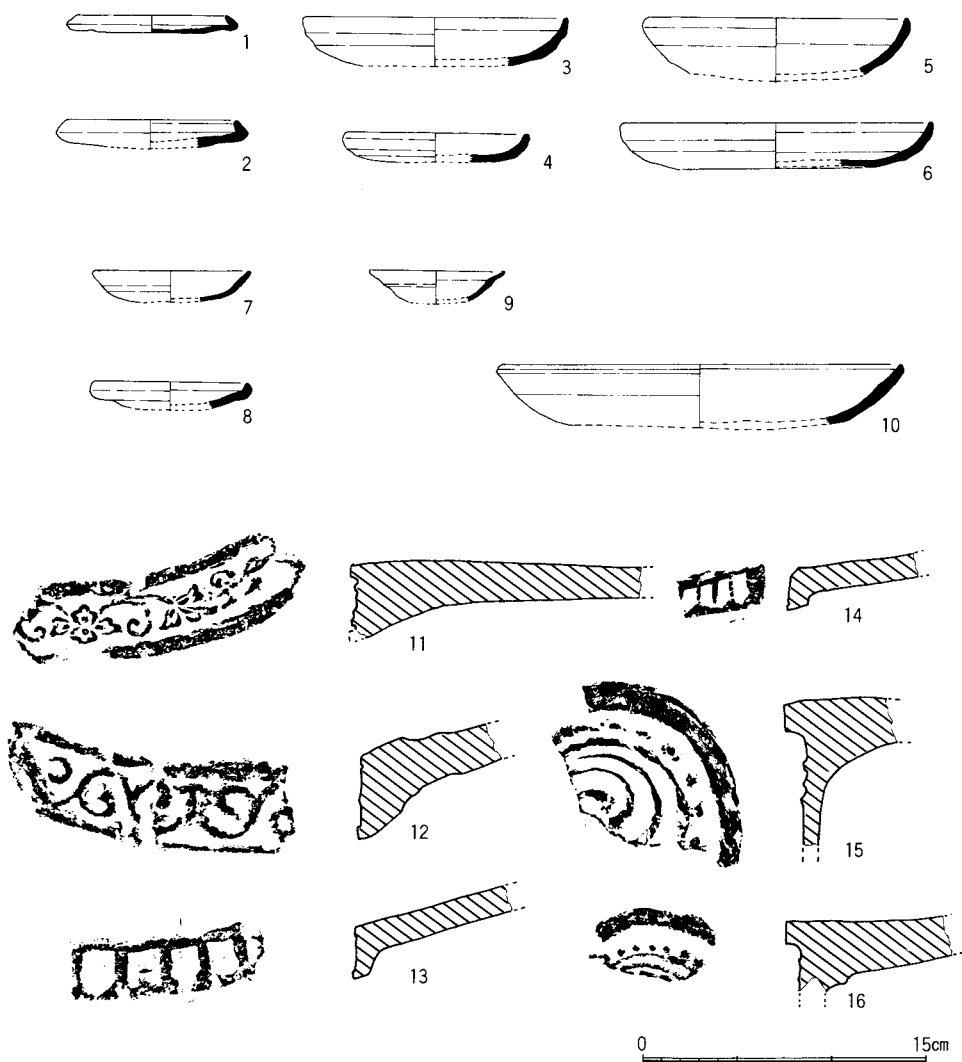


図2 出土遺物実測図・拓影（1：4）

**遺物** 平安時代中期の遺物は、10世紀後半の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、輸入陶磁器などが出土した。平安時代後期の遺物は、12世紀前半に属する多量の土師器皿と共に焼け石・焼土・炭片などが出土している。12世紀後半の遺物には、土師器、軒平瓦、軒丸瓦、鋳型片などがある。戦国時代の遺物にも炭片・焼け石・焼土を含む土師器皿が多量に出土する地点を確認している。桃山時代及び江戸時代の遺物には17世紀初頭と考えられる多量の土師器片、陶器、瓦などが出土している。

**小結** 調査は仁和寺院家跡のうち、大聖院及び真光院の跡と考えられる地区であった。

大聖院に関連する遺構・遺物では、12世紀後半に属する溝・土壇・遺物包含層や仏具製作に関係した鋳型片(図3)、瓦当(図2-11～16)、瓦片、土器などを検出した。常盤山下町西北部、常盤御池町南半地域にもこれらの遺構・遺物が集中しており、寺域の範囲を示しているものと考えられる。

真光院は、室町時代・桃山時代・江戸時代初期の遺構・遺物が集中する常盤山下町西南部、常盤古御所町西北部が寺域の中心と考えられる。

以上の他に、10世紀から11世紀に属する平安時代中期の遺構・遺物を検出しており、しかも大聖院・真光院両寺域にまたがる広範囲な地域で検出したことに留意する必要がある。特に10世紀代に遡る遺構・遺物は仁和寺創建期に近接したもので、関連が注目される。

また、常盤御池町北側の丘陵地で、12世紀初頭(図2-1～6)及び室町時代(図2-7～10)に属する土師器皿が多量に出土したが、両者ともに焼土・焼け石・炭片などを共伴しており、土師器窯に関係したものと考えられる。特に御室近辺では、12世紀初頭の土師器窯は未発見であり、貴重な資料といえよう。(平田 泰・加納敬二)

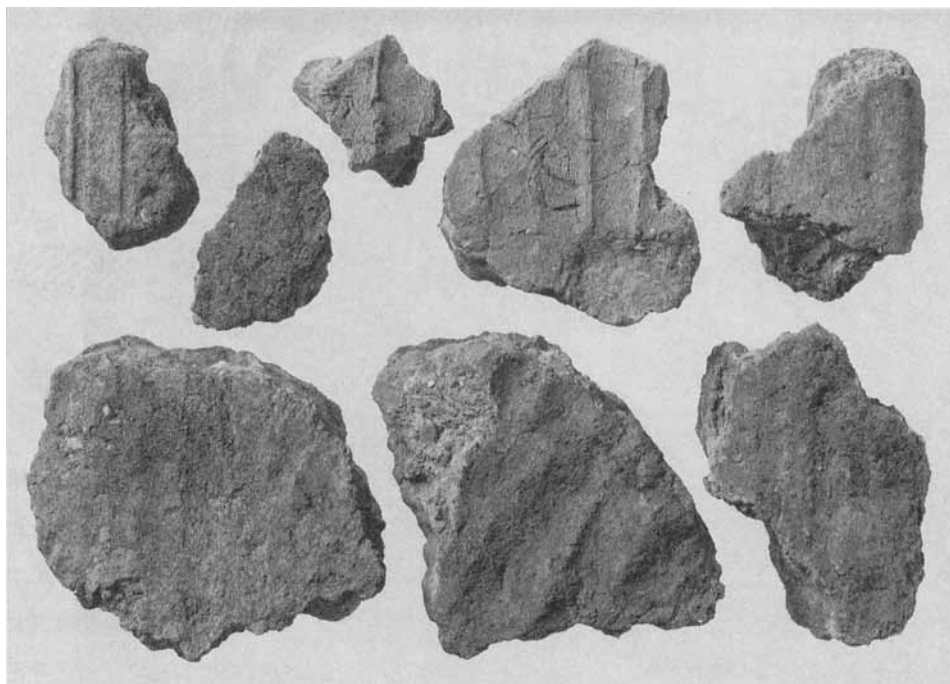


図3 大聖院跡出土鋳型片



## 15 巽1号墳

**経過** 巽1号墳は、京都市右京区山越巽町11-1他において宅地造成中に発見されたものであり、そのため調査はわずか3日間しかできなかった。

**遺構** 墳丘は完全に破壊されており、規模・形状は不明であるが、旧状からすると円墳の可能性が高い。内部主体は、ほとんどの石材が既に抜き取られていたが、わずかに基底石と抜取穴からみて、両袖の横穴石室であったと考えられる。石室の床面の削平も著しく、玄室部の西

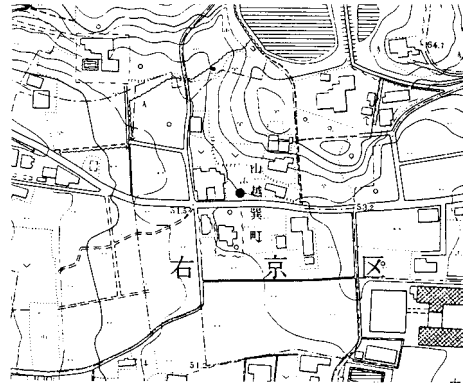


図1 調査位置図(1:5000)

側壁沿いと羨道の一部に板状の割石が敷かれた床面が残るのみである。復原値は玄室部の幅2.45 m、長さ4.6 m、羨道部幅1.65 m、長さ5.5 mを測る。

**遺物** 出土した遺物は、須恵器の杯身・杯蓋・高杯・裝飾付器台、刀子(20・21)、釘(32)、<sup>かすがい</sup>鏝(30)、鍬、馬具などの鉄製品がある。西側壁の奥壁沿いから杯身・蓋のセット、他は残存した敷石の上面から出土している。裝飾付器台は、浅い杯部の縁辺に甌4個と壺3個のミニチュアを配した器台で、杯中央部に剥離面があり、ここにも壺が取り付けられた可能性がある。鉄鍬は大きく短頸式と長頸式に分かれる。短頸式には、三角形(1~5)と柳葉形(6~9)がある。長頸式の鍬は、鍬身部の下に細長い<sup>のかつぎ</sup>篋被部が付いたもので茎部との境に刺篋被を有する。鍬身部は、柳葉式(10~12)と鍬身部と篋被部の境が不明瞭な無関のもの(13~19)がある。馬具には、<sup>うず</sup>金銅装の雲珠(34)、<sup>かこ</sup>飾金具(24~26)、<sup>しおで</sup>裝飾鋌(28)、<sup>しおで</sup>鉸具(29)、<sup>しおで</sup>鞍(22・23)などがある。雲珠は鉢が盛上った半球形で腹部に凹線装飾を施す。また脚と思われるほぼ同大同形の<sup>しおで</sup>一鋌半円形の金具が11個出土しているので、復原では12脚とした。鞍は帆立貝式に曲げた鉸具と座金具を組み合わせたもので刺金はない。

**小結** 巽1号墳の調査は短いものであったが、内部主体が両袖の横穴石室であることを明らかにした。また床面からは石棺とみられる凝灰岩片が、面取りしたものを含めて数個体確認している。このように、巽1号墳は大型の内部主体を持ち、金銅装の馬具・裝飾付器台などの優れた副葬品を有することから、嵯峨野地区でも有力な古墳だと思われる。(木下保明)

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 1987年報告

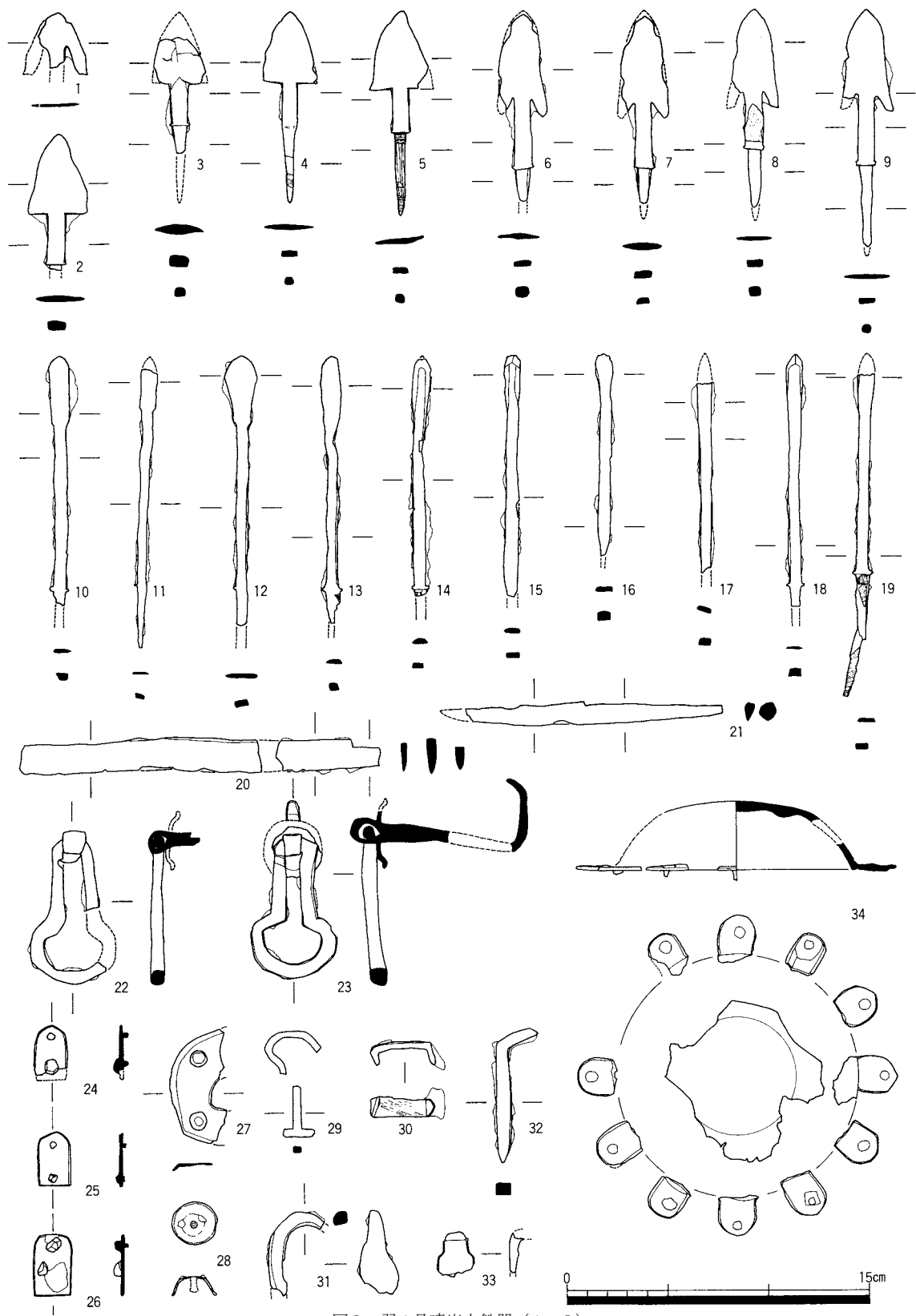


图2 巽1号噴出土鉄器 (1 : 3)

## 第3章 資料整理

### 1 遺跡測量

昭和61年度に行った遺跡測量の件数は71である。内訳は発掘調査41、試掘・立会調査19、その他11である。その他の中には写真測量での標定点測量及び撮影作業も含まれている。

遺跡測量に関しては、調査位置を平面直角座標系の数値で管理運営することを調査体制に組み入れた昭和56年度より本格的に開始した。しかしながら、作業を行う人により様々な方法で測量が行われてきたために精度のむらが生じたり、測量成果の管理に問題が生じてきた。これを解消し同一の測量精度を保証するため当研究所における遺跡測量の仕様を整備した。これは、測量作業の体制と考古学における遺構実測図の位置精度をどの程度にするかとの問題が絡んでくる。高精度の測量であれば作業時間に問題が生じ、簡単なもの過ぎると位置精度に問題が生じることが考えられる。我々はそれらを考慮の上、公共測量の3～4級基準点測量を仕様の目安とした。測量の方法は基本的に開放型のトラバースとし、路線の辺数が3辺を越える場合は単路線の結合型トラバースとした。水平角観測は正反2対回法で、水平目盛位置は0度と90度とし、観測における誤差の許容範囲は倍角差30秒以内、観測差20秒以内とした。鉛直角観測は正反1対回法で、高度定数の較差30秒以内とした。距離測定は1セットを3回読みとし2セット行い、1セット内の較差が2cm以内、各セットの較差が2cm以内とした。また、単路線方式の場合の点検計算における誤差許容範囲は、方向角の閉合差 $20'' \sqrt{n}$ 以内、水平位置の閉合差 $2.5\text{cm} \sqrt{N \Sigma S}$ 以内、標高の閉合差 $15\text{cm} \Sigma S / \sqrt{N}$ 以内とした。nは測角数、Nは辺数、 $\Sigma S$ は路線距離(km)である。観測機材は2級トランシット及び直読式の光波測距儀を使用している(一体型のものである)。

京都市内には昭和52・53年度に平安京域を中心にした地域に遺跡発掘調査基準点と称する遺跡測量のための1級基準点が公共建物の屋上に35点設置された。他に、国土地理院が管理している三角点、京都市所有の1級基準点が100点程度あり、これらの基準点を利用し遺跡測量を行っている。作業にかかる時間的なものは、基本的に開放型のトラバースであること、基準点から調査地点までの距離が比較的短いこと、標高も間接水準で行うこと、計算・カード化をパソコンで行っていることから、測定間の移動を含めても観測作業に半日程度、計算、カード作成に1時間程度で終了する。すなわち、1調査に対しての遺跡測量は1日の測量作業で全てが終了している。実作業に関わる人員は専従で2名である。調査地での遺方測量は現場担

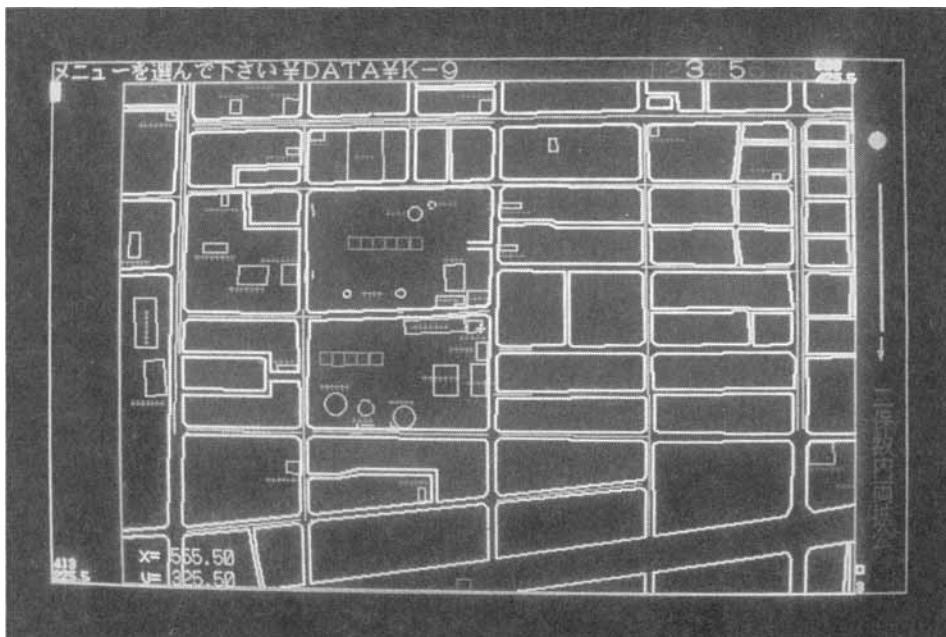
当者に任せている。

(辻 純一)

## 2 コンピュータ

今年度も基本的にオフィスコンピュータによる入力作業を中心に進行した。入力の中心は調査カードと写真データである。入力件数は調査カードが903件で合計7851件に達した。写真データが4×5inのもので約18000件である。この他に、保存処理資料用にパソコンを導入し、データ処理化を開始している。

近年はパソコンもかなり性能が向上し、現在稼動しているオフコンの問題点があらわれてきている。まず文字での検索ができないこと。ネットワーク機能がないこと。容量が限られること、などがあげられる。一方、研究所内の体制の問題としては、遺物や遺構などの多量なデータに対する入力体制が整っていないことがあげられる。この問題は根底からのもので、実際にどのようなデータが、ほんとうに必要なものであるのかを見直す時期にきているようだ。



地図データの出力例

そのような状況のもと、オフコン上のデータを一部、パソコンに移し変えて使用している。現在稼動している作業内容は次のものである。

1. 調査カード（メインデータベース）の入出力
2. 測量計算・カード作成
3. 各種データベース化（写真・保存処理・測量）
4. 写真測量データによる遺構平面図作成（修正・出力）
5. 地形解析・数値解析（数値データによる等高線作図など）
6. 文書作成 （辻 純一）

### 3 写真撮影

これまでは撮影室（スタジオ）としては出入口が狭く大型の資料搬入が困難であった。その上、暗室と共用部分もありスタジオとしての使用可能面積も狭小であった。また二階という条件のために、広い撮影場所を必要とする遺物の集合や重量のある石仏・大甕などの運搬も困難で撮影に不都合を感じていた。これらを解消するために研究所設立10周年記念として作成した『平安京跡発掘資料選（二）』の撮影を契機として9月に収蔵庫二階部分に全面的に移設した。ここはエレベーターが装備され、これまでより面積も約60㎡と広く、天井もわずかであるが高く（310cm）、現時点での研究所内では撮影室としての条件は最良と思われた。俯瞰撮影台を使用する部分の天井部に、表面を水生黒ペンキで塗布した厚さ3cmの発泡スチロール板を水性ボンドで接着することにより、天井の補強と撮影台ガラス面への反射をなくす工夫もした。これによって前撮影室は暗室、写真整理室として利用することになった。

パソコンによる写真登録台帳の作成、データベース構築は今年度も継続して行っている。昭和62年3月31日での4×5in.判のデータ量は21500余件である。ロールフィルムのデータ量は11750余件である。

今年度の他機関からの委託撮影は以下の通りである。

財団法人 大阪市文化財協会	遺物写真撮影
財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター	遺構・気球による撮影
長岡京市 教育委員会	〃 及び遺物写真撮影
株式会社 ミラノ工務店	空中写真撮影

（牛嶋 茂）

## 4 保存科学

### 1 作業の概要

昭和 61 年度に下鳥羽収蔵庫で行った、小型木製品の整理作業の結果を報告する。整理作業の概要は以下の通りである。

発掘調査で出土の木製品  
コンテナ・直出しの下鳥羽収  
蔵庫搬入

パック

遺構・層位・日付け分類

品目別に写真単位を基本と  
した実測・略図・計測記録  
の作成分類

略図・計測済の木製品を写  
真単位で穴あきフィルムに  
いれて封入する。

写真単位で写真撮影

PEG処理

収納管理

木製品台帳作成

(1) 現場作成の台帳をパソコンに入力し、量により組替えと整理方法を検討する。

(2) コンテナ収納の木製品を全てポリエチレンフィルムでバックして、軽量化、組替えの簡易化を図る。

(3) 遺物台帳を参照して遺構・層位・日付けごとに分類して組替えた後、コンテナを深いコンテナに替え、収納容量を減らす。

(4) 品目別に整理し、品目ごとに完形のものから並べ、写真1カット分の略図を作成して個々の計測を行う。実測が必要なものは単品で扱う。

(5) 略図を単位とするポリエチレンフィルムの収納袋を造り、整理番号順に収納する。袋には通水性を持たせ、穴をあける。(PEG含浸処理の準備)

(6) 略図・計測済の製品を略図順に並べ写真撮影する。実測した製品は単品で、漆器はカラーで撮影する。

(7) 穴あき袋に封入したものはそれだけで、実測したものは実測したもので1回の保存処理工程としそれぞれ処理期間、最終濃度設定を変えて保存処理する。

(8) 保存処理終了の木製品は下鳥羽収蔵庫で保管する。保存処理した木製品は展示などの必要がある場合のみ表面処理を行い、通常は行わない。

(9) 台帳カードに略図コピー、写真を貼り、必要事項を記入した上で調査遺跡を単位として製本する。3部台帳のコピーを作成して、所員の閲覧に供する。

## 2 自然乾燥した木製品の回復処置

自然乾燥して著しい収縮を起こした木製品の回復について、昭和62年2月に奈良国立文化財研究所で行われた保存科学研究集会で「木材の収縮とその回復について」『昭和61年度保存科学研究集要旨』で発表した。その成果に基づいて、自然乾燥済の井戸杵を全てこの方法で処理した。最も顕著な回復をした井戸杵を以下に示す。

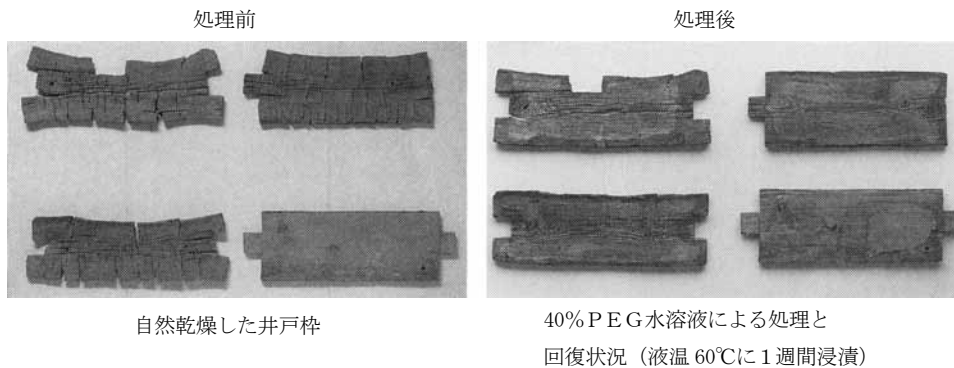


表1 自然乾燥した木製品のPEG 40%処理点数

調査記号	内容	点数	処理期間	調査記号	内容	点数	処理期間
84NG-KJ2	井戸杵	74	860327-0403	85HK-RE	井戸杵	72	870128-0204
HR-15	井戸杵	16	0327-0403	81HK-CK	井戸杵	34	0128-0204
へ専売	井戸杵	56	0327-0403	81HK-CF3	杭	23	0128-0204
へ壬生	井戸杵	107	0327-0403	81HK-SM5	杭	2	0128-0204
81HK-XC	井戸杵	28	0327-0403	81HK-CK	井戸杵	118	0204-0212
81KS-Z03	流木	9	0327-0403	RT-IR2	井戸杵	57	0204-0212
82NG-PV	井戸杵	149	0403-0412	81HK-CF3	杭	17	0204-0212
85NG-PV	杭	29	0403-0412	79MK-NK2	井戸杵	81	0212-0219
77KS-NZ	井戸杵	4	0403-0412	82HK-HN2	井戸杵	42	0212-0219
不明	桶	48	0403-0412	不明	井戸杵	43	0212-0219
HK-HK2	曲物	4	0412-0421	85HK-BD	井戸杵	12	0219-0408
80MK-XB	曲物	1	0412-0421	85FD-AB	井戸杵	28	0219-0408
77TB-TB77	曲物	6	0412-0421	84HK-KA6	井戸杵	39	0219-0408
不明	曲物	2	0412-0421	81HK-IA	井戸杵	72	0219-0408
85TB-TB112	杭	293	0421-0429	82HK-HK2	井戸杵	27	0219-0408
82HK-MH	井戸杵	76	0421-0429	立会	井戸杵	4	0219-0408
	小計	902			小計	671	

### 3 国庫補助による木製品のPEG処理

出土木製品の保存処理を国庫補助によって行った。最終PEG溶液濃度を100%に設定し、処理期間を約10箇月間とした。内容は以下の通りである。

表2 国庫補助による木製品のPEG処理

鳥羽離宮跡（第77次調査）		平安京左京九条二坊（84HK - BC）		そ の 他	
品 名	点 数	品 名	点 数	調査記号	点 数
櫛	3	人形頭	37	83HK-YC	100
下駄	7	人形	6	仁和寺子院	34
木球	10	齋串	6	平安学園	15
独楽	3	舟形	2	85BB-HR188	50
扇骨	18	箸	24	その他	32
箸	2	へら	35		
羽子板	1	刷毛	20		
陽物形	1	下駄	13		
顔形	1	糸巻	22		
卒塔婆	1	独楽	1		
呪符	1	荷札	62		
留針	3	底板	18		
槌の子	1	木札	20		
曲物底板	8	蓋板	43		
物差し	1	ひき物	23		
荷札	6	栓	22		
板絵	3	卒塔婆	1		
桶側板	8	漆器	173		
曲物	6	不明	198		
漆器	28				
不明	48				
小計	160	小計	726	小計	231

表3 保存処理年間工程

処 理 内 容 (月)	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
写真撮影・実測												
ラベル作成・梱包												
含浸槽に浸漬												
含浸槽の濃度管理												
含浸槽から取り出し												
表面処理												
処理後写真撮影												
処理台帳作成・整理												
処理後写真撮影												
処理台帳作成												
使用済樹脂類の廃棄												



#### 4 木製品の整理作業

木製品の略図・計測・写真撮影作業は現場の合間に不連続に行ったもので、その結果は以下の通りである。

表4 木製品の略図・計測・パック点数

調査記号	整理点数	整理期間
85HK-MN	250	860908-0910
82HK-FD	111	0911-0912
81HK-CK	1940	0913-1001
77HK-NE	753	1002-1022
85FD-AB	3680	1024-1213
85 F D -AC	2530	1213-870209
85HK-BD	245	870207-0209
83HK-KA2	864	0201-0221
合計	10373	

表5 木製品の35mmフィルムによる写真撮影

調査記号	フィルム番号	撮影期間
85HK-YC2	木 146-160	860902-0909
83HK-YC	木 161-178	0910-0919
81HK-YC	木 178-181	0919-0920
81HK-CK	木 186	0926
82HK-FD	木 181-184	0920-0922
85HK-MN	木 184-186	0924-0926
84NG-KJ2	木 186-187	0926-0929
77HK-NE	木 197-201	1022-1223
86TB-TB121	木 202-203	1223
86HK-RI	木 203-204	1226
85FD-AB	木 205-224	870109-0210
85FD-AC	木 224-233	0210-0221
84HK-BC	木 234-241	0302-0307
77TB-TB77	木 241-244	0307-0310

(岡田文男)

#### 5 遺物復原

復原作業(石膏・彩色)は『平安京跡発掘資料選(二)』, 国庫補助関係報告書用, 60年度年報用を主として行った。その内容は以下の通りである。この他に大阪府埋蔵文化財協会から委託された緑釉陶器3点がある。

調査記号	点数	調査記号	点数
HK-RE	22	RH-CA	20
HK-HK2	15	RH-KG10	12
HK-SM	54	RH-KG11	15
HK-WC	17	KS-IJ	51
HK-BC	12	KS-TS	13
HK-LQ	21	UZ-SW20	11
HK-IM	106	UZ-QD	1
HK-YC2	1	UZ-LS	10
HK-YC3	1	RT-NK23	7
HK-SG	15	RT-NK35	1
HK-ML	4	RT-NK56	1

HK-EN	5	RT-NK59	1
HK-FC	1	RT-NK67	15
HK-PD	1	FD-UA	14
HK-GK	1	FD-DM5	16
HK-QT	2	FD-DC	30
HK-CK	2	TB-TB102	22
HK-CF	6	TB-TB106	3
HK-EZ2	1	TB-TB119	8
HK-SE	1	TB-TB121	8
HK-KA	1	MK-OE	2
HK-BD2	1	MK-KB	8
BB-RH35	2	MK-NK	3
BB-KS	3	MK-HO5	1
BB-UZ11	3	NG-PV	24
BB-HQ43	43	NG-KJ2	30
BB-HR85	85		
		合 計	753 点

(牛嶋 茂)

## 6 報告書の刊行

昭和 61 年度は以下の報告書を刊行した。

- |                              |           |
|------------------------------|-----------|
| 1 『平安京跡発掘資料選 (二)』            | 1986 年11月 |
| 2 『平安京跡発掘調査概報』 昭和 61 年度      | 1987 年3月  |
| 3 『中臣遺跡発掘調査概報』 昭和 61 年度      | 1987 年3月  |
| 4 『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和 61 年度     | 1987 年3月  |
| 5 『法勝寺跡発掘調査概報』 昭和 61 年度      | 1987 年3月  |
| 6 『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』 昭和 61 年度  | 1987 年3月  |
| 7 『醍醐 1 号墳発掘調査概報』 昭和 61 年度   | 1987 年3月  |
| 8 『北野廃寺跡発掘調査概報』 昭和 61 年度     | 1987 年3月  |
| 9 『中久世遺跡発掘調査概報』 昭和 61 年度     | 1987 年3月  |
| 10 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和 61 年度 | 1987 年3月  |

## 第4章 事務報告

### 1 人事異動

#### (1) 役員の選任

理事長の選任 理事長 増田 駿 (昭和61年6月27日付)

専務理事の選任 専務理事 坂本 雅人 (昭和61年6月27日付)

理事の選任 理事 齊藤 武夫 (昭和61年6月27日付)

#### (2) 事務局職員の異動

採用 考古資料館 主任 牧 康司 (昭和61年4月16日付)

研究所 参事 清水 孝次 (昭和61年5月1日付)

昇任 調査部 調査課長 永田 信一 (昭和61年4月1日付)

調査部調査課 主任 長宗 繁一 (昭和61年4月1日付)

調査部調査課 主任 鈴木 久男 (昭和61年4月1日付)

調査部調査課 主任 家崎 孝治 (昭和61年4月1日付)

調査部調査課 主任 平方 幸雄 (昭和61年4月1日付)

調査部資料課 主任 牛嶋 茂 (昭和61年4月1日付)

転出 研究所 総務部長 勝西 温二 (昭和61年11月1日付)

退職 研究所 参事 清水 孝次 (昭和62年3月31日付)

研究所 調査部長 田辺 昭三 (昭和62年3月31日付)

### 2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所設立10周年記念事業の実施

#### (1) 中華人民共和国考古学者の招聘並びに学术交流及び視察

期間 昭和61年10月29日～11月8日 (11日間)

招聘者 中華人民共和国社会科学院考古研究所西安研究室

主任 馬 得志 先生

中華人民共和国陝西省文物局

副局長 陳 全方 先生

中華人民共和国陝西省博物館

館長 王 仁波 先生

訪問先 京都市役所、京都新聞社、奈良国立文化財研究所、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、国立歴史民俗博物館他

(2) 「日中交流講演会」の開催

日時 昭和61年11月3日(祝) 午後1時30分～4時30分

会場 京都産業会館 シルクホール (参加者 約700名)

講演 「唐長安城—発掘調査の総括—」 馬 得 志 先生  
「唐代日中交流史—長安を中心として—」 王 仁 波 先生  
「陝西省考古学事情」 陳 全 方 先生

(3) 「平安京跡発掘資料選(二)」の刊行、配布

(4) 写真展「'86発掘調査成果集」の開催

日 時 昭和61年11月1日～9日(8日間)

会 場 京都市考古資料館3階会場 (入場者 566名)

財団法人京都市埋蔵文化財研究所の設立10周年に当り、上記の記念事業を実施した。

まず、京都市の姉妹都市であり、平安京造営のモデルとなった唐の長安城を有する中華人民共和国陝西省西安市から馬得志先生他2名の考古学者を招き、学术交流及び講演会を実施した。招聘者のうち馬、王の両先生は昭和55年に続き2度目の入洛であった。

入洛後は、京都市役所、京都新聞社等の表敬訪問を始め、京都府埋蔵文化財調査研究センター、奈良国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館他各地の調査研究機関を訪問し、学术交流を行った。また、日中交流講演会ではそれぞれ最新の発掘調査成果をスライドで詳しく報告され、会場満員の参加者の好評を得た。

この他、昭和54年に発行した「平安京跡発掘資料選」に続き、その後の発掘資料をまとめた「平安京跡発掘資料選(二)」の刊行、配布を行った。

また、毎年、発掘調査成果を発表する写真展を例年どおり開催した。



日中交流講演会

## 3 普及啓発及び技術者養成事業

## (1) 現地説明会の開催

- ア 昭和61年9月21日 午前 「平安京西寺跡」 (参加者 約150名)  
 イ 同上 午後 「久我東町遺跡」 (参加者 約200名)

## (2) 埋蔵文化財専門研修への派遣 於・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

- ア 昭和61年11月27日～12月19日 (20日間)  
 「歴史時代遺跡調査課程」 調査部調査課 平田 泰

## (3) 研究会等への派遣

- ア 昭和61年4月15日 於・奈良国立文化財研究所  
 「第10回近畿地方出土木器の集成研究会」 調査部資料課 中村 敦
- イ 昭和61年4月26日・27日 於・駒沢大学  
 「昭和61年度日本考古学協会総会」 調査部調査課 吉村 正親  
 「 久世 康博
- ウ 昭和61年8月9日・10日 於・福井県立朝倉氏遺跡資料館  
 「シンポジウム・一乗谷と中世都市」 調査課長 永田 信一
- エ 昭和61年8月～昭和62年3月 於・京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 「長岡京連絡協議会」(毎月開催) 調査課長 永田 信一  
 調査部調査課 鈴木 廣司  
 「 上村 和直
- オ 昭和61年9月10日～12日 於・千葉県館山市  
 「全国埋蔵文化財法人連絡協議会」 調査課長 永田 信一  
 昭和61年度研修会」 総務部総務課主任 片山 巖
- カ 昭和61年9月13日・14日 於・東京都  
 「第7回日本貿易陶磁研究会」 調査課長 永田 信一  
 調査部調査課 堀内 明博  
 「 平尾 政幸
- キ 昭和61年10月11日・12日 於・大阪市  
 「第4回近畿地方埋蔵文化財担当者」 調査課長 永田 信一  
 研究会」 調査部調査課 主任 長宗 繁一

ク 昭和 61 年 10 月 17 日～ 20 日 於・青森県八戸市  
「日本考古学協会昭和 61 年度大会」 調査部調査課 吉 村 正 親  
百 瀬 正 恒

ケ 昭和 61 年 12 月 14 日 於・京都市伝統産業会館  
「第 9 回調査成果交流会—山背の寺院跡—」  
参加団体 京都府教育庁文化財保護・財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都大学埋蔵文化財研究センター・同志社大学校地学術調査委員会・財団法人京都文化財団・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・大山崎町教育委員会・財団法人長岡京市埋蔵文化財センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所（今年度担当）・京都市埋蔵文化財調査センター  
(参加者 約 70 名)

コ 昭和 62 年 2 月 22 日 於・向日市  
「スライドでみる乙訓の発掘」 調査部調査課 主任 長 宗 繁 一

サ 昭和 62 年 3 月 19 日・20 日 於・奈良市  
「第 3 回条里制研究会大会」 調査部調査課 久 世 康 博

4 シリア沖古代遺跡発掘調査への派遣 シリア沖古代遺跡発掘運営委員会  
日本放送協会

昭和 61 年 8 月 4 日～ 10 月 11 日 調査部長 田 部 昭 三  
調査部調査課 吉 崎 伸

## 5 京都市考古資料館の状況

### (1) 展示替えの実施

「群集墳コーナー」の新設，2階展示場カラーコルトン一部取り替え。

### (2) 「第 7 回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期間 昭和 61 年 8 月 6 日～9 日（小中学生とも各 2 日間）

#### ア「小学生親子教室」

第 1 日目 京都市社会教育総合センターでスライドを交えた学習，映画「大昔のくらし」鑑賞後，土器づくり。

第 2 日目 考古資料館見学後，映画「大枝山古墳群」鑑賞後，感想文作成。

- 参加者 78名 (39組)  
 イ 「中学生サマースクール」  
 第1日目 移築復原した御堂ヶ池1  
 号墳見学後、考古資料館  
 見学及び学習。  
 第2日目 平安京西寺跡現場で発掘  
 調査及び遺物水洗いの  
 実習。



中学生サマースクール

- 参加者 54名  
 ウ 「土器づくり作品展」の開催  
 期間 昭和61年8月22日～31日  
 会場 京都市考古資料館

- (3) 京都市考古資料館文化財講座の開催  
 会場 京都市考古資料館 3階会議室

第1回 昭和61年5月24日 (参加者 32名)

「平安京跡の発掘—右京二条二坊十五町の調査から—」

調査部調査課 平尾政幸

「平安京出土の折櫃・長櫃について」

調査部資料課 岡田文男

第2回 昭和61年6月28日 (参加者 45名)

「栗栖野瓦窯群の発掘」 京都市埋蔵文化財調査センター

北田栄造

「鳥羽離宮跡発見の装飾金具について」

調査部調査課 主任 鈴木久男

第3回 昭和61年7月26日 (参加者 58名)

「平安京を測る—平安京条坊の復原—」

調査部資料課 辻純一

「平安京右京八条二坊二町跡発見の木製品」

調査部調査課 辻裕司

第4回 昭和61年9月27日 (参加者 51名)

「新たに発見された前方後円墳について」

調査部調査課 丸川義広

「平安京承明門発見の輪宝、櫃について」

〃 梅川光隆

第5回 昭和61年10月25日 (参加者 75名)

「如意寺跡の発見」

京都市文化財保護課 梶川敏夫

「茶屋四郎次郎邸宅跡発見の陶磁器」

調査部調査課 平尾政幸

第6回 昭和62年1月24日 (参加者 83名)

「地下鉄烏丸線で発見された遺跡について」 平安京調査会 小森俊寛

「地下鉄烏丸線で発見された遺物について」 〃 原山充志

第7回 昭和62年2月28日 (参加者 61名)

「平安京の井戸」 調査部調査課 平田 泰

「法勝寺の瓦」 〃 上村和直

第8回 昭和62年3月28日 (参加者 59名)

「記者からみた京の埋蔵文化財」 京都新聞社社会部 記者 丸毛静雄

「鳥羽遺跡出土の形象埴輪について」 調査部調査課 堀内明博

京都市考古資料館では今年度から、新たな普及啓発事業として「京都市考古資料館文化財講座」を開講した。これは、埋蔵文化財研究所が実施している発掘調査の成果を、実際に調査を行った調査担当者が報告を行うもので、いわば、生きた調査成果を速報的に市民に対し、公開することを目的とするものである。講座は、原則的に毎月、第4土曜日に2つのテーマで開催することとし、また年数回は外部からの講師による報告も行うこととした。今年度は、計8回の講座を開催したが、毎回多数の応募者があり好評を得ている。

(4) 展示パンフレット等の発行

ア 入館案内のパンフレット (英文) 等

イ 小中学生のための入館案内

ウ 「平安京跡コーナー」展示図録

(5) 関係会議への参加

ア 昭和61年5月15日・16日 於：岡山美術館

「関西博物館連盟例会」 館長 小川 武

イ 昭和61年5月28日・29日 於：鳥取県立博物館

「関西博物館連盟例会」 主任 牧 康司

ウ 昭和61年11月13日・14日 於：福岡県立美術館

「全国博物館大会」 学芸員 峰 巍

エ 昭和61年12月19日・20日 於：東京都庁, 日本博物館協会

「江戸博物館建設に伴う情報収集等」 副館長 浪貝 毅

オ 昭和62年1月16日・17日 於：京都国立近代美術館

「日本博物館協会研究協議会」 主任 牧 康司



(6) 入館者の状況

ア 入館者数 15万人の突破

昭和62年1月15日、昭和54年11月の開館以来の入館者数が15万人を記録した。15万人目の入館者となったのは、折しも第5回全国都道府県対抗女子駅伝に京都市姉妹都市チームの一員として参加するため入浴中のソ連キエフ市、リュドミーラ・ニコラーエブナ・スダークさん(21歳)であった。これを記念し、スダークさんに対して記念品の贈呈を行った。



会館 15万人目の入館者

イ 入館者数

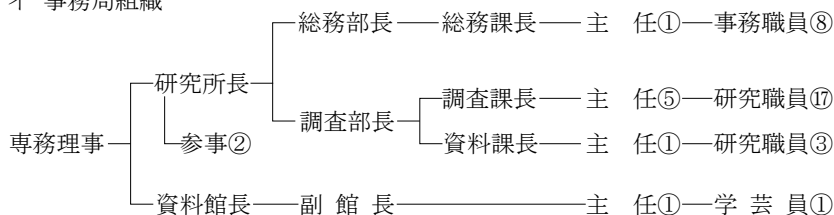
昭和61年度月別観覧者数一覧表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12歳未満	12才以上	12歳未満		
4	26	1,293	440	21	65	1,819	70.0
5	27	1,522	330	382	568	2,802	103.8
6	25	1,323	252	138	0	1,713	68.5
7	27	1,423	338	243	0	2,004	74.2
8	27	1,550	545	136	31	2,262	83.8
9	25	1,269	270	163	0	1,702	68.1
10	27	1,413	236	167	149	1,965	72.8
11	26	1,282	215	245	21	1,763	67.8
12	23	992	163	68	57	1,280	55.7
1	24	1,133	241	202	0	1,576	65.7
2	24	1,135	206	88	20	1,449	60.4
3	26	1,307	255	89	185	1,836	70.6
合計	307	15,642	3,491	1,942	1,096	22,171	72.2

(参考) 昭和60年度観覧者合計 22,674人 (一日平均74.3人)

6 組織および役職員 (昭和62年3月31日現在)

イ 事務局組織



ロ 役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長 専務理事 理事	増田 駿	京都市文化観光局長
	阪本 雅人	京都市文化観光局文化観光部参事
	上田 正昭	京都大学教授
	木村 捷三郎	(財)京都市埋蔵文化財研究所参事
	小島 泰男	京都市文化観光局文化観光部長
	齋藤 武夫	京都市文化観光局文化観光部文化財保護課長
	杉山 信三	(財)京都市埋蔵文化財研究所長
	田辺 昭三	(財)京都市埋蔵文化財研究所調査部長
	田中 琢	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
	角田 文衛	平安博物館館長
監事	西山 幸治	京都大学教授
	福山川 敏男	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
	井上 嘉久	(財)京都市文化観光資源保護財団専務理事
	松山 充	京都市会計室長

ハ 事務局職員名簿

	氏名	職名	担当		氏名	職名	担当
	阪本 雅人	専務理事 <small>(京都府)</small>		調査部 調査課	菅田 薫	研究職員	調査
	杉山 信三	研究所長(理事)			堀内 明博	〃	〃
	木村捷三郎	参事(理事)			百瀬 正恒	〃	〃
	清水 孝次	参事			加納 敬二	〃	〃
総務部 総務課	勝西 温二	総務部長 <small>(京都府)</small>	業務 〃 庶務 業務 〃 庶務 〃 業務		平尾 政幸	〃	〃
	片山 巍	主任			磯部 勝	〃	〃
	菅田 悦子	事務職員			梅川 光隆	〃	〃
	上村 京子	〃			辻 裕司	〃	〃
	村木 節也	〃			前田 義明	〃	〃
	本田 憲三	〃			久世 康博	〃	〃
	金島 恵一	〃			上村 和直	〃	〃
	小松 佳子	〃			丸川 義広	〃	〃
	夏原 美智代	〃	吉崎 伸		〃	〃	
	東 藤 昭	〃					
調査部 調査課	田辺 昭三	調査部長(理事)	調査	調査部 資料課	牛嶋 茂	主任	資料 測量 電算 保存 処理
	永田 信一	調査課長			中村 敦	研究職員	
	本 弥八郎	主任			辻 純一	〃	
	長 宗 繁一	〃		考古資料館	岡田 文男	〃	
	鈴木 久男	〃			小川 武	館長	
	家崎 孝治	〃			浪貝 毅	副館長 <small>(京都市埋蔵文化財調査センター所長兼任)</small>	
	平方 幸雄	〃			牧 康司	主任	
	吉村 正親	研究職員			峰 巍	学芸員	
	平田 泰	〃					
	木下 保明	〃					
鈴木 廣司	〃						

(村木節也)

付表1 昭和61年度発掘調査一覧表

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類
平安宮	1	61-001-01-02 中務省跡 86HK-LQ	上京区下立売通東入 下ル中務町	86.05.19 ～ 86.06.20	50㎡	ND64-1J35	京都市長 今川正彦	前田 吉崎	国庫 補助
	2	61-033 鼓吹司跡 86HK-NA2	上京区御前通一条下ル 東堅町 132-1 京都市立仁和小学校	86.08.07 ～ 86.09.10	420㎡	ND64-1A53	京都市長 今川正彦	辻 裕	
平	3	61-019 左京一条三坊九町 1 86HK-MP	上京区烏丸通下長者町上ル 龍前町 605	86.07.07 ～ 86.09.04	468㎡	ND64-2E33	(財)京都 私学振興会	本 平田 木下	
	4	61-028 左京一条三坊九町 2 86HK-MQ	上京区室町通上長者町下ル 清和院町 566, 568	86.07.28 ～ 86.09.13	165㎡	ND64-2E33	㈱山一不動産	本 平田 木下	
	5	61-025 左京四条三坊十六町 86HK-FH	中京区東洞院通三条下ル 三文字町 205	86.07.18 ～ 86.10.23	432㎡	ND64-4E45	㈱ユニテック	平安京 調査会	
安	6	61-052 左京四条四坊七町 86HK-FJ	中京区堺町通六角下ル 甲屋町 394	87.01.17 ～ 87.03.16	216㎡	ND64-4J12	㈱長谷川工務店	平安京 調査会	
	7	61-037 左京六条一坊八町 86HK-HK4	下京区中堂寺命婦町 1	86.10.01 ～ 86.11.15	1000 ㎡	ND74-1B55	㈱日本たばこ産 業	丸川	
	8	61-023 左京七条二坊 ・八条二坊 86HK-WE2	下京区住吉町から油小路町 (堀川通)	86.08.04 ～ 86.10.30 87.02.23 ～ 87.03.28	830㎡	ND74-1L13 ・H52	京都国道工事事 務所長	平安京 調査会	
	9	61-031 左京八条一坊八町 86HK-ZD	下京区観喜寺町 3 京都市立大内小学校	86.07.21 ～ 86.08.06	212㎡	ND74-3C 1 1	京都市長 今川正彦	平尾	
	10	610-003 左京八条三坊十六町 86HK-BF	下京区不明門通七条下ル 東塩小路町 735- 1	86.04.22 ～ 86.07.05	201㎡	ND74-4A14	㈱殖産住宅相互	平安京 調査会	
	11	61-048 右京三条二坊八町 86HK-RI	中京区西ノ京原町 97	86.12.08 ～ 87.03.23	857㎡	ND63-4D45	㈱リクルート コスモス	堀内 木下	
	12	61-045 右京六条三坊四町 86HK-OB2	右京区西院溝崎町 12 他 10 筆	86.11.19 ～ 87.02.07	942.5 ㎡	ND73-2D45	㈱ローム	平尾 梅川	
	13	61-034 右京七条一坊一町 86HK-SM6	下京区朱雀分木町 中央市場	86.08.25 ～ 86.10.23	1700 ㎡	ND74-1F53 ・J13	京都市長 今川正彦	平尾 加納	
	14	61-007 右京九条一坊十・十二 町 1 86HK-SG12	南区唐橋門脇町 29, 30, 31, 44 の一部	86.11.05 ～ 86.11.19	1360 ㎡	ND74-3E33	㈱総合地所	鈴木久 磯部 堀内	
	15	61-011-01-03 右京九条一坊十一町 2 86HK-SG13	南区唐橋西寺町 55-2	86.11.04 ～ 86.11.18	44㎡	ND74-3E43	京都市長 今川正彦	堀内	国庫 補助
白河街区	16	61-001-04-01 法勝寺跡 86KS-TS	左京区岡崎法勝寺町 30	86.04.01 ～ 86.05.15	247㎡	ND65-3B55	京都市長 今川正彦	辻 裕	国庫 補助
	17	61-005 尊勝寺跡 86KS-BD4	左京区岡崎西天王町 98 武徳殿弓道場	86.05.15 ～ 86.07.31	654㎡	ND65-3A13	京都市長 今川正彦	上村 辻 裕	
鳥羽離宮跡	18	61-001-03-01 第 120 次調査 86TB-TB120	伏見区竹田浄菩提院町 91-2	86.08.11 ～ 86.09.30	378㎡	ND84-3L12	京都市長 今川正彦	鈴木久	国庫 補助
	19	61-001-03-02 第 121 次調査 86TB-TB121	伏見区竹田浄菩提院町 92, 93, 99, 101	86.11.14 ～ 86.12.15	307㎡	ND84-3L11	京都市長 今川正彦	鈴木久 前田	国庫 補助
	20	61-001-04-08 下鳥羽遺跡 86TB-DH	伏見区下鳥羽城ノ越町 34-1, 34-2	86.11.17 ～ 87.01.20	348㎡	ND94-1P51	京都市長 今川正彦	辻 裕 磯部	国庫 補助

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類
中 臣 遺 跡	21	61-001-02-01 第66次調査 86RT-NK66	山科区西野山中臣町 58, 58-3, 59, 78-5	86.04.01 ～ 86.05.26	326㎡	ND85-2E24	京都市長 今川正彦	丸川 木下	国庫 補助
	22	61-001-02-02 第67次調査 86RT-NK67	山科区勤修寺東金ヶ崎町 10 西金ヶ崎町 48, 49, 64, 65	86.05.12 ～ 86.09.25	1700 ㎡	ND85-2F53	京都市長 今川正彦	平方 菅田	国庫 補助
長 岡 京 跡	23	61-006 左京南一条三坊 ・二条三坊 86NG-SD7	伏見区久我西出町 西羽東師川河川敷	86.12.10 ～ 87.02.07	298㎡	ND93-2F21	京都市長 今川正彦	丸川 上村	
	24	61-017 左京四条二・三坊 86NG-PV6	伏見区羽東師菱川町	86.12.01 ～ 87.04.25	1000 ㎡	ND93-4A53	京都市長 今川正彦	長宗 鈴木寛	
	25	61-002 久我東町遺跡 86NG-KJ3	伏見区久我東町	86.04.15 ～ 86.11.15	5000 ㎡	ND93-4P21	京都市住宅 供給公社	長宗 鈴木寛	
そ の 他 の 遺 構	26	61-004 植物園北遺跡 86RH-KA2	北区上賀茂桜井町～ 岩ヶ垣内町の北山通	86.05.13 ～ 86.08.09	700㎡	ND54-2F13	京都市交通局	平安京 調査会	
	27	61-056 中の谷窯 86RH-SC3	左京区岩倉木野町 137 京都精華大学校構内	87.02.28 ～ 87.05.30	770㎡	ND45-3A14 ND44-2K14	学校法人 京都精華学園	平安京 調査会	
	28	61-001-04-02 一乗寺向畑町遺跡 86KS-IJ	左京区一乗寺向畑町 17-1, 19	86.04.21 ～ 86.05.13	220㎡	ND55-1G54	京都市長 今川正彦	平尾 本	国庫 補助
	29	61-001-04-04 北野廃寺 1 86RH-KG10	北区北野紅梅町 49	86.05.08 ～ 86.05.31	173㎡	ND63-2D13	京都市長 今川正彦	吉崎 鈴木久	国庫 補助
	30	61-001-04-05 北野廃寺 2 86RH-KG11	北区北野下白梅町 39	86.06.02 ～ 86.06.30	206㎡	ND63-2D33	京都市長 今川正彦	本 木下	国庫 補助
	31	61-001-04-06 室町殿跡 86RH-CA	上京区烏丸今出川上ル 御所八幡町 110-5	86.09.25 ～ 86.10.11	29㎡	ND54-4I43	京都市長 今川正彦	辻 裕	国庫 補助
	32	61-024 慈照寺（銀閣寺）境内 86KS-GK2	左京区銀閣寺町 2	86.06.20 ～ 86.10.21	452㎡	ND65-1D34	宗教法人 慈照寺	前田 梅川 吉崎	
	33	61-058 大枝山古墳群 86MK-OH3	西京区御陵大枝山 2-13 他	87.02.27 ～ 87.04.04	40㎡		㈱西洋環境開発	丸川	
	34	61-035 天鼓の森古墳 86MK-KJ	西京区上桂森上町 26 京都市立桂中学校	86.07.29 ～ 86.09.13	384㎡	ND73-3A14	京都市長 今川正彦	丸川	
	35	61-055 南春日町遺跡 86MK-HO13	西京区大原野南春日町	87.02.21 ～ 87.03.28	400㎡	ND82-3H41	京都府知事 荒巻慎一	加納	
36	61-001-04-03 醍醐古墳群 86FD-DM5	伏見区醍醐内ヶ井戸町 16- 2	86.04.30 ～ 86.06.18	400㎡		京都市長 今川正彦	北田	国庫 補助	
37	61-001-04-07 中久世遺跡 1 86MK-AA	南区久世中久世 1 丁目 143	86.10.23 ～ 86.11.04	217㎡	ND83-4A31	京都市長 今川正彦	上村	国庫 補助	
38	61-027 中久世遺跡 2 86MK-TK	南区久世殿城町	86.08.01 ～ 86.09.06	192㎡	ND83-4A54	㈱竹中工務店	上村		
39	61-043 伏見城々下町 86FD-AD2	伏見区今町 659- 1 他	86.10.08 ～ 86.11.25	434㎡	ND94-2J51	京都市長 今川正彦	平田		
40	61-046 伏見城跡 86FD-AE	伏見区桃山町永井久太郎 56	86.12.01 ～ 86.12.18 86.12.15 ～ 87.01.16	465㎡	ND94-2H31	近畿農政局	平方		

付表2 昭和61年度試掘・立会調査一覧表

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	種類	委託者	担当
平安宮	1	61-026-01 梨本 86HK-SB001	上京区智恵光院通 下長者町上ル西辰巳町 辰巳児童公園	1986.09.09 ～ 1986.09.13	12㎡	試掘	京都市長 今川正彦	平安京 調査会
	2	61-039 (3) 平安宮主殿寮, 平安京左京北辺二坊 86HK-W-6・7	上京区 今出川通～中立売通 知恵光院通～堀川通他	1986.10.08 ～ 1987.03.28	1817㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	家崎
平	3	61-009 (1) 左京北辺三坊・一条三坊 86HK-W-1	上京区室町通 今出川通～下長者町通	1986.07.05 ～ 1986.09.19	1817㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	家崎
	4	61-036 左京六条一坊八町 86HK-HK003	下京区中堂寺命婦町 1	1986.08.25 ～ 1986.08.30	98.5㎡	試掘	(株)日本たばこ産 業	家崎
	5	61-039 (2) 左京七条二坊 86HK-W-5	下京区堀川通 花屋町通～七条通	1986.10.08 ～ 1987.03.28	430㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	家崎
京	6	61-032 左京九条四坊二町 86HK-AH2	南区東九条東山王町 27 京都市立山王小学校	1986.07.23 ～ 1986.07.27	30㎡	試掘	京都市長 今川正彦	家崎
	7	61-026-04 右京三条一坊十六町 86HK-SB004	中京区西ノ京船塚町 朱雀公園	1986.11.13 ～ 1986.11.19	39㎡	試掘	京都市長 今川正彦	平安京 調査会
	8	61-016 右京四条四坊十三町 86HK-RF	右京区西院笠目町 9-15	1986.05.12 ～ 1986.05.26	230㎡	試掘	学校法人 京都外国語大学	平田
	9	61-040 右京四条四坊十五町 86HK-RG	右京区山ノ内苗町 42	1986.10.04 ～ 1986.10.07	84㎡	試掘	(株)阪 セロファン	家崎
	10	61-030 右京五条三坊十六町 86HK-AH001	右京区西院日照町 1 京都市立四条中学校	1986.07.16 ～ 1986.07.16	36㎡	試掘	京都市長 今川正彦	家崎
	11	61-026-02 右京六条四坊四町 86HK-SB002	右京区西京極豆田町 1 東大丸児童公園	1986.09.20 ～ 1986.09.24	50㎡	試掘	京都市長 今川正彦	平安京 調査会
	12	61-026-03 右京七条一坊十町 86HK-SB003	下京区西七条東八反田町 31 府警花屋町住宅	1986.09.26 ～ 1986.09.29	50㎡	試掘	京都市長 今川正彦	平安京 調査会
	13	61-009 (3) 右京八条一坊 86HK-W-3	下京区西七条南東野町 ～西七条東久保町	1986.06.19 ～ 1986.08.06	624㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	家崎
	14	61-009 (2) 岡崎遺跡, 白河街区 86KS-W-2	左京区二条通 川端通～疏水	1986.05.15 ～ 1986.08.07	1512㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	家崎
	鳥羽	15	61-054 鳥羽離宮跡 86TB-SW054	伏見区竹田躰川町他	1986.02.02 ～ 1986.10.31	約 2200m	試掘 立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳
その他	16	61-042 勤修寺境内 86RT-KN002	山科区勤修寺仁王堂町	1986.10.20 ～ 1986.10.31	140㎡	試掘	京都市長 今川正彦	平方 菅田
	17	61-012 山科本願寺跡 85RT-SW054	山科区音羽伊勢宿町 3～40 西野広見町・大手先町 今屋敷町	1986.04.01 ～ 1987.03.31	約 7700m	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	百瀬
	18	61-039 (4) 牛尾窯 86RT-W-11	山科区御陵牛尾町	1986.10.08 ～ 1987.03.28	565㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	家崎

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	種類	委託者	担当
長岡	19	61-018 久我東町遺跡 86NG-PV	伏見区羽東師志水町	1987.03.09 ～ 1987.03.11	147㎡	試掘	京都市長 今川正彦	長宗 鈴木広
	その他	20	61-047 中の谷窯 1 86RH-SC001	左京区岩倉木野町 137	1986.12.08 ～ 1986.12.13	24400㎡	分布	学校法人 京都精華学園
21		61-051 中の谷窯 2 86RH-SC002	左京区岩倉木野町 137	1987.01.16 ～ 1987.01.24	4780㎡	磁気 探査	学校法人 京都精華学園	平安京 調査会
22		61-039 (5) 蟹ヶ坂瓦窯 86RH-W-15	北区上賀茂蟹ヶ坂町	1986.10.08 ～ 1987.03.28	420㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	家崎
23		61-014 特別史跡特別名勝 慈照寺 86KS-SG001	左京区銀閣寺町 2	1986.05.07 ～ 1986.05.13	44㎡	試掘	宗教法人 慈照寺	梅川
24		61-010 円宗寺跡 86UZ-SW010	右京区御室 小松野町・芝橋町 大内、宇多野紫橋町	1986.03.20 ～ 1986.09.04	1285㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	加納
25		61-053 仁和寺院家跡 86UZ-SW-053	右京区常盤 森町・一ノ井町 古御所町・山下町他	1987.01.20 ～ 1987.03.31	1490㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	平田 加納
26		61-057 広隆寺旧境内、常盤仲之町遺跡 上ノ段町遺跡、和泉式部町遺跡 86UZ-SW057	右京区太秦 桂ヶ原町・多藪町 東峰岡町・和泉式部町他	1986.02.23 ～ 1988.03.30	2934㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	平田 加納
27		61-001-005 巽古墳 BB-UZ11	右京区山越巽町 11-1 他	1986.07.17 ～ 1986.07.20	120㎡	試掘	国庫補助	木下
28		61-022 天鼓の森古墳 86MK-AH001	西京区上桂森上町 26 京都市立桂中学校	1986.06.04 ～ 1986.06.16	104㎡	試掘	京都市長 今川正彦	丸川
29		61-008 峰ヶ堂城跡 (法華山寺) 86MK-FO	西京区御陵鳴谷 大原、峰ヶ堂他	1986.04.07 ～ 1986.05.14	472 362㎡	分布	住宅都市 整備公園	上村
遺跡	30	61-039 (1) 鳥辺野 86RT-W-4	東山区清閑寺山ノ内町	1986.10.08 ～ 1987.03.28	805㎡	立会	京都市上下水道 事業管理者 中田 淳	家崎
	31	61-029 西飯食町遺跡 86FD-AH001	伏見区深草池ノ内町 京都市立藤森中学校	1986.07.08 ～ 1986.07.09	50㎡	試掘	京都市長 今川正彦	鈴木久 磯部
	32	61-038 伏見城々下町 86FD-AD001	伏見区今町 659- 1 他	1986.10.01 ～ 1986.10.07	115㎡	試掘	京都市長 今川正彦	平田
	33	61-001-005 京都市内遺跡 86BB-	京都市内一円	1987.01.04 ～ 1987.12.31		立会	京都市長 今川正彦	家崎